

国立国語研究所学術情報リポジトリ

方言談話資料（8）：

老年層と若年層との会話 群馬・奈良・鳥取・島根
・愛媛・高知・長崎・沖縄

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-10-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002277

方言談話資料 (8)

—老年層と若年層との会話—

群馬・奈良・鳥取・島根
愛媛・高知・長崎・沖縄

国立国語研究所資料集 10-8

国立国語研究所

1985

方言談話資料(8)

—老年層と若年層との会話—

群馬・奈良・鳥取・島根
愛媛・高知・長崎・沖縄

国立国語研究所

刊 行 の こ と ば

国立国語研究所では、昭和49年度から同51年度にかけて、「『各地方言資料の収集および文字化』のための研究」という題目の下に、全国各地で方言による談話の録音と、その文字化（標準語訳・注つき）を行ってきました。この研究は、急速に失われつつある方言を現時点で録音・文字化し、国語研究の基本的資料とすることを目的としており、当研究所地方研究員の協力を得てこれを実施しました。

その結果は、機を得て、順次刊行する予定であり、昭和58年度までに、『方言談話資料(1)』～『方言談話資料(7)』を刊行しました。本年度は、老年層話者と若年層話者との会話の第二集として、本書を刊行します。

本書に収めた資料の録音・文字化は、鳥取県については、当研究所言語変化研究部第一研究室所属（収録当時）の飯豊毅一（現昭和女子大学教授）・佐藤亮一・真田信治（現大阪大学助教授）・沢木幹栄・白沢宏枝が担当し、その他の各県については、それぞれ、上野勇（収録当時群馬県担当地方研究員・現ことばの学校代表）・杉村孝夫（同協力者・現福岡教育大学助教授）、後藤和彦（当時奈良県担当地方研究員・現大妻女子大学教授）、広戸惇（当時島根県担当地方研究員・現京都文教短期大学教授）、杉山正世（当時愛媛県担当地方研究員・故人）・江端義夫（同協力者・現広島大学教育学部助教授）、土居重俊（当時高知県担当地方研究員・現四国女子大学教授）、愛宕八郎康隆（当時長崎県担当地方研究員・現長崎大学教育学部教授）、中松竹雄（当時沖縄県担当地方研究員・現琉球大学教育学部教授）の各氏に担当していただきました。また話者もしくは司会者として、井上嘉十・井上トリ・小林喜市・小林弥太郎・小松よ志ゑ（以上群馬県）、東正弘・上垣春夫（以上奈良県）、土井頼重・中川義隆・西尾愛治（以上鳥取県）、阿部慧二・山岡芳信（以上愛媛県）、田島敏・田島正実・橋村清澄（以上高知県）、平尾忠太郎・平尾政博（以上長崎県）、新垣恒篤（沖縄県）の各氏の協力を得たほか、有志の助力がありました。記して深く感謝の意を表します。

昭和60年3月

国立国語研究所長 野元菊雄

方言談話資料作成のための担当者

国立国語研究所言語変化研究部第一研究室

飯 豊 毅 一（現在，昭和女子大学教授） 徳 川 宗 賢（現在，大阪大学教授）

佐 藤 亮 一（室長） 真 田 信 治（現在，大阪大学助教授）

沢 木 幹 栄（主任研究官） 白 沢 宏 枝（研究員）

国立国語研究所地方研究員（五十音順）

秋 山 正 次	愛宕 八郎康隆	五十嵐 三 郎	井 上 章	井 上 史 雄
今 石 元 久	岩 井 隆 盛	上 野 勇	遠 藤 潤 一	大 島 一 郎
大 橋 勝 男	岡 野 信 子	奥 村 三 雄	笥 大 城	加 治 工 真 市
加 藤 信 昭	加 藤 正 信	金 沢 直 人	川 本 栄一郎	神 部 宏 泰
剣 持 隼一郎	後 藤 和 彦	小松代 融 一	斎 藤 義七郎	迫 野 虔 徳
佐々木 隆 次	佐 藤 茂	佐 藤 虎 男	清 水 茂 夫	杉 山 正 世
田 尻 英 三	種 友 明	玉 井 節 子	近 石 泰 秋	土 居 重 俊
日 高 貢一郎	日 野 資 純	広 戸 惇	廣 濱 文 雄	北 条 忠 雄
本 堂 寛	馬 瀬 良 雄	松 本 宙	三 浦 芳 夫	虫 明 吉治郎
村 内 英 一	室 山 敏 昭	谷 開 石 雄	矢 作 春 樹	山 口 幸 洋
山 本 俊 治	和 田 實			

「方言談話資料」(8) 編集担当者

飛 田 良 文 佐 藤 亮 一 沢 木 幹 栄 小 林 隆 白 沢 宏 枝

収録・文字化担当者（協力者）

群馬…上 野 勇(杉 村 孝 夫) 奈良…後 藤 和 彦

鳥取…飯 豊 毅 一・佐 藤 亮 一・真 田 信 治・沢 木 幹 栄・白 沢 宏 枝

島根…広 戸 惇 愛媛…杉 山 正 世(江 端 義 夫)

高知…土 居 重 俊 長崎…愛宕 八郎康隆 沖縄…中 松 竹 雄

目 次

刊行のことば	3
まえがき	7
凡 例	10
I 群馬県利根郡利根町大字追貝	11
七倉七石七不思議	15
義経伝説	35
II 奈良県吉野郡十津川村谷垣内	55
よもやま話	58
III 鳥取県八頭郡郡家町	85
今の農業と昔の農業	88
IV 島根県仁多郡横田町大字大馬木	111
解説	113
農機具の本を見ながらの三人の会話	120
V 愛媛県越智郡伯方町木浦	153
松食い虫被害	155
VI 高知県南国市岡豊町常通寺島・滝本	209
解説	211
こどもの頃の遊び、いたずら、食べ物などの話	218
VII 長崎県西彼杵郡琴海町尾戸郷	243
1. 青年宿の話	246
2. ペーロンの話	280

VIII 沖縄県那覇市首里	295
1. 明治の首里城周辺	299
2. 守礼門の額	314
3. 坊主御主と呼ばれた国王の話	334

まえがき

研究の経過

この研究は、昭和49年度から同51年度にかけて行った。

昭和49年度は準備期間とし、全国47都道府県で各種の実験的録音・文字化を行い、その結果に基づいて、次年度以降の計画を立案した。

50年度は、全国的視野のもとに重点地域を定め、23の府県から各1地点を選定して 老年層の男性と同女性との対話、もしくは、男女を含む老年層話者3人の会話を録音し、文字化することとした。

51年度は収録地点を4地点減らし、19の府県について、原則として50年度と同一の地点で(a)目上・目下の関係にある老年層の男性2人による対話、(b)老年層の男性と若年層の男性との対話、もしくは、両者を含む3人の話者の会話、(c)場面設定の会話、の3項目についての録音・文字化を行い、収録可能な地域では、付録として、民話の収録・文字化も実施することとした。(c)については、「品物を借りる」「(旅行などに)誘う」「新築の祝いを述べる」「隣家の主人の所在をたずねる」「けんかをする」「道で知人に会う」「道で目上の知人に会う」「うわさ話をする」の8場面を、全地点共通の場面として設定した。

以上の録音・文字化資料は、すべて国立国語研究所で整理し、保管しているが、当研究所では、このうち、50年度分についてはすべて刊行した。51年度分は本巻をはじめとして順次刊行していく予定である。今回は、51年度に収録・文字化を行った老年層話者と若年層話者による談話資料のうち、「群馬県利根郡利根町大字道具」「奈良県吉野郡十津川村谷垣内」「鳥取県八頭郡郡家町」「島根県仁多郡横田町大字大馬木」「愛媛県越智郡伯方町木浦」「高知県南国市岡豊町常通寺島・滝本」「長崎県西彼杵郡琴海町尾戸郷」「沖縄県那覇市首里」の8地点分について、オフセットにより複製印行する。

話者の条件

話者には次の条件の人を選ぶこととした。

1. 老年層話者による談話(50年度)

その土地で生まれ育ち、よその土地に住んだことのない、あるいは、その期間が比較的短い人で、日常生活ではもっぱら方言を用い、また、録音機を前にしても方言色豊かなおしゃべりが可能な人。したがって、よその土地から嫁入り、婿入りした人は採らない。ただし、女性については、他に適当な人が得られないときには、近隣地から嫁入りした人でも、収録地点との間に大きな方言の違いが認められない場合は可とする。話者の年齢は、原則として収録時において60歳以上とし、やむをえないときは、55歳以上も可とする。発音その他の障害がなければ、高齢者でも差し支えないが、話者相互の年齢が離れすぎるのは好ましくない。また、話者相互の地位・身

分関係も、ほぼ対等であることを原則とする。

2. 目上・目下の関係にある老年層の男性2人による対話(51年度)

話者の年齢は上記1に準ずる。この項は、改まった表現や種々の敬語形式などを得ることをねらって設定したものであり、対話の具体的な人物像として、たとえば、旧地主階層の人物対旧小作階層の人物、僧僧対その壇家にあたる人物、その土地出身の教員(校長など)対その土地の一般的職業(農業・漁業など)に従事している人物などを候補として示したが、地域の事情もあると思われるので、この点は各地の担当者(地方研究員)に一任した。なお、目上にあたる人物として、在外期間の比較的長い人物を登場させなくてはならない場合もあると考えられるので、在外歴に厳しい条件はつけないことにした。

3. 老年層男性と若年層男性との談話(51年度)

老年層については原則として60歳以上、若年層については原則として20~30歳台とする。話者相互の地位・身分関係は、ほぼ対等であることが望ましい。職業は老若ともにその土地における一般的なものであること。在外歴については1に準ずる。

4. 場面設定の会話(51年度)

上記1に準ずる条件を備えた老年層の男女に、場面に応じて、種々の演技的対話をしてもらった。

5. 民話

特に条件はつけず、その土地で生まれ育った民話の語り手があれば可とした。

司会者

主たる話者のほかに、話の引き出し役としての司会者が同席することとした。司会者はこの研究の主旨を理解し、かつ、司会役としての能力を有する地元方言の話し手が望ましい。司会者の年齢・居住歴等に、特に条件はつけなかった。

録音量・文字化量

50年度・51年度ともに各約60分程度の録音量(51年度については、各項目平均20分、合計60分程度)について文字化を行うこととした。また、内容の豊かな文字化資料を得るために、文字化すべき録音量の数倍を録音し、その中から適切な部分(話がとぎれず、しかも発言が特定の話者にかたよっていないこと。話の流れ、話題の展開が自然であること、など)を選択して文字化することとした。

文字化原稿の作成・表記

1. 将来のオフセットによる複製印行に備えて、一定の様式の文字化用紙を作成し、担当地方研究員に配布した。
2. 文字化は原則として表音的カタカナ表記によることとした。これは、利用者の便宜、文字化作業の能率などを考慮してのことである。ただし、対象とする方言の性格によって、カナ表記では特殊な字母を多数必要とし、かえって煩雑になると判断される場合は、国際音声字母による表記も可とした。なお、それぞれのカナで表わす具体的音声の範囲・内容については、各担

当者が「解説」の中で説明することとした。

3. アクセント、文末イントネーションの記述の有無は、その表記法を含めて担当者の判断にまかせた。
4. 聴き取りが困難な箇所や、言いよどみ、言い重なり、言い直し、笑い声などについては、これらを一定の符号で表わすことにした（凡例参照）。

文字化には、標準語訳、および、場面、文脈、特徴的音声、方言形の意味・用法などについての注をつけることとした。なお、標準語訳はあくまでも内容理解のための手がかりの一つと考え、訳が問題となるような箇所については、できるだけ詳しい注をつけることを担当者に求めた。

収録方言・表記・収録内容についての解説

文字化原稿とは別に、収録方言・表記・収録内容についての解説を担当者に求めた。解説には、原則として次の事項を記すこととした。

1. 地点名
2. タイトル
3. 録音年月日
4. 録音場所
5. 話し手の氏名・性・生年・職歴・役職歴・居住歴・言語的特徴など
6. 録音環境（同席者・話の進行状況・場の雰囲気など）

なお、収録地点の概観と収録した方言の特色等については、原則として、50年度分の文字化資料（既刊）にゆずった。

I。群馬県^{とね}利根郡^{とね}利根村大字^{おっかい}追貝

収録・文字化担当者 上 野 勇

同 協力者 杉 村 孝 夫

- 1 地点名 群馬県利根郡利根村大字追貝
- 2 タイトル 「七倉七石七不思議」「義経伝説」
- 3 録音年月日 昭和51年8月21日
- 4 録音場所 小林弥太郎氏宅
- 5 話し手

K 井上 嘉十 (男)

生年 明治35年

最終学歴 東村尋常高等小学校卒

兵歴 なし

職歴 東村(現利根村)役場勤務20年、追貝土地改良委員
10年。

A 小林弥太郎 (男)

生年 明治40年

最終学歴 東村尋常高等小学校卒

兵歴 なし

職歴 農業、神主

O 小林与志急 (女)

生年 明治40年

最終学歴 東村尋常高等小学校卒

職歴 農業

昭和6年旧東村大字千鳥から旧東村大字追貝に嫁す。

T 井上 トリ (女)

生年 明治43年

最終学歴 東村尋常高等小学校卒

職歴 農業

旧東村大字高戸谷から旧東村大字平川に嫁す。

I 小林 喜市 (男)

生年 昭和15年

最終学歴 群馬県立利根農林高等学校卒

職歴 農業、利根村議

6 録音環境

収録担当者的上野勇、協力者の杉村孝夫および井上嘉十、トリの孫井上ありさ(3歳程度)が同席。「義経伝説」では小林多志急が終るまぎわに加わった。収録担当者的の上野勇は、小林喜市の舅。なごやかなうちに収録が行われた。あらかじめ話題について打ち合わせを行った後、収録に入っている。

7 収録地点の概観・収録した方言の特色などについては、『方言談話資料(1)』を参照。

七倉七石七不思議

話し手

K 井上嘉十 男 明治35年生まれ

A 小林弥太郎 男 明治40年生まれ

T 井上トリ 女 明治43年生まれ

I 小林喜市 男 昭和15年生まれ

(U 上野 勇 採録担当者)

I アノ ソーユー ⁽¹⁾ハナジツ テナ ⁽²⁾メツタ スクネンサネー。(K 入
あのう、そういう 話というのは とても 少ないのさね。
→.) ナノクラ ⁽³⁾ナナイシ ナナフシギナンテナ。オンモ ⁽⁴⁾ハジ
七倉 七石 七不思議などというのは。おれも初
メテ ジッサイ キー ^{x x x}ハジメテ キータンダケドモ。マタ ソレ オソ
めて 実際 初めて 聞いたんだけども。また それは
ラク ドーユー カタチデ デテルカ マー アノ カジューサンナンカ
どういう 形で 出ているか まあ あの 嘉十さんなんか
ニ キカネート ハー ナカナカ ワカラネート オモッテネ↓ ア
に 聞かないと もう なかなか わからないと 思ってね。 あ

ルテード (ク シー) シッテル ハンイナイデ ハナジー シテ
る程度 知ってる 範囲内で 話を して

ミテ クンネーカネ。(間)
みて くないかぬ。

U ドン ドンナ ハナジナンデス。ソフ (1 ナチクラ)
xxxx どんな 話 なんですが。 その (七倉)

K エー ドレモネー。
ええ、どれもねえ。

U ナチクラッテ。シ↓。
七倉って。うん。

K ナン クラッチューノガネー (Uシ↓) アノ サワノ コトージャーネー
xxxx 久良というのがねえ、 あの 沢の ことではない

カト モーダケドネー。アノー ナチクラッチューノガ オダグラ
かど 思うんだけどねえ。あのう、七倉というのが 小田久良

ダトカネー ソイカラ マナイダグラ クサクラ ナンテンガ コ
だどかねえ、それから 真菜板久良、草久良 などというのが、
xx

コレモネー ドーモ マター アノー カンガエテ ミタケド
これもねえ、 どうも 考えて みたけど

ソロアネンダヨ。ナ ナチクラガ。
xx 揃わないんだよ。 七倉が。

A ナチクラン ナンネンカイ。
七倉に ならないのかぬ。

K シ↓。 ナチクライ ナンネンダヨ。(Aフーン) ソイカラ ナナイシモネー (A
うん。七倉に ならないんだよ。 それから 七石もねえ、

シ↓) アノー アスコワ ヒラガーノ オフドーサマノ チット
あのう、 あそこは 平川 の お不動様の ちょっと

シモノ ⁽⁸⁾ホーニ アノー イビシイシツチュガ アンサネー。(A ンー) ナナ
下の 方に いびし石というのが 有るのさねえ。 セ

イシガネ↓。ソレカラ アノー カミザカニ ヒメイシ。ソレツカラ
石がね。それから 上坂に 娘石。それから

セージロックン⁽⁹⁾ シモノガ^(A ンー) モンドコロイシ。ソイツカラ
清次郎君の(家の)下にあるの が 紋所石。それから

ウラノガガ ナツツタツケナー コレ アノ ニジューサンヤ
裏にあるのが 何ていったっけなあ、 ニ十三夜

サマナンゾガ マツツテ アル イシガ アルダケドネー。ソイカラ
様などが 祭って ある 石が あるんだけどねえ。それから

ゼンタロックン⁽¹⁰⁾ マイニ アル (I ンー) オーイシガ (A ン↓。)コレガ
善太郎君の(家の)前に ある 大石が、 これが

ヘーッテタツケカ⁽¹¹⁾ ナヘンネーダゲナ オボエガ ネーシ。ソ
入ってたっけが 入らないのだから 覚えが ないし。

ノー マナイタグラニ ヘビイシツチュンガ アルダチツタ。
真菜板久良に 蛇石 というのが あるのだといった。

I ソー↓。

T ジャー イマ シトツダ。
では もう ーっだ。

K ダカラ ゼンタロックン⁽¹²⁾ オーイシガ ハイ ソレ ユツタツケ
だから 善太郎君の(家の前の)大石が ^{XXXX}入っ、それ 言ったっけ
ナー。
なあ。

A ユツタイネー。(I エー)
言ったいねえ。

K ュッタカ。ソー スルト (↑ アスコガ) アートガー……
言ったが。そうすると (あそこが) 後が……

T セージローガ マエノ アノ デッケー イシワ ナンチュン。
清次郎の家の前の あの 大きい 石は 何と言うの。

K アノー セージローガ シモノガンガ アレガ キクイシツチュン⁽¹³⁾
清次郎の家の) 下にあるのが あれが 菊石 というの

デ (A シー↓。)ソレカラ ソノ ウラノガガ ナニ ナニイシツタ
で、 それから その 裏にあるのが 何石といった

ツケナ ソレ。

っけな それ。

A ア⁽¹⁴⁾ サンヤサマダノ コーシンサマダノ (K シ↓。サンヤサマ。)
ああ、三夜様だの 庚申様だの (うん。三夜様。)

マツツテ アル。

祭って ある。

K シ。アノ イ イシガ アンダケド。(I シ↓。)
うん。あの 石が あるんだけど。うん。

T ワスレチャッタイネ。(I ~~~~~)
忘れちゃったよね。

K ソレデ マー イシモ ソロアネンサ。(A シ↓。)ソイカラ ナ
それで まあ 石も 揃わないのさ。 それから、セ

ナクラガ^{#(15)} ナナクラガ ソロアネーシ ソレカラ ナナフシギ (A
倉が セ倉が 揃わないし、それから セ不思議 (

ナナフシギガ アルチュッキヤイ。ヒラガーニヤ。)
セ不思議があるというがね。平川には。)うん、セ不思議

ギガサー ソレモ アノー ナカノ ダイコント⁽¹⁷⁾ ソイカラ ク
議がさあ、それも 野中の 大根と それから

リアケノ サンドグリ (A シ ↓) コレダケワ オボエテルダケド
 栗明の 三度栗, これだけは 覚えているけれど,
 アトワ キー⁽¹⁸⁾タダケドモ ドー カンゲーテモ (A 笑) デネンダ
 後は 聞いたのだけれども どう 考えても 出ないんだ
 ヨ。
 よ。

A シ ↓。

I シ ↓。 (A ~~~~~) ソノ フタツノ イマ デタノワ ドーユン
 その 二つの, 今 出たのは どのような
~~~~~ ノナカノ ダイコント……  
 野中の 大根と……

K ノナカノ ダイコンチュノワネー マイタデ ナクッテ ダイコン  
 野中の 大根というのはねえ, 蒔いたので なくて 大根  
 が マイトシ ソノ ハタケー ハイルツチュン。  
 が 毎年 その 畑に 生えるというの。

I ハ ハー ↓。 ノナカッテナ ドコイ アルン。  
 は はあ。 野中というのは どこに あるの。

K ノナカッチュナー アノー アスコニー サワガ アルンサーネー。  
 野中というのは, あのう あそこに 沢が あるんさねえ。  
 アノ <sup>(19)</sup>ヒラバラノ トラノスケガ ウラノ ホーニ。  
 平原の 寅え助の(家)裏の 方に。

I エー。 エー。 エー。 エー。  
 ええ。 ええ。 ええ。 ええ。

K アノ サワノ ムコーノ イツタイオ ノナカアザッチュンサーネー。  
 あの 沢の 向うの 一帯を 野中字というのさね。

I アッ ソーカー。  
ああ、そうがあ。

K ソー。ソノ ノナカアザデ ナンダカ ハタケワー アレガ<sup>#</sup>ン  
うん。その 野中 字で なんだか 畑は あれが、う  
ー ヒロシクンガ ツクッテタ (I ソー) ハタケダ<sup>ト</sup>カ ユー ハタケダッ  
ーん、博君が つくっていた 畑だとか いう、畑だ  
キューケドネー。(A ソー) エー。エ モトワ ダーガ ハタケダガ  
というけどねえ。 ええ。 もとは 誰の 畑だか  
ナ シラネーガ マー ソノー ノナカノ ダイコンキューノワ  
知らないが、まあ そのう 野中の 大根というのは  
マカネーデ ダイコンガ ハイルツチュンデ……  
蒔かないで 大根が 生えるというので……

T ジャー カラシナミテヨーナンジ<sup>ャ</sup>ネンカイ。  
では、 芥子菜のようなものではないのがね。

K ソイデ ン ドソナンダッ チュッ タラ  
それで どんなのだといったら

T ソコデ ツッパジケ<sup>チャ</sup> マタ ライネン ハエルジ<sup>ャ</sup>ネンカイ。  
そこで 弾けては また 来年 生えるのではないのがね。

K マー ソーユ コトダンベケドモ。(I ソー)  
まあ そういう ことだらうけども。

A ソー。ソナ コト ユーナー。ヒラガーノ ナナフシギ ナナフ  
うん。そんな ことを 言うなあ。平川の セ不思議 セ不  
シギッテ。  
思議と。

K ソー。ソニ ユーンダケドネー。ソレカラ アノー アスコノ サ  
うん。そう 言うんだけどねえ。 それから あそこの

シドグリッ チューナー コリャー アノー サイキンマデ アッ タ  
 三度乗というのは、これは 最近まで あった  
 ダケドモ アスコデー ウツロガ アッタンサーネー。ソノー オ  
 のだけれども、 洞が あったのさね。 その  
 ッキナ クリノキノ ナカニ。  
 大きな 栗の木の 中に。

A  $\overline{\text{ハ一}} \downarrow$  .

I  $\overline{\text{シ一}} \downarrow$  .

K ソア ナカデ コジキガ <sup>(20)</sup>  $\overline{\text{ヒ一}}$  モシテ (<sup>I</sup>  $\overline{\text{ハ一}}$  .) ソシテ <sup>I</sup>  $\overline{\text{アタ}}$   
 その 中で 乞食が 火を 燃して そして あた  
 ッテ モシッパレーデ デタダガナ コジキダガナ コドモダガナ  
 って 燃しっぱなしで 出たのだが、 乞食だか 子供だか  
 ナカオ ヤイチャッタンサネ。 (A  $\overline{\text{シ一}} \downarrow$  .) (<sup>I</sup>  $\overline{\text{ハ一}}$   $\overline{\text{ハ一}}$  .)  $\overline{\text{テ}}$   
 中を 焼いてしまったのさね。 で、  
 ソレガ <sup>(21)</sup>  $\overline{\text{モトデ}}$  カレチャッタンデ スー (<sup>I</sup>  $\overline{\text{ハ一}} \downarrow$  .) オレガ  
 それが 原因で 枯れてしまったので おれが  
 アッチノ  $\overline{\text{ホ一エ}}$  ナニカニ <sup>I</sup>  $\overline{\text{イブヨ一ニ}}$  ナッタンダカラ <sup>I</sup>  $\overline{\text{ソ一}}$   
 あっちの 方へ 何かに 行くように なったのだから うんと、  
 ト<sup>#</sup>  $\overline{\text{ナンダッタカチ一}}$  . オレガ  $\overline{\text{ウチュー}}$   $\overline{\text{デル}}$   $\overline{\text{マエダイチ一}}$  .  
 何だったかなあ。 おれが 家を出る 前だよなあ。  
<sup>(22)</sup>  
 ショーボーカ ナンカデ  $\overline{\text{イツタ}}$   $\overline{\text{ジブンダッタガナ}}$   $\overline{\text{ソソ}}$   $\overline{\text{トキ}}$   
 消防が 何かで 行った 時分だったが、 そのとき  
 ニ  $\overline{\text{クリガ}}$   $\overline{\text{ナッタッタケドネ一}}$  .  $\overline{\text{エガガ}}$   $\overline{\text{チョット}}$   $\overline{\text{チ一センダ}}$   
 に 乗が 生っていたけどねえ。 いがが ちょっと 小さいんだ

ヨ。フツーフ クリヨリネー。(A シ↓。) (I シー。)ソイデ チカ  
よ。普通の 粟よりねえ。 それで 中

エ シトツツブシャー<sup>(24)</sup> シトツツブダケデ アトワ コー シーナ  
に 一粒しか、 一粒だけで あとは しいな

ン ナッテル。(I シーナン ナッテル<sup>テ</sup>)(A シー。)ソンナ クリダカラ ア  
になっている。(しいなに になっているて) そんな 粟だから あ

ンマリ マンゾクシタ タイシタ クリジヤネーダケドネー。(A  
んまり 満足な、 たいした 粟 ではないのだけどねえ。

シ↓。) (I シ↓。)ソノ クリガ ハル チッター マター' アキモ  
その 粟が 春に 生ったり また 秋も

ナルツチューヨーナンデー (I アー サ<sup>xx</sup> サ<sup>xx</sup> サンド ナルツチューン<sup>テ</sup>)  
生るといふようなので (ああ、 三度 生るといふので)

サンド<sup>(25)</sup> ナデ<sup>xx</sup> サ サンドグリツチューナー フシギノ (I ハー ハー ハー)  
三度 生るので 三度 粟 といふのは【七】不思議の

(A シ↓。) シトツダツチンダソーダケドモ (A シー) ダケドモ ムカシノ シ  
ひとつだといふのだ そうだけれども、 けれど 昔の人

トガ サンドグリダツタラ ソノ クリノ マー ツグツチュー  
が 三度 粟 だといったら その 粟の まあ、 つぐという

コトワ シラナクモ (I エー) ミオ ウエテ (I エー) サンド ナル クリガ  
ことは知らなくても 実を 植えて 三度 生る 粟が

デギルカ デギネーカ ヤッテ ミレバ イーダツタッペケド<sup>(26)</sup>  
できるか できないか やって みれば よかったらうけど、

イマ ソー オモケドネー。

今 そう 思うけどねえ。



A シ↓。  
うん。

I シー↓。  
うん。

K タダ オラーモ ソア ジデーニャー サンドグリ コレガ サン  
ただ 自分たちも その 頃には 三度乗<sup>(27)</sup> , これが 三  
ドグリダッチューナンター キータダッタケドー。  
度乗 だということ 聞いたのだったけれど。

I ヘー。 ソラ ドコラヘンニ アッタ。  
へえ。それは どのあたりに 在った。

K ソラーネー " エートー アズコノー # サーテーナー ヒロシクンノ  
それはねえ、 ええと、 あそこの、 さてな、 博君の  
トコカラ チョット ノボッタ トコデ……。  
ところから ちょっと 登った ところで……。

I シー。 ヒロシクンチュート ヒラガノ……。  
博君というヒ 平川の……。

T カミダ。  
上だ。

K シー↓。  
うん。

I カミ カミデスネ↓。  
xxx  
上ですねえ。

K カミジャネン。(「ドコ」) ヒラバラ。  
上ではないよ。(どこ) 平原。

I ア ヒラバラネ オナジトコノネ (ア シー↓。)  
あ、平原ね 同じところのね

K ヒラバラナンダイネ。 ヒラバラノ ヒロシクンノ ウチカラ チョ  
平原なんだよね。 平原の 博君の 家から ちよ

ット (I アッ) ノボッタ トコデ コッチ ワイチサンノ ウチガ アルン  
 っ と 登った ところで、こっちは[淋]和ーさんの 家が あるん  
 ダガ ソノ アイサノ ヒダリテ アタリノ トコニ ジュニサ  
 だが、その 間の 左手当りの ところに ナニ様が  
 マガ <sup>(28)</sup>アルンダイ。(A ツー↓。) (I エー。) # ソノ ジュニサマ  
 あるんだよ。 うん。(ええ。) その ナニ様の  
 ノ ヤネニワ キクノ ジュロクノ キクノ モンガ ハイッテ  
 屋根には 菊の、十六の 菊の 紋が 入って  
 ルトカ ユー。  
 いるとか いう。

I ハー ハー ハー ハー↓。ナルホド。  
 はあ はあ はあ はあ。なるほど。

A ツー↓。  
 うん。

K コレガ フルイ ソノ イジミヤダナンキューカラ ソレニ ソソ  
 これが 古い 石室だなどというから、 そん  
 ナナ カンケー シキヤー イネダンベーガ 下ニカク マー  
 なのは 関係 しては いないだろうが とにかく まあ  
 ナチツノ ウチ ソノ フタツシヤ (I ツー↓) (A ツー↓) カガデーラ  
 七つの うち その 二つしか 考えら  
 ソネーデ ソイデ ソンシオ ツクル トキニモ ソノ ハナシー  
 れなくて、それで 村誌を 作る ときにも その 話を  
 ダシタケードモ (A ツー↓) アントキ アツマッタ シト シラチ  
 出したのだけれども あの時 集まった 人[達]は 知ら  
 カッ タンサネー。  
 なかったのさね。



A  $\overline{\text{へー}}$ 。

I  $\overline{\text{シー}}$ 。

K  $\overline{\text{ダカラー}}$   $\overline{\text{イマ}}$   $\overline{\text{シラベテ}}$   $\overline{\text{ミルダラ}}$   $\overline{\text{アレグレーデ}}$   $\overline{\text{サアーニ}}$   
だから 今 調べて みるなら あれぐらいで、 さあめに  
<sup>(29)</sup>  $\overline{\text{ーカ}}$   $\overline{\text{クダリノ}}$   $\overline{\text{チンタッケナー}}$   $\overline{\text{イノガ}}$   $\overline{\text{トコノガナ}}$ 。  
いか 下の、 何といたったけなあ、猪之の家の人。  
<sup>(30)</sup>

A  $\overline{\text{ノ}}$   $\overline{\text{ノブアーニカ}}$ 。  
<sub>xx</sub> のぶあにいか。  
<sup>(32)</sup>

K  $\overline{\text{ノブアーニデデモ}}$   $\overline{\text{チケレバ}}$   $\overline{\text{ハー}}$   $\overline{\text{アト}}$   $\overline{\text{ドーモ}}$   $\overline{\text{オンナシジマ}}$   
のぶあにいででも なければ もう あとは、どうも 女の人達では  
 $\overline{\text{ー}}$   $\overline{\text{ヨソカラ}}$   $\overline{\text{キタ}}$   $\overline{\text{シトダッチュート}}$   $\overline{\text{シ}}$   $\overline{\text{キ}}$   $\overline{\text{アンマリ}}$   $\overline{\text{キー}}$   
他所から 来た 人だというと <sub>xx</sub> <sub>xx</sub> あまり 聞い  
 $\overline{\text{テ}}$   $\overline{\text{ネーヤネー}}$ 。(I  $\overline{\text{ソーダイネー}}$ .)  
て【知って】いないよね。(そうだよね。)

A  $\overline{\text{シラネーヤネー}}$ 。 $\overline{\text{ソーダイネー}}$ 。  
知らないよね。 そうだよね。

T  $\overline{\text{ハー}}$   $\overline{\text{トシヨリワ}}$   $\overline{\text{ナークナッタカラ}}$ 。(I  $\overline{\text{ソーダネー}}$ .)  
もう 年寄は いなくなったから。(そうだよね。)

K  $\overline{\text{ナークナッタカラネー}}$ 。  
いなくなったからねえ。

I  $\overline{\text{トー}}$   $\overline{\text{トー}}$ 。  
とう とう。

T  $\overline{\text{チョー}}$   $\overline{\text{アーニガ}}$   $\overline{\text{トシヨリデ}}$ ……。  
<sup>(34)</sup>  
長あにいが 年寄で……。

I アト イツツ ワカンネー ワケダ。  
あと 五つ わからない わけだ。

K ソーダナー <sup>(35)</sup> チョーカナー。  
そっだなあ、 長かなあ。

T チョーアニーガ コンタラト <sup>(36)</sup> (クシー) オナジダカラ。  
長あにいが あなた達と 【年が】同じだから。

A ソー。  
そう。

K ソイデ トシヨリデモ ナニカ ハナストカー ソソナヨーナ ハナ  
それで 年寄でも 何か 話すとかな そんなような 話  
シデモ デテ ナナフシギナンキューノー キーテレバネー (<sup>A</sup> ソ  
でも 出て セ不思議などというのを 聞いていねばねえ、(そ  
ーだ。)(<sup>I</sup> ソーダネー。) ダレカ オボエテルガント オモードケド  
うだ。)( っだねえ。) 誰か 覚えているかと 思うのだけど  
モ アントキ キタノ ジョーキチクン フジ ハツタローサン  
も、あの時 来たのは 正吉君、 藤井 初太郎さん、  
ブイチサンナンチュ ガ イマイ ハンジローサンモ イタダケド  
武ーさん などという人が、今井 半次郎さんも いたのだけれど  
(<sup>A</sup> ソ。) アンターモ <sup>(38)</sup> ナナフシギ シラナカッタモン。  
あの人達も セ不思議は 知らなかったよ。

A ソ。(<sup>I</sup> ソソソソ。) コーゾークン <sup>(39)</sup> シリソナモンダナー。ヤ  
うん。(うん うん うん。) 弘造君は 知っていそなものだなあ。  
タアニーガ <sup>(40)</sup> ヨク シッテタッ タカラ ユッテタッ タイネ ソ。(<sup>K</sup>  
弥太あにいが よく 知っていたから、 言っていたよぬ。  
ア ソ リーカ コーゾークン。) コーゾークンダラ <sup>(41)</sup> コトニヨルト キ  
(あ そうか、 弘造君。) 弘造君なら ことによると

ーテタガナ……。

聞いていたが……。

K ヤタアニーカラ ソンナ ハナシ (A キータ) キータ コトガ ア  
弥太あにいから そんな 話を (聞いた。) 聞いた ことが あ  
ルカイ。  
るかね。

A オラー キータ コトガ アル。ヒラガーノ ナナフシギッテノ。  
おれは 聞いた ことが ある。平川の セ不思議というの。

K ソースレバ コーゾクン シツテルカナー。  
そうすると、弘造君は 知っているかなあ。

A コトニヨレバ キータ コトガ アル。オラー ヤタアニーニ  
ことによれば 聞いた ことが ある。おれは 弥太あにい  
ヒラガーノ ナナフシギッチューナ コレト コレト コレトダナ  
平川の セ不思議というのは これと これと これとだ  
ンテ ユッタケド ソントキワ ヨクジヤー <sup>(42)</sup>ネー マー ソーカ  
んて 言ったけど そのときは よく解からなかったけれど、ああ そうか  
イナーテ ユッテ イマ ユー ソノ ダイコンダトカナンテ イッコ  
いなあと いて、今話に出たその 大根だとかなどと、全然  
マカネーダケド マイトシ ハエルダナンテ ソンナナー キー  
蒔かないのだけれど 毎年 生えるのだなどと そんなのは 聞い  
タッタガナ ヤタアニーカラモ キータ コトガ アル。  
たのだったが、弥太あにいからも 聞いた ことが ある。

K アー ソースリヤー コーゾクンニ キーテミリヤ……。  
ああ、そうしたら 弘造君に 聞いてみれば……。

A コーゾクンダラ コトニヨルト キータ コトガ アルカ シン  
弘造君なら ことによると 聞いた ことが あるか しれ

ネー。(K シー↓。)  
ない。(うん)

I キーテイレバナ (A シー↓。)  
聞いていればね

ソリャー ナカナカ キーテ  
それは なかなか 聞いて

シダヨ。  
いないよ。

T ドーセ タイシタ デーコンジマ ナカッペケド アレダッペヤイ。  
どうせ たいした 大根では なかるうけど あれだろうよね。<sup>(44)</sup>

ツッ (A ローダイネー。) タネガ タネガ ツッ アノ ツッパジケチャー  
xxx (A そうだよなあ。) xxxxx 種が xxx 弾けてはさあ

サー ソジチャー マタ……  
そしては また……

A シ↓。ソレガ ハイルンダイネー。  
うん。それが 生えるんだよねえ。

T ハイル……。アッチノ ホーガ マタ ツッパジケ スルカラ  
生える……。あっちの 方が また 弾け【たり】するから

(A シ↓。) タエネージャ ネンカイ。  
絶えないのではないのガね。

A タエネーラシー。  
絶えないらしい。

T アノ カーラシ ムカシノ カーラシナナンゾガ タエネーヤムシ。  
芥子, 昔の 芥子 菜などが 絶えないよね。

(A シー↓。)オラガ ウチノ メグリナノゾ アルケド イッコー  
(うん。) 私の 家の まわりなどに あるけど, 全然

マイタジャー ネーケド ハルサキニ ナルト ケッコー コー ツッ  
蒔いたのではないけど 春さきに なると けっこう こう 摘んで

デ モンデ クーグレーサー<sup>(45)</sup>。ドッコデ ハジケテ ハエルダカ。シ  
揉んで 食うぐらいさ。 どこで 弾けて 生えるのだ。

ゼンニ ハエル。  
自然に 生える。

A ナナフシギダナンテ イッテ。 コ<sub>xx</sub> ヤタアニーワ シッタッケヨ。  
七不思議だなんて 言って。 弥太あにいほ 知っていたっけよ。

K ソレカラ ノリナナンゾガ<sup>(46)</sup> アルダッペ。(ア ノリナモ) オレガ  
それから 海苔菜などが あるだろう。(海苔菜も) おれが

コドモン 下キ ウント アッタシダケドモ ソレガ ズーット  
子供の ときは たくさん あったのだけど、それが ずっと

ナクッテ センソートージ ナニモ ネー トキニ アンナ  
無くて、戦争当時 にも 無い 時に あんな

モンデモ ハエレバ イート オモッタ。ソントキ ハエナカッタ  
ものでも 生えれば いいと 思った。 その時は 生えなかった

ケドネー ン イマー ボツン ボツン マタ ハエル。  
けどねえ、 今 ほっり ほっり また 生える。

I アー ノリナカイ。(A シー↓.)  
ああ、海苔菜かね。

T アー アンナ モナー ドーコニ タネガ アッテダガナサー。  
ああ、あんな ものは どこに 種が あってだかさ。

I ナルホドネー。(K アー) トブカ……。  
なるほどねえ。 飛ぶか……。

T ダカラ ウーント フカークイ アノー シタニ イテ<sup>(47)</sup> アレジマ  
だから とても 深くに、あのう 下に【種が】あって あれでは  
ネンカイ トラクターデモ ナンデモ ホネーダシタカラ<sup>(48)</sup> マタ  
ないかね、トラクターでも なんでもが 放り出したから また

ハエタジマ ネンカイ。

生えたのではないかね。

U ノリナッテナ ドンナ モンデヌ。

海苔菜というのは どんな ものですか。

T コンナネー ハッ マルイ ハッパダケ(<sup>U</sup>シー) ドネー ズーット  
こんなねえ 丸い 葉だけ どねえ、ずいぶん

キガ オーキク ナッテ……

木が 大きく なって……

K ソイデ ハッパガ キジレタヨーニ ナッテルンサネー。(<sup>U</sup>シー)

そして 葉が 縮れたように なっているのさね。

T (エーダネー) <sup>(49)</sup>ダケ ノメッコゲナ ハッパネー。(<sup>U</sup>シー) <sup>(50)</sup>フーキノ  
(そうだねえ) だけど すべすべした 葉ねえ。 路の

ハッパヨリ ノメッコゲナ ツラツラ シテル。 ダカラ アレ ツメキッ  
葉より すべすべした、つるつる している。 だから あれを 爪の先で  
<sup>(51)</sup>

テ テンプラエナンゾ シテ クーダカラ。(<sup>U</sup>シー)

摘んで てんぷらになど して 食べるのだから。

K アー テンプラノ シンナンゾニ スルンダチ。(<sup>U</sup>シ↓)ホシト  
ああ、 てんぷらの 芯などに するんだな。 干して

イテ アオク ホスツチュート ソノ モジッテ ウドンイ ヨク  
おいて、 あおく 干すというと、 <sup>(52)</sup> 揉んで うどんに よく

カケテ クー アノノリ (<sup>U</sup>コンチュ エー エー) アオノリノ カワリニ。  
かけて 食う、あの 海苔 (<sup>U</sup>具にする) 青海苔の 代わりに。

I アオノリト チョット ホストネー オナジヨーナ ~~モン~~ モンダネー。  
青海苔と、ちょっと、干すとね 同じような ものだねえ。

K マー リンナヨーナ モンダネー ノリナッチュー……。  
まあ そんなような ものだねえ、 海苔菜という……。

U ネー。ノリニ ニテルノネ。 (I タブン )  
ねえ。海苔に 似ているのね。

K ソー ソーナンダイネ。  
そう， そうなんだよね。

T ム ムカシノ コッ タカラ (U ン-) カネ ダシテ カウヨリ  
昔の ことだから 金を出して 買うより

ソレオ ノリニ シテタジャ ネーカネー。 (笑)  
それを 海苔として使っていたのではないかね。

K マ ソンナ モンノ タグイジャ ネーカト オモダケドネー。  
ま， そんな ものの 類では ないかと 思うのだけどねえ。

トニカク (I タブンネー) ダイコンチュンガ シゼンニ ハイル  
とにかく (多分ねえ) 大根というのが， 自然に 生える

ダイコンダチュー ノナカノ ダイコンダチュー デ。  
大根 だという， 野中の 大根 だというので。

## 注

- (1) 今、話題になりかけている話。すなわち、七倉七石七不思議の話。
- (2) 「とても」の意で肯定（例えば、メッタ アルと言えば「たくさんある」の意）にも否定にも用いられる。
- (3) 「ナナークラ」の第2音節は半長音。事柄がなじみのないものなので自己確認しながらゆっくり発音しているために生じた。
- (4) 「オレモ」の第2音節「レ」が、鼻音の前で撥音化した形。
- (5) 久良または倉の字を当てる。
- (6) 七久良は以下の通りとの説もある。真菜板久良，小田久良，白久良，松久良，荷久良，発知久良，小松久良。
- (7) 七石は以下の通りとの説もある。こがね石，<sup>マクマク</sup>厄焼石，大石，姫石，紋所石，一ツ石，蛇石。
- (8) 発音は [e-biʃi]。恵比須石か。
- (9) 小林清次郎。
- (10) <sup>チアキ</sup>千明善太郎。
- (11) 片仮名の下に。印あるものはすべて無声音。
- (12) 「入っていたかどうかわからない」と言おうとして言いさした。
- (13) はっきりした [tʃu] ではなく， [tʃüi] である。
- (14) 二十三夜様を略して三夜様という。
- (15) 間を長さにより，仮りに3段階に分け，長い方から #，"，' という記号で示す。
- (16) 「アルチューカマイ」 > 「アルチューキマイ」 > 「アルチュッキマイ」のような音声的変形により生じた形。
- (17) 「弘法大根」という名でもよばれている。土地の所有者（大根の生える）は，後でも名前が出る吉野寅之助さん。
- (18) 笑いながら。曖昧。「キータドコロモ」のようにも聞こえるが，これでは意味不明。
- (19) 地名。利根村大字平川字平原。
- (20) [hi:] と喉頭の摩擦音である。母音もや > 中舌的。
- (21) 吸気によって生じた音。次に言うことを考えている。



- (22) 消防団。
- (23) 「ナツタッタ」は回想的過去を表す。
- (24) 「ジカ」が、K音脱落、連母音融合を経て「ジャー」となった。
- (25) 「サンド ナデ」のように聞こえるが、「サンド ナルデ」の「ル」が聞こえなかったもの。
- (26) 形容詞のいいきりの形+ダッタッペで過去の当為を表している。
- (27) 前文を受けて「自分もその時代には、これが三度乗だなどと聞いたけれど、実を植えて三度なる粟ができるかできないか試みはしなかった」という意をこめて中止している。
- (28) 山の神。祭日が十二日であることからの命名。獵師、杣、木挽、炭焼きなど山仕事の神。正月のつくりもの、オコジ（おこぜ）の絵馬、古びな、川原石、御幣、斧などを供える。山の神は騰（おこぜ）を好むといわれている。
- (29) 千明吉太郎（キチタロウ）。通称「サアーニー」。
- (30) 平原の下（しも）の方。
- (31) 猪え吉の略称。
- (32) 吉野昇の「ノボル」の省略形に「アニー」をつけたもの。「アニー」は結婚などを契機として、一人前の男と認められる者につけられる敬称接尾辞。年上の者だけでなく、年下の者に対しても用いられる。女性の場合は「アンネー」という。例えば、小林タエ子さんであれば「ヨシアンネー」という。
- (33) 「女衆」の直音化、短呼化したもの。対立する語は「オトコジ」。
- (34) 長次郎の省略形に「アニー」をつけたもの。
- (35) 長次郎の略称。
- (36) 「コンタ」は、「こなた」からか。対称の代名詞。「ラ」は複数を表す接尾辞。「年が嘉十さんと同じだから」の意。トリさんと嘉十さんは夫婦。
- (37) 井上武一。
- (38) 「アンテー」は、「あの手合い」（あの連中）の意。
- (39) 吉野弘造。

- (40) 吉野弥太郎の「マタロウ」の省略形に「アニー」をつけたもの。
- (41) 断定の助動詞「ダ」の仮定形は「ダラ」である。
- (42) 「イクジャー ネー」とも言う。「イレバナ」(居ればな)とも。
- (43) 「イゲバナ」は「行けばな」。曖昧であるがこう聞こえる。又、「
- (44) 「ツッパジケル」(弾ける)。「ツッ」は接頭辞。
- (45) 「ケッコー ～グレーサー」で「～するのに十分な程だ」の意。この場合、「春さきになると、摘んで、揉んで食べるのに十分な程生える。」の意である。
- (46) 「ノリナ」は、海苔のような菜という命名の植物だが、植物学上の名称は不明。
- (47) 「種が土中深く埋まっている」ことを「タネガ シタニ イル」という。
- (48) 「ホネーダス」は「放り出す」であるが、この場合「トラクターで掘り返して土中深くに眠っていた種を地表近くの、発芽しやすい条件の位置に移動させた」の意。
- (49) 「ド」の音は聞きとれないが「しかし」の意では「ダケド」と言う。
- (50) 「落」は「フーキ」と言う。
- (51) 「アジ ツベキッテ」のようにも聞こえるが、話者の説明によると「アレ ツメキッテ」と言っているのではないかと、言う。[re]の破裂性が強いことと母音が狭いことにより「ジ」のように聞こえ、[m]と[b]の交替により「メ」が「ベ」のように聞こえるものと思われる。
- (52) [udo~i]。
- (53) 「コンチュ」は「こにする」(うどんなどの具にする)ということ。

## 義経伝説

話し手

K 井上嘉十 男 明治35年生まれ

A 小林弥太郎 男 明治40年生まれ

O 小林与玄彦 女 明治40年生まれ

T 井上トリ 女 明治43年生まれ

I 小林喜市 男 昭和15年生まれ

(U 上野 勇 採録担当者)

I ヒラガーニャー イガイト ソーユーンガ アルンダイネー<sup>(1)</sup>。(Uシ。)  
平川には 意外に そういうのが あるんだよね。

ヨシツネノ カンケースルモノシノ ハナシダトカ。(Uシ。)  
義経の 関係するものの 話だとか。

A デンセツガ アライチー。  
伝説が あるよなあ。

K ソー。  
ううん。

- I オトギバナシミテーヨ一ナノデ (U ン)アルラシーカラ。  
御伽話のようなので  あるらしいから。
- U ドンナノガ アルンデス。ヨシツネカンケースルンジャー。  
どんなのが  あるんです。義経関係では。
- K ヨシツネーノ ハナシワネー。(U ン)アノー ヨロイバシノ  
義経の  話はねえ。  あのう  鎧橋の、  
ソノ (U ン)ヨシツネガ ヨロイバシノ スグ シモニ ヨロイイワツチ  
義経が、  鎧橋の  すぐ  下に  鎧岩という  
ユンガ アランダケドモ (U ン)アスコマデ キテ ソノー ヒジョーニ  
のが  あるんだけども、  あそこまで  来マ、  非常に  
イー テンキダモンダカラ アー ヨロイカブトー イワニ カケ  
いい  天気だものだから  鎧兜を  岩に  掛け  
テ ソシテ シジューガ (3) ソコデ ギョーズイオ ツカッテー サ  
マ  そして  主従が  そこで  行水を  つかって、  さ  
ラニ オクイ ノボッタト (U ン)ユー ソノ ヨロイイワオ ニ ナゾ  
らに  奥に  登ったと  いう その  鎧岩<sup>xx</sup> に  なぞ  
ラエテ アスコノ ヨロイバシモ ハシノ ナマエモ (U ン)ツイテンダ<sup>(4)</sup>  
らえて  あそのの  鎧橋も、  橋の名前も  ついているの  
ケドネー。ソレカラ コンダー ダンダン ムラオ カミー ノボ  
だけどねえ。それから  こんどは  だんだん  村を  上に  登っ  
ッタ トコロガ ソノー ジューシャガ アドガ カワイタツチュ  
た  ところが  従者が  喉が  渴いたと言った  
ッタラ ベンケーガ ヤリノ コジリデ (U ン)チョット ホッ  
ので  弁慶が  槍の  金當で  ちょっと  掘っ  
タラ ソコイ ミズガ デタ。(U ン)ソノー ホーガンイドッ  
たら  そこに  水が  出た。  その  判官井戸

チュー'クローホーガンノ マー ホーガンイドダイネー。(U シ) いう 九郎判官の まあ 判官井戸だよねえ。

シ)マー ソシチ コトー キネン シテダカ ホーガンイ ホ  
まあ そんな ことを 記念 してだか

ーガンドーチューガ アンダイネー。(U シ)デ ヨシツネシジ  
判官堂というのが あるんだよね。 義経主従を

ューオ マツッタ。  
祭った。

A オスガタガ アルダイネー。  
御姿が あるんだよね。

K オスガタガ……。  
御姿が……。

U ヒラガーニ。  
平川に？

A シ。(I ソー)  
うん。

K アルツツタイネー。  
あるといったよねえ。

A アルヨ。  
あるよ。

T アルンカ。(U シ)  
あるのが。

K ヨシツネニ (A ベンケーダノ ヨシツネニ。) (U シ) ベン  
義経に (A 弁慶だの 義経に。)

ムサシボーニ (U シ) ヒタチボーダガナ。  
武威坊に 常陸坊だか。

A  $\overline{\text{ソ}} \downarrow \overline{\text{フタリ}}$   $\overline{\text{イレテネー}}$  ( $^{\text{K}} \overline{\text{チンダガナ。ソ}}$ )  $\overline{\text{オレモ}}$   $\overline{\text{ノゾッテ}}^{(5)}$   
うん 二人 入れてね, ( $^{\text{K}}$  何だかね。) おれも 覗いて  
 $\overline{\text{ミタケド}}$   $\overline{\text{アルヨーダ}}$ 。  
みたけど あるようだ。

T  $\overline{\text{ソ}} \downarrow \overline{\text{ンジャー}}$   $\overline{\text{アノ}}$   $\overline{\text{チンチダ}}$   $\overline{\text{ホ}}$  ( $^{\text{K}}$   $\overline{\text{ホーガン……}}$ )  $\overline{\text{ホーガンドーノ}}$   
では あの 何というのだ, ( $^{\text{K}}$   $\overline{\text{判官……}}$ )  $\overline{\text{判官堂の}}$   
 $\overline{\text{マサナンツツタン}}$   $\overline{\text{マサガ}}$   $\overline{\text{カリテタ}}$   $\overline{\text{ウチニカイ}}$ 。  
政などといったの 政が 借りてた 家にかね。

K  $\overline{\text{ソ}} \downarrow \overline{\text{ダ}}$   $\overline{\text{ソ}} \downarrow \overline{\text{ダ}}$   $\overline{\text{アノ}}$  ( $\overline{\text{Tヘー}}$ )  $\overline{\text{ドーニ}}$   $\overline{\text{オレモ}}$   $\overline{\text{ヨッタ}}$   $\overline{\text{コトガ}}$   $\overline{\text{ネン}}$   
そうだ そうだ あの 堂に。 おれも 立ち寄ったことが ない  
 $\overline{\text{デ}}$   $\overline{\text{エ}}$   $\overline{\text{イ}}$   $\overline{\text{ソ}}$   $\overline{\text{チンタイ}}$   $\overline{\text{アルガナ}}$   $\overline{\text{ソノ}}$   $\overline{\text{マダ}}$   $\overline{\text{セッコー}}$   $\overline{\text{オガンダ}}$   
ので 何体 あるか また 丹念に 拝見した  
 $\overline{\text{コトモ}}$   $\overline{\text{ネンダケド}}$ 。 ( $\overline{\text{I}}$  ~~~~~)  
こども ないんだけど。

A  $\overline{\text{オレガ}}$   $\overline{\text{イッカイ}}$   $\overline{\text{ノゾッテ}}$   $\overline{\text{ミタッタ}}$ 。  
おれは 一回 覗いて みたことがある。

K  $\overline{\text{ア}} \downarrow \overline{\text{ワーカイ}}$ 。  
ああ, そうかね。

A  $\overline{\text{ア}} \downarrow$   $\overline{\text{アノ}}$   $\overline{\text{キツネゴシカラ}}$ 。 ( $\overline{\text{T}}$   $\overline{\text{イル}}$ )  
ああ。 狐格子から。 ( $\overline{\text{T}}$  いる?)

I ~~~~~  $\overline{\text{イッパンテキニワ}}$   $\overline{\text{ヨシツネノ}}$   $\overline{\text{カンケーノワ}}$   $\overline{\text{ズット}}$   $\overline{\text{ケート}}$   
一般的には 義経の 関係のは ずっと 系統  
 $\overline{\text{一テキニ}}$   $\overline{\text{ツナガッテ}}$   $\overline{\text{アルンナ}}$   $\overline{\text{アルンサネ}}$   $\downarrow$ 。  
的に つながって あるのは あるのさね。

K  $\overline{\text{ワーダイネ}}$   $\downarrow$ 。  
そうだよね。

T ソイジヤ マサワ ケー アノ ア ヒキアゲテ キテ イルバガ ネ  
 それでは 政は 引き揚げてきて 居場所が  
 ーデ アレダッ タカ ソノ ドー コー カリテタ ワケカ。  
 なくて あれだったが、その 堂を 借りていた わけか。

K ソーダ ソーダ アスコ カリテ イタンサ シトッ  
 そうだ そうだ あそこを 借りて いたのだ  
 キリ。  
 時期。

T ナダガナ ホーガンドー マサダナンテ (笑)。  
 何だか 判官堂政だなんて。

K ソシテ コンダー ミチ シトリ カミニ ウチュー ツクッテ マサワ  
 そして 今度は 一人で 上に 家をつくら 政は  
アスコニ (↑シ↓) イタダケド。(↑ン) ソイカラ カミー ノボッテ  
 あそこに いたのだけど、それから【義経一行は】上に登って  
ソノ ハテナ スモモノ タイラ ツテ チニカ ソナヨ ナ ハテ  
 そのう、はてな、すももの 平 っ 何か そんなような はて  
ナー テ ノドガ カライタ チッ タラ マー コノ スグ ムコーニ  
 なあ。喉が 渴いたといったら、それじゃあこの すぐ 向うに  
エ スモモノ ウント アル トコガ アルカラ ソコ イグッチュ  
 すもものが たくさん ある ところが あるから そこに行くという  
ート ソノ スモモガ アッテ ソノ マー スッペ ノ クエバ  
 と すもものが あって 酸っぱいのを 食べば  
 (↑ン) ツチュ ハナシュ シタダケデ ソノ マー (

↑シ↓) ノドガ カライタ ナー マー アー ハナシ シタデ イ 下  
 喉が 渴いたのを 話を したので

ーッテッ<sup>16</sup>タトカッテ。ソレカラ アノー (↑シー コッチ コッチ) ロクノ  
通っていったとあって。それから ろくの

ダイラノ <sup>(12)</sup> ツギニ ブタイノタイラテンガ アッテ (↑エー エー) ソイデ  
平の 次に 舞台の平というのが あって それで

ブタイノタイラテ ソノ マタ ヤスンデ ソノー (↑<sup>(13)</sup>アリサー↑) ソイ  
舞台の平で また 休んで (↑ありさ) それ

カラ (↑ダメダヨ ワリー コト シチャー。ヤメナー。' ユー ホラ ハンカチ)  
から (↑だめだよ 悪い こと しては。やめなさい。 ほら ハンカチ。)

マイオ (↑アー マツタツツー ヤツネ↓。) ベンケーガ マイオ マツタト ユー  
舞を (↑ああ 舞ったというやつねえ。) 弁慶が 舞を 舞ったという

ソノー ブタイノ <sup>(14)</sup> タイラチュンガ アッテ (↑い。) マー ソンナ コトー シナ  
そのう 舞台の 平というのが あって まあ そんな ことを しな

ガラ ダンダント ヤマオ ツメテ" オー ジューノ ホーエ オチノ  
から だんだんと 山を 奥に進んで 奥州の 方へ 落ちの

ビタ' チュヨーナ ケーカ……。

びた というような 経過……。

I ダケド ヒラバラニ アノー サイ モト サイソーチン <sup>(15)</sup> トコロエ アノー  
だけど 平原に とも採草地の ところに

アノ ヨシツネガ ゲタデ コー ノボッタ' タ アトガ ツイテル イ  
義経が 下馬太で こう のった 跡が ついている

ワ イシ チュンガ アル チュッ タイネ。 トラノスケ サンガ イッ  
<sup>xx</sup> 石というのが 在るといったよね。寅之助さんが 言い

タ デス ヨ。

ましたよ。

K ダレ ノ。

誰が。



I トラノスケサンが。  
貞之助さんが。

K ハッ ハー。 ~~~~~。(A イッタカナー.)  
は はあ。(A 言ったかなあ.)

I ソイデ ソノ イシワ (<sup>(16)</sup>アッ アッ コボスナヨ.) (A シ.) コンド  
それで その 石は (<sup>(17)</sup>あぁあぁ、零すなよ.) 今度  
アノ (<sup>(18)</sup>アノ ヨバレルンカ.) チンダッ ケチ (<sup>(18)</sup>オバサンチ イニ  
(御馬也走になるのか.) 何だっけなあ、(<sup>(18)</sup>おばさんは いい  
モノ クイタダチ.) キョードー ボチ ツクッ タイネ。  
物を くれたのだなあ。 共同基地を つくったよねえ。

K ア。  
ああ。

I アスコン トコエ モッテ キテ ウツシテ キタナンツツ テ。  
あそこの 所へ モッテ キテ ウツシテ キタナンツツ テ。  
チャントネ ヤッパリ ニホンノ スジガ コーニ アングアローデ  
ちゃんとね、やっぱり 二本の 筋が このように あるんだそうで  
スヨ。  
すよ。

K ヘニ イシニネ。  
へえ、石にねえ。

I エニ イシニ。  
石に。

K ヘ。  
へえ。

I ヨシツネガ ソノ ウエイ ノボッタ ゲタノ アトダナンテ。  
義経が その 上に 登った 下馬の 跡だなんて。

K ヘー。  
へえ。

I ダカラ ソッチー アソコマデ イッテ コーイラニ モラバルノ  
だから そっちに、 あそこまで 行って こういうふうに 平原の  
アタマー トーッテッ タカッテ ユー コトニ ナンダガナッテ  
上を 通っていったかと いう ことにな るのだから

T コリャー ナンダヨ オジーサン。  
これは 何だよ おじいさん。

I ハナシ シタ ケドネー。  
話を した けどね。

K リースリャー ブタイノ タイラワ ウソニ ナルンダガ ムコー  
そうすれば 舞台の 平は 本当でないことになるんだが、向うが  
ガ ケワシクッテ (<sup>I</sup> ドッチガ) ノボレネンデ (<sup>I</sup> ケエッタ ンジャ  
険しくて (<sup>I</sup> どっちが) 登れないので (<sup>I</sup> 帰ったんじゃ  
ネー ンデスカネー。) コッチー キター ノボッ タダガナ ソレ  
ないんですかねえ。) こっちに 来て 登ったのだから それ  
モ (<sup>I</sup> エー) ワカンネー ヤネー。  
も わからないよねえ。

T ハツデンション (<sup>(19)</sup> トコー シトマタギニ シタナンチューノワ ア  
発電所の ところを 一跨ぎに したなどというのは  
リャー ナ ナニガ ナニモンダッタイ。  
あれは 何が、 何者だったね。

K ソリャー アノー コーボーサマノ コーボーイドッチュンガ ア  
それは 弘法様の 弘法 井戸というのが  
スゴニ アッテ (<sup>T</sup> ヘー。) ソイデ ソノー (<sup>(20)</sup> ナンダナ ~~~~~) コー  
あそこには あって、(<sup>T</sup> へえ。) それで そのう (<sup>T</sup> 何だな。)

ボーサマが アスコデ ソノ"コノ ミザー ヒジョーニ イー  
弘法様が あそこで、 この 水は 非常に いい  
ミズダカラ アノー <sup>(16)</sup>(<sup>T</sup>コボスナ.) <sup>(16)</sup>(<sup>A</sup>オトスナ.) (<sup>T</sup>コボ  
水だから (<sup>T</sup>零すな.) (<sup>A</sup>落とすな.) (<sup>T</sup>零

スナ。ヨソミ シネーデ ヨーク フメ.) カネオ イ カネオ  
すな。よそ見 しないで ちゃんと 飲め。) <sup>xx xx</sup> 金を

イル トキニャー ツカーネーガ マー カジヤノ チニ ハモノ  
鑄る ときには 使われないが 鍛冶屋の 刃物を  
ー キタエルノニ コノ ミズオ ツコート <sup>(21)</sup>イートカ チントカ  
鍛えるのに この 水を 使うと いいとか なんとか

イッタッチェンデ (<sup>I</sup>シ.) <sup>(22)</sup>アスコニ カジゲートツチュー バガ アル  
言ったというので、 あそこに 鍛冶垣内という 場所がある  
ンサネー。ソイデ <sup>(23)</sup>クニガ アスコニ イタ コトガ アルダケド  
んさねえ。それで 国が あそこに いた ことが あるんだけど、

アノ キンジョー タガヤスツチュート <sup>(24)</sup>カナクソガ デルダッ  
あの 近所を 耕すという と 金屎が 出るのだ  
チュー。 (<sup>A</sup>シ.) <sup>(25)</sup>ダカラ モトー カジヤガ ナンゲンカ  
という。 (<sup>A</sup>うん.) だから 以前は 鍛冶屋が 何軒か

アッタ バシヨジマナーネーカナンツッテ。ダカ ヤッパリ ソース  
あった 場所ではないかなどという。 だから やっぱり そうす

リャー カ タダ <sup>xx</sup>メージョーダケノ カジヤゲートダナンツッ  
れば ただ 名前だけの 鍛冶屋垣内だなどと言っ  
タッテ (<sup>A</sup>シ.) <sup>(16)</sup>カジゲートダトカ (<sup>T</sup>コボスナ.) <sup>(16)</sup>カジヤゲ  
たって、 (<sup>A</sup>うん.) 鍛冶垣内だとか (<sup>T</sup>零すな.) 鍛冶屋垣

ート (<sup>T</sup>コボスナ.) <sup>(16)</sup>トカ イッダケードモ ソレモ 'タダ ウソ  
内 (<sup>T</sup>零すな.) とか 言ったけれども それも ただ 虚言

ジヤネー。(1フ↓。)ソノー ジギ カワッパタノー ハタケニ  
ではない。(1うん。)その 直ぐ[近くの]川端の 畑に

ドンナ イシナンダカ オレモ ミタ コトガ ネンダガ イツ  
どんな 石なんだか おれも 見た ことが 無いんだが、いつか  
カ イッテンベー イッテンベートモッテモ ナカナカネー。ミギ  
行ってみよう 行ってみようと思っても、なかなかねえ。右

アシダガナ ヒダリアシダガナ (Aフ↓。)アシアトガ アルダッチュー。(A  
足だか 左足だか 足跡が あるのだという。

Aフ↓。)イシニネー。(Aイシニネー。)ソイデ ソノ アイ  
(Aうん。)石にねえ。(A石にねえ。)それで その

ムカイニ ハタヤツフチノ<sup>(25)</sup> ホーニモ ヤッパリ イシガ (Aイシ  
向いに 幡谷縁の 方にも やっぱり) 石が (A石が

ガアルン。)ソノ アシアトノ アル イシガ アルダツツー。(Aシ  
あるの。)その 足跡の ある 石が あるのだという。

フ↓。)ソイデ コーボーサマガ ソノー (Aマタイダッチューダ。  
(Aうん。)それで 弘法様が そのう (A跨いだという。)

ミズガ デタンデ アスコ ボーデ ソノ シトマタギニ シテ<sup>(26)</sup>  
水が 出たので あそこを 棒で 一跨ぎに して

イッタンダ ワタツタナンチュー。  
行ったんだ、渡ったなどという。

T ダカラ モーノズキナ シトガ アレジヤネン コーニ アシ ホ<sup>xx</sup>  
だから 物好きな 人が あれではないの、こうに 足を、  
アノ ムカシノ コッタッテ ホッタジヤネンカイ。'ムツシ<sup>(28)</sup>  
昔の ことだから 彫ったのではないかね。ねえ。

イックラ ナンダッテサー (Kソシテ ソーユー デンセツ ツクッタカ。)シー。  
いくら 何だってさあ (Kそして そういう伝説をつかったか。)

アノー マタイダグ<sup>(1)</sup>レーニヤ<sup>(1)</sup> アシアトガ ツクワケ ネーモノ。ムシ。  
跨いだぐらいでは 足跡が つくわけ ないもの。ねえ。

A <sup>(29)</sup> イクラ コーボーサマダッテ ムシ。チカラガ アッ、タッテナー。<sup>(1)</sup>  
いくら 弘法様だって ねえ。力が あったってなあ。

T <sup>(30)</sup> チンダカ コッチッペチト アノ ムコーッペチニ アシアト  
何だか こちら側と 向う側に 足跡

ガ アンナンテ<sup>(A)</sup> ヒ<sup>xx</sup> オラ ホンテ<sup>(30)</sup> イッテルダヨ。<sup>(1)</sup> ダッテ  
が あるなんて 私の 方では 言っているのだよ。 だって

アシアトノ コレガ コンター イシニ ツクナンテ<sup>(31)</sup> イックラ  
足跡の これが あなた、石に つくなんて いくら

ナンダッテ カンゲーラエネーヤ。(笑) イクラ ムカシダッテサー。  
何だって 考がえられないよ。 いくら 昔だってさあ。

(A) ダッテ ソーユー タトエデ……。  
だって そういう 譬えで……。

A エラバラノ ソノ イマ ユー ヨジツネガ ゲタデ アガッタナ  
平原の その 今 話に出た 義経が 下駄で あがったなど  
ンキュー イシダッテチー (↑ムシ) ゲタデ アガッダグレーデ  
という 石だってなあ、(↑ねえ) 下駄で あがったぐらいで  
<sup>(32)</sup> イシー アトガ (↑ソ-ダヨ) ツク ワケワ ネー。  
石に 跡が (↑そうだよ) つく わけは ない。

T アートノ ツク ワケワ (A) <sup>(33)</sup> ネ-トモ-デー。  
跡の つく わけは ないと思うよ。

K マー アノー トーリガ ムカシノ オーシューカイドー 'ダッタ  
まあ、あの 通りが 昔の 奥州 街道 だった  
<sup>(34)</sup> 'ラシーインダイネー。ツイジノ 末-カラ (↑シ) (A) シー。  
らしいんだよねえ。 築地の 方から (↑うん) (A) うん。

アレオ スーット キテ オータツザワ<sup>(35)</sup> トーッテ ソイデ イマ  
 あれを ずうっと 来て 大立沢を 通って そして 今の  
 ノ ソノ サンドグリノ トコー<sup>(36)</sup> トーッテ カミザカオ クダッ  
 その 三度栗の ところを 通って 上坂を 下って  
 テー ソシテ アノー ムコーギシ ウツッテー カラサワオ ノ  
 そして 向岸に 移って 唐沢を

ポッテ (Iア) ソレカラ アノー コッチノ ナニー デテ キタッペー。  
 登って それから こっちの 何に 出て きたろう。

オックイバラ<sup>(37)</sup> トーッテネ。 (A ソー)<sup>xx</sup> ド 下ノ ミナガ ホ  
 追貝原を 通ってね。 (A ううん。) どの 道が

シトダガナ。 (A ~~~~~) ソレカラ コンド オーヨーイ<sup>(38)</sup>  
 本当だが。 それから 今度 大楊へ

ウツッテー (Iエ) オーヨーカラ アカサカゴエデ……。  
 移って 大楊から 赤坂越えて……。

A アカサカゴエデ アナバラエ<sup>(38)</sup> デタイナー。  
 赤坂越えて 宍原へ 出たよなあ。

K シ。コムギノトーゲオ<sup>(39)</sup> コシテ (A ソー コムギ……) オーママイ<sup>(40)</sup> デル……。  
 小麦の 峠を 越して 大間々へ 出る……。

A オーママイエ デタイナー。  
 大間々へ 出たよぬえ。

K アー コレガ アノー ムカシノ オートーリデ<sup>(41)</sup>。  
 ああ、これが 昔の 大街道で。

A オートーリラシーヤ。  
 大街道 らしいや。

T テ テオ ヨゴシチャ<sup>(16)</sup> ダメナンドヨ。  
<sup>xx</sup> 手を 汚しては だめなんだよ。

K オラガセド キリドシー マッテ クルヨーニ チッタフ  
おれの家の裏を、切通を 回って くるように なったのは  
ズット ソレダカラ アタラシー……。  
ずうっと それだから 新しい ……。

A アトダッペ キット。  
後だろう、きつと。

K アタラシー ミチダラシーンダヨ。  
新しい 道 らしいんだよ。

A シ。 ソーダッペ。(K シ。)  
そうだろう。

I チンカ ソ ジダイニ キロクト シテ ノコッテル<sup>ア</sup> キロ  
なにか その 時代に 記録として 残っているのは、記  
クト ユニカ ネンゴーガ ウタッテ アルフ ソコ モリヤ  
録と いうが、年号が うたって あるのは その 森山の  
マ ア ナンチュンダ ジンジ<sup>ノ</sup> ゴホ<sup>ン</sup>タイガ ソ ソ ネ  
あの、何というのだ、神社の 御本体が その  
ンダイ ネンゴー<sup>ン</sup> ンダ<sup>ソ</sup> デス<sup>ネ</sup>。  
年代の 年号なんだそうですね。

K ヘー キザンテ<sup>(42)</sup> アルダ (I エ。)<sup>ネ</sup> ネンゴーガ<sup>ネ</sup>。  
へえ、刻んで あるのだ、(I ええ。) 年号がね。

A ネンゴーガ イヤ イヤ (I カイテ アルン。) カイテ アルン。  
年号が いや いや (I 書いて あるの。) 書いて あるの。

I カイテ アルン<sup>デ</sup>ス<sup>ヨ</sup>。  
書いて あるのですよ。

K ヘー。(A ア。)  
へえ。

I ソレダケナンダソーデス。ソノ トーシニ ノゴツテル ネンゴ  
それだけなんだそうです。その 当時に 残っている 年号  
オ デ ウタッテ アル ジンジメノ カンケート ナルト。  
で うたって ある 神社の 関係と なる。

K ハー↓。  
へえ。

A ア↓。  
ああ。

I デ イチバン ナニカ ソレガ フルインダト ユー。  
で、一番 なにか それが 古いんだと いう。

K ハー。 (↑<sup>(16)</sup> テテ ~~~~~)  
は はあ。

A ヨリトモ……  
頼朝……

I ソレイガイワ ネンダソーデス。  
それ以外は ないんだそうです。

A ヨリトモガ セイタイジョーグンニ ナッタ トキノ ソノ  
頼朝が 征夷大將軍に なった ときの、その  
ンゴダ。 (↑<sup>(16)</sup> フイテ……)  
年号だ。 (↑ ふいて……)

K ハー↓ ワーカイ。 (↑<sup>A</sup> ア↓。) ハー↑。  
はあ、 そうかね。 (↑<sup>A</sup> ああ。) へえ。

I アトア アッテモ ネンダイガ ウタッテ ネーカラ カイテ ネ  
その他には あっても 年代が うたって ないから、書いて  
ーカラ ゼンゼン ワカンネンダソーデスケドネー。  
ないから 全然 わからないんだそうですけどね。



K シー↓。  
ううん。

A ソリャー キレーニ ジガ ワカルダヨ。  
それは きれいに 字が わかるのだよ。

K ア ローカイ。  
ああ そうかね。

A ア↓。  
ああ。

I ダカラ ソコニ アル サクラガ オソラク ソノ ネン ネンダ  
だから そこに ある 桜が おそらく その xxxx xxxxxx

イ ネンダイノ (K ア↓ アレ。 ウ) サクラダロート ユーツテ。  
xx 年代の (K ああ あれ。 ) 桜だろうと いった。

K ウエテネー。  
植えてねえ。

I ハッピャクネン。  
八百年。

K シー↓。" ローダカ シンネーナー。 アンナニ チカガ クサッテ  
ううん。 そうだか しれないなあ。 あんなに 中が 腐って  
シマツテ…… (笑) (I エ↓)  
しまつて…… (I ええ)

A クサッ チャッテネー。  
腐 ちゃってねえ。

O アリャ エダダモノ ネー。  
あれは 枝だものねえ。

A エダダモノ。 ナンダ。  
枝だもの。 何だ。

K アリャ ミキジャネー エダカイ アレガ。  
あれは 幹ではない，枝かね，あれが。

A ミキャー ミキ ミキダイネー。モトアネー。  
幹は 幹 幹だよね。もとはね。

K ミキャー。アー ソーカイ イマ ノコッテルンガ エダガ<sup>(43)</sup> (A  
幹は。 ああ，そうかね，今 残っているのが 枝が (A  
ソー ソー。) ノコッテネー。  
そう そう。) 残ってねえ。

## 注

- (1) 平川には義経伝説があるが、まとまった話ができる程は知らない、という井上嘉十さんの発言をうけて、小林喜市さんから始まる。
- (2) 「アング」は、「アルダ」の「ル」が撥音化したもの。
- (3) 拗音の直音化の結果、「シュジュー」が「シジュー」となっている。
- (4) 「ツイテンダ」は、「ツイテイルダ」から母音脱落（ツイテルダ）、撥音化（ツイテンダ）を経て生じた形。
- (5) いいきりの形は「ノゾク」。連用形の音便形が促音便となっている。類例として「歩ク」の音便形「歩ッテ」などがある。
- (6) 政治の略称形。
- (7) [ore] の [e] はやや口の開きが狭い。
- (8) 「セッコー」は、丹念に、まじめにの意。「セッコ ヨク カセグ」（せいを出して働く。）「セッコが イー」（こまめに動く。）などともいう。
- (9) 堂の格子戸ごしに見た、の意。
- (10) 連声により、「アルンワ」が「アルンナ」となった。
- (11) 「イルバ」は「居る場」で「居場所」の意。
- (12) 「ロクノダイラ」には、土地では、特に漢字を当てていない。
- (13) 同席の孫（名前をありさという）に向かって。
- (14) 前出2例では「ブタイノタイラ」とアクセントの山はひとつで単語（複合語）意識、しかし、この例では「ブタイノ タイラ」と山が二つになり、ニ文節意識。
- (15) 草を採る場所。
- (16) 孫にむかって。（Aからは、同席の子供にむかって。）
- (17) 飲み物を御馳走になるのが、の意。「ヨブ」、「ヨバレル」で御馳走を振舞う、振舞われるの意である。
- (18) (16)(17)と同様、孫にむかって。
- (19) 千鳥発電所。
- (20) 孫にむかって、ささやき声で。
- (21) 共通語の「使う」、「仕舞う」などauで終わる動詞は連母音融合

により才段長音としてあらわれる。

- (22) 「ゲート」は「あたり」、「一帯」という意味であるが、「垣内(カイト)」からきたものが。
- (23) 国次郎の略称。
- (24) 「カナクソ」は、鉾石を溶かした時にできるかす。
- (25) 幡谷は片品村の字名。片品川の左岸にある。幡谷のへり、の意。
- (26) 以下、笑いながら。
- (27) 「コッ タッ テ」は「コトダテ」から変じたものが。
- (28) 「申す」から変じたものが。相手の同意を求める感嘆詞。「ムッ シ」と「……ネンカイ」との間にはポーズがある。
- (29) 以下笑いながら。
- (30) 話者は「オラ ホーデ」と言っているのではないかという。
- (31) 「こなた」からきたものが。間投詞的に用いられている。
- (32) 以下笑いながら。
- (33) 「ゲー」のようにも聞こえるが、そのような言い方はない。
- (34) 片品村の字名。
- (35) 片品・利根村の境の沢の名前。
- (36) 平原の上。
- (37) 片品川の支流、浮川(たにがわ)南方の河岸で傾斜がゆるやかになっているところにある字名。
- (38) 利根村の字名。
- (39) 「コムギ峠」の名で知られている。小麦峠の他、小吹峠、小蓬峠などとも書かれた。昔、ある時に子供を背中に背負った人が峠を通りかかったが、大風が吹いて、子供をもがれて行方不明になってしまった。子供をもぐような強い風が吹いたので「コモギ峠」という名がついたという言い伝えがある。
- (40) 山田郡大間々町。途中、奇応丸で有名な利根村の根利を通る。
- (41) 山田郡大間々町から赤城山北面を通り、根利、追貝を經由する道は、日光へと通じており、「日光裏街道」といわれてきた道である。
- (42) [kizande]。「キサンデ」のようにも聞こえるが、前接音節の子

音の気音が強いため、母音 [i] の「声」が消され、さらに続く音節の頭子音の「声」もなかば消えたものと考えられる。

(43) 「エダ」の [e] の口の開きは、共通語のそれよりも狭い。

## II. 奈良県<sup>よしの</sup>吉野郡<sup>とつかわ</sup>十津川村<sup>たにがいと</sup>谷垣内

収録・文字化担当者 後 藤 和 彦

- 1 地点名 奈良県吉野郡十津川村谷垣内
- 2 タイトル よもやま話
- 3 録音年月日 昭和51年7月
- 4 話し手
  - A 東 正弘 (男) 明治42年生まれ
  - B 上垣春夫 (男) 昭和10年生まれ
- 5 収録地点の概観・収録した方言の特色などについては、『方言談話資料(2)』を参照。

# よもやま話

話し手

| (略号) | (氏名) | (性) | (生 年)    |
|------|------|-----|----------|
| A    | 東 正弘 | 男   | 明治42年生まれ |
| B    | 上垣春夫 | 男   | 昭和10年生まれ |

B コンヤ ソノ トツゼンチュウカノ (A アー) マー コガナ  
 今夜 その 突然と言うかね まあ こんな

ハナシ ユンカ マ ユーベ マー トシオノ (A アー) アニト  
 話(と) 言うのか ま 昨夜 まあ 寿男の 兄と

ホンデ ウシロギセンセート ウチイ ヨッテ クレテカラヨ デ  
 それで 後木先生と 家には 寄って くれてね、<sup>(1)</sup> で

マー オレ モー ソノトキ モー シゴトデ モー キケトッテノー  
 まあ 俺(は) もう その時 もう 仕事で もう 利けていてね、

(A アー) (笑いながら) ホンデ ネヨッタンヤヨ (A ウン)  
 それで 寝ていたのだよ (うん)

ウン。 ホタラ ソノ アレ カカー オコスヨッテノー (A アー)  
 うん。 したら その あれ 嬢(が) 起こすからね

ドガーシタンヤ ユータラ (A アー) シタラ マー ンー ジツワ  
 どうしたのだ(と) 言ったら したら まあ 実は



コー コーダ アノ バーサン イマ オクッテ キテ クレタン  
こう こうだ、あの 婆さん(を) 今 送って 来て くれたの  
ジャ チュワイ。(笑いながら ~~~~~) (A ンーノー~~~~~)  
だと言うわい。 ねえ

ソレデ<sup>(2)</sup> メー コスリモテ トビオキテヨ (笑) ホデ ジャー  
それで 目(を) こすりながら とび起きてね それで では

ホッタラ アノ バーサン オクッテ キテ クレトッタラ  
そしたら あの 婆さん(を) 送って 来て 来ていたら

オーキニナト イワンナラントモ一テ オリキタラ ソシタラ  
ありがとうなりと 言わなければならぬと思つて 下りて来たら そしたら

ウシロギセンサーノ オクッテ キトルシ ジツワ マ ソレニ  
後木先生が 送って 来ているし 実は まあ それに

クワエテ ソノ アシタノ バンワ ハルオアニー キテ クレン  
加えて その 明日の 晩は 春夫兄(が) 来て くない

カチ イヤライヨ。(笑) (A アーアー) オレワ ソガーナ コトワ  
かと 言うよ。 俺は そんな 事は

マツタク エテ ワルイ ユンカノ (笑) ショーニ アワン  
全く 得手(が) 悪い(と) 言うのかね 性に 合わない

ヨッテニテ (A ンー) ユータケンド (A アー) ソシタラ  
からって 言ったけれど、 そしたら

ユータラ<sup>(3)</sup> アタラシヤノ オジサンモ キテ クレルンヤチュワイヨ。  
言ったら 新しいの 小父さんも 来て くれるのだから言うよ。

(A アーナルホド~~~~~) ジャー ダイブ ネブタイ メンタマ  
なるほど では 大分 眠たい 目の玉(を)

コスリモ一テ<sup>(4)</sup> ホンジャ マー オジサン キテ クレルンヤツタラ  
こすりながら では まあ 小父さん(が) 来て くれるのだから

ワカー オレモ イクラ シゴトン エライ ユータチノ (A ンー)  
 若い 俺も いくら 仕事が 大変だ(と)言ったってね  
 ヤッパリ ンー オレ エライチ コトワレンシ マシテヤ ンー  
 矢張り 俺(は) 大変だ(と) 断われないし まして  
 アニキト ウシロギセンサー キテ クレトルノニ オレ イケン  
 兄貴と 後木先生(が) 来て くれてるのに 俺(は) 行けない  
 ワヨチューテ ユーノワ ワリーショ (A ハー) ンー ソテ  
 よと言って 言うのは 悪いしね それで  
 マー イカシテ モラオーカイチューテ (A ンー) ジャーケンド  
 まあ 行かせ? 貰おうか(と)言って, だけれど  
 オレン トコワ カナワンゼトヨ (A ンー) ソノ オー コド  
 俺の 所は かなわな(い)せとね, その  
 モラモノ チビラモ オルシ ソテ ナンヤ ソリャ カマワン  
 子供等もね ちび等も いるし それで 何だ, それは かまわない  
 コツチャケンド ウチノ ジーサンラ ソラ ヨー リカイシテ  
 事だ(けれど) 家の 爺さん等(は) それは 良く 理解して  
 クレルシ トシヨリラモ バーサンモ キタ コツチャシ (A ンー)  
 くれるし 年寄り等も 婆さんも 来た 事だし,  
ジャーケンドノ ヤッパリ オレラモノー ワンガノ ウチジャッチ  
 だ(けれど)ね, 矢張り 俺等もね 自分の 家だ(と)って  
 ユーテモ (A ンー) ヤッパリ トシヨリラモ アル (A ンー)  
 言っても 矢張り 年寄り等も ある  
 コツチャシ コドモラモ ガンガラ ガンガラ ユーノニ オチツイ  
 事だし 子供等も がんがら がんがら 言うのに 落着い  
 タッチューカ ソガーナ センサーラ キテ ハナシシテ クレル  
 た(と)言うか そんな 先生等(が) 来て 話して くれる

(A ンー) ノモ オレモ マタ ソレモ エー ヨーローノ ウエ  
                  の も 俺も また それも 柴の 上(に)

コシ カケタヨーナ シセーデ ハナシシテモ オチツカントモーテ  
腰(を) 掛けたような 姿勢で 話しても 落着かないと思て

(A アー) ソヤッタラ アタラシヤニ イコーカーチ (笑) マ  
                  そうだったら 新しやに 行こうかって ま

オジサンニ ウー ワンガ オシカケテ イクノワ ワリーケンド  
小父さんに 自分(が) おしかけて 行くのは 悪いけれど

アタラシヤニ イテ ミロカイチューテノ (A アー) ユータン  
新しやに 行って みようかと言ってね 言ったの

ヤケンド。 ホタラ……

ト"けれど。 そしたら……

A イヤ ワシモノー (B ンー) アレ チョット アノ バーサン  
いや 俺もね, あれ ちょっと あの 婆さん(を)

アノ シタラ オクutte オリテ イクシ フット アノー ナニ  
あの 下等(に) 送って 下りて 行くし ふっと あの 何

シテカラ センセー アノ タバナヤデ トマツトルンジャッテ  
して 先生(が) あの 田花屋で 泊まっているのだから

ユーンジャワヨ。 (B ンー) ソレデ アノー マー クルマン  
言うのだよ。 それで あの まあ 車の

ナカデ サー アノー ウモ<sup>xxx</sup> ウモ<sup>xxx</sup> オ<sup>xx</sup> ウマレタ ト<sup>xx</sup> トチワ  
中で さあ あの 生まれた 土地は

ドチラサンデスカッテ キータラ マー エー タイワンエ  
どちらさんですかって 聞いたら まあ 台湾へ

イッテノ (B ハハン) シテ マー ハイセンデ キノミキノママ  
行ってね そして まあ 敗戦で 着の身着のまま

アノ マ ニッポンイ ヤッテ キタンヤ ユーテ (B ンー)  
あの ま 日本に やって 来たのだ(と) 言って、  
デ イマワ ゲンジューチワ ヨコハマナンヤッテ ユー オハナシ  
で 今は 現住所は 横浜 なんだって 言う お話  
ナンヤワヨ。(B ハーハー) ホーカチュテ ワシモ ソラー  
なのだよ。 そうかと言って 僕も それは

アノー クルマン ナカデ アノ チョーヨーニ イッテ アノー  
あの 車の 中で あの 徴用は 行って あの  
タイワンカラノー グンゾクガ イッショニ イッタッテ ユーヨ  
台湾 からね 軍属が 一緒に 行ったって 言う

ーナ クルマン ナカデノー (B ンー) チョット ハナシモ  
ような 車の 中でね ちょっと 話も

シ<sup>xx</sup> シヤッタリ シテカラ (B ンー) マー アコデ ワシノ  
しあったり して まあ あそこで 僕の

イエワ ツイ ソ<sup>xx</sup> コノ ムコーノ アノ ヒー アカットル  
家は つい この 向こうの あの 灯(が) ともっている

トコ アコナンヤ ユーテ。 夕ウエノ ホーニ ヒー アカッ  
所, あそこなのだ(と) 言って。 そしたら 上の 方には 灯(が) ともっ

トル トコ アレワ キョネン イッタ フカゼクンノ イエナン  
ている 所 あれば 去年 行った 深瀬君の 家なの

ジャワヨッテ (B ンー) ユーヨーナ ハナシデ (B ンー)  
だって 言うような 話で

マー ワカレテカラ マー タバナヤサンデ トマットルンダテ  
まあ 別れてから まあ 田花屋さんで 泊まっているのだから

イーオッタノー。 マー ベツニ アノー ソレガ ア ドーッテ  
言っていたね。 まあ 別に あの それか どうって

ユー コトモ ナイケド ホカノ ヒ<sup>xx</sup> ミ<sup>xx</sup> ヤドヤヤッ タラノ一  
言う 事も 無いけれど 他の 宿屋 だったらね

ワシラン モッテッテモ コレ タイテ クレンカッテ ユ一  
僕等が 持って行ってても これ(を) 炊いて くないかって 言う、

タイテ クレンカッテ (笑) ユ一カ (B 笑) イエンカ シラン  
炊いて くないかって 言うか 言えないか 分らない

ケンドノ (B ン一) キョネンモ キテ クレトッタン ジャッチュー  
けれどね 去年も 来て くれていたのだから言う

カラ (B ユ一) マ一 モッテッタラ メンド一 ミテ クレル  
から (言う) まあ 持って行ったら 面倒 みて くれる

ジャロチュテ ヒョット オモイツイテヨ一 (B ア一) ソシテ  
だろうと言って ひょっと 思い付いてね そして

シタノ (6) ホ一ニ ナンバノ トリノコリ アッテヨ一 (B ン一)  
下の 方に 玉蜀黍の 採り残り(が) あってね、

ン一 マ一 アノ モ一 マ一 ナンダ カタク ナッテノ一  
まあ あの もう まあ 何だ、 固く なってね

オイシクモ ナインジャケド マ一 アノ テサグリデ ゴロッポン  
おいしくも 無いのだけれど まあ あの 手探りで 五六本

マ ムイデ キタンヤワ。 (B ホ一) (笑) ソシテ マ一  
ま もいで 来たのだよ。 そして まあ

モッテッテ (B ン一) アノ タイテ モローテ クレ一  
持って行って あの 炊いて 貰って くれ(と)

(B ン一) ッテノ一 ア一 ワシモ アノ一 アノ アノ ヒトノ  
言ってね、 僕も あの あの あの 人の

イ<sup>xx</sup> アノ ヒトガラモ ヨ一 シットルシ ワシノ イエモ  
あの 人柄も 良く 知っているし 僕の 家も

アガーノ トナリニ アルンジャワヨッテ (B シー) ユーヨーナ  
あの家の 隣に あるのだよ、って 言うような

ハナシ シタンジャワヨ。 (B シー) ホーカ ユーテカラ  
話 したのだよ。 そうか、(と) 言って

シテ マー アノ アシターノ アシタノ バン アノ ココガイテ<sup>(7)</sup>  
そして まあ あの 明日の 明日の 晩 あの この家で

アノ ア コッチ ココ キテ クレルッチューンジャワイッテ  
あの xx こっち ここ(1) 来て くれる、って言うの、って

(B シー) ハナシシタンジャ カジンニ。 (B シー シー)  
話 したのだ、 家人に。

ホーカ ユーテカラニ マー タロー ジロー タロー ケントーニ  
そうか(と) 言って まあ 太郎 次郎, 太郎(は) 剣道に

イタシノー ジローワ……  
行ったしね, 次郎は……

B シー キョー イタンジャロ。  
今日 行ったのだらう。

A ウン。  
うん。

B ウン ウン ウン。  
うん うん うん。

A ジロー ソシタラ アノ キョー ナニ イッタンジャワ。  
次郎(は) したら あの日 今日 何(1) 行ったのだよ。

シモユイミテ ナンカ ~~~~~  
下湯へ 何か

B アッ ソノ キャンプジャ ナンジャト (笑いながら) オー  
ああ, その キャンプ、って 何、って おお、

アレ イタンカ。 (A ンー キャンプワ アノ スリヤ)  
あれ(に)行ったのか。 (うん キャンプは あの)

ホージャ アレカ  
それじゃ あれか

A アレト (B ンー) アノ エー セ センタクヤノ  
あれと あの セ 洗濯屋の

アニキニノ (B アー アー) アノシトラ イテ クレルンジャッ  
兄貴にね あの人数(が)行って くれるのだから

チューテ。  
言って。

B オー セーネンダ<sup>ン</sup>テ<sup>ン</sup> ドーゾ コーゾ ソガン セワシテ クレ  
おお 青年団で 何やかやと そんな世話してくれ

ルンヤッテ ユートツタ。 フン。  
るのだから 言っていた。 ふん。

A ハンゴー ニジクルヤラノ<sup>(9)</sup> (B 笑) コメ サンゴーホド  
飯盒(を) ゆわえるやらね 米(を) 三合ほど

クレー ユーテ。 (笑) ジローワ イクシ。  
くれ(と) 言って。 次郎は 行くし。

B ジャー アレカ。  
じゃあ あれか。

A ソノ アシテ (B ンー) マー アノ ヒラダニ サンパツニ  
その 足で まあ あの 平谷(に) 散髪に

イッテ キテカラヨ<sup>ー</sup> (B ンー) イロイロ カンガエヨッ  
行って 来てからね いろいろ

カンガエタンヨ。  
考えたのよ。

B アー アー アー。  
ああ ああ ああ。

A マー アレラ マー オランダモ イーシ マ ベツニ ソレデノー  
まあ あれら(は) まあ いなくても 良いし ま 別に それでね

アノー ナンテ ユー コト ナインジャケド マー チョット  
あの 何て 言う 事(は) 無いのだけれど まあ ちょっと

コンバン アノ オキャク クルンジャチュワイ ッテ マ コガ  
今晚 あの お客(が) 来るのだから言うよ っ て ま こん

ナ ムサイ トコエ クンナチュ ワケニモ イカンシ (笑)  
な むさい 所へ 来るなと言う 訳にも いかないし

ホンデ<sup>2</sup> ミンナ オクノマーモ<sup>2</sup> ナカノマモノー アノ ミンナ  
それで 皆 奥の間も 中の間もね あの 皆

エンノモ サンジョーモ ミンナ ツコートルヤロー。(B オー  
縁先も 三畳も 皆 使っているだろう。

オー) ドコデ<sup>シ</sup> シヤーッテ カナイ ユーンヤワヨ。(B 笑)  
どこで<sup>xx</sup> するのって 家内(が) 言うのだよ。

マー ショーナーワ ベツニ ソノ ドコソノ ヒトジャ ナイシ  
まあ 仕様無いわ、 別に その どの 人では 無いし  
(10)

ノー マー ソリヤ オクノマヤッタラ アレワ ネヤ シッパナシ  
ねえ まあ それは 奥の間だったら あれば 寝具(を)敷きっぱなし

ジャシ (B オー) マー ソリヤ オコスンヤケド ムサイシ  
だし まあ それは 起こすのだけれど むさいし

モー カッテデ ヤッタラ<sup>ナ</sup>ッテ (B ンー) マ ハナシシテカラ  
もう 勝手に やったらなって まあ 話(を)してから

ホンダラ サンパツ イッテ キテ カエッテ キタラ マ アツー  
それだったら 散髪(に) 行って 来て 帰って 来たら ま 暑く



モ アルシ デ" カカー クサカリ キテカラ オリテ キテ  
も あるし で 嬢 (は) 草刈り (に) 来てから 下りて 来て

ワシ ヒ ヒラダニカラ キテ ミタラ モ モドッテ キテ  
僕 (は) <sup>xx</sup> 平谷 から 来て みたら も 戻って 来て

ヤレ アツカッタ アツカッター ユーテ エライ アツカッタヤ  
やれ 暑かった 暑かった (と) 言って、 大変 暑かっただ"

ロノー ユーテ (B 笑) マ アノ アネノ ムスメト マゴト  
ろうね (と) 言って ま あの 姉の 娘と 孫と

ウチニ オッテ モ アレラ メシ ヒルメシノ シタク シヨル  
家に いて も 彼等 (が) 飯、 昼飯の 仕度 (を) している

シ て マ アノ ワシモ ユーベ チョット オソカッタシ  
し、で まあ あの 僕も 昨夜 ちょっと 遅かったし

キョー ヒラダニ イッテ ジテンシャ フンデ ノボッテ キタラ  
今日 平谷 (に) 行って 自転車 (を) 踏んで 登って 来たら、

イ イク トキャ イーケンドヤロ カエリ フンデ キタラ  
<sup>xx</sup> 行く 時は 良いけれどね 帰り 踏んで 来たら

モー。

もう。

B キケタジャロ。

利けただろう。

A キケタヨー。(笑) クラネノ ウエノ (B シー) ホーデ  
利けたよ。 倉根の 上の 方で

イシバシデ (B シー) アノ ヒノキノ タツトル トコデ  
石橋で あの 桧の 立っている 所で

ヒトスズミ シテカラ アガッテ キタ。 アー シンドイ シン  
ー涼み してから 上がって 来た。 ああ 疲れた 疲

ドイ ユーテ デ<sup>〃</sup> ビール イッパイ<sup>×××××</sup> イッポン アケテ カナイト  
 れた(ト) 言って で ビール 一本 あけて 家内と  
 マ チョット ノンデカラニ モー ツカレタシ エー ヨコニ  
 ま ちょっと 飲んでから もう 疲れたし 横に  
 ナットッタラ チョット ソージスルンヤ イッテ (B オー)  
 なっていたら ちょっと 掃除するのだ(ト) 言って  
 ナニスルンダ<sup>(11)</sup> イッテカラ<sup>〃</sup> イヤ モ ソコラ ヒッパリサガー  
 何をするのだ(ト) 言って、 いや も そくら(モ) 引張り探して  
 トルシ オキャクラ チョット クルッチュヤ モ ボンニモ  
 いるし お客等(カ) ちょっと 来るって言えば" も 盆にも  
 チコー ナルシ チョット アノ ウワベリ シッカエルンジャ  
 近く なるし ちょっと あの 上縁(モ) 敷きかえるのだ(ト)  
 ユーテ ニカイ アガッテ ネー ッテ イーヨル。 (笑)  
 言って ニ階(ニ) 上がって 寝よ って 言っている。  
 マー ダルーモ アルシ マー ニカイ アガッテテ ネテカラ<sup>×××××</sup>  
 まあ だるくも あるし まあ ニ階(ニ) 上がって行って  
 ネオッテカラ マー ニジニ ナリ サンジニ ナリ スルンデ<sup>〃</sup>  
 寝ていてから まあ 二時に なり 三時に なり するので  
エ カカー マタ ボンモ チコー ナルシ イッソー アノー  
 嬢(ハ) また 盆も 近く なるし 一層 あの  
 キタガイトーノ モロータ クサ カルンジャ チューテ デテクシ  
 北垣内の 貰った 草(モ) 刈るのだ(ト) 言って 出て行くし  
 (B ンー) マ イテ コイヨッテ ユーテ スワリヨッタ<sup>〃</sup>ンヤケド  
 ま 行って 来いよって 言って 坐っていたのだけれど  
 ソノ クサス<sup>×××××</sup> <sup>(12)</sup>クサスシボー ツクッテ コイ ユーンジャワヨ。  
 その 草すし棒(モ) 作って 来い(ト) 言うのだよ。

B アー スシグイカ。<sup>(13)</sup>  
ああ すし杭か。

A オー (B ンー) キョネン サンボン アッタツダケド モー イ<sup>xx</sup>  
おお、 去年 三本 あったのだけれど もう  
ニホン タラン。 イッポン アルンジャケンド<sup>ッ</sup>テ。 ッ  
二本 足りない。 一本 あるのだけれどって。

B オレン トコナ ホンデモ アレジャガ タ コガーナ アオイ  
俺の 所には それでも あれたが、 ね、 こんな 青い

アレシタモノ

あれしたもの

A オーサイ。 アレ イッポンダケ イッテ ミタラ アツツラヨ。  
おおね。 あれ 一本だけ 行って みたら あっただろうね。

(B 笑) ソジャケンド モッテッテ ミオツテカラ コリヤ マ  
そうだけれど 持って行って 見ていてから これは ま

アンナ トコイ ツキタテテモ ショーガ ナイシ マ ソガー  
あんな 所に つき立てても 仕様が 無いしま そんな

マイトシ モラワンデ エライ ワルインジャケンド マ アノ  
毎年 貰わないで、 大変 悪いのだけれど ま あの

センオ ヒ<sup>xx</sup> アノ ヒキシメ<sup>テ</sup> トバシタローゼ ユーテ シテ  
線を あの 引きしめて 飛ばしてやろうぜ(と) 言って そして

アノ アガッテ キオツテカラ マテヨ キテ モラウノワ イー  
あの 上がって 来ていてから 待てよ、 来て 貰うのは 良い

ケンドノー ソレデ アノー キノーモ アノ オーノセンセー  
けれどね それで あの 昨日も あの 大野先生(が)

ウエムラノノ ナニデ アレ ホンヤデ オルンジャッテ ユーケド  
植村のの 何で あれ 本家で いるのだから 言うけれど

デンワバンゴ－ サガシテモ チョットモ ナインジャシナ (B  
電話番号(ガ) 探しても ちよっとも 無いのだしね、

アー アー アー フーン) デ キタガートノ バーサンニ  
で、 北垣内の 婆さんに

アレ ヤシキデ クサ カリヨルヨッテ デンワバンゴ－ アルンカ  
あれ 屋敷で 草(ガ) 刈っているから 電話番号(ガ) あるのか、

アルカーッテ キーミテモ ナイシッテッテ イヤ アルヨ ッテ  
あるかって 聞いてみても 無いし、て言って いや あるよ っテ

ユーテ クレテ マー アノ ココラーデ ココ オレトコ キタ  
言って くれて まあ あの こころで ここ 俺(ノ)所(ニ) 来て

ロー ユンジャケンド ソノ (笑) オカシーナ コトオ カナ  
やろう(ト) 言うの(ト)けれど その おかしな 事を 家内

イン シュー オッタッテ ベツニ キク ワケジャ ナイケンド  
の 衆(ガ) いたって 別に 聞く 訳では 無いけれど

(B オー オー) シャベリニクイシ チョット アノ キューニ  
しゃべりにくいし ちよっと あの 急に

オモイ ヘン アノ オモイツキ カワッタンデ アコエ デンワ  
××××× ××× ××× 思いつき(ガ) 変わったので あそこへ 電話

シテ ユーベノ トコロデ ヤッテ モラウヨーニ ショート  
して 昨夜の 所で やって 貰うように しようと

オモ－テッテ (B ン ン) ジャー ホンナラ オレ  
思ってた言って、 では それなら 俺(ガ)

チョット ヒトアシサキ オリルスカ デンワ スルワヨー (B 笑)  
ちよっと 一足先(ニ) 下りるから 電話 するわよ

ッテ ユーテ クレテヨ－。  
って 言って くれてね。

B アー ジャットアンカ。 ウン ウン ウン。  
ああ たったのか。 うん うん うん。

A ソジヤ ソシテ クレー ユーテ デ アノ オリテ キテ シチジ  
それじゃあ そうして くれ 言って、 で あの 下りて 来て 七時、  
ロクジスギヤッ ツロ。 マ アスコデ シゴトシテ オル トキ  
六時過ぎたらただろう。 ま あそこで 仕事して いる 時、  
ソイテ バーサントコエ デンワ シタンジャケド シサツ <sup>(14)</sup>  
それで 婆さん(の)所へ 電話 したのだけれど 私設(電話が)  
サッパリ キコエンヤワナ。  
さっぱり 聞こえない(の)だね。

B ウン アー チョード オレヨ ソノ シゴトカラ モドッテ  
うん。 ああ 丁度 俺よ、 その 仕事から 戻って  
キテナー (A アー アー) アット パンツカケ ナッテ ソノ <sup>(15)</sup>  
来てね パンツかけ(に) なって その  
(笑) フロイ ハイロカト オモットッタデノー (A アー アー  
風呂に 入ろうかと 思っていたからね

アー) ホイタラ アタラシヤノ オジサンカラ デンワヤッテ  
そしたら 新しやの 小父さんから 電話だって

ユーヨル ホシタラ バーサン サキー デテ クレテノー。  
言っている、 そうしたら 婆さん(が) 先に 出て くれてね。

A ウン (B ホイテ キ) ソリャー モー ハナシオートッタヨッテノー  
うん (それで) それほ もう 話しあっていたからね  
(B アー ジャーダッタ) ホレデ マー (B ンー) ガッテン  
ああ たった。 それで まあ 合点

シテ デテ クレタンジャロケド サッパリ キコエンノヤヨ。  
して 出て くれたのだろうけれど さっぱり 聞こえないのだよ。

(B シー) ソレデ マ アノ アー コーシューー コーシューーツチューー  
それで ま あの 公衆, 公衆って言う

コト ナイケド マ ホンキ カケタラ ホーガ イーンジャ  
事 無いけれど ま 本機(を) 掛けたら (その)方が 良いのでは

ナイカッテ ユーテヨ (B シー) ソレデ アノ マゴニ チョット  
ないかって 言ってね それで あの 孫に ちょっと

マゴ ヨンダラ ハシッテ キテ シラベテ ミタロ ミタロ  
孫(を) 呼んだら 走って 来て, 調べて みてせうじ みてせろう(と)

ユーテ カミガキカ ウエガキカ ワ ドッチヤラ ワカラン  
言って, <sup>かみ</sup>上垣か <sup>うえ</sup>上垣か <sup>xx</sup>どっちやら 分らない(と)

ユーテ (B オー) マー <sup>xx</sup>カ アノ アイウエジャスカ ウオ  
言って まあ あの 「アイウエ」だから 「ウ」を

サキニ ミテ ソレデ カカ テ カガ サキカ ドッチ ミオッ  
先に 見て それで 「カ」か, 「カ」が 先か どっち 見て

タンヤケンド マドロクサーンジャケンドナ ヤッパリ ジュンジョ  
いたのだけれど まどろっこしいのだけれどね 矢張り 順序

ミニヤ ワカランジャロ。 ソシタラ (B シー) ミツケテ  
見なければ 分らないだろう。 そしたら 見付けて

(B 笑) ヨンキョクノ オー ナンボカンボッテ イーヨッテ  
四局の いくらいくらって 言っていて

ホレデ ヒカエテカラ テ デンワ シタラ バーサンラ ウケテ  
それで 控えてから それで 電話 したら 婆さん等(か) 受けて

クレテ アニ <sup>xxxxxxx</sup>カエッテ マダ カエッテ コンカーッテ ユタラ  
くれて 兄 未だ 帰って 来ないかって 言ったら

イマ キトルッテ。

今 来ているって。

B ヨー ヨー。 オレ ソノトキ モドッタ トキジャッタ。(笑)  
やっと。 俺 その時 戻った 時 だった。

A (笑いながら) ツカレタローナー アツイノニ。 ソレデモ ココイ  
疲れただろうね 暑いのに。 それでも ここに  
コンナラントモータ チャウカ。 オレトコ コンナラントモータ  
来なければならぬと思つて、 違うか。 俺(の)所(に) 来なければならぬと思つて  
チョット ハヤカッタロダー。  
ちょっと 早かつたろうね。

B ユーベワヨー (A ンー) ソレ オレ シゴトガ マ ワリアイト  
昨夜はね それ 俺 仕事が ま 割合

オソカッテノー (A ンー ンー) ホデー カエリ オソカッタ  
遅くてね それで 帰り(が) 遅かつた

ノト (A ンー) ツイ オレ クルマ シタエ オイテ アッテ  
のと つい 俺 車(を) 下へ 置いて あつて

ノー (A アー) セーザイショノ トコイヨー。(A ンー) ソレデ  
ね、 製材所の 所にね。 それで

タンシャ ニノツテ ウエー (A ンー) アノ ナニモ ニモツ  
単車に 乗つて 上に あの 何も 荷物(が)

ナイ トキワ タンシャデ カヨータ マシヤト オモータ  
無い 時は 単車で 通うのは ましたと 思つて

(A ンー) ホンテ ウチ インデ ミタラ ヒョット バーサンガ  
それで 家に 帰つて みたら ひよつと 婆さんが

オマエ キモノ キカエトルヨーナンジャワヨ。(A ンー)  
お前 着物(を) 着かえているようなんだよ。

バーサン ドコ イクンヤ ユータラ ホシタラ オマエ  
婆さん どこ(に) 行くのだ(と) 言つたら そしたら お前

カナーノ ヤツノー (A ンー) バーサン イマカラ オリテ  
 家内の 奴ね, 婆さん 今から 下りて  
 イクンヤ ユーテノー。(A 笑) チョーイト マテヨ。(A ンー)  
 行くのだ(と) 言ってね。 ちよっと 待てよ。  
 コリャー シクジツタトモ~~ー~~テ。(笑) ソレデ オレ オモイダ~~ー~~テ  
 これは しくじったと思って。 それで 俺 思い出して  
 ノー (A アー アー) ソリャ マタ オマエ アシモ ワリーシ  
 ね それは また お前 足も 悪いし  
 オリテ クルノ オ アレヤシ オレ チョット クルマ モチー  
 下りて 来るの あれだし 俺 ちよっと 車(を) 持ちに  
 オリテ イクワイ~~チ~~ユ~~ー~~テカラ タンシャデ オレ シタニ~~ニ~~ オリテ  
 下りて 行くよって言ってから 単車で 俺 下に 下りて  
 キヨッタラ (A ンー ンー) チョード ウシロギセンセーニ  
 来たら 丁度 後木先生に

ソコデ デオーテヨ。  
 そこで 出逢ってね。

A オー オー ノー。(B 笑)  
 おお, おお, ねえ。

B ソシテ センセーニ ノシテ モロータシヤケドノー。 ソレデ  
 そして 先生に 乗せて 貰ったのだからね。 それで  
 コンバンガタ ソレオ イシキシテ コリャ アノ タンシャデ  
 今晚方 それを 意識して これは あの 単車で  
 インダラ アカント オモ~~ー~~テカラ (笑) クルマ モッテ (A  
 行ったら 駄目だと 思って。 車(を) 持って  
ンー ンー) アガットッテカラヨ (笑) オジサント コンナラン  
 上がっていて 小父さんと乗なければならない



トモテノー。 (笑)

と 思 っ て ね。

A コンナラント ユーテモ ソリャ アノ ナンヤロ。 ココエ  
来なければならぬと 言っても それは あの 何だろう。 ここへ  
クルチャー コト オレ マー アノ ヤッパリ ムコーサンニモ  
来ると言う 事, 俺 まあ あの 矢張り 向こうさんにも  
ノー アノ マ ショーダクシテ モラワンナランシ ソレヤデ  
ね あの, ま 承諾して 貰わなければならないし そんなこんなで  
マー ソーユー デンワ シテ ソイデ キミニ キータラ マ  
まあ そういう 電話(を) して それで 君に 聞いたら ま  
アノ オレトコガ スルワイッテ アンタ ユーテ クレタワヨ。  
あの 俺(の)所が するよ, って 貴方 言って くれたよ。  
マー ケド オレモ デンワノ クチ スワリヨルンジャスカ  
まあ けれど 俺も 電話の ロ(に) 坐っているのだから  
モ オレ オレカラ シトクワヨ ユーテ マ ソンナ ツゴーデ  
俺 から しておくよ(と) 言って ま そんな 都合で,  
(笑) (B イヤ マー) マー アノ ナンヤワノー。 マ ヤッ  
( いや まあ) まあ あの 何だ? ね。 - ま 矢張り  
パリ アノー カナイ オ オッタラ ホーゲンヤ ナンヤデ  
あの 家内(が) いたら 方言や 何やで  
ナンゾ シャベル ユーテモ マゴラ キョーワ ミ フタリ  
なんか しゃべる(と) 言っても 孫等 今日 ミ 二人  
オランシ アレワ ニカイ インデ マー スッコンドルチャーシ  
いまいし あれは 二階(に) 行って まあ すこんでおると言うし  
ナー (B アー アー) ベツニ ジャマニ ナランワヨッテ  
ね, 別に 邪魔に ならないよって

ユータケンド マ ヤッパリ オタガイ ソノ ホー イートモーテ  
言ったけれど ま 矢張り お互い その 方(が) 良いと思って

マー キューニ オモイツイテ。(AB笑) コンバン マー  
まあ 急に 思い付いて。 今晚 まあ

(B ンー) ノシテ キテ モロテ (B アー~~~~) ヨカッタヨ。  
乗せて 来て 貰って 良かったよ。

(B ンー) ウン。 マー ソレワ ソート ボンモ チカヨッテ  
うん。 まあ それは そうと 盆も 近付いて

キテ セーザイノ ホーモ キョーワ セーザイ シオラナンダノ。  
来て 製材の 方も、 今日は 製材 していなかったね。

B ウン。 エート オトツイカラヨ (A アー) アノ オハライ  
うん。 ええと 一昨日からね あの 小原に

イテノー (A ンー) イマ ソノ スギムラサンノ アレ  
行ってね 今 その 杉村さんの あれ

スギモト ユー ヒトカ (A ンー) アノ シノ タテリオル  
杉本(と) 言う 人か あの 衆の 建てている

ヤツノ イマ アノ アレ キソ シオルンヤワイ。(A アー  
奴の 今 あの あれ 基礎(8) しているのだよ。

アー) ソンデ キノー オトツイカラ ソレデ ソレニ オワレ  
それで 昨日 一昨日から それで それに 追われ

テノ (A ンー ンー) モー アツー アルシ オー ユーガ<sup>(16)</sup>タメー  
てね、 もう 暑く あるし おお 夕方時分(は)

シオダラグラライニ ナッテノ ツイ アセ コー ナッテノー。  
塩 鱧位に なってね、 つい 汗(が) 濃く なってね。

(A ~~~~) (笑) ウン。(A フーン) ホデ ツイ セーザイモ  
うん。 それで つい 製材も

ミンナカラ タノマレタノモ ヨー セントヨ (A ウン) ノバシ  
皆から 頼まれたのも よう しないでね 延ばし

ノバシ シテカラ。 アシタ ホンデ ニチヨー ヘンジョーシテ  
延ばし して。 明日 それで 日曜 返上して

シゴトスルカッチ イヨツタンジャケンド ワカー シラモ ヨ<sup>xx</sup>  
仕事するかって 言っていたのだけれど 若い 衆等も

シゴニン イキョンノー ニッチョビワ ヤスミターチューシ<sup>人</sup>  
四~五人 行っているの(が) 日曜日は 休みたいと言うしね

(A アー アー) デ モー ゴーインニ アシター ヤスモーカーッ  
で もう 強引に 明日 休もうか

テユーカラヨ (A ンー) マ アシタノ アサ ナッテ ミナ  
と言って まあ 明日の 朝(に) なって みなければ

ホントーワ ワカランノ<sup>ジャ</sup>ケンドモ。 (A ウン) ウン マ  
本当は 分らないのだけれども。 うん ま

ンー ニチヨービニ マタ キトッテ ワカー シラ マタ ブツ  
日曜日に また 来ていて 若い 衆等(か)また ぶつ

ブツ ユーシヨ (A ンー) (笑) ヤスミター (A アー) チューテ  
ぶつ 言うしね、 休みたい と言って、

キタイシテ オッタ トキニ ヤスマセント シゴトシタラノー。  
期待して いた 時に 休ませないで 仕事したらね。

(A アー アー) マタ (笑) ボヤカレタラ カナワンシノー。  
また ほやかれたら かなわないしね。

(A ノー ~~~~~) ウン。

A ソレデ モー ズーット アノー ナニカ。 ソレデ ヤスム  
それで もう ずっと あの 何か。 それで 休む、

セーザイダケ ヤスムット ユー コトジャ ナシニ モー アノ  
製材だけ 休むと 言う 事では 無しに もう あの  
(B ンー) ダイクサンモ ゼンブ ナンヤ。  
大工さんも 全部 ないか。

B ジャーワ。 タイガイ アノ ヤスム トキワノ。 ソレニ ワカー  
だよ。 大概 あの 休む 時はね。 それに 若い  
シラ オルシノー (A ンー) ワカー シラ ワカー シラデ  
衆等(か) いるしね 若い 衆等(は) 若い 衆等で  
ヤッパリ タマノ ニチヨービニヤ ヤスミターンジャ ローシ。(笑)  
矢張り たまの 日曜日には 休みたいのだろうし。

A ウン。 ソーヤワノ ヤッパリ。 (B ンー) キカイシゴトト  
うん。 そうだね 矢張り。 機械仕事と  
ナッテ キタラ ン ムカシノト チゴートノー ヤッパリ アタマ  
なって 来たら 昔のと 違ってね 矢張り 頭  
モ メモ ツカワンナランシ ラクナヨーニ ミエテモノー (B 笑)  
も 目も 使わなければならない 楽なように 見えてもね  
ヤッパリ (B ジャーワ コマカクテ。) ソーユ ワケニモ  
矢張り (だよ。 細かくて。) そういう 訳にも  
イカンシ。 ~~~~~  
いかないし。

B マー イマノ ン チョーバチューカ シゴトショーバイワ  
まあ 今の 帳場と言うか 仕事商売は  
(A ンー) ナニ シテモ ソガーナ ケーコーワ アルノー。  
何 しても そんな 傾向は あるね。

A ンー。 マー。  
うん。 まあ。

B ヤッパ (A ンー) ドガーニ ユーノカ ソノー ワカー シラ  
矢張り どんなに 言うのか その 若い 衆等  
ニワ ワカー シラノ ソノ ツイ ゼニダケ モーケテ タメテ  
には 若い 衆等の その つい 銭だけ 儲けて 貯めて  
ドーチューヨリモ ヤッパリ チカヨクチューヤー オ オカシーカ  
どうと言うよりも 矢張り 近欲と言えは<sup>xx</sup> おかしいか  
シランケンド アル テード キョー イチニチ キョー イチニチ  
知らないけれど 或る 程度 今日 一日 今日 一日  
オ ソノ ナンチューカノーラ (A ンー) アレシターチュー  
を その 何と言うかね あれしたいと言う  
キモ アルト オモーン<sup>ジャ</sup> ウン。 ソガーナノ アンマリ  
気も あると 思うのだ。 うん。 そんなね、 余り  
コー オサエテモノラ (A ンー) ツイ オマエラノ アレ<sup>ジャ</sup>  
こ 押さえてもね つい お前等の あれだつて  
チャーチューニ ユーテ シオツテモ ヤッパリ ドクソニ ソノ  
言うというふうに 言って していても 矢張り どこかに その  
ナンゾ フキデルモン アルヨツテニノー。 (笑) ウーン。  
なんぞ 吹き出るもの(か) あるからね。 うん。

A ヤッパシ ムカシヤッタラノー ソノ キカイガ タンジュンナッタ  
矢張り 昔だつたらね、 その 機械が 単純だつた  
ヤロ。 ノー ヨキトカ ハツリトカバッカシダケド イマワ  
だろう。 ね 斧とか 鋳とか 許りだければ 今は  
(B ~~~~~) モー ミンナ アノー ノーリョクテキツテ ユー  
もう 皆 あの 能力的って 言う  
カノー マー アサ<sup>xxx</sup> アサデモ モー タンシャデ<sup>ト</sup> トンテ<sup>ク</sup> クルカ  
かね まあ 朝でも もう 単車で 飛んで 来るか

ジ<sup>xx</sup> ジドーシャデ マー カラダワ ラクナケンドノー ヤッパリ  
自動車で まあ 体は 楽だけれどね 矢張り

ソートー アノー ナニオ ツカワンナランシ (B ジャーノー)  
相当 あの 何を 使わなければならない (ただね)

キカイ ドーグニ シテモノー (B ンー) ミンナ アノ フク  
機械, 道具に してもね 皆 あの 複

ザツニ ナッテ クルヨッテ ヤ<sup>xxx</sup>ソリヤ アノ カラダワ  
雑に なって 来るから それは あの 体は

ローリョクノ メンデワノー ダイブソリヤ ウント ハブケ  
労力の 面ではね 大分 それは うんと 省け

ルンヤロケド ヤッパリ ソレダケ アタマ ツカワンナランデノー。  
るのだろうけれど 矢張り それだけ 頭(を) 使わなければならないからね。

ヤッパリ (B マー アレジャーノー) ンー。 マー ソレデ  
矢張り (まあ あれだね) うん。 まあ それで

ジダイノ フーチョート ユーカノー。  
時代の 風潮と 言うかね。

B ソレワ ショガ ナイノー。 (A ンー) ヤッパリ モー ヒトツ  
それは 仕様が 無いね。 矢張り もう 一ッ

ノ ナンチューカ ソガーナ。  
の 何と言うか そんな。

A マー シューフツカセーニモ ナローカッテ ヤーヤー ユートル  
まあ 週二日制にも なるうかって やあやあ 言っている

ケンドノー マー ソリヤ ケンド <sup>xx</sup>ハ ソノ ロードーシャワ  
けれどね まあ それは けれど その 労働者は

ハタラカナンダラ オカネニ ナランジャワノー ヤッパリ。  
働かなかつたら お金に ならない(の)だよね 矢張り。

B ジャー ジャー、 ドガーモ ナランヨ。(A シー。マ) ケン  
だ、 だ。 どんなも ならないよ。 けれ

ドモ ヤッパリ ナンチューカノーラ ヤスム トキニヤ ヤスム  
ども 矢張り 何と言うかね 休む 時には 休む

(A シー) チューカノーラ ソガーナ ヒトツノ アレオ シタラ  
と言うかね そんな 一つの あれを したら

マタ ワカー シラノ タノシミチューノモ デテ クルシノー。  
また 若い 衆等の 楽しみと言うのも 出て 来るしね。

A ソリヤ ヤッパリ。 デ タイリョク ー (B ウン。 タダ ソノー)  
それは 矢張り。 それで 体カ (うん。 只 その)

ノー (B オー) オ イジスル テンニデモ ソノ テンワ  
ね を 維持する 点にでも その 点は

ヤッパリ ナンジャワノー。  
矢張り 何だよね。

B ソレデ エー ナンチューカ (A シー) イマノ ジギョーヌシッ  
それで ええ 何と言うか 今の 事業主

チューノワ ムカシノ アレト チゴテー マー ヒトオ ツカウ  
と言うのは 昔の あれと 違って まあ 人を 使う

チューノワ ムズカシーチューカノーラ ソガーナ コトガ アルノ。  
と言うのは 難しいと言うかね そんな 事があるね。

ウン タシカニ。  
うん 確かに。

A マー シー ソリヤノー ヤッパリ。  
まあ それはね 矢張り。

B ソイデ ツイ (A シー) オラーミターナ ナンチューカ モー  
それで つい 俺みたいな 何と言うか もう

ツイ シジューダイニモ ナッタラ オレ ハタチノ トキニワ  
つい 四十代にも なったら 俺(が) 二十歳の 時には

コガーナ コトモ シテ キタンジャッタ ユーテモノーラ  
こんな 事も して 来たのだった(と) 言ってもね

イマノ ジューシチハチノ シ ワカー シラニワ ツージンシノー  
今の 十七,八の <sup>xx</sup> 若い 衆等には 通じないしね。

ラ。(笑) ウン。 ヤッパリ。  
うん。 矢張り。

A マ ヤッパリノー ドー ユー フーニ シテ。  
ま 矢張りね どう 言う ふうに して。

B ソノ シメタリ ユルメタリ スルチューカノーラ。  
その 締めたり 緩めたり すると言うかね。

A シー タバケル ユー ワケジャ ナイケド (B ジャー ジャー.)  
おだてる(と) 言う 訳では 無いけれど (そう そう.)

ソリャー アノー ワカランサカーノー。(B シー ~~~~~)  
それは あの 分らないからね。

ヤッパリ ニンゲン イケリヤ トシ ヨッテ キテノー アット  
矢張り 人間 生ければ 年 寄って 来てね あっと

モータ トキニワ アーット オモ オモークド ワレワレモ  
思った 時には あっと <sup>xxx</sup> 思うけれど 我々も

(電話のベル) ソンナ コト ユータッテノー ケッキョク  
そんな 事 言たってね 結局

ソレバツカリモ イカンシ。  
それ許りも いかないし。

B ジャーワ。(A シー) マー タシカニ ソレモ アルノー。  
そうだよ。 確かに それも あるね。



## 注

- (1) キケルは「身にこたえる」というような意味か。
- (2) こすりながら。モツは継続を表す接尾要素。
- (3) 東正弘氏の所の屋名。
- (4) (2) を参照。
- (5) ヨロに同じ。小枝のたきぎ。
- (6) とうもろこし。
- (7) ガイは接尾要素。～の所・～の許の意。ガエとも。
- (8) ミテは、多く場所を表す格助詞「へ」相当で用いられる。
- (9) しばりつける。
- (10) 寝具・寝床。
- (11) サガスは一面に～する意を表す接尾要素。
- (12) } 草を刈らすために取付ける棒杭。
- (13) }
- (14) シサツと聞こえるが、シセツ（私設）の誤り。
- (15) パンツだけになって、パンツひとつになって。
- (16) 夕方時分。

### III. 鳥取県<sup>や ず</sup>八頭郡<sup>こう げ</sup>郡家町

収録・文字化担当者 飯 豊 毅 一  
佐 藤 亮 一  
真 田 信 治  
沢 木 幹 栄  
白 沢 宏 枝

- 1 地点名 鳥取県八頭郡郡家町
- 2 タイトル 今の農業と昔の農業
- 3 録音年月日 昭和51年7月6日
- 4 録音場所 郡家町公民館の一室
- 5 話し手
- A 土井 頼重 (男) 明治30年生まれ 農業 別府集落生育
- B 西尾 愛治 (男) 昭和26年生まれ 農業 篠波集落生育
- C 中川 義隆 (男) 昭和31年生まれ 町役場勤務 篠波集落生育

6 録音環境

録音は新築の公民館の会議室で行なった。防音は申し分なかったが、反響がよすぎるくらいもあった。土井氏は終始リラックスしていたが、西尾・中川両氏は、はじめ少し緊張ぎみだった。

- 7 収録地点の概観・収録した方言の特色などについては、『方言談話資料(6)』を参照。

\* 作業分担

ここに収録したものは、飯豊毅一、佐藤亮一、真田信治、沢木幹栄、白沢宏枝が録音作業を行い、文字化・注は、主として沢木と白沢が行った。なお、文字化に際しては、衣笠日出男・諭志両氏から助言をいただいた。

## 今の農業と昔の農業

話し手

| (略号) | (氏名)  | (性) | (生年)     |
|------|-------|-----|----------|
| A    | 土井 頼重 | 男   | 明治30年生まれ |
| B    | 西尾 愛治 | 男   | 昭和26年生まれ |
| C    | 中川 義隆 | 男   | 昭和31年生まれ |

- A ドーナ イマー アノ (B エー) ワカエー セーネンシューニ  
 どうだね 今 若い 青年達に
- マー キーテミタエート オモウデスケド イマノ ショクセーカツツ  
 まあ 聞いてみたいと 思うですけど、 今の 食生活
- チュー モンノ アノー アリカターワ ドー カンジテオラレルナ。  
 という ものの 有り方は どう 感じておられるね。
- B ンー ソーデスナー マ イマ アノ マ イロイロト アノー  
 うん そうですね まあ 今 まあ いろいろと
- インスタントニ ナリマシテデスナー (A エーエー)  
 インスタントに なりましてですねえ
- インスタントショクヒンツチ アノー ゴツツイ アノー ソノ  
 インスタント食品という 非常に

フキューシマシタデス。(A ハイハイ) マー ソレオ マー  
普及しましたです。 まあ それを まあ

アノー トキドキ マー タベルンデスガー カラダニ ワルイッ  
時々 まあ 食べるのですが 体に 悪い

チュー コトデシテナー マー アノー サンドノ メシニワ  
という 事としてねえ まあ 三度の 御飯には

チョット イッショク グライ ダッタラ<sup>(1)</sup> イーデスケドネー。  
ちょっと、一食 ぐらい だったら いいですけどねえ。

(A ハーハー) ナンダ ソノー ラーメンカ ナンカ トクニ  
何か その ラーメンか なんか 特に

モー カンゾー ナンカ ワルクシマスシネー。 イッカゲツ  
もう 肝臓 なんか(を) 悪くしますしねえ。 一か月

ナンカ イッカゲツー ラーメンオ アサバン ジャナシニ  
なんか 一か月 ラーメンを 朝晩 ではなしに

サンショク タベルト カナラズ ソノ カンゾー ワルクスルッ  
三食 食べると 必ず 肝臓を 悪くする

チャナ コトオ キキマシタケドモ。

というようなことを 聞きましたけども。

A ナルホド ハーハー。

なるほど、はあはあ。

B エー。 デモ ムカシノ ソノ キセツニ アッタネー アキニワ  
ええ。 でも 昔の(ように) その 季節に 合ったねえ、 秋には

ナニ タベルトカ ハルニワ ナニ タベル ソノ キセツノ  
何(を) 食べるとか 春には 何(を) 食べる、 その 季節の

モン トレバ ソレダケデ ボクワ ジューブン ミタスジャナイ  
もの(を) とれば それだけで ぼくは 充分 満たすのではない

デスカナ。 エー ダケド イマワ モー ハムトカ イロイロ  
ですかね。 ええ、 だけど 今は もう ハムとか いろいろ

アリマシテ ソノー マー モー エーヨー トリスギテ  
有りまして もう 栄養(を) 取りすぎて

ヒマンジッ チャナンデネー (A ソーソーソー) ヒマンジガ  
肥満児というふうに使われている 肥満児が

デキチャッテ マエトワ ギャクニナツタデスケドモ、 ハイ。  
できてしまって 前とは 逆になったんですけども、 はい。

マー イマワ ボクトシテワ ヤッパリ サイテーワ アノー  
まあ 今は ぼくとしては やっぱり 最低は

キセツノ モノオ タベルツチュアーナ カタチニネ ソレガ  
季節の ものを 食べるというような 形にね、 それが

ヤッパリ アノー ケンコージャナイカッ ソガエーニ オモー  
やっぱり 健康じゃないかと そのように 思う

デスケドネー。

ですけどねえ。

A ドーモ ワシラーモ ソー オモイマスナー。  
どうも わたしらも そう 思いますねえ。

B ンー。 ショクジガ カタヨルデスネチャー (A ハイハイハイ)  
うん。 食事が かなよるですねえ

イマダッ タラネー。 (A ハイハイ) マエワ キセツニャ  
今だったらねえ。 前は 季節には

ナニガ アル イマダッタラ ソノ マ ハウスモンガ デキマス  
何が 有る、 今だったら まあ ハウスものが できます。

カラ (A ハイ) モー フユニーワ フユニ タベルモンガ  
から、 もう ~~xxxxxxx~~ 冬に 食べるものが

ナツニ ネー イロイロト ……。

夏に ねえ いろいろと ……。

A マー ハウスヤ ナンゾデ マー ハヤダシガ イロイロ  
まあ ハウスや なんぞで まあ 早出しが いろいろ

アルデスケド ヤッパ ソノー シゼンニ デキテキタ モノノ  
有るですけど やっぱり 自然に できてきた ものの

ホーガ ホン<sup>(4)</sup> ナツカシーヨーニ カンジマスナー。

ほうが とても 懐しいように 感じますねえ。

B ンー。

うん。

C マー ウチラ ヒャクショーッチュノワ アレデスケド マ  
まあ わたしら 百姓というのほ あれですけど まあ

ショクバニ デトルッチュートー ドーシテモ ヒャクショーチュー  
職場に 出ているというと どうしても 百姓という(のは)

マ タイギート ユーカネ (B ンー) (A ハイ) ゼンゼン  
まあ 大儀と いうかね、 全然

シトナイッチュー ワケデモ ナイデスケドネー。 (B ンー)  
したくないという わけでも ないですけどねえ。

ケド

けれど

A ナカガワ (C チュウツ) サンノ トコロワ アノー マズミサン  
中川 さんの 所は 真澄さん

チューノガ オジーサンデショ  
というのが おじいさんでしょう？

C エー コ<sup>xx</sup> コノマエ シニマシタケドモ  
ええ この前 死にましたけども。

A ア イマ オトーサンガタガ ヒャクショー シテオラレルカナ。  
ああ 今 お父さん方が 百姓を しておられるかね。

C ソーデス。  
そうです。

A アー ンナ マー ケッコーナココ。 (C エー)  
ああ それなら まあ 結構な ~~~~~。

B マー ボクモ アノー マー オヤジモ ケッコー トシダシネ。  
まあ ぼくも まあ 親父も 結構な 年だしね。

(A エー) マー ハジメワ ツトメトツタデス。 (A エーエー)  
まあ 初めは 勤めておったです。

マー ソレデ ハジメ マー イヤイヤナガラ マー ヒャクショー  
まあ それで 初め(は) まあ いやいやながら まあ 百姓を

セント イケンナーツチュアナ オモッテネー (A 笑) ソレデ……  
しないと いけないなというように 思ってね。 それで……

C イマワ ホンニ イヤイヤ イヤイヤナガラ スルツチュノガ  
今ほ ほんとうに xxxxxxx いやいやながら するというのが

オーイデスケネ。  
多いですからね。

B エー。 ダケー サー ユーデスガ ヒトガ アノー トモダチガ  
ええ。 だから 言うのですが 人が、 友達が

ネー ワカイノニ マジメダナ ダトカネ。 マジメージャ  
ねえ 「若いのに 真面目だな」 だとかね。 真面目じゃ

ナイデスケドモ (C 笑) マー デモ ヤリョー ルチュートネー  
ないですけども まあ でも (百姓を) やっているとねえ

ソノー イヤイヤガネー アノ セキニンガ アル テード アノー……。  
いやいやがねえ 責任が ある 程度 あのう……。



C ア モタサレテ クルケー。  
ああ 持たされて くるから。

B エー カカッテ クルトネ イヤイヤガー イヤイヤ ヤルンジャ  
ええ (責任が) かけて くるよね いやいやが いやいや やるんじゃ  
~~~~~ ナイヨーニ ナルンデスガ エー。  
ないように なるのですが, ええ。

C マー ウチラ ジナンダケー マー ドゲデモ エーワッ チャーニ
まあ わたしらは 次男だから まあ どんなでも いいわというように
オモットルケド チョーナンノ ホーワ (B シー) スルキモ
思っているけど 長男の 方は (百姓を) する気も
ナゲナシヨ ナンダ。
なさそうだしよ。

A シナ マー ヒャクショーガ オモシロー ナッテキタラ
まあ 百姓が おもしろく なってきたら
ホンマモン デスケドモナー。
本物 ですけどもねえ。

B ソーデスナ。 マー ジブンデ ドコニ イッテモ マー アノー
そうですね。 まあ 自分で どこに 行っても まあ
ウラ ヒャクショーダッテ イエルヨーナ ヒトナラネー。
わたしは 百姓だって 言えるような 人ならねえ。

(A ハイ) アノ ナカニワ モー ボクラノ ツレニモ イロイロ
中には もう ぼくらの 仲間にも 大勢

ヒャクショーオ シオラレルケド ウラ ヒャクショーダッテ
百姓を しておられるけど 「わたしは 百姓だ」って

モー イーキルデスナ ミナサンガ。(A エー) ソーナッタラ
もう 言い切るのですね みなさんが。 そうなったら

モー (C モー リッパデスネー (笑)) ケーエーモ アンテー
もう (もう 立派ですわえ) 経営も 安定

シトルシネ。(A エー) モー チュートハンパダッタラ
しているしね。 もう 中途半端 だ、たら

イーニクイデスガ ウラ ヒャクショーダッチャーナ コトワネ。
言いにくいですが、「わたしは 百姓 だ」ってというような ことはね。

ソレデモ アルテード ケーエーガ シツカリ シトルシ マー
それでも ある程度 経営が しつかり しているし まあ

サラリーマンカラ サラリーマンニ ナリターモ ナイシ ソレデ
サラリーマンから サラリーマンに なりたくも ないし、⁽⁶⁾ それで

マ ナゼ ヒャクショーオ エランダカナッ ソイヤニ トウトネ
まあ「何故 百姓を」 選んだかな、」 そういように 問うとね

マ ジブンノ スキナヤーニ ナルシ ソシテ マタ アノ
まあ 自分の 好きなように なるし そして また

ワノ ジカンモ トレルシネ マ ヒトカラ ドーノ コード
自分の 時間も とれるしね、 まあ 人から どの ころの⁽⁷⁾

マ イワレタクナイッ チューアーナ ヒトガ マー アルテード
まあ 言われたくないというような 人が まあ ある程度

(C マー ゲン……) ヒャクショーオ コノンドルデスナー。
百姓を 好んでいますわえ。

C ゲンダイデモ ムカシノ セシューセードガ ノコットルヨーナ
現代でも 昔の 世襲制度が 残っているような

カンジデスケーナー。
感じですからねえ。

A マー ソリャー ヒャクショーデ ノンキニ ヤリオルノガ
まあ そりゃあ 百姓で のんきに やっているのが

イチバン イーデー ネーカナー。

一番 いいのではないかなあ。

B シー ダケド (A ~~~~~) イマワ アレデスゼ ヒャクショー
うん。ただけど 今は あれですよ 百姓

ヒャクショー イッテモ イッショーヤ ニトー ツクッテモネ
百姓 言っても 一町(歩)や 二町(歩) 作っていてもね

(A エー) モー ジダイガ ジダイダカラ タベテイケマセン
もう 時代が 時代だから 食べていけません、

モ サイデー ゴショーグライ タンボガ ナイトネ。

もう 最低 五町(歩)位 田んぼが 無いとね。

A ソリヤ タンボバツカリデ コメバツカリデ ケーザイオ
そりや(五町歩あれば) 田んぼばかりで、 米ばかりで 経済を

シマート デキルケナー (B エー) ソリヤ。
まかなうと できるからなあ そりや。

B マ ソレデ アノ ドイサン チョット アノー キキタイコトガ
まあそれで 土井さん ちよっと 聞いたいいことが

イマ ウカンダデスガ。 アノー ヒャクショート ノーギョーノ
今 浮かんだですが。 百姓と 農業の

チガイワ ドーユーモンカナー ソノー ヒャクショート ユーノワ
違いは どういうものかなあ、 その 百姓と 言うのは

(A, C 笑) ソノ コメ ツクルントネー (A ン) ノーギョート
その 米を 作るのとねえ、 農業と

ユーノワ ヤサイ ツクッタリ ウシ カッタリネー ウラー
言うのは 野菜を 作ったり 牛を 飼ったりねえ、「わたしは

ヒャクショー ダッダッテ ヒャクショート ノーギョーノ チガイッ
百姓だ」と言たって 百姓と 農業の 違い

チュノワ ドーユー モンダローカナト ボク キキタイデスガ。
というのは どういう ものだらうかなと, ほく(は) 聞きたいですが。

C ヒャクショーツテヤ ナニカナ。
百姓と言えは 何かな。

A ヒャクショーチューノワ ヒャクサマチュモンテ モー ナンゾ
百姓と言うのは 百様と言うもので もう なんでも

カンゾ ヒャクサマ ツクルノガ ヒャクショーチューテ ナエー
かんでも 百種類 作るのが 百姓と言うので ない

ダローカト (B ヒャクサマ ---) エー モ イロンナモノオ
だらうかと, (百様 ---) ええ もう いろいろなもの,

ドンナモンテモ ツクルノガ ヒャクショーチューア センカト。
どんなものでも 作るのが 百姓と 言いは せんかと。

(C シー)

B シー。 ジャ ノーギョーワ ドーデスカナ。 (C 笑)
うん。 じゃあ 農業は どうですかな。

A ノーギョーワ ハチローガタノ カンタク ミタエーニ ジッチョーブ
農業は 八郎潟の 干拓 みたいに 十町歩

デモ ヒトリガ オヤジガ アノー ドーグ モットツテ
でも 一人が, 親父が 道具を 持っていて

ガ—ット ヤツテ イッセンビョー トルノガ コレガ ホンノ
ガ—ッと やって 一千俵 取るのが これが ほんとうの

ノーギョー チューンテ ナエーダローカ。 (B シー) マー シイテ
農業と言うのでは ないだらうか。 まあ しいて

リクツ ツケリャー デスゾ。 (B シー)
理屈を つけりゃあ ですぞ。

C サー ショクギョーデモ アンタ ナニ ショルダイツテ
 職業でも 「あんた 何を しているんだ」って、
 ノーギョーチュツテ ユー ヒトト (B 笑) ヒャクショーツテ
 「農業」って 言う 人と、 百姓、て
イッタラ ゴツツイ ナンドカ オチルヨーナ キガ シマシテナ
 言ったら 非常に 何だか 落ちるような 気が しましてね、
ヒャクショーツテ モノ -----。
 百姓って もの(は)---

B ン ソー ソー ソー ソー ウラ ウラ ヒャクショー ジャ ナイ デ⁽¹⁰⁾
 うん そう そう そう そう 「わたしは 百姓じゃ ないよ
 ノーギョーダ~~テ~~ツチュ ヒトモ オラレルシナー。(C ン)
 農業だよ」という 人も おられるしねえ。

A ヒャクショー ワ ヒャクサマツ チュ モンダ チュ コト オ キー テ
 百姓は 百様 と言う ものだという事を 聞いて
オリマス⁽¹¹⁾デ。
 おりますよ。

B ン ジャー アノ ノーギョー チュ ノ ワ (A ナン デ モ
 うん じゃあ 農業と言うのは 何でも
ツクラ ニヤ イケ ン テ) ン モー キン ダイ カ ニ マ ナル ヨー ナ
 作らなければいけないって) うん もう 近代化に なるような
ホ コー ニ モツ テ イク ノ ガ ノー ギョー カナ。
 方向に 持って 行くのが 農業かな。

A マー ノー ギョー チュ マ ウラ ラー ワ ウラ ノ ナ リ ニ カン ガ エ
 まあ 農業って まあ わたしらは わたしなりに 考え
リヤ マー ハチ ロー ガ タ ノ ヒャク ショー ミ タ エ ー ニ
 りゃ まあ 八郎湯の 百姓 みたいに

ジツチョーモ ジューゴチョーモ ツクル ヒトワ ベツデスケドナ
十町(歩)も 十五町(歩)も 作る 人は 別ですけどね、

(B ンー) コノ ヘンノ ハシタ ノーキョーデ イツチョー
この 辺の 端に 農業で 「一町

ビャクショー ⁽¹²⁾ ビンボーゴロツチュー コトバガ アルソーナ。
百姓 貧乏ごろ」という ことばが あるそうよ。

(B ンー) タンボ イツチョー ツクルノガ ホントーニ
田んぼ(を) 一町(歩) 作るのが ほんとうに

⁽¹³⁾ ビンボースル ズット コレガ ビンボーゴロダチュ テスナー。
貧乏する、 まさに これが(ちょうど) 貧乏ごろだと言うですわねえ。

(B ンー) ヤマオ マー シマネノ オージヌシワ イチグンニ
~~xxxxxx~~ まあ 島根(県)の 大地主は 一郡に

ソートースル ヤマオ モットラレルツチュ コトオ (B ンー)
相当する 山を 持っておられるという ことを

⁽¹⁴⁾ キーテ オルガ ヨンマンチョーブツチュア コーボデナー。
聞いて おるが、 四万町歩と言う 公簿(面積)でねえ。

コレモ タンボ アンタ ナンビャクチョーブ モットッテモ
これも 田んぼ(を) あんた 何百町歩 持っていても

⁽¹⁵⁾ アーシテ イマノ ノーチカイカクデ (笑) (B ンー) ミンナ
ああして あの 農地改革で みんな

ナーナッテシマッタダ[〰] マー トニカク チートズツ ナンニモ
無くなってしまったのだ。 まあ とにかく ちよつとずつ 何でも

アルツチュノガ イーデ[〰]ナエーカト オモイ[〰]ダエーダ[〰]デスナ。
有るといのが いいではないかと 思いはじめたですわね。

C イマ (B ンー) ゲンタン ゲンタンテ (B ンー) イーマスナー。
今 減反 減反て 言いますわねえ。

B デモ ナカナカ チートズツ ナンボ アルッ チッ テモ ソノー
でも なかなか ちょっとすつ いくら 有るとしても

カズジャー ナカナカネー アレモ テオ ツケ コレモ テオ
数では なかなかねえ、 あれも 手を つけ これも 手を
ツケ ケッ キョクワ ダメニ ナルジャナイカナ。[↑]
つけ、 結局は だめに なるんじゃないかな？

A ヤー ヤマモ アリ タモ アリ ハタモ アリ ユーカショーケンモ
やあ 山も 有り 田も 有り 畑も 有り 有価証券も
アリ ゲンキンモ アリ。 (C フナー)
有り 現金も 有り---

B ア ソーユー アー ソーユー イミデスカ。 ウン ボクワ
~~xx xxxxxxxx~~ ああ そういう 意味ですか。 うん ぼくは

マタ サクモツモ ナンシュルイモ ツクットルトカ ソーユーナ
また 作物も 何種類も 作っているとか そういうような
チョット カンチガイ シタケドモ。
ちょっと 勘違いを したけども。

A ソレガ ドーモ ココラデ アンタ ジッ チョーブモ タンボ
それが どうも こころで あんた 十町歩も 田んぼを

カエーアツメテ ヒャクショー スルチュアナタッテ テキンデスケー
買い集めて 百姓をすると言ったって できないですから
ナー。
ねえ。

B イヤ デキマスゼ (A エッ) デキマス イマワ。 ジッ チョーブ---
いや できますよ (えっ?) できます 今は。 十町歩 ---。

A カネガ デキン (B アー カネノ ホーガネ) デスカ ヨー。
金が できない (ああ 金の 方がね) ですよ。

(C 笑) ソガエーナ カカネオ ヨー コシラエンダ。
そのような 金を こしらせることはできない。

B ンー。 デモ コノ アタリツチュケド マ イマ ヒメジノ
うん。 でも この あたりと言うけど まあ 今ほ 姫路の

オクトカネ (A エー) マ ソイデ イマワ マー ツーキン
奥とかね, まあ それで 今ほ まあ 通勤

ノーギョーガ ハヤツテマスカラネー (A エー) ニジッポン
農業が はやってますからねえ, 二十分

ジッポン マ サンジッポン カカッテモ モー イマワ クルマデ
十分 まあ 三十分 かかっても もう 今ほ 車で

サーツト イキテネ アサバン ア モー ト ツーキンミタイニ
サーツトと 行ってね 朝 晩 もう 通勤 みたいに

シテ カエツテクルデスケドネー。 ダカラ モー フカノーデワ
して 帰ってくるですけどねえ。 だから もう 不可能では

ナイト オモイマスケドナ ソー (16) (C デキル デキル) エー。
ないと 思いますけどね そう, (できる できる) ええ。

C キカイ ~~xxxx~~ キカイカモー ススンドルシ (B ソーデスナ)
機械化も 進んでいるし (そうですね)

キカイモ ダイタイ (B ソーソー) イエニャ イッケンニャ
機械も だいたい 家には 一軒には

~~xx~~ タイブ アリマスカラネ。 (B ンー)
大部 有りますからね。

A サー タンボノ ネウチター ノーグノ ネウチノ ホーガ
さあ 田んぼの 値打ちとは 農具の 値打ちの 方が

カエツテ (C サー ソノコトオ ユーデスガネ) (B ソーデスナ)
かえって (さあ その事を 言うですがね) (そうですね)

ヨーケーイ カ キンガクガ ヨーケン ナール。
金額が 余計に なる。

B イマ キカイカ キカイカダオレデネ。
今 機械化倒れでね。

A キカエーガ イチゴー ツカエリヤ エーケドモ ゴネットカ
機械が すっぴ 使いりゃ いいけども 五年どか

ハチネットカノ イッシューキニヤ マタ サラニ コシラエニヤ
八年とかの 一周期には また 更に こしらえなければ

ナラン。(B ンー) キカエーノ ショーキャクワ アンタ
ならない。 機械の 償却は あんた

アノ ゴジューマンモ ロクジューマンモ イチネンニ アツタラ
五十万(円)も 六十万(円)も 一年(間)に 有ったら

モー カンジンナ (B ンー) トコロワ (C エー) トラ
もう かんじんな 所は

トラレテシマウカラナ。
取られてしまうからね。

B ソーデスナ ショーカクガ スンダラ スグ アタラシーノト
そうですね 償却が 済んだら すぐ 新しいのと

ナリマスガ。(A ソーソーソー ソーナットル) ンー ハナシニ
なりますね。 (そうそうそう そうなっている) うん 話に

ヨレバ アメ アメリカナンカワ モー モトオ トルマデ モー
よれば アメ アメリカなんかは もう 元を 取るまで もう

キカイオ ダイジニ ツカイマスシナー ニホンワ モー ツカイ
機械を 大事に 使いますしねえ 日本は もう 使い

ステ ミタイナ コトデネ, ソノテン ---。
捨て みたいな ことでね, その点 ---。

A アノ ハチローガタデ ヤットル ヒトノ ハナシ チョット
ハ郎湯で やっている 人の 話(を) ちよっと

キキマシタガナ (B シー) ジッ チョーフ ツクットルッテ
聞きましたか 十町歩 作っている、て、

オヤジガ (B シー) ヒトリデ モー ヒトオ チョットモ
親父が 一人で もう 人を 少しも

テゴシテ⁽¹⁸⁾ シェーデモ エーケナー. (B シー) (C フーン)
手つたにせなくても いいからねえ。

B ジャ ジカドーリョクテ ---
じゃあ 自家労力で ---

A アノ オ オーガタ オーガタ ノーキダケー ロッピャクマンダカ
xx xxxxxxx 大型 農機だから 六百万(円)だか

ハッピャクマンダカ カカルソーデスナ (B シー) ナンニモ
八百万(円)だか かかるそうですね、 何でも

スル キカエーオ. (B シー) ノットッテ ヤ^{xx} ヤリヤー モー
する 機械を。 乗っていて ヤリゃあ もう

エーダソーデスケナー。
いいですねからねえ。

B ア ジェンブ コンバイン アガエーナ (A エーエー) アレデスナー.
ああ 全部 コンバインや あんな あれですねえ。

A コ コメ モミズリキモ ナンニモ ツイトルノガ. (B シー)
xx 米, 糶すり機 何でも 付いているのが。

(C コンバインダナ) (B シー) シー マー ダエータエー
コンバインだね うん まあ だいたい

センビョー⁽¹⁹⁾ トルソーデスナ ジッピョー アガルソーナケー.
千俵 取るそうですね、 十俵 あがるそうだから。

C (笑いながら) センビョー ---。

千俵 ---。

A ンー。 トコロガ ハジメノ コロワ ソノ コメガ サンドモ⁽²⁰⁾
うん。 ところが 初めの ころは 米が 三斗も

ゴトモ コボレシャツタ。⁽²¹⁾ アー⁽²²⁾ カーミーオ モツテクレア
五斗も こぼれてしまった。 ああ “か-み-” を 持ってくれば

ヨカツタニ コイツ モツタイナエー スクイトリヤ ヨカツタト
よかったのに こいつは もったいない すくい取りゃ よかったと

(B ンー) オモイヨツタケド ナーニ ユーダイヤ センビョー
思ってたけど 何を 言うのだね 千俵

トルノニ イッピョーヤ ニヒョー コボレテモ ナーニナルコト
取るのに 一俵や 二俵 こぼれても 何になるかい。

ダエー。

B ソーデスナー モー。

そうですねえ もう。

A デ シマエーニヤ (B ンー) ア コメオ イッピョーヤ
で しまいには 米を 一俵や

ニヒョー コボレテモ カマエーセンガナト。 (B ンー) アー
ニ俵 こぼれても かまいやせんがなと。

トーニ シゴトガ ソノ キカエーダケー シゴトオ スンデシヤッ
とくに 仕事が, 機械だから 仕事を 済んでしま

テナ オンナシヤーナ レンチューガ (B・C ンー) ヨーサリ
てね, 同じような 連中が 夜

サケ ノミヨツテ ワー (B・C ンー) コレカラ ホッカエードーエ
酒を 飲んでいて 「おまえ これから 北海道へ

イキタ コーイヤッ。⁽²³⁾

行ってこようか。」

B シー。アー ソーカナ。ンナ フユワ シゴトガ ナイデスケー
うん。ああ そうかね。それでは 冬は 仕事が 無いですから

ソーユー マー アノ リョコーナンカ スルンカナ。
そういう まあ 旅行なんか するのかな。

A エー ホッカードーニ イコーヤッ チッテテ アンタ アノ
ええ 北海道に 行くよと言って あんた

ヒコーキ ホッカードーニ ⁽²⁴⁾ クルケー アケノ ヒニモ マタ---。
飛行機(か) 北海道に 来るから あくる 日にも また---

(B フーン) マ ノンキナモンダシ ソレデ ハンブン ゼニガ
まあ のんきなものだし、それで 半分 銭が

ノコル ッ チューデスナ (B フーン) ハンブンワ ノコル。
残るといふしねえ、 半分は 残る。

(B ソーデスナ) キカエーノ ショーキャク シタリ ナンゾ
そうですね) 機械の 償却を したり なんだ

カンゾ シテモ ハンブン ノコル ッ チュー (B ン) マー
かんだ しても 半分 残るといふ、 まあ

ソガエーナ ヒャクショーワ ベツデスゾ ソリャーナ。
そのような 百姓は 別ですよ ソリャあねえ。

B マ ナカナカ ウラヤマシー ボクラカラ イエバ ウラヤマシー
まあ なかなか うらやましい、 ぼくらから 言えば うらやましい

ヤーナ ハナシデスケドナ。
ような 話ですけどね。

A マー マー セーフカラ ムラ ッ タンダケ ゼニモ ヨケー イリャー
まあ まあ 政府から 買ったのだから 銭も たくさん いりは

センダラーシ。

しないだろうし。

B ン ン。 マー チョット ナカガワクンニ キキタイケドナー
うん うん。 まあ ちよっと 中川君に 聞きたいけどねえ

マー コーシテ イ^{xx}イマ ノーギョー ッ チューモンワ ソノー
まあ こうして 今 農業というものは

マ ジブンガ イザ ノーギョー ショート オモッタラ ドノ
まあ 自分が いざ 農業を しようと 思ったら どの

テンオ ジブンガ カイリョースル マー ソイコトオ アレカナ
点を 自分が 改良する, まあ そういう事を あれかな

カイリョースルトスレバ ドノ テンオ カイリョーシタラ イーカ
改良するとすれば どの 点を 改良したら いいか

ソイコト オモワレトルカナ ソーユー ジブンガ ソーユー
そういう事を 思われているかな, そういう, 自分が そういう

タチバン ナツタラネー ノーギョー セン^上 イケンチャ^上
立場に なったらねえ 農業を しないと いけないというよな

タチバン ナツタラ マ イマノ ヤリカタダツタラ チョット
立場に なったら まあ 今の やり方だったら ちよっと

ムリ イケンナー ショーライワ マー コーユー カイリョー
無理, いけないなあ 将来は まあ こういう 改良を

センケナー トカ。

しなければなあとか。

C ソンナコトワ ナイナー。 (B ウン) ダイタイ イマノ
そんな事は 無いなあ。 だいたい 今の,

モットル ワケダケー イマノデネー (B ン) タイシテ
保っている わけだから 今のでねえ たいして

カエルコター ナイ ヤットル トーリニ スリヤ ソレ ソンナニ
変えることは 無い, やっている とおりに すりゃ それは そんなに

(B ウン) カイリョー セーダケーツテ ----。
改良を しないから、て ----。

B アー ソーカ (C 笑) マ イマ コーチセーリデネー マー
ああ そうか まあ 今 耕地整理でねえ まあ

ヒャクショーノ ホーワ ア マー ヒャクショー ユーホージャ
百姓の 方は, あ, まあ 百姓と 言う方じゃ

ナシニ ノーギョーノ ホーワ マー タンボデスナー タンボ
無いに 農業の 方は まあ 田んぼですわねえ, 田んぼ(の事を)

オモニ イーマスケド モー キカイカガ ススミ マー コンバ
主に 言いますけど もう 機械化が 進み まあ コンバ

イン トラクターネー マー モー ヒ ヒトデガー モー
イン, トラクターねえ まあ もう ^{xx} 人手が もう

ショーク デキテ ショーリョク (C ヒトデツチュアーナ
償却 できて 省力 (人手というような

モンワ イラランダデ) ウン ショーリョクン ナッタデスケナ。
ものは いらないから うん 省力に なったですからね。

マー ソレジャー モー キカイカダオレニ ナリマスシナー。
まあ それじゃあ もう 機械化倒れに なりますしねえ。

マー ソレイガイニ アノー ナニカ ジブンガ ヤリタイツチュアーナ
まあ それ以外に 何か 自分が やりたいというような

ソーユー ジカンガ オーク トレルデスヨネ ショーリョクテキニ
そういう 時間が 多く 取れるですよ 省力的に

ナルト。

なると。

C ソーダ。 サケー⁽²⁶⁾ マー シゴトニ デルダガ。 (B ンー)
 そうだ。 丁から まあ 仕事に 出るのだが。
 ソレニ イマ イマ イマ ナンダー マ マエ キータコトダケト
 それに ^{xxx} ^{xxx} 今 なんだ まあ 前(に) 聞いた事だけト
 コレァー (B ンー) ノーキョーガ ゼンブ イッテニ ヒキウ
 これは 農協が 全部 一手に 引き受
 ケテ ヒャクショー スルッ チッ テッテ キータコトガ アルダケト。
 けて 百姓をすると言って 聞いた事が 有るのだがけど。

B ウン ウン ウン。 ウン コナイダ ---。
 うん うん うん。 うん この間 ---。

C イマワ ソゲンコトダケー ソゲ ヒャクショーモ ナンニモ ---。
 今は そのような事だから そんな 百姓も 何にも ---。
 (B ンー)

A ウケオイコーサク⁽²⁷⁾ マー タバコワ ヨケー ダサレル⁽²⁸⁾ デスケド
 請け負い耕作, まあ 煙草は たくさん(請け負いに)出しておられるです
 ナー (C エー) コメオ ツ コメノ ウケオイコーサクワ
 けどねえ ^{xxx} ^{xx} 米の 請け負い耕作は
 ドンナ コトン ナルデショーナ ナンダ イッタンテ ニヒョー
 どんな 事に なるでしょうね。 「何だ 一反で 二俵
 グラェーカ アノー ノキョーニ ウケオイコーサク シテモライヤ
 位か」 農協に 請け負い耕作を してもらえば
 ニヒョーグラェカ (C フーン) クレンジローヤ チッテ イッタ
 二俵位しか くれないうらうよって 言った
ヒトガ アル。
 人が 有る。

C ソイダケド ケツキョクワ サケド ソーユー コトニヤ ナラヘンデ
そうだけど 結局は そうだけれど そういう 事に なりはしないで

ショーカーナ。

しょうかな。

B ンー ソイコトニ ナル。
うん そういう事に なる。

C ゼンブ モー イッテニ ヒキウケテ -----。
全部 もう 一手に 引き受けて -----。

注

- (1) ～アツタラのようにも聞こえる。
- (2) [mra:mej] のように m が聞こえるが、これは調子でそうなったものである。
- (3) ヤッパリの言い誤りか。古くはヤッパシ、最近はやっパリと言う。
- (4) ホンコノマエ（ついこの前）のように使う。
- (5) ナンダに特別な意味はない。
- (6) サラリーマンになってから百姓になり、またサラリーマンになる、の意。
- (7) ドーノコーノが普通の言い方。
- (8) ニチョーの言い誤りか。
- (9) シマウは「まかなう」の意。イチマンエンノ カイヒテ カイオシマウ（一万円の会費で会をまかなう）のように使う。
- (10) ゼとも言う。
- (11) (10) に同じ。
- (12) 「ちょっと良い貧乏な状態」というほどの意。
- (13) ズットは感情をこめて強めることば。子供を叱るときに、ズットコノコワ ホンニ イケンコダ（本当にこの子はいけない子だ）のように使う。
- (14) 登記してある面積。これに対する語が実測面積。
- (15) 「今の」ではなく「あの」の意。
- (16) ソーは「不可能ではない」にかかる。
- (17) 「一代」の意。「一期」から来たことばか。
- (18) テゴーは「手伝い」の意。テゴースル「手伝う」。
- (19) 一反当り十俵で、つごう千俵の意。
- (20) 一斗、二斗はイット、ニト。だが三斗はサンド。以下シト、ゴトと続く。
- (21) ～シャツタは「失敗して～する」の意。
コロントシャツタ ころんでしまった
シャツタ！ しまった！

のように使う。

- (22) カーミーは穀物のもみをすくう道具で、トタンと竹で作られている。
- (23) 本来はイキテコーイヤ。イキテコイヤは「行って来い」、イキテコーイヤは「行って来よう」。
- (24) クル・イクに関して九州・富山とならんで中国地方で対者中心の使い方のあることが報告されているが、この地点はそうではないようである。
- (25) 減価償却のことか。
- (26) 普通はダケー。
- (27) 農地は持っているが人手が足りない人が、農協に仲介してもらって、他人に耕作をまかせるシステム。
- (28) 「煙草は請け負い耕作に出す人が多いが」位の意。

IV. 島根県^{に た}仁多郡^{よこ た}横田町大字^{おお ま き}大馬木

収録・文字化担当者 広 戸 惇

A 収録地点とその方言について

1. 地点名 島根県仁多郡横田町大字大馬木

2. 収録地点の概観

横田町は、島根県の東南端にある。収録地点は旧馬木村であり、大馬木と小馬木に分けられていた。東隣りは旧八川村であり、今は共に横田町と合併した。従って収録地点は一山越えれば広島県であり、旧八川村は東は鳥取県日野郡と境を接している。この地方は出雲の最も奥深い所で、旧馬木村は鉄道が通っていない。今日でも横田駅からバスかタクシーを利用しなければならない。出雲の最も僻地の山間部と言えよう。合併後の今日の横田町は総戸数2,314戸、人口9,958人、そのうち大馬木、小馬木(旧馬木村)の総戸数471戸、総人口2,314人である。収入は水田と林業のみであり、これという産業はない。ただこの地方は、昔砂鉄を産したこともあり、この方面はかなりの資料がありそうである。

3. 収録した方言の特色

① 方言区画上の位置、隣接諸方言との関係

隣接した広島県、鳥取県の方言の影響はそれほど大きくないと思われる。ただウ音便について疑問がある。仁多郡地方に限って、オモータ、イータがよく出る。出雲一般はオモッタ、イッタである。これは広島県の影響なのか、もともと出雲も古くはウ音便であったのが、促音便となったのか、それが仁多郡地方に残存しているのかの何れかである。音便形に、「貰ッタ、払ッタ」をモラータ、ハラータと仁多郡でいう。このウ音便形は、もともと出雲古来のものと思われ、鳥取県日野郡にも用いられている。これを考えると、ウ音便形が古いのではないかとも思われる。また出雲では、進行形は現在形には用いられず、過去形にのみ用いられる。行キョッタ、降りョッタなど。

② 音韻上の特色

出雲市の音韻について、かつて国広哲弥氏の調査が、島根県方言辞典にある。仁多郡も同じと思われるので、国広氏の表を示すこととする。一般に出雲の北部地方は、音が短く、南部の山間地帯は長いのが一つの

特色でもある。北部のアゲナに対し南部のアゲーナなど。

| | | | | | | | | | |
|--------------------|-----------|-----------------|------------------|-------------------|-------------------|-------------------|--------------------|--------------------|-----------------------|
| ウエ
we
[we] | ワ
wa | | オ
o
[o] | ア
a | エ
e
[e] | イ
i
[i] | ヨ
jo | ヤ
ja | ウヤ
wja
[wjae] |
| | | フ
hu
[hu] | ホ
ho
[ho] | ハ
ha
[ha] | フェ
he
[he] | フィ
hi
[hi] | フョ
hjo
[hjo] | フヤ
hja
[hja] | |
| | クワ
gwa | グ
gu | ゴ
go | ガ
ga | ゲ
ge | ギ
gi | ギョ
gjo | ギヤ
gja | クヤ
kwja
[kwjae] |
| クエ
kwe
[kwe] | クワ
kwa | ク
ku | コ
ko | カ
ka | ケ
ke | キ
ki | キョ
kjo | キヤ
kja | |
| | | | ロ
ro
[ro] | ラ
ra | レ
re | リ
ri | リョ
rjo | リヤ
rja | |
| | | | ツ
co
[tsɔ] | ツア
ca
[tsa] | ツエ
ce
[tse] | ツイ
ci
[tsi] | ツョ
cjo
[tso] | ツヤ
cja
[tsa] | |
| | | | ド
do | ダ
da | デ
de | | | | |
| | | | ト
to | タ
ta | テ
te | | | | |
| | | | ゾ
zo | ザ
za | ゼ
ze
[dze] | ジ
zi
[zi] | ジョ
zjo | ジャ
zja | |
| | | | ソ
so | サ
sa | セ
se
[se] | シ
si
[si] | ショ
sjo
[so] | シヤ
sja
[sa] | |
| ン
n | ン
n | | ノ
no | ナ
na | ネ
ne | ニ
ni | ニョ
njo | ニヤ
nja | |
| | | | モ
mo | マ
ma | メ
me | ミ
mi | ミョ
mjo | ミヤ
mja | |
| | | | ポ
po | パ
pa | ペ
pe | ピ
pi | ピョ
pjo | ピヤ
pja | |
| | | | ボ
bo | バ
ba | ベ
be | ビ
bi | ビョ
bjo | ビヤ
bja | |

以上の表で見られるように、出雲地方の特色はズーズー弁であり、ことにウ段の発音が困難である。ウタ(歌)→オタ、イヌ(犬)→エノ、ムカシ(昔)→モカシ、ユキ(雪)→エキ。イはエと発音される事が多い。ウ段拗音は直音となり、キューコー→キーコー、チューガク→チーガク。リ、ルは長音化し、アリマス→アーマス、トル→トーとなる。時にはコレヲ→コーヲともなる。ことにシとス、チとツ、ジとズは混同している。よって、シとスはスイ、チとツはツイ、ジとズはズィで表記した。近年若い層から次第にズーズー弁が消失しつつあり、老人にもこの傾向が現われている。

今一つ、仁多郡のみに見られる音韻上の特色がある。拙著「山陰方言の研究」の中から引用する。それはr音を挟んで、前後に母音が来た時次のように変化する。

(1) eru → jae

例. 寝る(neru) → njae、減る(heru) → hjae。この録音では、jaeの部分にさらにja:に聞こえる場合がある。出る(deru) → djae → dja:に聞こえる。

(2) iru → ja:

例. 着る(kiru) → kja:、生きる(ikiru) → ikja:

(3) iri → ja:

例. 着物(kirimon) → kja:mon、婿入り(mukoiri) → mokoja:

(4) uri → sa: または wa:

例. 釣り(tsuru) → tsa:。仁多郡ではツリはtsiriであるから(3)に含まれると見るべきかも知れない。降ります(Furimasu) → Fwa:masu。

(5) eri → jae

例. 蹴ります(kerimasu) → kjaemasu、参り(mairi → maeri) → majae。

(6) uru → wa:

例. 来る(kuru) → kwa:、降る(Furu) → Fwa:。ただし、

「^す為る」は、swa: とはならず sa: となる。

以上の6通りの場合が考えられ、例外も多いように見えるが、もともとシとス、チとツとの区別を持っていなかっ、たし、イはエと発音されることが多いところから iru も iri も eri も同じものとして取扱うべきであるかも知れない。ともかく r 音を挟んで、母音が前後に来る時に特殊な変化をする。これは出雲地方でも、仁多郡のみに見られる現象である。

出雲全域で、セ、ゼはシェ、ジェと発音される。

③ 文法上の特色

この録音に現われたものを中心に述べる。

1) 代名詞

オラ 最も一般的な言い方。複数にオラダ、オラド、オララチ、オラヤチがある。男女共に用いる。オラダはオラドワの約。

ワシ オラに比して尊大な言い方。身分のある人が言う。男女共に用いる。

オマエ 最も一般的な言い方。共通語より敬意の度合いが高い。共通語のアンタぐらいに当る。男女共に用いる。

オマエサン 相手に対して敬意表現として言う。男女共に用いる。

アンタ 近年になって、新しい言い方として普及。

2) 動詞

進行形の(所謂ツツアル)ヨルは中国地方で広く用いられるが、出雲では不思議に過去形しか用いない。しかも北部ではあまり用いないが、仁多郡ではかなり用いられていることが、この録音によつて知られる。行きヨツタの形でなく、行キヨツタが多い。テイルは出雲の西北部はトル、他はチオルを用いる。

音便形は出雲地方や隠岐地方は促音であるが、この仁多郡に限って、ウ音便形がかなり用いられる。イータ(言、た)、オモータ(思、た)としばしばこの録音に現われる。ことにモラータ(貰、た)、ハラータ(払、た)の形は、この仁多郡と、隣接する鳥取県日野郡にのみ現われる。出雲地方、隠岐地方、鳥取県の山陰地方の音韻法則によれば、この方が正当であり、モラッタ、ハラッタを用いることが、むしろ不自然で

ある。ただ、動詞のうち二音節語の場合、買う、這う、会うなどは、出雲全域でウ音便形をとり、カータ、ハータ、アータとなる。山陰地方の音韻法則とは、モラウタ (morauta) の二重母音 au の開音は a: の長音となるからである。形容詞についても、高くて → タカーテ、浅くて → アサーテとなる。

3) 形容動詞

アゲータ、ソゲータ、コゲータ、ドゲータは、中国地方のソガイダの変化である。出雲地方は、二重母音 ai は e: となることによる。アゲータラ、アゲータッタ、アゲーニ、アゲータ、アゲーナ、アゲーナラとなる。出雲の北部はアゲダ、ソゲダと短い。仁多郡も時に短く言う。

4) 敬語

ゴザイマスから変化したゴダエス、ゴザエス、ゴザイス、時にはゴザンスも言う。ツシャル (ルは長音化してツシャールとなるのが一般) は最もよく用いられ、行カッシャー、書カッシャッタ、見サッシャイと言う。下さいはゴサッシャイ (ゴスはくれる) からガッシャイが生じる。なさるに対して、ナハル (ルは長音化してナハール) が時に用いられる。女性が用いるようだ。松江市では、ナル (ナーと長音化する) がよく用いられ、行きナーカ (行きなさるか) などと言う。

5) 副詞

ケー。ケー忘レタは つい 忘れたの意。録音ではこうした時の用法は出ず、間投助詞として使われ、訳しようがない。

6) 助動詞

断定の助動詞ダは、中国地方は広くジャであるが、日本海側は出雲を中心としてダを用いる。出雲地方でジャを用いるのは、この仁多郡と隠岐島の一部である。仁多郡も若い人達はダを用いるようである。ジャは老人に多いが、ダも混入する。

4. その他

この地を選んだのは、昔話の最もよく残っている地帯であること。仁多郡、それもこの旧馬木村は、今日なお昔話の宝庫である。北部の出雲部では、既に収集が困難である。また最も交通不便の地でもある。

今一つは、ここには杉原清一氏のような、よき協力者があるためである。同氏は昭和11年の生まれであるが、県立横田高校を出、兵庫県立兵庫農業短期大学を終え、38年4月から40年3月まで、母校の横田高校の農業科に講師として勤め、公民館農業参考室相談員、農業協同組合の営農指導員となり、横田町誌編纂委員、馬木小学校百年誌編纂主幹、現在は自家農業のかたわら、横田町文化財専門委員、県文化財保護指導員（横田町担当）、県埋蔵文化財調査委員（仁多郡、大原郡を担当）という顔の広い、かつ熱心な協力者があるゆえである。この度の録音に当り、会場、話し手の依頼など、すべてを行っていただいた。

B 表記について

イ列音、ウ列音は中舌母音である。したがって母音*i*と*u*はすべて中舌母音と表記すべきであろう。片仮名の場合は実際にはその表記は困難である。と同時にシとス、チとツ、ジとズ以外はそれほど目立たないし、その必要もあるまい。出雲地方では、古老はシとスを混同し、その中間音となり、古老は文字を書く際にこれを混同することが多かった。アリマシタをアリマスと書くのはその一例である。チとツも同様である。島根半島の北側の海岸で、戦後クチ配給アリの貼り紙があった。靴の事である。よって、シとスはスイ、チとツはツイ、ジとズはズイと表記した。しかし近年、中舌母音、すなわちズーズー弁も次第に減少しつつあり、本録音でも、ほとんどが、この区別を持っており、今まで述べた通りの表記とした。

セ、ゼはシェ、ジェと今日でも発音される。表記もそれにしたがった。

C 話者・録音環境など

1 タイトル 農機具の本を見ながらの三人の会話

2 録音年月日 昭和51年8月6日

3 録音場所 横田町馬木幼稚園

4 話し手

A 吉川 幸吉 (男) 明治35年生まれ 大工兼農業

B 戸屋 英明 (男) 明治36年生まれ 農業

近衛兵として2年間、東京で生活をしたことがある。

C 小早川 広志 (男) 昭和24年生まれ 自転車店

5 録音環境

杉原清一氏の協力を得て、上記の三人にお願いした。蝉の音がしきりにするるので、夏ではあったが、蝉の声を切る側をしめ、反対側は水田で、時折鳥追いのガスで音を出す機械の音が聞こえるので、止めてもらったりした。

戸屋氏が話し上手のため、割にかたくならず進行した。

同席者 杉原清一、島根大学助教授田中瑩一、馬木小学校教諭
小川昭男

農機具の本を見ながらの三人の会話

話し手

| (略号) | (氏名) | (性) | (生年) |
|------|-------|-----|----------|
| A | 吉川 幸吉 | 男 | 明治35年生まれ |
| B | 戸屋 英明 | 男 | 明治36年生まれ |
| C | 小早川広志 | 男 | 昭和24年生まれ |

C カー アラオコスイ デスイ カネ。⁽¹⁾
これは 「荒起し」 ですかね。

A インヤ ドレンニデモ (C アラオコスイ ツィーカ) ドレンニデモ
いや どれにでも 「荒起し」というか どれにでも

ツィカイマスイワネ。 アラオコスイニモ サースィネ ⁽²⁾ (C ハー)
使いますよ。 「荒起し」にも するしね (はあ)

ナカオコスイニモ サースィネ。 ⁽³⁾ (C ハー) アノ イロイロ
「中起し」にも するしね。 (はあ) あの いろいろ

ツィカイマスイワネ。
使いますよ。

B ホリタツィヤツィモネ ⁽⁴⁾ (A アー) (C ホー) アノネ
「堀田」というのもね (ああ) (ほう) あのね

ケッキョク サイゴニ コヤスイオ オイコンテ⁽⁵⁾ (C ハー)
結局 最後に 肥料を 投げ込んで。 (はあ)

ムカスイノ ウマヤゴエオネ (C ハー ハー ハー) ウスィニ
昔の 厩肥をね (はあ はあ はあ) 牛に

フマシエタンヤ ウマニ フマシエタヤツイオ (A ワーチャ)
踏ませたのや 馬に 踏ませたのを (我々ほ)⁽⁶⁾

タンナカエ イレテ (C ハー) ソレカラ ソレオ マタ
田の中へ 入れて (はあ) それから それを また

コー タガヤスイテ ズット (A 咳) スィキコム (C ハー)
こう たがやして すっと 鋤込む (はあ)

タメニ ツィカウ。 (C ハー) ソレデ スィキダテ イヨツタ。
ために 使う。 (はあ) それで 鋤 だと 言っていた。⁽⁷⁾

(C ハー)
はあ

A コノ コノ スィメンヤチャーネ ダイブン ムカスイノ モンテスイ
xxx この 図面 などね たいぶん 昔の ものです

ケンネ (C ハー) アー スィキモ ダイブン ナニ (B コレワ)
からね (はあ) ああ 鋤も たいぶん 何 (これほ)

カイゾーサレテネ。

改造されてね。

B アー ムカスイノ オースィキダネ。 (A アー) (C ハー)
ああ 昔の 大鋤 だね。 (ああ) (はあ)

カッコーガ。

恰好か。

A タツタモ アノ エーヤツイニ ナツテネ。
次第に ⁽⁸⁾ ああ よいものに なってね。

C コーガ アタラシイ ヤツィ デスィカ。 (B エーヤ)
これが 新しい ものですか。

A アー コレヤチャ ダイブン アタラシイ⁽⁹⁾ ナツタモンダワネ。
ああ これなど だいいぶん 新しく 作ったものだわね。

(C ハー) ハー ホレニ ミンナ モー コレオ ショー
はあ はあ それに 皆 もう これを 知っている

ケンネ。 コゲナ スィキワ。 (C ハー) アー。
からね。 こんな 鋤は。 はあ ああ。

B ソノホーガ ツィト フルイジャー ナイカナー。
その方が 少し 古いではないかなあ。

A アゲダネー (B フルイ) アー。 (B アー ダイブン
ああだねえ ああ。 ああ。 だいいぶん

コレガ カワッ) コー コーガ ダイブン アタラシイ
これが 変わ、) xxx これが だいいぶん 新しく

ナツ ショーワ。

なっているわ。

C オラヤツィモ ミタコトガ アーデスィ ダドモネ。 (B エー)
わたし達も 見たことが ありますけれどもね。

コドモノ ヨツ ツィカ イツィ ツィ グライノ トキニネ。

子供の 四つか 五つぐらいの 時にね。

B エー コレワ トコガ トコガ ナイヤツィデ (A ウン) コノ
これは xxx 床が ないもので この

テマエノ コー テー モツィ ⁽¹⁰⁾ ハンドル エマゴロデ⁽¹⁰⁾ イヤー
手前の こう 手を持つ ハンドル 今頃で(今頃の言葉で)言えば

ハンドルダネ。 (C ハー) コー テデ⁽¹⁰⁾ モツィトコロカラ
ハンドルだね。 はあ こう 手で 持つ所から

(C ハー) コー ツィズィイタ サキエ コノ (C カー
はあ) こう 続いた 先へ この (C これは

テツィテスィカ。) カナグガ ツィチョル。
鉄ですか。 金具が ついている。

C カナグガ (B エー) ハー。 (A スィキノ)
金具が はあ。 (鋤の)

B ココガ ⁽¹¹⁾ヘカ (C ハー) コツ ツィガ スィキザキ ユーテ
ここが ⁽¹¹⁾ヘカ (C はあ) こっちが 鋤先と 言って

イーヨツタ。
言っていた。

C コレテ スィジェンニ アッチノ ウエエ モツテアゲテネ。⁽¹²⁾
これで 自然に あっちの上へ 持って上げてね。

B エー ズーット ココエ コー キツテキテ (C ハー)
ずっと ここへ こう(ハンドルを)切ってきて (はあ)

ソレカラ コンド コノ ヘカテ ズィーット コー (C ハー)
それから 今度 この へかで ずうっと こう (はあ)

ツィツィオ ウエエ ハネル。 (C ハー) ウン。
土を 上へ ほねる。 (はあ) うん。

A コレ ⁽¹³⁾カタガ。
これ 型が。

B コレヤー ムカスィノ。 (A ンー アゲダネ アー) カタガ
これなど 昔の。 (ああだね ああ) 型が

フルイ。 (A アー)
古い。 (ああ)

C ハー (B ~~~~~) コリヤー ナンテスィカネ。 コーガ
はあ これは 何ですかね。 これが

ブンカイスイタトコロテスィカネ。(笑いながら)

分解した所ですかね。

B コレガ ヘカ。(A アー) (C ハー)
これが ヘか。(ああ) (はあ)

A ブンテキニ カイタモンダネ。(C ~~~~~)
部分的に 書いたものだね。

B コレガ イツィバンサキノ ウスイノ (C ハー) スイリントコテ
これが 一番先の 牛(に対しては) (はあ) 尻の所で
(C ハー) (A ヨコ ヨコガシエダ) ヨコガシエ。(C ハー)
(はあ) (よこがせて) (よこがせ) (はあ)

ソレオ ウエノ アー スィキノ ナンツィー ネリダ イーヨッタ。
それを 上の ああ 鋤の 何と言ったか(なあ)「ねり」だ(と)言っていた。

A ンー ネリ イーヨッタネ。
うん 「ねり」(と)言っていたね。

C コラー ナンテスィカネ。 テデ モツィ ヨートコロ。
これは 何ですかね。 手で 持つ所。

A アー アゲダ。
ああ ああだ。

B エ エー テデ モツィトコロ。 テデ モツィトコロ。(A ~~~~~)
手で 持つ所。 手で 持つ所。

C アー コーテスィカネ。
ああ これですかね。

B コレワ ウエノ ウエノ トコロノ マッスィク マエエ デダ
ウエノ これは 上の 所の まっすく 前へ 出た

(C ハー) アノ コレダ。
(はあ) あの これだ。

C アー ハハハハ。 シェボネ ミタエナ (B 笑) シャタエ
 ああ はははは。 背骨の ような 車体の
 ミタエナ (B 笑) スィテンシャデ イヤー。 (A ソゲダ。)
 ような 自転車で 言えは。 (そうだ。)
 (B ソー ソー) (笑) ハー。 ムカシャー ウスイガ エー
 (そう そう) はあ。 昔は 牛が いい
 グヤイニ ウマイコト コー アルキヨツタ (B ~~~~) デスィカネ。
 具合に 上手に こう 歩いていた ですかね。

B ウスイガ (A ハー ウスイ ---) コーコー ツィナデ スィーット
 牛が (はあ 牛 ---) このように 綱で ずうっと
 ウスイノ ハナエ ツィナー ツィケチヨイテ カズィトリ
 牛の 鼻へ 綱を つけておいて 船取り
 (C アー ココカラネ ハー) ソエデネ ---
 (ああ ここからね はあ) それでね ---

A ウスイノ ウスイノネ コノ ツィナトネ (C ハー) (咳)
xxxxxx 牛のね この 綱とね (はあ)
 ソレカラ コノ ツィナトデ アノ フッパラショツタモンダケンネ。
 それから この 綱とて あの ひららせていたものだからね。
 (C ハー) ハー。
 (はあ) はあ。

B ココエ ココエ ヒッカケテアル。 (C ハー ハー) ソエデ
xxxxxx ここへ ひっかけてある。 (はあ はあ) それで
 ナレンアイダワネ (C ハー) コノ ツィナデ ウスイオ
 慣れぬ間ほね (はあ) この 綱で 牛を
 ホーコーオ ムキオ エー グヤイニ ムケナ イケンシィ (C ハー)
 方向を 向きを よい 具合に 向けねばいけないし (はあ)

コツ ツイノ テデワ ス_{xx} スイキオ (C ハー ハー)
こちらの 手では 鋤を (はあ はあ)

ツイカマエトツテ マッスィグ エカニャー イケン。 ナレン
つかまえていて まっすぐ 行かぬほ いけない。 慣れぬ

アイダワ ウスィガ タイショー スィテ ズィーット エガンテ
間 は 牛が 大将を して(自分勝手にして)すうと 曲って

スィマウダケン。 (C ハー) ⁽¹⁵⁾ ヨコスィノホーエ エキテ
しまうのだから。 (はあ) 横の方へ 行って

(C ハー) マタ モトエ モドッテワ ヤリナオサナ エケン。
(はあ) またもとへ 戻っては やり直さぬほ いけない。

(C ハー) イマンゴロワ
(はあ) 今頃は

C デモ ホントワ ツイカラガ エルデスィネヤ。 モトデ モッチョ
でもほんとうは 力が いるですね。 手許で 持って

ラニヤ。

いなければ。

B アー アー。 エンヤ アンマリ ツイカラワ エラン。
ああ ああ。 いいえ。 あまり 力は いらぬ。

C エランデスィカネ。
いらぬですかね。

B ダドモ (A アー アノネー) イマゴロノ コーウンキテ
けれど (ああ あのねえ) 今頃の 耕耘機で

ヤルホーガ ヨッポド ラクナワネ。 ハナウタオ ウターチョッテ
する方が よほど 楽だわね。 鼻歌を 歌っていて

デモ。

でも(できる)。

C ソリャー マー (B 笑) ソゲデスイネ。 イマ マダ
それは まあ そうですね。 今(は) まだ(その上)

トラクターガ アーデスイケンネ。 (B アー)
トラクターが あるですからね。 (ああ)

A アー。 ソレデモネ イマンゴロワ ミンナ アノネ アノ
ああ。 それでもね 今頃は 皆 あのね あの
オナンコデ ヤーケンネ アノ オナンコバツカードモネ、
女牛で やるからね あの 女牛ばかりだけれどね、
ムカスイワ コツテーデ ヤリョツタ モンダケンネ。
昔は 男牛で やっていたものだからね。

B ウン コツテーダ。
うん 男牛だ。

C ウーン。 コツテースイカ オラダツタデスイカ。
ううん。 男牛しか いなかったですか。

B インヤ イヤ スイゴトオ ヤラシエルノニワ (C ハー)
いいや いや 仕事を やらせるのには (はあ)

コツテーデ ヤラシエル。 (C ハー) コツテーツイーノワ
男牛で やらせる。 (はあ) 「こっ、てい」というのは

ワカーカネ。
分るかね。

A コツテーバツカリダ。 アノー オナンコモ オナンコモ オリョツ外
男牛ばかりだ。 あの 女牛も いたと

オモウケドモ オナンコデワ スイゴトガ デキンダケンネ。
思うけども 女牛では 仕事か できないのだからね。

~~~~~

C イヤ コッテー ツィー ヤチャー。

いや 「こってい」というのは。

B オトコウスイノ コトダ。

男牛の 事だ。

C ハー ワカーマスイワ。

はい 分ります。

B キンタマ モッタ ヤツィ。 (笑)

きんたま(ε)持った 牛。

A ソイデ<sup>16</sup> コッテーデ<sup>16</sup> ナケニャーネ (C ハー) ツィカラガ  
それで 男牛で ないよね (はあ) カガ

ホソテ イケンダ。 (C ハー ハー ハー) ンー。 ソエカラ  
弱くて いけないんだ。 (はあ はあ はあ) うん。 それから

オラダネ<sup>16</sup> ダイクサーニネ (C ハー) ナンダエダ<sup>16</sup> ダイクノ  
わたし達ね 大工(ε)するのは (はあ) なんだ 大工の

アイマスイゴトニ ヒャクショー ショッタダケンネ。 (C ハー)  
合間 仕事に 百姓(ε) していたのだからね。 (はあ)

ソーダケン ツィート ハエーブンノ ウスイデナケニャー エケ  
それだから 少し 早い分の 牛でなければ いけ

ダッタケンネ。 (C ハー) ソーダケン スイランスイーデモ  
なかったからね。 (はあ) それだから 知らない人でも

クリャー ケー アタマニ コゲサーブリデ<sup>17</sup> ナイツィヤツィダナ  
来れば つい 頭に こうするので ないよ

ケニヤ イケダッタ。 (C ハー ハー) ソノグライダト スイットネ  
いけなかった。 (はあ はあ) そのぐらいたとするとね

ホー マゲニ<sup>18</sup> イソグダケンネ (C ハー ハー) スイゴトガ  
ほう 上手に 急ぐのだから (はあ はあ) 仕事か

マゲン デキル。 ( C ハー ハー ) ソゲスイ チョイテ コンダ  
上手に できる。 はあ はあ そうしておいて こんどは

ダイクスイゴトニ ジョウツ モンダ。  
大工仕事に 出ていたものデ。

C ハー オラヤツイ<sup>(19)</sup> ジェンジェン ヒヤクショーナンカ スイタコトガ  
はあ わたし達(は) 全く 百姓 など しは事か  
ネーダケンネ。  
ないのだからね。

B サー ホンニ ナンダネ。 <sup>(20)</sup> ワスイラ ツイカ ヤルヨーニナツテモ  
さあ ほんとに 何だね。 わたし達が (百姓を) やるようになっても、

ハズイメワ コツテダツタ。 ( C ハー ) ムカスイワ イースイノ  
初めは 男牛 だった。 はあ 昔は 飯石(郡)の

( C ハー ) イマゴロノ ミトヤノネ ( C ハー ) アンダノ<sup>(21)</sup>  
はあ 今頃の 三刀屋のね はあ あんたの

( C ハー ) アノ キンネモサンツイー オーキナ バクロサンガ  
はあ あの 金右衛門さんという 大きな 博労さんが

オツテ マイアサ キテ ( C ハ ) スイヤマ クラマツツァンノ  
おって 毎朝 来て は 須山 蔵松さんの

コトダワネ ( C ハー ) アレノ オトー オズィー オトーサンガ  
事だわね はあ あの人の ~~xxxxxx~~ ~~xxxxxx~~ お父さんが

( C ハー ハー ) ネ ソコエ タノンデネ ( C ハー ) ソノ  
はあ はあ ね そこへ 頼んでね はあ その

ウスイオ カリニ<sup>(22)</sup> フシェノ ヤエガキサントコマデ ムカエニ  
牛を 借りに 布勢の 八重垣さん(の)所まで 迎えに

イキョツタ。 ( C ハー ) デ スイゴトガ スイント マタ  
行っていた。 はあ で、 仕事か すむと また

ソコマデ オクツテエツテ ムコーノ ホーエ ワタスイ。

そこまで 送って行って 向うの 方へ (牛を) 渡す。

C ア ソラ アサマ トーニ デラッ シャッタ。

ああそれは 朝 早く 出なされた。

B (笑) トーニ デニャ ムコーエ オーハラカラ ツイーハンゴロニ

早く 出なければ 向うへ 大原から 昼飯頃に

(22)

へ ムカエニ アガツチョルダケン。 ソコエ カエスイニ。

もう 迎えに 上っているのだから。 そこへ (牛を) 返しに。

(C ハー) ソゲス<sup>イ</sup>タ (間) トキニャー コノ ウスイスイキテ  
(はあ) そうした 時には この 牛鋤で

ヤリョッタモンダ。

やっていたものだ。

(23)

C ハー。 カー ナニスィーモンデスィカネ。

はあ。 これは 何をするものですかね。

B ソリャー オマエ マングワダネ。

それは あんた 馬鋤だね。

A コリャー マングワ。 マングワ コア<sup>(24)</sup> タイスィタ ネンノ イッタ

これは 馬鋤。 馬鋤 これは たいした 念の 入った

マングワダワネ。

馬鋤 だわね。

C マングワツツテ ナンデスィカ。

馬鋤 とは 何ですか。

A コアー (B アー) スィロオ カクニ ツィカウ<sup>ン</sup>ダ。  
これは (ああ?) 代を かくのに 使うのだ。

B アー イマ<sup>ゴ</sup>ロノ (A イマノ) ハロー。  
ああ 今頃の (今の) 「ハロー」。

A ウスイテ<sup>ウスイテ</sup>ネ。 ( B イマンゴロテ イヤ ) ズィーット  
牛で 牛でね。 ( 今頃 (の言葉) で 言えば ) すうっと

ドロオ オコエタモノオネ。 ( C ハ ハ ハ ) コンド  
泥を 起したものをね。 ( はあ はあ はあ ) こんど

ミズィ アテテネ ソレオ コ ヤッテッテ ドロオ  
水(を) あててね それを こう やってって 泥を

( B クダク ドロオ クダク モンダ ) ( C ハ ハ ハ )  
( 砕く。 泥を 砕く ものだ ) ( はあ はあ はあ )

サイドキダワネ。 ( C ハ ) ( A・B 笑 )  
砕土機 だわね。 ( はあ )

B エーゴテ イヤ ハローカ。  
英語で 言えば 「ハロー」か。

A アゲ アゲ アゲイワニヤ イケ ココヤツイテワ  
ああ ああ ああ言わねほ いけない この地方では。

~~~~~ ( C ハ ハ )  
(はあ はあ)

B コレガ マン マン ウマグワト カイトアル。 マングワ。
これが マン マン 馬 鋏と 書いてある。 馬 鋏。

C ハ。 ハ ウマノ クワデシカ。 (A ハ) クワ ココ
はあ。 はあ 馬の 鋏ですか。 (はあ) 鋏 こ

B ウマ ハローノ ハガ カイトアル。 (C ハ ハ) ウマニ
馬, 「ハロー」の「ほ」が 書いてある。 (はあ はあ) 馬に

ヒカシエ タヤツィガ ウマジヤナイ ウスイガ ヒーチョーケンネ。
扱かせたやつが 馬ではない 牛が 扱いているからね。

(C ハ) マングワ。
(はあ) 馬 鋏。

C コラー クサ アノ (B タオツィグルマ) タグルマカネ。
これは ^{xxx} あ の 田 打 車 田 車 かね。

A ハー タグルマ。 コー タグルマ ズィンド ムカスイノ モン
はあ 田 車。 この 田 車 (は) 大 変 昔 の も の
ダワネ。 (C ハー) ハー モ ^{xx} モクシェーノ タグルマダワネ
だわね。 (はあ) はあ 木 製 の 田 車 だわね。

C ハー。 ミタコトガ ネーダケンネー。 ジェンジェン。
はあ。 見 た 事 が ない の だ から ね え。 全 く。

B ツィカゴロノ ワカイヒトワネ ワカラン。
近 頃 の 若 い 人 は ね 分 ら ない。

A コゲナ タグルマ ヨケー ミタコトガ ネーネー。
こ ん な 田 車 あ ま り 見 た 事 が ない ね え。

B ウツィヤツィ アルヨ。
わ た し 達 あ る よ。

A アーカネ。
あ る かね。

B ブン ^{xxx} ブンクウ サイダワネ。 エンマネ コイツィネ キソーシルワネ。
文 化 財 だ わ ね。 今 に こ い つ (を) ね 寄 贈 す る わ ね。

A エンマネ コンナ --- アー ホンナラ キソーシテゴスイ
今 に こ ん な --- あ あ ほ ん なら 寄 贈 し て あ げ (る) 。

C コーモデスイカネ。
こ れ も だ す かね。

A コレワ ソーデモ ダイブン アタラシィー ナツタ モンヤツィダ。
こ れ は そ れ で も た い ぶん 新 し く な っ た も の だ 。

B アー ナカウツィ グルマダ。
あ あ 中 打 車 だ 。

A アー アゲダ。 タグワーマツィーヤツィ ダ⁽²⁵⁾ (B アー 'ダイブ'ン)
ああ ああだ。 田車 というやつだ。 ああ たいぶん)

アー。
ああ。

C ウーン コーモ コーモ アタラスイー モン
うん これも これも 新しいもの -----。

A コーモ コーモ ダイブ'ン アテ -----。 コーガ スイジエンニ
xxxxxxx これも たいぶん あて -----。 これが 自然に

コンド カネニ ナーワケダケンネ。 (C ハー ハー) オーカタ
こんど 金属に なる訳だからね。 はあ はあ) おおかた

ミラツ シャエ コツ ツィ ノ ホージャー カネニ ナッ チョーワ。
見てごらん こっちの方では 金属に なっているわ。

C コリヤー マタ ナンデスイカ タンキリ。 (B ハッタンキリカ)
これは また 何ですか たんまり。 ハ反切りか。)

ハッタン。
ハ反。

A コーモ ヤッパー アノ タグルマノ シュルイデショーネ。
これも やはり あの 田車の 種類でしょうね。

コレモ ミタコトガ ネーネ。
これも 見た事が ないね。

C コノヘンニヤ ミエン デショー。
この辺りには 見えないでしょう。

A アー ミタコトガ ナイネー。
ああ 見た事が ないねえ。

C アノ ゲタミタエナヤツィガ アーデスイガネ。
あの 下駄のようなやつが あるですがね。

A アリャー ⁽²⁷⁾ ワースイダ^ダ ゲタミタエナモノワ ワースイダ^ダ。
 あれば 「わあし」^ダ 下駄のようなものは 「わあし」^ダ。

C ワースイ。
 わあし。

B コノヘンジャー ワーシェダツィー^{ンダ} (C ワースイ) ワーシェ
 この辺では 「わあせ」^ダというの^ダ (C わあし) 「わあせ」
 ダツィー。
^ダという。

A コーモ タノ クサトーダケンネ。 (C コリャー タタク^{モン}
 これも 田の 草取 ^ダだからね。 (C これは ^ダくもの
デスカ。) アー エンヤ エンヤ タンナカ コースイテ
 ですか。) ああ いいえ いいえ 田の中(を)このように^ダ鋤いて
マジェクータ。
 ませるの^ダ。

C アー アー。 エンヤ マタ。
 ああ。 いいや また。

B テデ ヤルトワ ラクナツィー^ダ。 (C ハー) ハツタンドリ
 手で やるよりは 楽^ダというの^ダ。 (C ハー) ハ反取

ナンツィーネ イーヨツタデスィガネ。 (C ハー) ハツタンドリ
 などと言う 言っていた^ダですがね。 (C ハー) ハ反取

トワ テデ ヤリャー イッ ツィンツィニ イッタンクライスィカ
 と言うのは手で やれば 一日に 一反ぐらいしか

トレンノガ (C アアアー) (A ソレカラ ---) コゲコゲ
 (草が)取れんのが (C ああああ) (A それから ---) こうこう

ヤリャー (C 笑) ハツタンモ トレーツィー (C ハー)
 やれば ハ反も 取れるという (C ハー)
ハあ

ソレデ ハッタンドリツィー。

それで ハ反取という。

A ソレカラ コレワ コレワ ババ⁽²⁸⁾ (C カー スズィ
それから これは これは ぼぼ) これは 條

ヒッ パー デスィカ。) ア コレワ ババヒキダ。

ひっはりですか。) あ これは ぼぼ引きた。

C ア ババヒキツィー モンデスカ。 (A ハーン) シェン ヒク
あ ぼぼ引きというものですか。 (はあん) 線(を)引く(線を書く)

モン。

もの。

A ハーン (B アー シェン ヒク) コリヤー シェン ヒクダ
はあん (ああ 線(を) 引く) これは 線(を) 引くのた

コリヤー マダ サイキン マンダ (C アノ) ヤッチョースィーガ
これは まだ 最近(でも) また (あの) やっている(使っている)人が

アーケンネ。

あるからね。

C ケーナヤツィガ アッタデスィガネー アノ サンカクンナツタ
こんなやつが あったですがねえ あの 三角になった

ヤツィガ。 コトント オトイテ ヤツガ。

やつが。 ことんと 落して やつが。

A ウーン ウン アレ アレ⁽²⁹⁾ ジョーギダ。

うん うん あれ あれ じょうぎだ。

C アリヤー ヨソデ ミタコトガ アー。 (A ウーン)
あれは 他所で 見た事が ある。 (うん)

B マダ ウツィニ トッチョイテ アルヨ。 ソレガ タクサン。
まだ 家に とっておいて あるよ。 それが たくさん。

(C ハー)
ほあ

A コノ ババヒキワ コリャー ホシェー ババヒキダワー。
この ばば引きは これは 小さい ばば引きだわあ。

カンジョーノ ワリー ババヒキダワー (B 笑) (C コーモ)
勘定(効率)の 悪い ばば引きだわあ (これも)

ニケン ニケングライ アーヤツィダナケニヤ カンジョーカ
~~xxxxxx~~ ニ間 ぐらい あるのでなければ 勘定が

ワリーテ エケンワネ。 タンナカ ナーベンモ アトサキシエ
悪くて いけんわね。 田の中 何辺も 後先しな

ニャー エケンダケンネ。
ければ いけないのだからね。

C アー ソリャー ソゲテスイネー。 コリャ マタ ナニ スイー
ああ それは そうですねえ。 これは また 何を する

モンテスィカ。 ~~~~~
ものですか。

B エブリ。
えぶり。

A コリャ エボーダガネ。
これは えぼりだかね。

C エブリツィータラ~~~~~。
えぶりと言ったら (何を するものですか)。

B ナラスィモンダ。 タオ タエランスィルモンダ。 (C ハー ハー)
均すものだ。 田を 平にする道具だ。 (ほあ ほあ)

A エマノ マングラデネ。 (C ハー) ナニ (B ヤッテ)
今の(先程説明した)馬鋤ね。 (ほあ) 何 (やって(このように使って))

アツ

B サイ サイゴニ (A アノ サイ サイド シチヨイテ ソシカラ
最後に (あの 三度 しておいて それから

コンド ソーテ コンド ヤーガネ) アノ エブリデモ
こんど それで こんど やるがね。) あの えぶりでも

コレモ コレヤーガネ。 (C ハー) タオ タイラニスイルモン。
これも これをやるがね。 (はあ) 田を 平にするもの。

(C ウーン)
ううん

A コラー エライモンガ アーモンダネ。 コリヤー ムカスイノ
これは 大変なものがあるものだね。 これは 昔の
クワダケンネ。
鉄だからね。

C ウツイン アーマスイズイ ムカスイノ クワ。
私の家(にも) ありますよ 昔の 鉄。

A コノモン タイガイ アーデショー アノ クワワ。
このもの(は) についてい あるでしょう あの 鉄は。

C コノブンガ。
この分が。

A ン アー アー ムカスイノ アジェノーグワダガネ コリヤー。
ん ああ ああ 昔の 畔塗り鉄だからね これは。

B イン イングワ ツイー ヨツタカナー。
いん鉄 と言っていたかなあ。

A アジェノーグワダガネ ムカスイノ。
畔塗り鉄だからね 昔の。

C ウー ン ドーグ ムカスイ。 イマモ ドーグガ アー
うん 道具 昔(の)。 今も 道具が ある
ダガ ムカシャ マット ヨケー アツタモンデスイネ。
が 昔は もっと たくさん あったものですね。

B (笑) ナカナカデスイヨ。 コレカラ (A) ヤッパリ
なかなかですよ。 これから やはり
(A トースイダ) タツタモ カイリョースイテネ。 (C ハー)
(篩デ) 次第に 改良してね。 (はあ)

エーモノワ ツイギツイギ デキルダケン。
よいものは 次々 できるデから。

C アゲデスイネ。 カ ナンデスイカネ。
ああですね。 これは 何ですかね。

B ナンダカエナー。
何デかなあ。

A ソレガ トユリトスイテアーネ。 (C トイスイノ イ イミ)
それが とゆりとして(書いて)あるね。 (砥石の ~~イ~~ 意味。)

トイスイ イレチャーガネ。 コレ トイスイダ。 (C ハー)
砥石(石) 入れてあるかね。 これ 砥石デ。 (はあ)

カー) カー スイイシャ。
これは? これは 水車。

B ミズイオ アゲル。 (A アー)
水を 揚げる。 (ああ)

C イマンゴロ ソンズイガ (A ミス アゲル) アーマシェンネ。
今頃 そんな(添水)が (水(石) 揚げる) ありませんね。

ソコン トコーニ ソンズイガ アーマスイガネ。
その 所に 添水が ありますがね。

A アー。(問) カー スイイシャダ。

ああ。 これは 水車 だ。

B コレワ ケツキョク ココデ コー

これは 結局 ここで こう ---

C コリャー ミズイ アゲーヤツイ タナイテ^{スィカ}。

これは 水(を) 揚げるやつではないですか。

B ンー ミズイ アゲシエンモン。(A アー ミズイ アゲシエンモンダ。)

うん 水揚げ専門。 ああ 水揚げ専門だ。

タンボガ コノ カワヨリモ (C タカイトコロニ アル。)

田が この 川よりも 高い所には ある。

ウン タカイトコガ アツテ コレデ クミアゲテ (C ハー)

うん 高い所が あって これで 汲みあげて (はあ)

ズィーット ヨコエ デテ コー (A トイガ)

ずうっと 横へ 出て こう 樋が

 。

C カー フマニヤ イケンブンジャー ナイテ^{スィカ}。

これは 踏まねば いけない分では ないですか。

B ンー フム。(A フンダワネ。)(C フーン) リョーホーエ

うん 踏む。(踏んだわね。)(ふうん) 両方へ

アノ スィ ツィーオ スィトーケンネ。(32)

あの 支柱を しているからね。

A コリャー マダ ナンダ⁽³³⁾エネ。 トーイガ⁽³³⁾ ネーケンネ。

これは まだ なんですね。 鳥居が ないからね。

(C ハー ハー) トーイニ サバッチョツテ。(C アー)

(はあ はあ) 鳥居に つかまっています。(ああ)

コノ サトノホーエ ⁽³⁴⁾ デアート アレー ヤリョツタネ マンダ
 この 平野部の方へ 出ると あれを やっていたね まだ
 コノ キンネンマデ。
 この 近年まで。

C ハー ハー。 コーモ エッショナモンデスイネ
 はあ はあ。 これも 同じものですね

A アゲデスイヨ。 コレ コレ (C ハー) コレダ。
 ああですよ。 これ これ (はあ) これだ。

C ウスイミタエニ (A ハー) チョッコ チョッコ ヤリヤニヤ。
 牛のように (はあ) ちょっこ ちょっこ やらねば。

A コリヤー ホンニ シェツィ スイゴトダトネア。 アーン。
 これは(水揚げ)ほんとうにきつい仕事だね(仕事だということだ)。 ああん。

C ミズイニ サカラワニヤ (A アーン) エケン
 水に さからわねば (ああん) いけない

デシヨウケンネ。
 でしょうからね。

B ノギグンノ ホーエ イクト タクサン アル。
 能義郡の方へ 行くと たくさん ある。

A ムカスイ ムカスイ ココンホージャー コメツィキ ショーツタ。
~~xxxxxxxx~~ 昔 この地方では(水車で)米搗(ε) していた。

ウツィラツィモ ウスイノワクノ ⁽³⁵⁾ スイマツカデ ⁽³⁶⁾ アノ カラウスイ
 私の家も うす庭の 隅で あの 唐臼(ε)

ツィーテネ (C ハー) カラウスイ スエチョッイテネ
 搗いてね (はあ) 唐臼(ε) 据えておいてね

(C ハー) コメツィキ ショツタ。 チョード コンナゲニ
 (はあ) 米搗(ε) していた。 ちょうど このように

チャント サバッチョッテネ (C ハー) コメツイキ ショッタワネ。
ちんと つかまえていてね (はあ) 米搗(毛) していたわね。

C ハー ハー。 エット ムカスイノ コトデスイワネ。
はあ はあ。 ずっと 昔の 事ですわね。

A アー ムカスイモンガ ユーコトダケンネ。 (B 笑)
ああ 昔の者が 言う事だからね。

C マダ ウマレチョラン。 コーワ シェンゴワ ツィカッチョラン
まだ 生まれていない。 これは 戦後は 使っていない
シャランデショー モー。
さらないでしょう もう(今は)。

A シェンゴワ ナイネー。
戦後は 無いわえ。

C マー ケナ (A アー) ミンナ ミ ノーグワ。
まあ (ああ) みんな 農具は。

B アー ジェンブ ナイネー。
ああ 全部 無いわえ。

A マンダ オラドンガネー サンズイ サンズイーダイグライナ
まだ わたし達がねえ ×××××××× 三十歳代ぐらいな

ズィブンニネ (C ハー) アノ イズィモフダー ウツィトネ
時分には (はあ) あの 出雲札を 打つとね

ヤッパア アノ ミズィ アギョッタネ フンデ。 (C ハー)
やはり あの(他地方の)水(毛) 揚げていたね 踏んで。 (はあ)

ハー アゲスイテ トーイ クンジョッテネ (C ハー) トイーニ
はあ ああして 鳥居(毛) 組んでおいてね (はあ) 鳥居に

サバッチョッテネ (C ハー) ソエカラ スィ イ シヤ ニ
つかまえていてね (はあ) それから ××××××××

スイイシャ ココツイカッテ ドンドン ドンドン フンデネー。
水車 ココを使って どんどん どんどん 踏んでねえ。

(C ハー) シェ ツイー スイゴトダナーツイテ オラダン
(はあ) 息の切れるつらい仕事だなあと言って わたし達

ミテネ (C ハー) トーリョツタガネ。 (C ハー ハー) ハー。
見てね (はあ) 通っていたがね。 (はあ はあ) はあ

B ケッキョク ヒカワノ ヘーゲンノホーダワネ。
結局 斐川(郡)の 平原の方だわね。

A アノヘンワ カリユースイケンネ。⁽³⁸⁾
あの辺は(ここからは、^{ひいかわ}斐伊川の)下流ですからね。

C アー アゲデスイネ。 アゲデスイネ。
ああ ああですね。 ああですね。

A ハー (C ハー) ゾーダケン ミズイガ フクイトコーオ
はあ (はあ) それだから 水が 低い所を

トーチョーケンネ。 (C ハー) ダムワ ズット タカイトコニ
通っているからね。 (はあ) ダムは ずっと 高い所に

アルデスイケンネ (C ハー ハー) イマンゴラー アノ
あるですからね (はあ はあ) 今頃は あの

ナンダエダ ハツイドーキデ ケー マゲニ アゲテ (C アゲ
何で? 発動機で つい 上手に(水を)揚げて (はあ

デスイネ) ゴスイダドモネ。 (C ハー)
ですね (はあ) くれるけれどね。 (はあ)

A ムカスイワ ソゲナコト ナイデスイケンネ。
昔は そんなこと ないですからね。

C ハー。 マー シェーカツイ ……。
はあ。 まあ 生活 ……。

B ツィカゴロワ ワカイスィー オトコノヒトモダガ ヨメサンダテテ
 近頃は 若い人 男の人もだが 嫁さんでも
 ラクナモンダケンネ。(C 笑) ウツィノ ババサンラツィカ
 楽なものだからね。 私の家の 婆さんなどが
 ヨメサンニ キタズィブンニヤ (C ハー) アタマモ オーキンコトニ⁽³⁹⁾
 嫁さんに 来た時分には (はあ) 頭も 大きく
 カミ イーテ (C ハー) ミンナ ツィルベテ サオテ コー
 髪(毛) 結って (はあ) 皆 釣瓶で 竿で こじ
⁽⁴⁰⁾
 タガテ ミズィ クミアゲテ ツィート ~~~~~ (C サオ
 桶で 水(毛) 汲み揚げて ついと 竿
 テスィカネ。) サオノサキ (C コノ コノ) ツィルベカ
 ですかね。 竿の先(に) (この) 釣瓶が
 スィート アー。(C アー アー) ダカラ ダイブン チョースィカ
 ずと(先に) ある。(ああ ああ) だから 大分 時代が
⁽⁴¹⁾
 ヨーテ ツィナン ナーガネ (C ハー) ソノトースィ。
 よくなって 綱(に) なるがね (はあ) その当時(は)。
 イマゴロノモナー エドポンプテ チョット コックサエ ヒネリャー
 今頃の者は 井戸ポンプで ちょっと コックさえ ひねれば
 ミズィガ サート テル。 カタッポニ ポンプガ アッテ コー。
 水が さあっと 出る。 片方に ポンプが あって こう。
 (C 笑) ダエタエ ムカスィ ノモンガ ナン ドレダケ ナンギ
 たいたい 昔の者が ~~~~~ どれほど 難儀(毛)
 スィタカガ ワカーダガネ。(C ハー) ハー トテモ (笑)
 したかが 分るたがね。(はあ) はあ とても
ブン (A トヤサントコーノワ サー マダ) ブンメーノ
~~~~~~~~~ 戸屋さん所のほ さあ また 文明の

オンケーダワネ。

恩恵だわね。

A アノ (C ソーデスィネ) イドガ フィーサンニ アーマスィタ  
あの (C そうですね) 井戸が 久しく ありました

ラーガネー。

ろうがね。

B エー アツタ アツタ。

ええ あった あった。

C エマー モー アリャーシェン。

今は もう ない。

B イマカラ ゴズィ アードドモ エマゴロワ フタオスィテ  
今から 50(年) あるけれど 今頃は 蓋をして

ポンプガ ツィイテヨル。

ポンプが ついている。

A イヤ アードドモ ナンダエ アノ  
いいえ あるけれども なんだ あん

<sup>(42)</sup>  
サオンバンノ (B ンー) サキーネ フシャク イワエツィケテ  
竿の棒の (B うん) 先にね 杓(ε) 結びつけて

(B ツィルベテ) ヤラッシャードモ。 (B キーリョー……)  
釣瓶で やりなさるけれど。

C アノ カッシャガ ツィータヤツィダネ。 (A ウーン)  
あの 滑車が ついたやつだわね。 (A うん)

B エンヤ キー リョーホーエ タテテ (C ハー) スィンボーガ  
いいえ 木を 両方へ 立てて (C はあ) 心棒が

ナー コーヤッテ クリノキテ コーヤッテ コー ツィンドクヤーニ  
こうやって 栗の木で こうやって こう 積んで置くように

チャントニトイテ (C ハー) キーバイスイキニヤッテ (C ハー)  
はあ はあ

コッツイガ オモタイダケン (C ハー ハー) コッツイ テテ  
こっちが 重いのだから (はあ はあ) こっち(8) 手で

コー ズィート サゲテ スィタエ オロスイ。 (C ハー)  
こじ すっと 下げて 下へ 降ろす。 (はあ)

コンド クミアゲノトキニヤー コッツイノ キノ ツィカラテ  
こんど 汲上げの時には こっちの 木の カで

テ<sup>xx</sup> イルメリヤー ズィート (C ハー) ハンドーテ  
手(8) ゆるめると すっと (はあ) 反動で

アガルノヤ。 (C 笑, ハー) マ ソゲナコトモ フルイコトダ  
上るのだ。 (はあ) ま そんなことも 古い(昔の)事だ

ワネ。 (C ハー) ソゲナヤツイ ヤリヨッタモンダ。 (C ハー)  
わね。 (はあ) そんなこと やっていたものだ。 (はあ)

ツィカゴロワ ヨメサンガ クート チョット コックテ ヒネリサエ  
近頃は 嫁さんが 来ると ちょっと コックで ひねりさえ

スィリヤー エドポンプテ ツァーット ミズィガ デル。  
すれば 井戸ポンプで つああと 水が 出る。

C ソーホド カネガ エーマスィワネ。  
それほど 金が いらいますわね。

B エー カネガ エッタテテ (C 笑) エマンゴロワ ラクナモン  
ええ 金が いったといても 今頃は 楽なもの

ダワネ。 (笑)  
だわね。

A コナエダモネ。 コナエダモ ~~~~~  
この前もね。 この前も -----

B ト イーヤーナコトオ ババサンタツィガ イーテネ (C ハー)  
と 言うような事を 婆さん達が 言ってね ( はあ)

ハナスィワ。 イマノ ヨメサンワ ラクナモンダイーテ。  
話すわ。 今の 嫁さんは 楽なものだ(と)言って。

A コナエダモネ ウツィノ ナンダエ (B 笑) スィマダイ テ<sup>チョー</sup>  
この前もね うちの なんて 島大(島根大学)へ出ている

コガネ (C ハー) チョッコー モドッテネ (C ハー)  
子がね、 ( はあ) 少しの間 帰ってね ( はあ)

ハナエタガ アルバイトニ エッ<sup>チョー</sup>サキデネ (C ハー)  
話したが アルバイトに 行っている先でね ( はあ)

アノ サラヤナンカ アラーニネ ナンボ ~~シエツ~~ ~~シエ~~ シエツスィイダ<sup>ダ</sup>  
あの 皿やなど 洗うに いくら 節水だ

シエツスィイダ<sup>ダ</sup> イー<sup>タ</sup>テテネ ケー コック ヌイ<sup>チョイ</sup>テ アライ  
節水だ(と) 言ってもね つい コック(を)抜いておいて 洗い

ナガスィ<sup>(43)</sup>テ ソノスィ<sup>タ</sup>デ ケー アラーツィ<sup>テ</sup>ネ。 (C ハー)  
流して その下で つい 洗うとってね。 ( はあ)

ミンナ ミズィガ ネー<sup>テ</sup>ヤ ナンズィニ クンジョイ<sup>テ</sup>ネ  
皆 水が 無いと言えば 何時に 汲んでおいてね

(C ハー) ソエカラ アラー<sup>テ</sup> アト<sup>デ</sup> スィスィグ<sup>ワ</sup>ネ。  
( はあ) それから 洗って 後で すすぐわね。

C アゲ<sup>テ</sup>スィ<sup>ネ</sup>。 (A ハー) アーガ ニホンズィンノ ワリートコ  
ああですね。 ( はあ) あれが 日本人の 悪い所

ツィーカ (A (笑いながら) ワル.....) (B 笑) スィマグニ  
と言うか 島国

コンジョーツィー (笑) ナンダエラ ネ。 ヨーネ トマラニヤ<sup>ー</sup>  
根性という 何か ね。 全く(水が)とまらねば

(A アー) オーハイゴン<sup>(44)</sup> シェンツィーヤツィテ。  
ああ 大騒ぎ しないというやつで。

A マーネ タエゲー オツィン ツィカクノホーデモネ ヨメサン  
まあね たいてい 私の家(の) 近くの方でもね 嫁さん(を)  
モラーチャツタスィーガ アーガネ ホンニ ミズィー ソマツィニ  
貰った人が あるがね ほんとうに 水を 粗末に  
ツィカーテダ (笑) ナンツィーテカーニネ (C ハー) ツィラツィラ  
使っていた などに はあ) ちらちら  
ハナスィ キクガネー (C ハー) ハー。 ムカスィノモノワネー  
話(を) 聞くがねえ ( はあ) はあ。 昔の者はねえ  
ミズィ アラニ<sup>(45)</sup> ツィカイスィランモノワ ヨー オヤカタニ  
水 使い(方を)知らない者は とても 親方は  
ナラン ナンツィーテネ (C 笑) イーヨッタモンダ。  
ならん などと言ってね 言っていたものだ。

C ソーダガ ムカシャ ミンナ イドダツタデサーカ。 イヤ カケ<sup>(46)</sup>  
それだが 昔は 皆 井戸だらたでしょうか。 いや  
カケミズィダネー。  
かけ水だねえ。

B カケミズィダ ヤマヨシェノトコロワ ミンナ カケミズィダ。  
かけ水だ 山寄の所は 皆 かけ水だ。

C マー ソーダドモ ムカシャ ヨー アゲナモン ノンジョツタト  
まあ そうだけれど 昔は よう あんなもの 飲んでいたら  
オモテネ。(笑) ヘビガ スィンダリ トゲダイスィランガ  
思ってた。 蛇が 死んだり どうか知らんが  
キチャナゲナエナ ミズィ。(笑)  
汚いような 水。

A ソーデモネー チャント ヒャクショーワネー (C ハー)  
そうでもねえ ちんちんと 百姓ほねえ (はあ)

ソゲナヤネ ウマレタズィブンカラ ソゲナヤネ ソダッチョーケン  
そんなように 生まれた頃から そんなように 育っているから

<sup>(47)</sup>  
ワーエテ マメダッタモンダワネ。

割合に 健康だったものだわね。

C ハー マー ナニ クータテテ ソゲナヤナ。(笑)  
はあ まあ 何(を) 食っても そんなような。

B マ ツィカゴロノ ワカイヒトワ ホントーニ。  
ま 近頃の 若い人は ほんとうに。

A メグマレタモンデスィワネ。

恵まれたものですわね。

B ホントーネ メグマレテ (A ハー) ブンメーノ オンケーテ  
ほんとうに 恵まれて (はあ) 文明の 恩恵で

エーモンダワネ。

よいものだわね。

## 注

- (1) カー（これはの意）出雲地方で広く用いる。アラオコシは、稲を刈ったあと、春になつて田を耕す最初の仕事。牛です。ここはアラオコシの機械。
- (2) サーはスルの転。Suru → sa:
- (3) アラオコシの次の作業。土をややこまかく砕く。
- (4) 堀田。すき起した田に水を入れ、さらにすき返すこと。
- (5) 負つて、投げ込んで。
- (6) ワーチワ → ワーチャ。
- (7) 進行形。出雲では現在形は用いない。
- (8) 次第に、順次に、追々にの意。タダモ、タダモノとも言う。
- (9) アタラシューをアタラシーと直音に言う。
- (10) テーモツはテラモツに当る。手デ持ツと言うべきところ。
- (11) 撓土板のこと。鋤の反転双をいう。
- (12) アゲルデスのようにも聞こえる。
- (13) つぶやくように、かすかに聞こえる。
- (14) 絵本を見ての名称のため説明されてもよく分らない。「ネリ」なども同じ。
- (15) タテ、ヨコをタテシ、ヨコシともいう。
- (16) オラの複数にオラヤツ、オラドがある。オラドワ → オラダと考えられる。
- (17) コゲサーブリはコゲスルブリであり、コウスルは、話し手が、身振で示したのと一緒になつた表現で、ブリは自分の動作。次の文節は十分聞きとれないが、本文の通りとすれば、「ないという奴でないと、いけなかつた」となる。
- (18) ウマゲニの転か。上手に、立派にの意。
- (19) オラダより新しい言い方のように思える。
- (20) ワスイラツイはオラヤツイと同じく複数。ワシはオラに対して尊大な言い方。



- (21) 地名らしいが、不明。
- (22) ハヤの軋だろうと思われるが、出雲の北部では用いない。
- (23) よく用いられる。出雲全般。
- (24) コア → カーであろう。
- (25) タグワーマと言うべきところ、この人はタグワーマと言っている。  
kuruma → kwa:ma
- (26) 「新しい」と言いかけたらしい。
- (27) ワーシともワーセともいう。大足の軋と説明された。山の草、堆肥を、水田の代かきの後、踏み込む大型の下駄のような道具。
- (28) 稲を植える四角の面積。ババヒキは従って苗を植える場所を定めるための縦横の線を引く道具。
- (29) 定規。三角定規のこと。作業の順序を言っている。
- (30) トイレ（砥入れ）と言っているが、トユリと聞こえる。
- (31) 小型の水車。小さな箱などつけて流れの水を入れて動かす。箱二つなどのものもある。個人の米搗きに用いた。
- (32) 鳥居が支柱をしているの意。
- (33) 鳥居の形をしているのでいう。
- (34) 「出ると」 deru(to) → djae となるべきが dae からさらに dae: となったと考えられる。
- (35) ウスニワノ（臼庭）と言っているのが、ウスノワクノと聞こえる。
- (36) スマッコと言っているのが、スマッカに聞こえる。
- (37) 出雲地方の札打ち。巡礼のこと。
- (38) 斐伊川は昔のヒノカワ。この地方はこの川の水源地に当る。札打ちをして下流の簸川郡の平野の風景を言っている。
- (39) 「頭も大きく」を強めて言っている。お嫁さんは以前は丸まげなどを大きく結っていた。
- (40) 桶のことをタガという。ツルベも昔は木製の桶だった。ちなみに肥桶はコエタガという。
- (41) 時代がよくなって、お金があるようになって、の意。昔は竹竿の先にツルベをつけて水を汲んだが、深い井戸は綱を使った。綱は竹より

- も高価だった。「調子がよくて」には「運がよくて」の意味もある。
- (42) サオンバーと言ふべきところ。バーは棒。
- (43) ほとんど毎年のように松江市は、夏になると水不足となり、水道が時間制となる。
- (44) ハイゴン（仁多郡は時にハイグン）は出雲地方のみに用いる。騒ぎあわてる意。尼子氏の敗軍の騒ぎからきた語と伝えられている。
- (45) 「洗い」と言いかけたらしい。
- (46) しょう → さあ（ショ → サー）の変化不明。
- (47) wariaide（割り合いで）割り合いにの意味らしい。riは長音化して、wa:となり、aiはe:となるからwa:edeとなったと思われる。

V. 愛媛県<sup>おち</sup>越智郡<sup>はかた</sup>伯方町<sup>きのうら</sup>木浦

収録・文字化担当者 杉 山 正 世

同 協力者 江 端 義 夫

1. 地点名 愛媛県越智郡伯方町木浦

2. タイトル 松食い虫被害

3. 録音年月日 昭和52年11月1日

4. 録音場所 伯方町農協会館組合長室

### 5. 話し手

A 山岡芳信 男 大正元年生まれ 農協組合長

よそで生活した期間（戦争のため外地で15年間）が長いため、土地の土着的なものの言いが、微弱になっている。また、組合長としての職務上、土地人との接触は多いけれども、共通語的なことばづかいが多くなっている。

B 阿部慧二 男 昭和17年生まれ 農協職員

木浦の純粋人である。よく話しよく協力してくれる誠意の人である。この人の話しことばには、土地ことばの生活の、たしかさが感じられる。

### 6. 録音環境

- ・ 同席者は、話者2人、研究協力者1人の合計3人である。
- ・ 収録時は、静穏な雰囲気であった。
- ・ 誠実で、熱のこもった自然会話が行われている。
- ・ 録音状況は良好である。ただ、マイクの1本使用であったことが、惜しまれる。

7. 録音地点の概観・収録した方言の特色などについては、『方言談話資料(6)』を参照。

# 松食い虫被害

話し手

| (略号) | (氏名) | (性別) | (生年)     |
|------|------|------|----------|
| A    | 山岡芳信 | 男    | 大正元年生まれ  |
| B    | 阿部慧二 | 男    | 昭和17年生まれ |

A ハヤ モー ネー。アノー ホラ モ イマノ コドモジャッたら  
 う ねえ。 あのう。 それは もう、 今の 子どもだったら、  
 モー ココラノ ホーゲンワ モー ワカラン ヨン ナットラ  
 う ころの 方言は、 もう 合らない ように なっている  
 イ ネー。シー。 ( B アー。ホーヨ。 ) ホラー オラーウエージ<sup>(1)</sup>  
 ねえ。 じん。 ( ああ。 そう よ。 ) それは、 私の家だの、  
 ヤノー テュー ワラジノー ユータテテ ( B シー。 ) シリ<sup>(2)</sup>  
 という 私らだの(と) いても ( じん。 ) それは  
 ヤ モー ワキヤ ワカラレ ノヨ。  
 う、 わけは 合らない のよ。  
 B ハケ ノー。 ワイラー コドモノ ジブンニ コナタ ガー コナ<sup>(3)</sup>  
 だから ねえ。 私ら 子どもの 場合に、 “コナタ”お “コ  
 タガー ユータ オマイラーガ ユー コナタ コナタ ガ ヤ ト ロ  
 ナタ”お(と) 言て、 “おまゑら”お(と) 言う(のを) “コナタ” “コナタ”おたらたらう。  
 一。 ( A ウー。 ) ハイ ソレラガ マー ハイ リカイ デ キン<sup>(4)</sup>  
 ( じん。 ) もう それらが、 まあ もう 理解 できない

ワイノ一。 ( A ン一。 デキン。 笑 ) ハケン ホーゲン ユーテモ  
わねえ。 じん。 ではない。 だから。 方言(と) 言っても。

ズンズン ヤッ バリ ソーユー チョーシテ ナイナッテ イクン  
ずんずん やっはり そういう 調子で なくなつて 行くの

ジャ ナイ カオモ一ガ ノ一。  
では ない か(と) 思うが ねえ。

A ハヤ モー ナニ ユータッテ アノ一 ホーゲン デー イマノ  
はや。 もう 何(と) 言つても あのう。 方言で 今の

コドモニ ホーゲン ハナシ シタラ モー ゼンゼン ワカ  
子どもに 方言(で) 話(を) したら、 もう 全然 分

ラン ワ。 ( B ワカラン ワ。 ) ン一。 ( B モー。 )  
らない わ。 ( 合(ら)ない わ。 ) じん。 ( もう。 )

B ハケ一 モー ヤッパ ガッコー イキヨッテ モー トキド キ ホ  
だから。 もう やっはり 学校(へ) 行つていても。 時々。 xxx

ヒョー ジュン ゴ ツカウ ヨーニ スル シー モー ワイラ デモ  
標準語(を) 使う ように するし、 もう。 私ら(で)も

ソー ジャケン ノ一。 ( 笑 )  
そうだから ねえ。

A ソ一。 ソレニ コドモ ガ オツ トラ マー ドー シテ モ ホ一  
そう。 それに 子どもが いたら、 まあ、 どうしても 方言

ゲン ヨリ カ ワ ツー ジ ン ノ ジャ カ ラ 一 ( xxxxxx )  
よりは、 まあ、 相手が 通じないのだから。

B ソ一。 ) ドー シテ モ ヒョー ジュン ゴ一 ハナ ス ヨー ン  
じん。 ) どう しても、 標準語(を) 話す ように

ナル ン ヨ。  
なる のよ。

B ソー。ソー。ソー。 ( A ソー。 ) ソー ヨ。 ハケン モー ワイラ  
 そう。 そう。 そう。 ( うん。 ) そう よ。 だから もう 私らの  
 ノ タイグライジャ ナ。 ヒョー ジュンゴ コーノ……。  
 代ぐらいた。 ね。 標準語(を)

A (笑) マー ソノー ブンジャ ワイ。 ( B ホー ヨ。 ) タイガイ。  
 ( ) まあ。 その おた。 よ。 ( そう よ。 ) た……。

B ワイラー コマイ トキダツタラ モー ノー。 (笑) モー ホー  
 私らは 小い 時だつたら、 もう ねえ。 ( ) もう。 方言  
 ゲン ソノ モンジャツタケド。  
 その ちのだったけど。

A ソー ヨ。 ソー ヨー。 ア アノ ガッコーエー ショーガッ  
 そう よ。 そう よ。 ああ、 あの 学校へ 小學校へ  
 コーエ イキョール ジブンジャツタラ ノー。 ( A ソー。 ソー。 )  
 行っている 時分だつたら ねえ。 ( そう。 うん。 )

チー センセーガ ヒョー ジュンゴ ツカエ ヒョー ジュンゴ ツ  
 ち。 先生が 標準語(を) 使え、 標準語(を) 使

カエ ユーテ (笑) ( B ソー。 ソー。 ) ハンタイニ ヒカラレヨ  
 え(と) 言て、 ( ) ( そう。 そう。 ) 反対に 叱られていた

ツタンジャケン ノー。  
 のだから ねえ。

B アノー コトバツカイガ ワルカツタラ ソノ イカン ユーテ  
 あのう。 言葉遣いが 悪かたら、 その いけない(と) 言て、

カード ツクッテ ( A 笑 ) ヤリョー ッタロー。 (笑) デモ ソー。  
 カード(を) 作て、 やっていたら、 ( ) でも、 そう……。

二……。

A ニワカニャー ソーワ ナンジャ ワイノー。ドー シテモ……。  
俄には、 そうは、 何だ よね。 どう しても……。

B スグニャー ソンガイ ナラン ワイノー。トーブン。ヤッバリ  
すぐには、 そんなに ならぬ。 あねえ。 当分。 やっぱり

ソノー ウ ウチノ コドモラデモ ハヤー ワシノ ホーゲンオ  
そのう。 <sup>xxx</sup> うちの 子どもらでも、 もう 私の お言を

ダイブ ハヤー ノー。 ツカイオルシ (A ソノ……。) ウチノ  
だぶん、 もう ねえ。 使っているし、 (その……。) うちの

コドモラデモ ワシラガ ユーテ ハー イヨル。オマイラガー  
子どもらでも “ワシラ”が(と) 言って、 もう 言っている。 “オマイラ”が(と)

ユーテ。 (笑) (A 笑)  
言て。

A マー アノー ワシトカ オマエトカ ユー コトバワー コレワ  
まあ、 あの “ワシ”とか “オマエ”とか、 いう ことばは、 これは、

アノー モー イツツモ ツカウケン<sup>(8)</sup> ネー。 (B シー。 ソー  
あのう。 もう いつも 使うから ねえ。 (ん。 そう

ヨノー。) ハーケン マー オモイダス シヨネー。 (B ソー。 ソ  
よねえ。 だから まあ、 思い出さ のよね。 (そう。 そう。

ニ。) ソノー アー コレワ ワシー イタラ ジブンノ コツチ  
そのう。 ああ、 これは、 “ワシ”(と) 言ったら “自分”の ことだ

ヤ ナトカー (B シー。) ユー コトー ソノー ガ ワカルー。  
な、とか(と) ん。 いう こと、 そのう、 が 分る。

(B シー。) イツツモ ツカウカラ オヤガ イツツモ ツカウカ  
ん。 いつも 使うから、 親が いつも 使うから

ラ ワカル ワケ。 (B シー。) サイキンワ ハヤー オラウエージャ  
分る わけ、 (ん。) サイキンワ 最近は もう “オラウエー”だの



ノー オー ワーラジャダノー (笑) テユー ヨーナ コトバ ツコー  
ああ “ワーラ” だの (と) という ような ことば(を) 使ったら、

タラー ワ ウラガジャー ユー ヨーナ コトバ ツコータラ  
<sup>xxx</sup> “ウラ” がだ(と) いう ような ことば(を) 使ったら、

モー コヤ ゼンゼン ワカラン ワイノ。  
む これは 全然 分らない わねえ。

B ホー ヨ。 ナカナカ ノー、 ホーデ モ ソノー カンゼンニ ソノ。  
そう よ。 なかなか ねえ。 それでも、 そのう、 完全に そのう、

ー ヤッパリ ココラノ コトバガ モー ホーゲンガ ナ ナイ ナッ  
やっぱり ころの ことばが、 む 方言が 無くなってた”

テヤ ノー、 ヒョージュンゴニ ナッテ シモー タラ モー ケッ  
ねえ。 標準語に なって (まったら、 む 結局、

キョク ソノ フルサト ユー カンジガ セン ヨー ナル ワ  
その ふるさと(と) いう 感じが しない よう(に) なる わ

ノー。 タブ<sup>ン</sup>。  
ねえ。 多分。

A シー。 ソレワ ナイ ヨーン ナル ワネ。 ( B シー。 ) シー。 ソ  
ん。 それは、 ない ように なる わね。 ん。 ん。 それ

リャ モー ヤッ パリー ト コローニワ ソノ トコロノ ナンガ  
は。 む やっぱり 所には その 所の 何が

ナケ ナナ イカン ワネー。 ( B ソー。 ソー ヨ。 ) シー。 マタ  
無くては いけない わねえ。 ( そう。 そう よ。 ん。 また

アノー オー タビ<sup>ー</sup> イットルー ウー ココカラ マー タビ<sup>ー</sup>  
あのう。 おお。 旅に 行っている、 うう。 こ(木浦)から まあ 旅に

イッ トル シトガ ココ イオ ナツカシガ ッテ カエッ ッテ クル  
行っている 人が こ(を) <sup>xxx</sup> 懐しがつて 帰って くる(と)

ユーナー ヤッパー ソノ ホーゲンガ アルケニ (B ン ン.)  
いのは、 やっぱり その 方言が あるから (うん うん。)

ナツカシーンデ アッテ ナー。 (笑) (B ホ ヨ ノ.) ヘ ケン  
懐しいので あつて ねえ。 (そう よねえ。) だから

ジブ<sup>(9)</sup>ンラーモ アノー アスコノ ソコノ サキノ ヒロムサン  
自分らも、 あのう あそこの その 先の 弘さん。

シンタク ヒラケノ (9) ヒロムサンラガ トミエサンノ ネ サン  
新巻を 聞いた 弘さんから、 トミエさんの ねえさん

ヨノー。 (B ン ン ン.) アマガサキニ オルケント ネ。 (B  
よねえ。 (うん。 うんうん。) 尼崎に いるけれど ねえ。 (

ン ン.) ココエ モンテ <sup>(10)</sup> キタラ ネ。 (B ン.) モー ア  
うんうん。) ここ(木浦)へ 戻つて 来たら ねえ。 (うん。) もう、 あ

ツチャ アマガサキノ コトバー ゼツタイ ツカワン ワイ。 (   
ちら 尼崎の ことばは、 絶対 使わない よ。 (

B ン ン.) アノ ヒト ワー。 (B ン.) ホ ヤ ケン モー ア  
うん うん。) あの 人は、 (うん。) そうだから、 もう ああ、

ワシガ アッコ イテ アー ツヴェワ <sup>(11)</sup> ドー ヤラ ト コー  
私が あそ(へ) 行って、 ああ、 “ツヴェ”(お尻)は どう やらと、 こう

ユータ ヨノー。 (B ン.) ヘ デ ツヴェガ (B タバコ イッポン) ン (B スワ  
言ったよねえ。 (うん。) それで、“ツヴェ”が (煙草(支) 1本) うん (すわせて

シテ モラ オー.) ツヴェガ ユ エ タ ラ ー ホ シ タ ラ オー ナ  
もらおう。 “ツヴェ”が (支) 言ったら、 えしたら、 おお! 懐

ツカシーヤ ナイ カ。 ツヴェテ ユータ トコー ユーノヤ ネ  
しいは ない か。 “ツヴェ”と 言った、と こう 言うのだ ねえ。

ー。 (B ン ン.) ホ ヤ ケン モー ヤッ パ リ アノ ホ ー ゲ ン ガ  
(うん。 うん。) だから、 もう、 やっぱり あの 方言が、

ゼンゼン ナイ ヨン ナッテ シモータラ コリヤー モー ニ  
全然 ない ように なって しまったら、 これは、 もう 日

ホンノ クニ ドコ イッタテテ (笑) (Bソー ヨノー。)  
本の 国 どこ(へ) 行ったとて、 (そう よねえ。)

ツマランノ ジャ ナイ (Bソ) カトコー オモーガ ナー。 (Bソ)。  
つまらないのでは ない (うん) かと、 そう 思うが ねえ。 (うん。)

B バケン ワイラン ツレデモ モー ホデモ ヨソイ イットレン  
だから、 私らの 連れて、 もう、 それでも 他所へ 行っているのでは、

デモ タマニ モンテ キタラ ノー。 ヤッバリ ココノ コトバ  
たまたまに 戻って 来たら ねえ。 やっぱり この ことはで

デ シャ バル ワノー。  
しゃべる わねえ。

A ホデ トシ トッタ ニンゲンノ ホーガー アノー ヨケー ナ  
それで、 年(を) とった 人間の 方が、 あの 余計(に) 懐

ツカシガルンジャ ナイ ノカイ。 (Bソ)。(ソ)。(ヨ)。(ハケン  
しがるのでは、 ない のかい。 (そう。 そう よ。 ) だから、

イマノ ワカイ モンデモ オー ヒョージュンゴデー スーッ  
今の 若い 者でも、 おお、 標準語で ずうと、

ト コー ヤッテ キョールケンドガー (Bソ)。(ソ)。(ヨ)。(ハケン  
こう。 やって 来ているけれど、 (うん。 ) これが

マタ イッターノ トシガ キタラー (笑) (Bソ)。(ヨ)。(ハケン  
また、 一巻の 年(令)が 来たら、 (そう よ。 ) や

ッパー アノー ヒョージュンゴヨリカワ ホーゲンオ (Bソ)。(ソ)。(ヨ)。(ハケン  
ぱり あの、 標準語より は、 方言を (うん。 )

マゼテ ハナシ ショール。 コレガ ナツカシ ナルンジャ ナ  
混ぜて 話(を) している。 これが 懐(く) なるのでは ない

インカトー ( Bゾー ヨ。ゾー。 ) オモウン ( B ウチノー )  
のかと ( そう よ。 そう。 ) 思うの ( うちの、 )

ジャガ ノー。  
だがねえ。

B ウチノ ウエノー アノー ヒウラ<sup>(12)</sup>ノー アヤネサン ヨノー。ア<sup>xxx</sup>  
うちの 上の あの、 日浦の アヤネさん よねえ。

アノ ヒト マダ ハケン ソノー ヒルガ キタリ バンガ  
あの 人、 まだ、 だから そのう、 昼が 来たり、 晩が

キタリ ショー ッタラ ゴハン タベニ カエルガト<sup>(13)</sup> ママガ  
来たり していたら、 ご飯(と) 食べに 帰ると、 “ママが

デキタ ソテ イヨルガ ノー。 (笑) (A笑) オカヤ<sup>(14)</sup>……。  
デキタ ソ”と 言っているが ねえ。

A ホレカラ モー アノー シブンラ トコデモ モー ソノー ナ  
それから も、 あのう、 自分ら(の) 所でも、 も、 そのう、 何

ンジャー。 ママガ デキタ ユー ノヨ。 ( Bゾー。 ) (笑)  
だ。 “ママが デキタ”(と) 言う のよ。 ( うん。 )

B ヤッパリ ノー。 ハケン ソーユー コトバーガ ノー。 ヤッパリ  
やっぱり ねえ。 そうだから そういう ことばが ねえ。 やっぱり

ノコッテモ エー ヨーナ キガ スル ノー。  
残っても …… ような、 気が する ねえ。

A ホイ マー ノコルン ノコ<sup>xxxxx</sup> ノコラダッダラ ソノ マ ニホンジ  
それ、 まあ、 残るの 残らなかつたら、 そのう、 ね 日本中

ユー ドコ イタテテ ツイジャガ テヨーニ ( Bゾー。 ) ナッ  
どこ(へ) 行ってても 同じだが(と) 言うように ( そう。 ) なって

テ シマウ ンヨ。  
(ま) のよ。

B ウチラノ オトトラガ フー。 トーキョーエ アーニ シューシ<sup>ニ</sup>  
 私らの 弟が ねえ。 東京へ あのように、 就職  
 ヨウ シタ トキニ<sup>ハ</sup> モー ソレ ヤッパリ ソノー ホーゲン  
 いた 時に、 もう それ、 やっはり そのう、 方言が  
 ガ デルノーガ ハスカシカッタ イヨルケド ノー。 (A <笑>  
 出るのが 恥ずかかった(と) 言っているけれど、 ねえ。  
 ンー。) ホイデモ コノ グラー ソノー ワカイ モン イタラ  
 うん。 それでも、 この じろは、 そのう 若い 者(と) いったら、  
 ソノ ホーゲンオ サ<sup>xxx</sup> サホド クニ シテ ナカロー。 ドコ<sup>ニ</sup>  
 その 方言を、 さほど 若い して なかろう。 どこ(へ)  
 イッテモ。  
 行ってた。

A ンー。 ソリヤ (B ノー。) ソー ヨ。 マター アノ コノ グローノー ワカイ<sup>ニ</sup>  
 うん。 それは (ねえ。) そう じ。 また、 あの この じろの 若い  
 モンノ ホーガー アーイーニー マ テレビナンカ ミヨツテモ  
 者の 方が、 あのように まあ、 テレビなんか(を) 見ている、  
 ー オー ワリアイ タビエ (B ンー。) ソノ イナカエ イナ<sup>ニ</sup>  
 おお、 割念、 旅へ (うん。) その 田舎へ 田舎  
 カエー ヨー デテ イキョーライ ネー。 (B ソー ヨ。 ソー。) (B ソー ヨ。 ソー。)  
 へ(と) よく 出て 行っている ね。 (うん) じ。 じ。 じ。  
 ソヤケン ヤッパシー ソノー マチノ ナカヨリカワ アーユー  
 そうだから、 やっはり、 そのう、 町の 中より は、 ああいう  
 ウ ソノ イナカノ フンイキ フンイキ ユナー マー ホ  
<sup>xxx</sup> その 田舎の 雰囲気、 雰囲気(と) いうのは、 まあ 方  
 ーゲンガ" アルケニ フンイキガ (笑) デキルンヤロト オモウン  
 言が あるから、 雰囲気が (笑) できるのだらうと 思うのだが。

ジャガ。 ( Bソー。ソー。 ) ソイカ モー トクワイノ ヨーナー  
そ。 そ。 それが、 もう、 都合の ような

モノノ イーカタデ ヤリョー ッタラー アノ ケシキモー ヤ  
ものの 言い方で やっていたら、 あの 景色も 山

マモ カワモー ( Bシー。 ) ソノー ミリョクテ ユー モナー  
も 川も ( はん。 ) そのう、 魁かと いう ものは

ハンゲン スルンジャ ナイ カトコー ( Bソー。 ) オモウン  
半減 するのでは ない かと、 じ。 ( そ。 ) 思うのだが

ジャガ ノー。  
ねえ。

B マー ワシラガ ホヤケン モー ココエ キタ キタラ モー  
まあ、 私らが、 だから、 ねえ、 ここへ、 <sup>xxxxx</sup>来たら、 もう

ヒョージュンゴニ カワルケド ノー。 ( A吐息 ) ヤッパリ ソノ  
標準語に 変えければ、 ねえ、 ( ) やっぱり、 そのう、

タマニャー ヤッパー ホーゲン ツカイモテ シャベリオル  
たまには やっぱり 方言(を) 使いながら 話している

ホーガ ヤッパー キワ ララジャ ノー。 ( 笑 ) コトバ <sup>xxx</sup>エ  
方が、 やっぱり、 気は 楽だ、 ねえ、 ( ) ことば(を)

エラバイテモ エーケン。 ( 笑 ) ( A笑 )  
選ばなくても いいから、

A ホヤー アノー マー コ ジブンラー イジョーノ トシノ ヒ  
それは、 あらう まあ、 <sup>xxx</sup>自分ら 以上の 年の 人

トガ キトッテモー ノーキョートカ ヤラバトカ ユービンキョ  
が 来ている、 農協とか、 役場とか、 郵便局とか(と)

クトカー ユー トコイ イッタク バヤイニワ ソノ ヒトラン  
いう 所へ 行った 場合には、 その 人らの

コトバガ ヤッパ一 ヒュージュンゴニ カワル モン 一。 (   
 ことばが、 やっぱり 標準語に 変る ちの ねえ。 )

B ソー ヨノー。 ) ( 笑 ) ( B フ……。 ) ヘケー ソ ソコノー   
 そう よねえ。 ) ( 笑 ) ( あ……。 ) だから、 xxx その

ソノ フンイキニ ヨッテ ( 笑 ) ヒョージュンゴン ナッテ シ   
 その 雰囲気(14)に よて、 ( 笑 ) 標準語に: なて し

マウ。デ ハナス ヨーニ一 モー シゼンニ ソー ナル。 ( B   
 う。 それ、 話す ように、 ちが 自然に ちが なる。 )

ソー ヨノー。 ) マター アノー ジブン トコノ ヨナー ヒ   
 そう よねえ。 ) また、 あのう 自分(の) 所の ような、 人

トガ ハタケトカー ヤマトカ ヨーナ トコニ ノラシゴトニ   
 が 畑とか 山とか(の) ような 所に、 野良仕事に

イットル バヤニワー コレワ マタ ムカシノ ヒョージュン   
 行っている 場合(は)、 これは また、 昔の 標準語が

ゴガ デテ クルン ヤ ヨーニ ナルンジャ ナイ カトコー   
 ちが 来る xxx xxx ように なるのでは ない か、こ、う (17)

オモウンジャガ ナー。

思いのだが ねえ。

B ソノー ホーゲンデモ エ ヤッパリ イロイロト ソノ イミガ   
 ちが、 方言でも、 xxx やっぱり いろいろと その 意味が

アルケンド マー キノーモ ソノ ワイ ワイノ オトートノ   
 あるけれど、 まあ 昨日も その、 xxxxx 私の 弟が、

ガ チョード ヨ ヨメ モラウンデ ハナショツタンジャガ ノ   
 ちがと、 xxx 嬢(ち) ちらうので、 話していたのだが ねえ。

一。 シンルイノ モント。 オマイ ホテ ケージ マタ タヤ マ   
 親類の 者と。 おまえ、 それで 慧二、 また、 "タヤ" また

ガ ダヤクセーガ ナ オツテ ナイ ノテ。ワ シマ ホン ダー  
 “ダヤ”癖か 直って いない ねえと。 私は、 本当に、 “ダヤ”  
ヤクセー ユーノ ガ チョットトー ハ ヤー ワカラン カッテ ノー。  
 癖(と) いうのが、 ちょっと、 もう 合らなくて ねえ。

(A オー。 <笑> )  
おお。

A アー ホ カー。 (笑) ンー アレオ キノ モ カ アノ カン サ  
 ああ、 そり が。 ( ) くん、 あれを 昨日も、 あのう、 監査で

デ ノー。 (B ンー。 ) ソノ ヤリ ョー ンノ ニー (B ンー。 )  
 ねえ。 ( ) くん。 そのう、 やっているのに、 ( ) くん。

アノ ケン イン シテ クレ トー (B ンー。 ) ユー トッ タ ヨ  
 あのう 検印 して くれと、 ( ) くん。 言っていた よ

ネー。 (B ンー。 ) ツキ スキ ノオ ネー。 (B ンー。 ) シシ ョ チョー  
 ねえ。 ( ) くん。 片々のを ねえ。 ( ) くん。 支所長さん、

サン ケン イン セー ト。 (B ンー。 ) ホヤ ケン ソノ ユー タ  
 検印 ( ) くん。 だから、 そのう、 言った

トキ ニワ アノ カン リシ ョ ク カイ デ キメ テ ユー タ トキ  
 時には、 あのう、 管理職会で 決めて、 言った 時には、

ニワ イッ カ ゲツ ニ カ ゲツ ワ シト ル ン ヨ ネー。  
 1ヶ月 2ヶ月は、 している のよね。

B アー。 ハンオ オス ヤツ ジャ ロ。 (A ンー。 ) アー。  
 ああ。 判を 押す やったろう。 ( ) くん。 ああ。

A ホイ テ ソイ カラ サキ ガー シテ ナイ ン ヨ ネー (B  
 そして それから、 先が して ない のよね (

ンー。 ) ホンデ シテ ナイ ト ユー ノ ガ ヤッ パー アノ ン  
 くん。 ( ) それで、 して ないと、 いうのが、 やっぱり、 あのう、 その



ノ ダヤクセ ヨネー。 ( B ン。 ) シゼーンニ ソー ナルンジ  
"ダヤ"癖 よねえ。 ( ん。 ) 自然に そう なるのであろうと

ヤ ロート オモウ ンヨネー。 ( B オウ ン。 )  
思う のよねえ。 ( ん。 )

B ヤッ アレ ダヤクセ ユーノワー アノ ウシヤ ウマ ウマ  
やあ。 あれ。 "ダヤ"癖(ヒ) 言うのは、 あのう 牛や 馬、 馬で  
ジャ ナイ。 ウシヤ ブタ カヨツタ トキノ アノ ダヤ ノ  
は ない。 牛や 豚(ヒ) 飼っていた 時の、 あの 納屋の  
アノ クサ ノ コト カノ ノ。  
あの 草の こと かねえ。

A ン。 ソノ ウシヤ ナンカ ダト ネ。 ( B ン。 ) アノ マ  
ん。 そのう、 牛なんかだと、 ねえ。 ( ん。 ) あのう、 まあ、

ー ダヤ アノ ウシ ノ イレル トコ ダヤ ダヤ イオ ッ  
納屋、 あのう、 牛を 入れる 所を "ダヤ"、 "ダヤ"(ヒ) 言って

タ ヨネ。 ムカシ ワ。 ( B ン。 ン。 ン。 ) ココ ラン ヒト ワ  
いた よねえ。 昔は、 ( ん。 ん。 ん。 ) こちらの 人は

ネ。 ( B ン。 ン。 ) ホイ タ モン ジャ ケン ソノ ソラ  
ねえ。 ( ん。 ん。 ) そうしたのだから、 そのう、 それに

モー ツナ サエ ハナ シ タ ラ ネ。 ( B ン。 ) サツ サ ト モ  
む、 綱をえ 放したら ねえ。 ( ん。 ) ままと ちう、

ヨソ イ ッ サイ イ カン ノ ヨネ。 ( B ア。 ) ホ カン ト  
他所へ いっさい 行かない のよねえ。 ( あ。 ) 他の 所へ

コ イ イ カ ズ ニ ソノ ジ ブ ン ノ ヘ ヤ エ モ ー ス ー ス ト  
行かずに、 その 自今の 部屋へ ちう ちうちうと、

イン チ シ マ ウ ン ヨネ。 シ ゴ ト ガ ス ン ダ ラ ネ。 ( B ン。 )  
帰って しょう のよねえ。 仕事か 済んだら ねえ。 ( ん。 )

ヘカラ モー シチ ソノー マー キツイ シゴト ウシニ  
それだから、 ちい ちい、 ちい、 仕事を 午に、

キツイ シゴト サシタ バアイ ヨネー。(Bシー。) サシ  
ちい 仕事を させた 場合 よねえ。(うん。) させた

タラ モー ジブン クラブレットルケン ネー。(Bシー。) ホヤケン モー  
ちい 自分(が) 草臥れているから ねえ。(うん。) だから もう

ヨソミ セン ノヨネー。(Bシー。) モー ジブンノ トコロ  
よ見(を) しない のよねえ。(うん。) ちい、 自分の 所も、

モ ホジャケン アノー ナンデー カドデー コー クラー ノ  
だから ああ、 何で 門で、 こい 鞆を 除

ケテ ヤッタラ ノー。(Bシー。) ソラーテ イタラ モー ソ  
い、 ちい、 ねえ。(うん。) それ、って 言ったら、 ちい それに

コニ アノー クサナンカ アッテモ、 ネ。(Bシー。) クワズニ  
ああ、 草なんか あっても ね。(うん。) 食べずに

モー イッタソワ モー サッサト ハイッテ イク ンヨネ。  
ちい、 いったんは ちい、 ささと 入って 行く のよね。

(Bシー。 シ。ソーナカッタ ノー。) シー。(Bシー。アー。ソレデ  
うん。 ちい。 そんなだった ねえ。(うん。 ああ。 それで

カー。) (笑) ホヤケン ジブンガー モー ムカシナリノー オ  
か。 ) (笑) だから、 自分(が) ちい 昔なりの、 おお、

ー ソノー ナニオ モー ヒトツツモ カイリョー セン ワケ  
ちい、 何を ちい、 かも 改良 しない わけ

ヨネー。(Bアーアーアー) ワルー ユーダラ ネー。(笑) (B  
よねえ。(ああ ああ ああ。) 思く 言ったら ねえ。(笑) (B

シーシーシー。ホー ヨノー。) (笑)  
うん。 うん。 うん。 ちい、 よねえ。

B ハーハーハー。ホー ヨノー。マー グイタイ コーナ (笑)  
はあ はあ はあ。 そう よねえ。 まあ、 大体、 そんな

ホーゲンジャ ノ ユータラ モー フツー ヤッパー ソノー  
方言だの(と) 言ったら、 もう 普通、 やっほり そのう

ヒャクショーノ ホーガ ヨー ツカウ ノー。マダ。  
百姓の 方が よく 使う ねえ。 まだ。

A ソラ モー ヒャクショーノ ホーガ (B ソー。) ショーバイニ  
それは ね、 百姓の 方が、 (うん。) 商人は

ソワー ツカワン ワイ。モハヤ モー ホトンドー ドコ イッ  
使わない よ。 もはや ね、 強ど どこ(へ) 行っ

テ。モー ヒョージュンゴノ ヨーナ ハナシカタジャ ワイ。  
でも、 標準語の ような 話し方だ よ。

(B ソー ヨノー。) ソー。  
そう よねえ。 うん。

B アケン コナイダモ ハケン アジャ ナバ トリニ イキョータ  
だから、 この間も、 だから 私は、 背(色) 探りに 行っていて

ノー。ホテー ワシノ <sup>(18)</sup>スエ イツタラ ノー。ヒトリ オバサ  
ねえ。 それ 私の 奥へ 行ったら ねえ。 1人の おばさん

ンガ キテ ハイ ト トリョーッタ ンヨ。(A 笑)ホテー ソ  
が、 来て、 もう <sup>xxx</sup>探っていた のよ。(A 笑) それ、 その

ノ オバサント ハナショツタンジャガ ノー。ハケン ヤッパリ  
おばさんと、 話していたのだが ねえ。 だから、 やっほり

ノー。トシトツタホド ノー。ヤッパリ ソノー イマ イツタ  
ねえ。 年とった(ほど) ねえ。 やっほり そのう、 今 言った

ホーゲンガ オイー ワイノー。ハケン ソガー ヒトト ノー。  
方言が 多い よねえ。 だから、 そんな 人と ねえ。

ハヤ <sup>xxx</sup> ハ ハチジューモ チカイ ヨーナ オバーサント ハナシ  
 もう 80も 近い ような おばあさんと、 話して  
 ヨーッ タラ ノー。ワイラーニャ ワカラン コトガ アル ワノ  
 いたら ねえ。 私らには、 合らない ことが、 ある わねえ。  
 一。 (A ソー。 ) トキドキ。  
 そり。 時々。

A モー ハヤー ジブンラデ ソノ ホーゲン ワスレトル ンヨノ。  
 ち。 もう 自分らで、 その 方言(を) 忘れてる のよね。

(B ソー。 ソー。 ) ソー。(B ハケン---) ナニ ユウンジャ ロー  
 そり。 そり。 うん。(だから---) 何(を) 言うのだろう

カトオモ (B ソー。 ソー。 ) コトモ アライ ヤー。(笑)  
 かと思う (そり。 そり。 ) ことも、 ある なあ。

B ハケン ノー。ヤッパリ コーユー モンガ ナイ ナッタラ ノ  
 だから ねえ。 やっぱり こういう ちが、 なく ならたら ねえ。

一。 モー……。  
 ちう……。

A ソヤケンドガ ナン ヨナー。アノー コーユー ヤクオ ショー  
 だけれど、 何 よね。 あのう。 こういう 役を して、

ッテ <sup>xxx</sup> シ ショーッ タラ モー ソノー ホーゲンオー ナルベ  
 してたら、 ちう そり、 方言を なるべく

ク ジブンデモ ツカワン ヨナー ココロガケ スルケンネー。  
 自分でも、 使わない ような 心掛け(を) ずから ねえ。

(B ソー。 ) ハケン ドー シテモ オー ジブンラーノ ヨーナ  
 うん。 ) だから、 どう しても、 おお、 自分らの ような

アー モンニ ドージャ コージャ アー スルヨリカワ (笑) (B ソー。 )  
 ああ 者に、 どうだ、 こうだ(と、 ああ するよりかは、 ) (うん。 )

モットー オーソノー チャクショーナラ チャクショー イッ  
もと おお、 そのう、 百姓なら 百姓(を) 1本で

ボンデ ヤリオルトカー (B ンー.) エー トコロデー ヤッ  
や.ているとか(と) うん. いう 所で: やった

タ ホーガ エーンジャ ナイ カトコー オモー ヨーナ キガ  
ほうが、 いいのでは ない かと、こう 思っ ような 気が

スレンジャガ ノー. (B ホー ヨノー.) アー.  
するのた"か" ねえ. そう よねえ. ああ.

B イヤー. ソノー ソノ ヒトガ イオツタガ ノー. マー ナバ  
いやあ. そのう、 その 人が 言っていたが" ねえ. まあ. 尊(と)

トリニットッテ ノー. アンタノ ホテー ソノー マー マ ワ  
探りに行って、 ねえ. あなたの そして、 そのう まあ. ま 私

シガ シンドイ シンドイ イタ ンヨ. ヤマイ (A 笑) テッベ  
か 疲れた 疲れた(と)、 言った のよ. 山へ、 頂上

ンマデ ノボッテ ノー. デ アンタラー コレグライガ シンドイ  
お 登って ねえ. で、 あなたらは、 どれくらいが 疲れた(と)

エテ アンターノ トシ ナンボ ゾノヨッター. アジャー オ  
言って、 あなたの 年(は)、 いくつ かね(と)言っていた. 私は お

バサン サンジューゴン ナツタ ンヨイテ ヤツタラ ノー. ア  
ばさん、 じ(オ)に なった. のよ(と)言っ やたら ねえ. あ

ンタ ナニ イオン デー. ワシャ <sup>xx</sup> アノ <sup>xx</sup> ワカイ ジブンニヤ  
なた. 何(を) 言っている のか. 私は あのう、 若い 時分(には)、

ー オナゴデモ ノー. (A 笑) ソノー サスデ アー ソレコソー  
女でも ねえ. ( ) そのう、 はんぶん構で、まあ それこそ

ノー. ソノー ニジツ カングライノ モナー ニ <sup>xxx</sup> ニノーテ イキョ  
ねえ. そのう、 20貫 ぐらいの ものは、 荷なって 行っていた

ツタ デーイテ ノー。  
よ(と)言って ねえ。

A ホー ヨ。 モー ウチラン オフクロラガ アー イッサイ アノ ヒャ  
そう よ。 もう、 うちの 母たちが ああ いっせい あの 百

クショー シタ コター ワカイ ジブンニャー ナカッタケド  
姓(を) (た) ことは、 若い 時分には、 なかったけれど

ノー。( B シー。 ) ソイデモ オヤジガ ナニ ンー ヨソエ デ  
ねえ。( うん。 ) それでも、 父が 何、 うん、 他所へ 出

ダシテ ノー。( B シー。 ) ワー モー ジブンラガー モー ハ  
はじめで ねえ。( うん。 ) 叔父、 もう、 自分か、 もう、

ー コドモ アイテニ シター ヒャクショー ショー ッタンジャ  
子ども(を) 相手に して、 有姓(を) していたのが

ガノー。( B シー。 シー。 ) ソレデー エー ヤッパシー アノー ジ  
ねえ。( うん。 うん。 ) それで、 ねえ、 やはり、 あのう 14.5

エー シゴカンノ モノワ モテ アルキョッタケン ノー。( B ホー  
貫の 物は、 持って 歩いていたから ねえ。( はう、

ホー。 ) アー。 オフクロラガー。  
ほう、 ああ、 母たちが。

B ヤッパシ サステ ニナイヨッタノー。( A アー。 ) フーン。  
やはり、 てんびん棒で 荷なっていたねえ。( ああ。 ) ふうん。

A ソラー イモナンカデモ モー アノー ハタケン ナカン アル  
それは、 草などでも、 もう あのう 畑の 中に ある

ヤッー ソノ ヘリマデ ダシテ クリョッタガ ノー。( B ア  
やっを、 その 縁まで 出して 来ていたが ねえ。( ああ。

ー。 ハハハ。 ) ンー。  
ははあ。 ) うん。

B

ムカシ ホイテ ヨー ソガンニ ニヨーテ イキョール トキ  
 昔、 そうして、 よく そのように 荷なって 行っている 時、  
 (20)

ハイ カタイツ ポーノ イグリエ ハケン ソコノ ドーグ イ  
 片一方の かごへ、 たから、 その 道具(を) 入

レテ カタイツ ポーノ イグリー コドモヤナンカ イレテ ノ、  
 れて、 片一方の かごへ、 子どもなど(を) 入れて ねえ。

イキョー タンジャ ロー、  
 行っていたのだらう。

A

ソー ヨ、 コドモ イレテ、 ア、 ソノ アノ マ アノ ワカオ  
 そう よ、 子ども(を) 入れて、 ああ、 そのう、 あのう、 まあ あのう 若奥さん

フサンデ アツ トラ ネ、 ( B シー、 ) ワカイ ヨメ サンデ ア  
 で あつたら ねえ、 ( ぶん。 ) 若い 嫁さんで あ

ツ トラ モ ミナ ナン ヨ、 ハタケ イク トキ ナー  
 たら、 もう 皆、 何 よ、 畑へ 行く 時 (には、

ベント オ カタイツ ポーエ スケテ ネ、 ( B シー、 ) テ カ  
 弁当(を) 片方へ 置いて ねえ、 ( ぶん。 ) で、 片

タイツ ポー コドモ イレテ ソノ テー シュガ サキ ノ ( B )  
 一方(に) 子ども(を) 入れて、 そのう 亭主が 先に、

笑) オヤイ サン サキ イットル ケン ネ、 ( B シー、 ) ホ  
 おやじさん(は)、 先に 行っているから ねえ、 ( ぶん。 ) そ

イ トラ ソノ ヒル ノ シタ ク チョット オクレ テ ア  
 したら、 そのう、 昼の 仕度(を) ちよっと 遅れて 朝

サメ ジ シ カタズ ケテ テ ソイ カラ アノ オ ベント ノ  
 (21)  
 飯(を) かつげてあいて、 それから あのう、 おお、 弁当(を)

モツ テ イ カナ イ カン ケン ネ、 ( B シー、 ) ホ イ タ ノ ソ  
 持って 行かなければ いけないから ねえ、 ( ぶん。 ) そしたら、 その

シ トキニワ ソノ一 コドモ オイトク ワケニヤ イカンケン  
時には、 その、 子ども(を) 置いておく わけには、 いかぬから、

( B ン一 . ) アブナイケニ ( B ン一 . ) ホヤカラ モ一 ソノ一  
ん、 危いから、 ん、 たから、 もう、 その、

カタイツ ポ一ワ一 ベント一 コ一 オヒツテ一 ( B ン一 . ) モツテ イ  
た一方は、 弁当(を) じ、 お櫃で ( ン一 . ) 持って 行て、

テ一 ホイデ カタイツ ポ一 コドモ イレテ コ一 ( 笑 ) ネヨ  
それ、 た一方(に) 子ども(を) 入れて、 じ、 荷なて、

一テカラ <sup>(22)</sup>ホチボチ コシヨツタ ワイ。  
ぼうぼう 越していた よ。

B ムカシト ハケン タ <sup>xxx</sup>ダイブ チガウ ヨノ一、 ワレモ ヨワ  
昔と、 たから 大分 違う よね、 私も 弱くなった、

ナツタ。 ワレモ <sup>(23)</sup>シオナカセ一 イキオツタケド ノ一。 ナンボニ  
私も、 塩人夫に 行っていたけれど、 ねえ、 いかにしても

モ ハケン サスワ ヨ一 カタニ ノセンカッタ カツタ ノ一。  
たから、 てんびん桶は、 肩に 乗せられなかった、 なかった ねえ。

( A 笑 ) モ一 セ一ゼ一 ハケン テカギデ ヒッカケル カ モ一 ウ  
もう、 せいせい、 たから 手鉤で ひっかける か、 もう 抱き

ズムダライジャ ノ一。  
かかえるぐらいた、 ねえ。

A マ一 ジブンラーノ トキニヤ一 モ一 アノ一 サスガ モ一  
まあ、 自分らの 時には、 もう あのう、 てんびん桶が、 もう

イチバンノ オ一 ソノ一 ノ一キグノ タイショ一 ヨネ一。 ( )  
一番の おお、 そのう、 農器具の 大将 よねえ、

B ソ一ヤ ノ一 . ) イマデ ュ一 ( 笑 ) ノ一キグノ ネ一。 ( B ツ  
そうだ、 ねえ、 今で 言う ( 笑 ) 農器具の ねえ、 ( 使



カイ ミチガ オイー ワイ。) アー。(笑) ナニ ヤルンデモ  
い 道が 多い よ。 ああ。 (何(を) やるのでも

アレガ ナカッタラ テキタッタケン ネー。(B ンー。ホー ヨ  
あれが 無かったら できなかったから ねえ。( うん。 そう よ  
ノー。 )  
ねえ。

B イマジッタラ モー サステ ソ ソガイニ ニナウ ユー コター  
今だったら、 お てんびん構て そんなに 荷なう(と) いう ことは  
エット ナカロー。 モー ミカン ツンデ<sup>補(2)</sup> キャリデ<sub>xx</sub> デ<sub>xx</sub> チート  
たくさん ないだろう。 もう ミカン(を) 積んで キャリ(カンを入れる容器)が 少  
ニナウグライノ モンジャ ロー。  
荷なうぐらいの 物だろう。

A イヤ、ニナヤ センノヨネー。(B オー。) モー ハタケノ ホ  
いや。 荷ないは しない のよねえ。( おお。 ち。 畑の ほ

トリマデ ミナ モアレールジャ ロー。(B ンー。) タイガイノ  
とりまで、 女な モノルールだろう。( うん。 ) たいていの

トコガー。(B ンー。ホー ヨノー。) ハケン ソヨン シテ タ  
所が。( うん。 そう よねえ。 ) た"から、 そのように して たい

イター ウチラノ ヨナー アノー ツマラン モンデモー ワ  
で 私らの ような、 あのう、 つまらない 者でも、 わ

ズカナ モンデモー ヤッパ<sup>ハ</sup> ハヤ シトガ ツケトキャー(笑  
ずかな 者でも やっぱり、 もう 人が つけておけば、

) ドー シテモ ツケト ナッテ (B ホー ヨノー。) ツケ  
ど (しても つけたく なくて、 ( そう よねえ。 ) つける

ルケン ネー。(B ンー。) ンジャケン モー (B タテヤ<sup>(24)</sup> アレ  
から ねえ。( うん。 ) た"から、 ち ( 立てれば、 あれ

ノ一。) モッコ一 モツダキ ヨ一。(Bソ一。) モ一 サ カタイ モノ一  
ねえ。) 巻を 持っだけ よ。(うん。) もう、 肩へ 物を

スケル ユ一 コター イマー アノ一 モンジャツタラー ムカ  
置く(と) いう ことは、 今(の)、 あのう、 着たら、 昔の

シノ ニンゲント クラベタラ モ一 ジューブノ イッチャ  
人間と 比べたら、 ちう 10分の 1だ

ワイ。 チカラワ。 タイガイ。  
よ。 カは。 たいてい。

B ホ一 ヨノ一。(Aソ一。) ワイラーガ モ一 イカン ノ一。 ウ  
そう よねえ。(うん。 私らが ちう いけない ねえ。 私

チラモ ホヤケン オヤジラト クラベタラ ノ一。 センゼン イ  
ら、 だから おやじらと 比べたら ねえ。 全然 いけ

カン ワ。 ホンマワ。  
ない よ。(ほんとう)

A ソ一。 ソヤ マター マ一 アンタン トコノ オヤジサンワー  
ん。 それは また、 まあ あなたの 所家の おやしんは、

チカラモチデー トオットツタケン。  
カ持ちで 通っていたから。

B イ一ヤ。 ソ一デモ ナインジャ ローケド ノ一。  
いや。 そうでも ないのだらうけれど ねえ。

A イ一ヤー。 ソラー マ一 ノ一。 ナカセ一 イキョ一 ッテモ ス一  
いや。 それは、 まあ ねえ。 塩人夫に 行っている、 長く

ト イター ゲンキナ ホ一ジャツタケン ノ一。(Bソ一 ヨノ一  
行っていて、 元気な おたらだから ねえ。(そう よねえ。

一。) ウチラン オトートラガ イッショニー イ一 ソノ一 イキョ一  
私たちの 弟らが、 いったい、 いい そのう 行っていた

ツタンジャケンドカ ナーシボニモ ソノー シタノー アノ ヨ  
のたけれど、 いかにしても そのう、 下の、 あのう、 善

シアツカタエ ノー、 (Bシー、 シー。) イツター ヨシフミラト  
先の方(家)へ ねえ。 (ん、 ん、) 行って、 善文らと

ハナシ スンノニ イー ナンジャ。 オトトガ ハナスノニ ナーシボ  
話(を) するの、 いい 何だ。 善が 話すの、 いかにしても、

モ カナワンノジャ ユーテ (Bシー、) イオツタケン ノー。  
叶わないのだ(と) 言て、 (ん、) 言っていたから ねえ。

(笑) ウン。  
うん。

B イヤー。 ハーケン ノー。 ナカセー イキョッタ コラー ワシモ  
いやあ。 だから ねえ。 塩人夫に 行っていた には、 私も

アルバイト イキョール コラー ヒニー ソノー シヘン ノ  
アルバイト(で) 行っている ころは、 日に そのう 4回 飯

シ ヲヨツタガ ノー。 ウチノ オヤジラモ ヤッパ ソカン シ  
(を) 食べていたか ねえ。 私の おせじらも、 やはり そんなに して

オツタ ノー。 (Aシー、 (笑)ソリャー ソー ヨ。) シー。 ハーケン  
いた ねえ。 (ん、 それは、 そう よ。 うん、 だから

マ-----

まあ

A ンー ムカシノー アノ アー ニンゲンワ アノー メシワー シゴトガ ク  
ん。 善の あの ああ 人間は あのう 飯は 仕事か 食

ワスンジャ ユーテ (Bソー ヨ、 ソー。) イヨツタロー。 (B  
おすのだ(と) 言て、 (そう よ、 そう、) 言ていたろう。 (B

ソー ヨ。) (af) ハヤケン メシー エー クワン ヨーナ モノワー  
そう よ、) だから 飯(を) よく 食べられない ような 善は、

シゴトガ マルインジャ トー ( Bソー ヨ。ソー ヨ。 ) ユー  
仕事か とろいのた と そう ふ、 そう よ、 いう

ヨーナ コトー イオウタ ヨノー。 ( Bソー。ソー ヨ。 ) マー  
よくな ことを 言っていた よねえ。 うん。 そう よ、 まあ、

チカラシゴトギリジャウタケン ノー。 ( Bホー ヨ。ホー ヨ。 )  
力仕事だけだったから ねえ。 ( そう よ、 そう ね。

B マタ ハラモ ヘリョウタ ヨ。ノー。 ( A笑 ) イヤ。ホシマ  
また、 腹も 減っていた、 よ、 ねえ。 ( いや、 ほんとう

A イヤー。アレグケニ イゴイタラー ハラワ ヘル ワイ。  
「やあ、 あれほどに 動いたら 腹は 減る よ。

B ヘリョウタノー。 ( Aシー。 ) マー アレデモ タシカニ オレモ  
減っていたねえ。 ( うん。 ) まあ、 あれでも、 確かに おれも

アレグライノ コト ショーラニャー ジョーブン ナラン ノ。  
あれぐらいの こと(を) (ていなければ、 丈夫に ならな... ね。

A シー。 ( Bシー。 )  $\frac{1}{xxx}$  イマノ ヨーナ アノー ホヤケン ミチ  
ん。 ( ん。 ) 今の ような あの、 だから 道

オ アルイテモ ノー。 ( Bシー。 ) ソノー ワリアイニ ヒトガ  
を 歩いても ねえ。 ( ん。 ) そのう 割合に、 人が

ツイテ コン ノヨネー。  
ついて 来ない のよねえ。

B シー。 クミアイチョーワ トークニ アシガ ジョーブナ ワイ。  
ん。 組合長は、 特に 足が 丈夫だ よ。

A イヤ。(笑) ソノ アノー ア コナイダドモノ オー ソノー マー カンリ  
いや、 その あのう この間でもね ああ そのう まあ 管理部

グチョートカ ね。( Bシー。 ) ハカラ アノー マー トンガイ  
長とか ね。 ( ん。 ) それから あのう、 まあ、 殿ヶ節の

(26)

チノ アニキワ アレー シンケーツデー アシガ ワルイケン<sup>ト</sup>  
兄貴は、 あれ(は)、 神経痛で、 足が、 悪いけれど、

が (B ン一。) マイニチ アノ一 ホイカラ一 カチョーサンジ  
うん、 毎日、 あのう、 それから、 課長さんだの、

ヤノ ジュンケンジャノ (笑) (B ン一。) ツトムラー オッラ  
社長だの、 (うん、) から(が) いたけれ

ケンド、 ネ。 (B ア一。) シンバトカラ アルキョッテモ ネ。 ( ね。 )  
ど、 ね、 ああ、 新波止から 歩いていても ね、

(B ン一。) ドー シテモ オフレル ンヨノ一。 (B ン一。) ホイ  
うん、) どう しても、 遅れる のよね、 (うん、) それでは、

ジャー モー コッチガ モー アシ ユルメニヤ一 シヨ一ガ  
う、 こちらが、 う、 足(を) ゆるめ 仕様が

ナイ、 (B ホ一ヨ。 ホ一ヨ。) オテラマデ イクノニ ナンボ ワシャ一  
ない、 (そうよ、 そうよ、) お寺まで 行くのに、 いくら、 私は、

モー ソノ一 アシ アワスノニ コッチガ ホネ オレレン  
う、 その 足(を) 合木村に、 こちら 骨(を) 折れる

ヨネ一、 (B マー アイラデモ一 マタ シ……。) ホイテ アノ  
のよねえ、 (まあ、 あれらでも まだ、 し……。) それ、 あのう、

ワカイ モンガ アノ一 クルマイ ノロー一。 (B ン一。) ホ  
若い 者が、 あのう 車に 乗ろう、 (うん、) た

ジャカラ ヨケー アシガ……。  
から、 おけい、 足の……。

B タシカニ ノ一。 ホデモ アシモ ノ一。 ヨワ ナツタテド ノ一。  
確かに、 ねえ、 それでも 足も ねえ、 弱(く) なた(けれ)ど、 ねえ。

マー ショーブンモ アライ ノ一。 (A 笑) イヤ一 ホンマ。 マ  
まあ、 残念も ある、 ねえ、 (いや、 (ほんとう、) まあ、

一 チカゴロノ ワカイ モンワ アルカンケン ソラー アシモ  
 虫頃の 若い 者は、 歩かないから、 それは 足も  
 ソラ ヨワイケド ノー。  
 それは 弱いけれど、 ねえ。

A イヤ アノー トノガイチノ ウー ソノー オイサンガ ノー。 (B  
 いや、 あのう、 殿様の そのう、 おじさんが ねえ。 (

オン。) アガニー アルイテ ネー。(Bフフン) マツリニ コー ゴヘー  
 ん。) あんなに 歩いて ねえ。(ふふん) 祭りに、 こう、 御幣(を)

モツテ アルクンジャー。 (Bンー。) アルイテ エー ソノー  
 搦て 歩くのよ。 うん。 歩いて ねえ、 そのう、

オトドシーマデワ ネ。 (Bンー。) アノ ヒト イチバン ハヤ  
 一昨年までは ね。 うん。 あの 人(が) 一番 早い

カッタンジャー。(Bホー。フン。) ンー。 ワイラデモ アノ トーノモ  
 たのだ。 (そのう。 ふうん。 うん。 私らでも、 あの 峠のもと

(30) ト コスノン ネ。 (Bンー。) アスコマデ モンテ キタラ モ  
 越すのに、 ね。 (うん。) あそこまで 戻って 来たから、 ちう

一 アセ カキョン ニャー。(Bハー。ハー。) ホーヤケン モ  
 汗(を) かいている のよ。(はあ。 はあ。) そうだ"から ちう、

一 タクミサンヤ サダハツツァンワ モー ゼンゼン イカンノ  
 匠さんや 定八様は、 もう 全然 だめなん

ヤ ネ。(Bンー。ンー。) ソンデ マエノ チョーチョーオ ヨネー。  
 だ、 ね。(うん。うん。) それで 前の 町長(を) よねえ。

(Bンー。ンー。) ヤッパ モー アノ トシヨリニ オイツケンガ ノーテテ  
 (うん。うん。) やはり もう あの 年寄りの 追いつけないか、 ねえって、

(B笑) イオツタンジャガ (Bハー。) キミヨッサンラテモー  
 言っていたのだから、 (はあ) 喜三義さんらでも、

エー オイツカダツタ ノー。( B ンー。 )  
追いつくことができなかった ねえ。( うん。 )

B マー ワシラガー マー アシガ ( A マー ジャケン モー ) ダイブン  
まあ 私らが、 まあ、 足か ( まあ だから もう ) 大合

ヨワ ナッタ。( A アルイタ ホーガー ツヨー ナルンジャロー  
弱く) なった。( 歩いた 方が、 強く なるのだらう

カトコー (笑) ----- ) ンー。 アルカニャー ( A ホヤケン )  
かた、 こゝ ----- ) うん。 歩かねば ( だから

イカン ノー。

いけない ねえ。

A ホイカラ ワシラモ エーズート アルキョールンジャケン コノ  
それから、 私らも ねえ ずっと 歩いているのだから。 ン

ゴロワー コドモラガ マー アスコノ ハンバイノ オナゴノ  
ごろは、 子どもか、 まあ、 あそこ 販売の せう

コデモ ね。( B ンー。 ) ナンダ? ミアイチョーサン ジテンジャン  
子でも ね。( うん。 ) 何だ 組合長さん、 自動車に

ノツタ コトガ アル ンカユーテ キランジャー。( B ンー。 )  
乗った ことが ある のか(と)言って、 聞くのだ。( うん。 )

ホヤケン モー ノリモンワ イッサイ ワシャー エー ノラン  
そうだから もう 乗りものは いっさい、 私は 乗ることができない

ヨーニ オモートルラシーンジャー。

ように、 思っているらしいのだ。

B ソー イヤー マ ノツタン ミタ コト ナイ ノー。

そう 言えは、 まあ 乗ったの(を)見た こと(が)無い ねえ。

A (笑) ンー、 ナイケニ ( B ンー。 ) (笑) マー キョウリョク  
うん。 無いから、 ( うん。 ) (笑) まあ、 極力、

アルク コトニ キメトルンジャケンドガ。

歩く ことい 決めているのだけれど。

B シー。マー アルクノガ エー。アルカナ ウチラン マー キン  
ん。 まあ、 歩くのが よい。 歩かねば、 私方の、 まあ、 金融

ユーブチョー ラデモ ノー。 モー コナイダモ ソノ ヨンカイエ  
部長達でも ねえ。 ちう、 この間も、 その 4階へ

チョット ヨージガ アッテ ノー。 ニサンベン オリタリ ア  
ちよと 用事が あつて ねえ。 2、3回 下りたの 上

カッタリ シタンジャガ ノー。 モー トキューデ イキ キライ  
たり (たのたが) ねえ。 ちう、 途中で 息(を) 切らして、

テ ダメジャ ワ。(笑)(A笑)  
たあだ わ。

A マク キンユーブチョーモ チョット コー カラダモ ナオラン  
また、 金融部長も、 ちよと、 ちう 体も 直らない

シ ノー。(Bシー。ホー ヨノー。) シー。ヨケー マー ナレ  
し ねえ。(ん。 そう よねえ。) ん。 合計、 まあ、 何だ

ジャケンド。 アイツモ ワカイ ジブンニャー ゲンキナ アッタ  
けれど、 あいつも、 若い 場合には、 元気で あつた

ケンドガ コノ ゴロン ナッテ ドーモ(笑) ココ アシガ  
けれど、 この ころに なつて、 どうも (このころ) 足が

ヨオー ナッタ ワイ。

弱く なつた よ。

B ハーケン ワシノ カラダー アイデモ ソノ セメテ アシデモ  
そうだから、 私の 体、 あれでも その せめて 足でも

キタエナ イカン オモエテ ノー。 コナイダノ ニチヨービモ  
きたえねば いけない(と) 思って ねえ。 この間の 日曜日も



ノ一。ウチノ ソノ コドモ ツレテ アノ タカマルイ ノホ<sup>ニ</sup>  
 ねえ。 うちの その 子とも(を)連れて、 あの 高丸山へ 登った  
 ッタ ショ。 フターリガ。 ホーダラ マー シンドカッター。 ホン  
 のよ。 二人か。 それなら、 まあ、 疲れた。 (ほんとう  
 マー。

A  
 ン一ヤ シンドイ ショ。 (B ン一。 ) ホヤ一 アサ ノ一。 (B  
 ン一。 ) クミアイエ クルノニ一 トノガイチ コイタ ホーカ  
 ン一。 ) ハヤインジャ ケンド ン一。  
 ン一。 ) トノガイチ ジャッター コー ウチカラ テタカー  
 ノホリジャ ロー。 (B ン一。 ソ一 ノ一。 ) ホデ アレカラ ウエ  
 ワ ワースカナ ノホリジャ ケンドノ ノ一。 (B ン一。 ) ソレデモ  
 アレガ タイソーナンジャ ン一。  
 ン一。 (B ン一。 ) ホイテ ヒタエ ムイテ オリタ ホーカ ハ  
 ルカニ トオイ一 ノヨネ一。 (B ン一。 ) トオイ一 ケンドガ一

B  
 アノ サカ ガ。  
 あの 坂 が?

A  
 ン一。 (B ン一。 ) ホイテ ヒタエ ムイテ オリタ ホーカ ハ  
 ルカニ トオイ一 ノヨネ一。 (B ン一。 ) トオイ一 ケンドガ一

シゼンニー ソノー (Bアー.) クダリノ ホー ムイテ イ  
自然に そのう、 ああ。 下りの 方(を) 向いて、 行

クンジャ ガイ。(Bアー.) アイダケ トシ トツクンジャ ノートモツテ  
くのた<sup>い</sup> よ。(ああ。) あれだけ 年(を) とったのた<sup>い</sup> ねえと思って、

(Bゾー ヨノー.) オモイヨンジャガ ノー。  
その よねえ。 思っているのた<sup>い</sup>がねえ。

B シー。 ホー ヨ。 ホー ヨノー。 ワイラガ モー ヤッパ ソノー  
うん。 その よ。 その よねえ。 私らが、 もう、 やはり、 そのう

カラダ キタエニヤ イカン オモテ ノー。 ヤルンジャ ケド  
体(を) 鍛えねば<sup>い</sup> いけない(と) 思っ ねえ。 やるのた<sup>い</sup>けれど、

ホンマ タマゲタ ノー。 イマ イヨツタ ハナシジャ ケド ヤマ  
(ほんとう) おどろいた ねえ。 今、 言っていた 話だけれど、 山へ

エ ノボツテ ノー。(A笑) コドモトー。 ソーリヤ モー ホン  
登って ねえ。 (子どもと。 それは、 もう、 (ほんとう)

ト イキガ キレタワイ。(A笑) ハケン モー チョージョーデ ノー。  
息が 切れたよ。(た<sup>い</sup>から、 もう 頂上で ねえ。

モー ハダカン ナツテ ノー。(A笑) モー ヒックリカエツテ  
もう 裸に なって ねえ。(もう、 ぬくり返って、

トーブンノ アイダ<sup>い</sup> ネヨツタ。 ホント。  
しばらくの間 寝ていた。(ほんとう)

A イヤ アレガ ソノー ジカンオ キメラレテ アガル エウンジ  
いや、 あれが、 そのう、 時間を 決められて 上がる(と) いうのでは、

ヤ ナインジャ ケンドガ <sup>↑</sup>ネ。(Bホー ヨノー.) ジブンノ キ  
ないのた<sup>い</sup>けれど ね。(その よねえ。 命令の 気

ズイ キママニ アガツテ イクンジャ ケンドガ シンドイ ワイ。  
随 気儘に、 上がって 行くのた<sup>い</sup>けれど、 疲れる よ。

( B ホー ヨ。 ) アー。  
そう よ。 ああ。

B ホーシテ アノー ヤマ テイレ センカロー。 ミチ ムカシノ  
そして あのう、 山(を) 手入れ (ないだ)らう、 道、 巷の

ミチガ モー ノー。 ソノー トコイ キガ ヨーケ ハエトット  
道が、 ちねえ。 その 所へ 木が たくさん 生えていよう。

ロー。 ホー ト クモノ ヘバガ ノー。 スゴイ ンヨノー。 (笑)  
それと 蜘蛛の 糸が ねえ。 おい のよねえ。

( A 笑 ) ハケー モー ココラ モー スリキズグラケ ヨ。 カヤ  
だから ちねえ、 こら(は) ちねえ 柳傷だらけ よ。 萱

アガン モンテ キッター。  
あんな ちねえ 切って……。

A イヤ イマ アノー アノー デンキガ マトカー ガスガマン ナ  
いや、 今 あのう、 あの 電気釜とか ガス釜に なっ

ッテ ( B ソー。 ソー。 ) シモータケン ノー。 ソノー ~~キ~~ キオ  
ア そう。 そう。 しよ、だから ねえ。 そのう、 木を

( B ~~ユ~~ コフバヤナンカ サデン ヨニ ナツッロー。 ) イッサイ  
松の葉なんかも 集めない ように なったらう。 いっさい

ツカフン ケニ。 ( B ンー。 ) アレテ ヨケー ヤマカ アレトルケ  
使わない から。 ( うん。 ) あれて、 よけい 山が 荒れているから。

ン。 ( B ソー。 )  
うん。

B ハーケン ウチラノ オヤジガ ケーギー ホヤケン ミテン。 ワ ワ  
そうだから、 私の おやじが、 慧ニ! だから、 見てみろ! 私

イラガ マツガ スキジャケン トキドキー ヤマー アルクンジ  
らが、 松が 好きだから、 時々 山を 歩くのだから

ヤケドト モー コクバガ<sup>↑</sup> ソレコソー ソノー (A  
と も、 松の落葉が ね、 それそ そのう

笑) ノー。 ジュータンミタイニ ツンドルケー シタワ モー  
ねえ。 ジュータンみたいい、 續んでいるから、 下は も

クサットロー ガイテ ノー。 ハーケン モー ナバモ<sup>xxx</sup> アン  
腐っておろう よ(と)言て ねえ。 だから、 も、 茸も あり

マリ ハエン ヨーン ナック。 (A<sup>オー</sup>。) ホント チョットノ  
生えない ように なった、 (おお。 ほんと、 ちょっとの

バシカ ハエテ ナカッタ ノー。 (A<sup>アー</sup>。 ホー カ。) ンー。  
場しか、 生きて なかった ねえ。 (ああ、 そう か。) うん。

<sup>(33)</sup>  
ズルナバガ<sup>(33)</sup> ダイブ ハエトツタケド ノー。 (A<sup>アー</sup>。) コトシ<sup>=</sup>  
“ずるなば”が、 大体、 生きていたけれど ねえ。 (ああ、 今年は、

ヤー。 (A<sup>ホー</sup> ノ。) ンー。 (A<sup>ホー</sup> ↑  
そう ね。 ) ン。 (ほう。

A コノ ゴロ ズルナバン ミル コタ ナインジャガ ノー。  
この ごろ “ずるなば”(色) 見る ことは 無いのだが ねえ。

B ナイ。 (A<sup>アー</sup>。) コトシ ノー。 アレニ カナリ ハエトツタ。  
ない。 (ああ、 今年 ねえ。 あれに、 かなり 生きていた。

ワシ トッテ キタンガ アゲ<sup>ヨ</sup>ー。 (A<sup>アー</sup> <sup>ホー</sup> <sup>カー</sup>。) ン  
私(は) 採って 来たが あげよう。 (ああ、 そう か。) うん。

二。 ズルナバオ。 (A<sup>ン</sup> ↑  
“ずるなば”を、 (うん。 ) も、 だから、 今までは、 大体

タイ イク<sup>(34)</sup>ケバー ジャックケン ノー。 マツタケガ ホン ハエテ  
“いく” は“かり”だったから ねえ。 松茸が、 (ほんと)に 生れ

ナカッ ツロー。

なかつたろう。

A ソー ジャ。 ソー ヨー。 マター コンドノ コーニ ヤマガー ア  
 そうだ。 そう よ。 また、 今度、 こんな 山が 荒れ  
 レタラ ナンジャ ワイ。 ( B ソー ヨ。 ) マー マツタケワ ナ  
 たら 何だ よ。 ( そう よ。 ) まあ、 松茸は、 何  
 ニー シタキトカー アノ シタフサーガ ヨーケ アツタラ ハ  
 下木とか、 あの 下草が たくさん あったら 生  
 エンラ シーン ジャ ケンドガ。

えならしいのだから。

B ホー ヨ。 ( A オー。 ) ハーケン ノー。 ワシー ライネン ノー。  
 そう よ。 ( おお。 ) だから ねえ。 私(は)、 来年 ねえ。  
 モット ハヤシチャロー オモータ ー。 ( A 笑 ) ソノ ハエル  
 もっと 生やしてやる(と) 思って ねえ。 ( その 生える  
 トコ アブダゲ チョットデモ マツバ ノケタ カオモータ  
 所(の) 部分だけ、 ちょっとでも 松茸(を) 除けた か(と) 思った  
 ケド ノー。 ホーント ノー。 チョットノ アイダ ノー。 ノケタ  
 けれど ねえ。 (ほんとう) ねえ。 ちょっとの 間 ねえ。 のけたら、  
 ラ スゴイ コクバガ タマツタケ ー。 マー ヤメタ ワイ。  
 おく 松の落葉が たまったから ねえ。 もう 止めた よ。  
 ( A 笑 ) ( 笑 ) ヤー ホンマー。 アガイン ナツタラ モー タメ  
 やあ、 ほんとう。 あんなに なったら、 もう ため  
 ジャ ー。 ( A ンー。 ア ) ナバモ ハヤー ヘン。  
 だ ねえ。 ( うん。 ) 茸も、 生えは しない。

A ハヤー ヘン ー。 ( B ンー。 ) ハケン コトシラヤツタラ マ  
 生えは (ない) よ。 ( うん。 ) だから、 今年らたらたら、 松  
 ッタケワ モー センコクテキニ マー スクナインジャローケン  
 茸は もう 全国的に まあ、 少ないのだからうけれど……。

下ガ……。

B ナンノー ハケン テッ チャンガ ノー。 アノー オーミシマイ  
何の。 だから 鉄さんが ねえ。 あの。 大三島へ

トリニ イツタンジャ ガー。 ホータラ (笑) コーマイノー ノ  
採りに 行ったのたよ。 そしたら、 ( ) ホサいのを ねえ。

ー。 イーッパイ トッテ キテ ノー。 モー コレ キネンニ チ  
いっほい(たくまん) 採って 来て ねえ。 もう、 これ(を) 記念に、 ちゅ

ート ノケトクンジャ テー。 ビニールブックロイ イ イレテ ノ  
と 除けておくのたよ。 て。 ビニール袋に <sup>xxx</sup> 入れて ねえ。

ー。 カザットツタ ワ。 (A笑) (笑)  
飾っていたよ。

A アー ナ ナンナ ヤー。  
ああ、 <sup>xxx</sup> 誰だ? ね?

B ー。 エンタローサン トコノ。  
ん。 遠太郎さん 所の。

A アー エンタサン トコノ。 (Bシー。) ホ <sup>→</sup>  
ああ。 遠太郎さん 所の。 (ん。 ほう。

B アッコノ ウラノ コンプラヤマモ ノー。 アノ ソノ ハエルケ  
碗この 裏の 金平山も ねえ。 あの その 生えるからと、

ンテ ノボッテ ミタンジャケド ノー。 ナカッタ イヨッタ ノ  
登って 見たのたけれと ねえ。 無かった(と) 言っていた ねえ。

ー。 コトシラー。  
今年らけ。

A マー コトシラー ヨケー マー アノ コノ ヒガ テルケ  
まあ、 今年らけ、 よけいに まあ、 あの この 陽が 照るから

ニ ナイノカモ ワカラシ。 ( B ソー ヨノー。 ) ホデモ モー  
無いのかも 合からない。 ( そう よねえ。 それでも、 ち

シゴネン シオツタラ マツノ キガ イッポンモ ナイ ヨシ  
4.5年 経ったら、 松の 木が、 1本も 無い ように

ナル ワイ。 ( B アー。 アー。 ) コレダケ ( 笑 ) ( B ソー ヨノ。 )  
なる よ。 ( ああ。 ああ。 ) これだけ ( ) ( そう よね。 )

マツクイカ キタラ。

松食い(虫)が 来たら。

B アレ スゴイ ゼー。 マツクイムシー。 アノー……。

あれ(は)、 すごい よ。 松食い虫。 あのう……。

A ハー。 アレデモ ネー。 ハジメニ ショードクオー ユータ イ

(はあ。 あれでも ねえ。 初めに、 消毒を(と) 言て、 言

ヨツタ ヨネー。 ( B ンー。 ) イヨツタトコロガ アノー チョーノ  
っていた よねえ。 ( うん。 ) 言っていたところに、 あのう 町の

ホーデ エー ショードク ヤルツテ イツテ イヨツタラー アノ  
方で ええ 消毒(を) やるよ 言て、 言っていたら、 あのう。

ー マー コノ マチナカノ ヒトー ヘリコプターデ ヤルンジ  
まあ、 この 町中の 人(は) ヘリコプターで やるのだから。

ヤケニ ( B ンー。 ) マチナカノ ヒトトカ マタ アノー ギョ  
( うん。 ) 町中の 人とか、 また、 あのう 漁業

ギョーファミアイレンチューノ ヒトワ ネ。 ( B ンー。 ) ヤッパ  
組合の連中の 人は ね。 ( うん。 ) やはり、

アレー ギョ ギョー サカナニ コーガイガ アル シカドー  
あれ、 漁業、 魚に 公害が ある のかどう

カネー。 ( B ンー。 ) ソレデ エー ホショートカ ナントカデ (   
かねえ。 ( うん。 ) それで、 ええ、 補償とか 何とかで、 (

B ンー。 ) ヤラダックラシーンジャケド ネー。  
うん。 やらなかつたらしいのだからねえ。

B アラー ネー。 ヤラニャー モー ソイー ワヤン ナル ゼー。  
あれは ねえ。 やらねば" もう それは、 ために なる よ。

A ミス"ガ" ナイ ヨン ナル ヨー。 ( Bソー ヨノー。 ) チカスイ  
水が 無い ように なる よ。 ( そう よねえ。 地下水が、

ガ モー アレガ カレテ シモーター ハタカ ボーズニ ナッ  
もう あれが 枯れて しまつて、 端が、 坊主(のよう)になつた

タラ ノー。

ら ねえ。

B ミットン。 モー アノ マツクイムシテ モー ヤラレテ シモーター カラ  
見てらん。 もう あの 松倉"で" もう やられて しまつて、

モー ( A笑 ) ホンマ アレ モー マツカ" ナイナッテ シマ  
もう、 ( ほんとうに、 あれ、 もう 松が" なくなつて (まう

ウ ワー。 アレ。

ふ。 よ。 あれ。

A アー。 マツカ" ナインナッ タラー チカスイガ" ナイ ヨン ナル  
ああ。 松が" なくなつたら、 地下水が" ない ように なる

ヨー。

よ。

B ソー。 ソー。 ( Aンー。 ) ホテー アノー チョット キューナ  
そう。 そう。 ( うん。 それで、 あのう、 ちょっと 急な

ノー。 ヤマジャッ タラ ノー。 チョット アメガ フツタラ グド"  
ねえ。 山だらたら ねえ。 ちょっと 雨が" 降つたら 崩れる

(35)  
レライ。

よ。



A  $\overline{\text{ホー}}$ ジャ。  $\overline{\text{モー}}$   $\overline{\text{アー}}$  ナッ $\overline{\text{タ}}$ ラー  $\overline{\text{モー}}$   $\overline{\text{テ}}$ ノ ツケ  $\overline{\text{ヨー}}$ カ  
 そうだ。 けい、 ああ なったら、 もう 今の つけ ようが、  
 ナイ。  
 無い。

B  $\overline{\text{ソー}}$ ジャ  $\overline{\text{ノー}}$ 。(A  $\overline{\text{アー}}$ 。)  $\overline{\text{ホー}}$ テモ  $\overline{\text{ココ}}$ ラー  $\overline{\text{テ}}$   $\overline{\text{ウタ}}$ ン  
 そうだ。 ねえ。(ああ、) それでも ころ(は)、 手を 打たない  
 ノジャ  $\overline{\text{ロー}}$  ガ。  
 のびろう ね。

A  $\overline{\text{イヤ}}$   $\overline{\text{ウ}}$   $\overline{\text{ウ}}$   $\overline{\text{ウ}}$   $\overline{\text{ト}}$ ニモ  $\overline{\text{ソ}}$ ノ  $\overline{\text{スグ}}$ ニ  $\overline{\text{コ}}$ ノ  $\overline{\text{ゴ}}$ ロー  $\overline{\text{ア}}$   
 いやあ、 打とうにも、 そのう、 ぐに、 この ころは、 ああ  
 $\overline{\text{ノー}}$   $\overline{\text{ケン}}$ リオ  $\overline{\text{サ}}$ キー  $\overline{\text{シュ}}$   $\overline{\text{チョ}}$ ー  $\overline{\text{スル}}$ ケン  $\overline{\text{ノー}}$ 。(B  $\overline{\text{アー}}$   
 権利を 先に 主張 するから ねえ。 ああ。  
 $\overline{\text{アー}}$ 。)  $\overline{\text{ソ}}$ レテ  $\overline{\text{ヤ}}$ レン  $\overline{\text{ノ}}$ ヨネ。(B  $\overline{\text{ホー}}$ 、  $\overline{\text{ホー}}$ 、  $\overline{\text{ホー}}$ 。)  $\overline{\text{ン}}$ ー。  $\overline{\text{スグ}}$ ニ  
 ああ。) それで やれない のよね。(そう、 そう、 そう。) うん。 ぐに  
 $\overline{\text{ア}}$ ノ  $\overline{\text{ナン}}$ デモ  $\overline{\text{モ}}$ ンク  $\overline{\text{ユ}}$ ー $\overline{\text{タ}}$ ラ  $\overline{\text{ホ}}$   $\overline{\text{ショ}}$ ーガ (B  $\overline{\text{ン}}$ ー。  $\overline{\text{ン}}$ ー。)  
 ああ、 何でと 文句(を) 言ったら 補償が。 うん。 うん。  
 $\overline{\text{ア}}$ ナニ  $\overline{\text{スル}}$ ヤ $\overline{\text{ロー}}$ 。(B  $\overline{\text{ン}}$ ー。)  $\overline{\text{ホ}}$ ヤケン  $\overline{\text{チョ}}$ ート  $\overline{\text{シ}}$ タテ  
 ああ、 何 するたろ。 うん。) そうだから、 ちょっと、 けとて  
 $\overline{\text{テ}}$   $\overline{\text{ソ}}$ ノ  $\overline{\text{ヤ}}$ ローニモ  $\overline{\text{ヤ}}$ レン  $\overline{\text{ノ}}$ ヨネー。  
 そのう、 やろうにも やれない のよね。

B  $\overline{\text{ア}}$ —  $\overline{\text{ホ}}$ イ $\overline{\text{テ}}$ モ  $\overline{\text{ナン}}$ トカ  $\overline{\text{セ}}$ ニ $\overline{\text{ャ}}$ ー……。  
 ああ、 それでも 何とか (なければ)……。

A  $\overline{\text{マー}}$   $\overline{\text{アレ}}$ ニ  $\overline{\text{マー}}$   $\overline{\text{カリ}}$ ニ  $\overline{\text{イ}}$ ッ $\overline{\text{セ}}$ ンマン  $\overline{\text{カ}}$ ガル  $\overline{\text{モン}}$   $\overline{\text{ダ}}$ ツ $\overline{\text{タ}}$   
 まあ、 あれに まあ、 後りに 1千万(円) かかる ちのたらたら、  
 ラ (B  $\overline{\text{ン}}$ ー。)  $\overline{\text{ホ}}$   $\overline{\text{ショ}}$ ーガ  $\overline{\text{オ}}$ マイ。  $\overline{\text{ナン}}$   $\overline{\text{ジャ}}$ ー。  $\overline{\text{イチ}}$   $\overline{\text{オ}}$ クモ  
 うん。 補償が あなた、 何だ。 1億(円)も

カカ<sup>ル</sup> ヨーナ コト<sup>ー</sup> イーダ<sup>ス</sup>ケン ノー。 ( B <sup>ホー</sup> ヨ<sup>ノ</sup>ー。  
かかる ような ことを 言い出から ねえ。 そう よねえ。

) <sup>オー</sup>。 ソイ<sup>ジャ</sup>ー モー ナン<sup>ボ</sup>ニ<sup>モ</sup>ー ミン<sup>ナ</sup>ノ <sup>ダイ</sup>ジ<sup>ナ</sup>  
お。 それでは、 もう いかにしても 皆の 大事な

ア<sup>ー</sup> <sup>ゼー</sup>キン<sup>オ</sup> ソ<sup>ノ</sup>ー ツカ<sup>ウ</sup>ノ<sup>ニ</sup> <sup>ネ</sup>ー。 ( B <sup>シー</sup>。 ) ソ<sup>ノ</sup>  
ああ、 親金を、 そのう、 使うのに ねえ。 ( うん。 ) その

<sup>ト</sup>ー<sup>ジ</sup>シャ<sup>ト</sup> シ<sup>タ</sup>ラ ヤ<sup>レ</sup>ン ワイ。  
当事者と したら、 やれない よ。

B ア<sup>レ</sup> ノー。 ス<sup>ツ</sup>ット ムカ<sup>シ</sup>モ ヤ<sup>ッ</sup>パ マ<sup>ツ</sup>クイ<sup>ム</sup>シガ <sup>チ</sup>ト  
あれ ねえ。 ちうと 昔も、 やはり 松倉い虫が、 ちうと、

ヤ<sup>ッ</sup>パ<sup>ー</sup> ア<sup>レ</sup> ナ<sup>リ</sup>ヨ<sup>ク</sup>タ コト<sup>モ</sup> ア<sup>ル</sup> イ<sup>オ</sup>ツ<sup>タ</sup> ノー。  
やはり、 あれ、 なっていた ことも ある(と) 言っていた ねえ。

A <sup>シー</sup>。 <sup>シー</sup>。 マ<sup>ツ</sup>クイ<sup>ム</sup>シ<sup>テ</sup>テ <sup>マ</sup>エ<sup>ノ</sup>ワ <sup>ネ</sup>ー。 ( B <sup>シー</sup>。 ) <sup>イ</sup>マ<sup>ノ</sup>ト  
うん。 うん。 松倉い虫という、 前のは ねえ。 ( うん。 ) 今のと

<sup>チ</sup>ガ<sup>ウ</sup> ワイ。 ( B <sup>オー</sup>。 ) ア<sup>ノ</sup>ー <sup>ジ</sup>ブ<sup>ン</sup> ト<sup>コ</sup>ノ<sup>ー</sup> ハ<sup>タ</sup>ケ  
違う よ。 ( おお。 ) あう、 組合(の) 所の 畑の

<sup>ノ</sup> ホ<sup>ト</sup>リ<sup>ニ</sup>ー イ<sup>ッ</sup>ホ<sup>ン</sup> カ<sup>レ</sup>ヨ<sup>ッ</sup>テ <sup>ネ</sup>。 ( B <sup>シー</sup>。 ) コ<sup>シ</sup>ガ  
(ほとりい 一本 枯れていて ね。 ( うん。 ) これか

ー マ<sup>ツ</sup>クイ<sup>ム</sup>シ<sup>ジャ</sup>ロ<sup>ー</sup> カ<sup>ー</sup>ユ<sup>テ</sup> イ<sup>オ</sup>ツ<sup>タ</sup> シ<sup>ヨ</sup>ネ<sup>ー</sup>。 ( B  
松倉い虫だろ、 か(と)言っ、 言っていた のよねえ。 ( B

<sup>シー</sup>。 ) <sup>イ</sup>ヨ<sup>ツ</sup>タ<sup>ケ</sup>ンド <sup>ソ</sup>ノ <sup>ト</sup>キ<sup>ニ</sup>ワ ア<sup>ノ</sup>ー コ<sup>ノ</sup>ー ミ<sup>キ</sup>  
うん。 ) 言っていたけれど、 その 時には、 あう、 この 幹へ

エ コ<sup>マ</sup>ー<sup>ニ</sup> <sup>モ</sup>ー ヤ<sup>ネ</sup>ガ <sup>ズ</sup>ー<sup>ツ</sup>ト <sup>テ</sup>タ シ<sup>ヨ</sup>ネ<sup>ー</sup>。 ( B <sup>シ</sup>  
細かく、 もう やにが ずうと 出た のよねえ。 ( うん。

ー。 ) <sup>シー</sup>ロ ナ<sup>ル</sup>グ<sup>ラ</sup>イ<sup>ニ</sup>。 ( B <sup>シー</sup>。 ) <sup>ホ</sup>イ<sup>テ</sup> カ<sup>レ</sup>テ <sup>キ</sup>タ  
白く なるぐらいに。 ( うん。 ) それ、 枯れて 来た

ケン / ( B シー。 ) アー コレガ マツクイジャロ カユター  
から ね。 ( ぶん。 ) ああ、これが 松倉(虫)だろか (と) 言って、

( B シー。 ) イヨックタ ヨ。 ( B シー。 ソー。 ) ホータラ コンドノ  
( ぶん。 ) 言っているよ。 ( ぶん。 ぶん。 ) それなら 今度の

マツクイワ チガウ ワイネー。 ( B ウーン。 ) アノ マニ ミエ  
松倉(虫)は、 違う わねえ。 ( うん。 ) あの、 目に 見え

シノヤ ロー。 ( B ホー ヨロー。 ) オー。 ケンビキョーテ ナカ  
ないのだから? ( そう よねえ。 ) おお、顕微鏡で なか

ツタラ フカラン ユーンジャロ、  
たり 合らない(と) 言うのだから。

B アノ ノー。 アレー アレ ナニ。 カ カミキリムシガ ( A シー。  
あの ねえ。 あれ。 あれ(は) 何? xxx 紙切り虫が、 ( ぶん。

) ハ ハコブアンジャッタ カノー。 ( A ソー ヨ。 ソー ヨ。 )  
xxx 運ぶのだった かねえ。 ( そう よ。 そう よ。 )

ホーデモ ソノ ヒトガ イオクタンジャカ ノー。 イマ コラー  
それでも、 その 人が 言っていたのだから ねえ。 今、 これは

ヤッバ ショードクデモ セニャー ノー。 ソノ ウチ ワヤン  
やはり、 消毒でも (なければ) ねえ。 その うち、 ために

ナル テ。 ムカシヤッタ ノー。 カレタラ キッテ タキギニ  
なる っ。 昔だったら ねえ。 枯れたら 切っ 薪に

シヨックタロー。 ( A (笑) ソー ヨ。 ソー ヨ。 ) イマン ナッタラ モ  
していたら。 ( そう よ。 そう よ。 ) 今に になったら、 もう

ー ミナー ガスヤ アガナンテ ヤル、 トーユテ ヤルケ ネー。  
みな ガスヤ あんなもので やる。 灯油で やるから ねえ。

キラカロー。 マー ソノ ママ カレタンガ ツ、 タットライ  
切らないだろう。 まあ、 その まま、 枯れたのが つまっている

ノ一。ハケン モー ソコラー ヒロガリ ホーダイ ヨ。  
ねえ。 だから もう そこらは、 えがかり 放題 よ。

A シ一。イヤ モー ホレワ モー <sup>ん</sup> イッタンワー ゼンブ ナク  
ん。 いや、 けう それは もう、 一旦は、 全部 無く  
ナッテ シマワニャー ナク ナッテ シモータラ シヌルジャロ  
なって しわねば、 無く なって しまったら、 死ぬたろうから  
一ケン ネ一、 ( B 笑 )  
ねえ。

B マー ソラー ソーダケド ノ一。  
まあ、 それは そうだけれど ねえ。

A ア一。ホイテ ソレカラ ハエタ ブンテ ナカッタラ コレ ソ  
ああ。 そして、 それから 生えた 方のもので、 なかたら、 これ 育た  
グタン ワイ。 ( B シ一。 )  
ない よ。 ( ん。 )

B オーミンマヤナンカグッタラー アー ハケン マツテ ナシン  
大三島などたったら、 ああ、 だから、 松で なしに、  
チガウ キュー ウエナ イカン ユー コトー ハイ イヨンジ  
違う 木を 植えたければ いけない(と) いう ことを、 もう 言ってる  
ヤロー。  
のたろう。

A シ一。ウラド<sup>(36)</sup>ナンカワー モー ホトンド ナイ ヨン ナック  
ん。 浦戸なんかは、 もう 強ど 無い ように なった

ヨ。 ( B シ一。 ) ア一。アソコワ マー ヒドカッタケン ネ一。  
よ。 ( ん。 ) ああ、 あそこは、 まあ ひとつかったから ねえ。

( B シ一。 ) ウラドノ アノー ミナトノ キンペンノ カッコ  
ん。 浦戸の あのう 港の 直前の 恰好の

一ノ イー マツナンカ モー ゼンブ カレテ シモータ ワイ。  
よ。 松など(は)、 もう 全部 枯れて (また) よ。

B マー ワシラモ コレ ナントカ セナー イカン モノージャ  
まあ、 知らぬ、 これ、 何とか (は) なくてほ、 いけない ものだ  
ワイノー。  
よ。

A デ イマン ナツテ ナントカ セナ イカン イカン ユテ ユ  
で、 今に なって、 何とか (は) なくてほ いけない いけない(と) 言て、 言  
ウンジャケンドモ ヨー。(B笑) アノ ハジメニ カンザキー<sup>(37)</sup>  
のだけれども よ。 (あ)の 初めに 金崎へ

チヨビット デター (Bウー。) トキ ヨネー。(Bウー。) ア  
少し 出た (うう。) 時 上ねえ。 (うう) あ

ノ トキニ モー シマ ゼンドー コー ショードク シトケバ  
時に、 ち 島 全土を、 こう 消毒 (ておけば

ネー。(Bンー。) ソラー モー シツカリ チカ ウンジャケン  
ねえ。 (うん) それは ちう、 たいへん 直うのだけれど……。

トガー……。

B ソー ヨノ。 ソー イヤー ハジメ カンザキー チョット デ<sup>XXX</sup>  
そう よね。 そう 言えは、 初め(に) 金崎へ 少し

デタダゲジャツタ ワイノー。  
出ただけだった 上ねえ。

A ソー ヨ。 ソー ヨ。 ホジャケン アノ トキオ アノー ヤル ユー  
そうよ。 そうよ。 そうだから、 ああ、 時を、 あらう やる(と) 言、

タウー キョ キョーグミ ホショー クレヤツタ ンヨ。(Bアー。  
たら、 漁業組(念が)、 補償(を) くれ、だった のよ。(ああ)

ホーデー。 ) シー。 ( B フーン。 ) ホレ イヤー ココラノ ヒ  
そう。 うん。 ( ふうん。 ) それ(を) 言えば、 こちらの 人

トラガノ。 ( B シー。 ) ソノー センタクモノ ( 笑 ) ヤッテ  
らが ねえ。 うん。 そのう、 洗濯もの(を)、 やって、

モー マタ アノー ホカノー ボンサイナンカニデモー アノー  
また、 あのう 他の 金銭なんか(に)でも、 あのう、

ヤクガイガ アルット コーユー ( B シー。 ) ハナシガ デテ  
薬害が あるて、 こう言う うん。 話が、 出て

ノ。 ( B シー。 ) アル ンカナイ ンカシランノヤケントガ ( B シー  
ね。 ( うん。 ) ある のか無い のか知らないのだから? ( うん。

一。 ) アル アル ユーテ ネ。 ホイテ ヤラサグッタ ンヨ。  
ある、 ある、 (と)言って ね。 それ やらさなかった のよ。

B ホー。 ホイテモ ノ。 アレ ナントカ セニャー モー ( A  
ほう、 それでも ねえ。 あれ(は)、 何とか しなくては、 もう (

笑) ノ。 タケシサントコロノ イエノ ウエノ ホーノテモ  
ねえ。 哉さん(の)所の 家の 上の 方(で)も

ミトシ。 ( A ホー ヨ。 ) アレ ヤンガテ ソノー ヤネー ド  
見にらん。 ( そう よ。 ) あれ(は)、 やがて そのう、 屋根へ たら

ッサリ オチテ クルゼ。  
さり 落ちて 来る せ、

A シー。 オチテ クルゾー。 ( B シー。 ) アンー ナンジャ ワイ。  
うん。 落ちて 来る ぞ。 ( うん。 ) ああ、 何だ? よ。

マー イチバン サイショ オーミシマエワ マー ヒドカクタク  
まあ、 一番 最初、 大三島へは まあ ひどかったけれど、

ンドガ ( B ソー ヨ。 ) イマー ココガ ヒドインジャケンド  
今、 に(伯方島)が ひどい(の)だから?

が コナイダモー ココエ アノー カクー ノーキョーカラー  
この間も、 二へ あの、 名 農協から

マチブン トーショブノ ノーキョーカラー コー キョーサイノ  
町部の、 島嶼部の 農協から、 二う 失津の

ー (B ンー。) スイシンノ ナンテ" キタ トキニ ノ。 (B ン  
うん。 推進の 何で 来た 時に ね。 (うん。

ー。) ミンナガー ザ"ダン ー ヤリョール トキニー クワイカ  
みなが、 座談(を) やっている 時に、 合が

ハジマル マエニー ザ"ダン ヤル トキニー ナンダ" ハ  
始まる 前に、 座談(を) やる 時に、 何だ! 伯

カタ ヒドイジャ ナイ カトー (B ンー。) ヌー モンジャケ  
方(は)、 ひといいは ない かと、 (うん。) 言う ものだ"から

ン ノー。 (B ンー。) イヤ。 ハカタワ モー オーカタ (笑)  
ねえ。 (うん。) いや。 伯方(は、 ち 大方 (笑)

シマイニ ナルケン (B ンー。) ライネンワ ミヤノクボイ イク  
終りに なるから、 (うん。) 来年は 客室へ 行く(と)

イヨツタケン ノッテ コーイッテ…… (笑) (B 笑) ホイテ  
言っていたから ねえ、 二う、 言て…… (笑) (B 笑) そして、

イヤ モー ソガイニ ヨソエ トビアルカイデ"モ (B ンー。  
いや ちう そんなに 他所へ 飛び夢がなくても、 (うん。)

マー ハカタニ オッテ クレー テユッテ ー エウンジャケン  
まあ、 伯方に いて くれと 言て、 言うのだけれど、

ド"ガ (B ンー。) ヤッパ ー ミヤノクボイ イッテ ー ホイテ  
うん。 (うん。) やはり 客室へ 行って、 そして、

サライネンニ ヨシウミノ (37) ホーエ イキソーニ イヨツタ"ゾ  
再来年い 吉海の ちへ 行きそうに 言っていた、 そ

一テ ユツテ ( B 一。 ) ユーター ソイツァー ソガンニ モ  
て 言ッて、 ( はん。 ) 言ッたら、 そいつは、 そんなに もの

ノガ ワカレンナラ コツチカラ チート ナントカ スルケン  
が 合るのなら、 こちから せし、 何とか するから、

トメトクレー エテカラ ワラワショー ッタケド ナー。 ( 笑 )  
止めておくれ(と) 言ッて、 笑わせていたけれどねえ。

B アー。アレワ デモ ナントカ セナ イカン ノー。 モー ホント  
ああ。 あれば、 でも 何とか (しなれば) いけな... ねえ。 もう、 (はんとう、

ソー セニャー マツ ナイン<sup>↑</sup>ヨー ナル ぜ。  
そう (しなれば、 松(が) 無いように) なる よ。

A いや。 ソリャ モー ナイン<sup>↑</sup>ヨー ナルナー モー トーゼン ヨー。  
いや。 それは ち、 無いように なるのは、 ち 当然 よ。

B マツガ ナイン<sup>↑</sup>ヨーナツテ ノー。 ホテ ホカノ キー ウエヨー  
松が 無いように なって ねえ。 そして 他の 木(を)、 植えよう(と)

オモテモヤ ノー。 ケツキョク ソノー チト シオカゼノ ア  
思ってもた ねえ。 結局 そのう せし 潮風の あ

タル ヨナ トコヤツタラ マツシカ ハヤ ハエン トコガ ア  
たゝ ぶな 所だったら、 松しか もう 生えない 所が あ

ロー、 (A ソーヨ。 ソーヨ (笑) ) ノー。 アーユー トコニ ハケン  
らう。 ( そうよ。 そうよ。 ) ねえ。 ああいう 所に、 たゝから、

モー ホカノ キジャ イカン ヨニ ナライ ノー。  
ち 他の 木では いけな... ように なる ねえ。

A ソヤ アノー オーミシマノー オーミシマジャ ナイ。 オーシマノ  
それは、 あのう 大三島の 大三島では ない。 大島の

アノー <sup>(40)</sup> ナンカ トモ <sup>(41)</sup> アレワ ナン カー。 セツミ カネー。 ( B  
あのう、 何か、 友(浦)、 あれば 何 か。 志津見 かねえ。 (



シー。 ) ヒツミノ ホージャッター モーゾ<sup>xx</sup> ゴーキヨリカ マツ  
志津見の 方だったら、 もう、 雑木より(も) 木で

デ ナカッター イカンケン ネー。 アノ ガイ<sup>xxxxx</sup> ( Bソーヨ。 )  
なかったら いけないから ねえ。 あの ( そうよ。 )

アノ カタイ イシコロミタイナ トコワ ネー。 ( Bシー。 )  
あの 固い 石こみみたいな 所は ねえ。 ( くん。 )

ホヤカラ アノー ガンバンノー ウエーヤッター モーマ  
そうだから、 あの 装置の 上だったら、 もう 松

ツデ ナカッター イカンノジャケンドガー ソレオーソノ  
で なかったら、 いけないのだけれど、 それを、 その

マツガー モ<sup>山</sup> ニサンネンデ アレーモ マタ ホツ ホツ  
松が<sup>山</sup> もう、 2、3年で<sup>山</sup> あれも また、 (もう(ほう、

ユー ミヨルケン ネー。 アレガ モー パーット ヒロガルケン。  
こう、 見ているから ねえ。 あれが<sup>山</sup> もう、 はあっと ながるから。

B アノー ハセ<sup>xxxx</sup> ツリニ イトツタラ ノー。 ハーケン カレオル カ  
あのう、 釣りに 行っていたら ねえ。 だから、 枯れている、 枯

レトル マツノ シタノエ<sup>xx</sup> ノー。 コンマイ ア<sup>xxx</sup> マツガ ノー。 ダ  
れている 松の 下へ ねえ。 小さい 松が<sup>山</sup> ねえ。 大

イブ ハエトツタケド ノー。 アイラモ ノー。 ホットツタラ ヤ  
分 生えていたけれど ねえ。 あれらも ねえ。 放っておいたら、 ヤ

ッバリ ヤンガテ、 ヤラレル ノー。  
(山) やがて、 やられる ねえ。

A シー。 アレモ モー イカン ワイ。 ( Bシー。 ) トニカク イッ  
くん。 あれも、 もう いけな<sup>山</sup> あ。 ( くん。 ) とにかく、 1本

ポンモ ナイ ヨン ナラニャー コリヤ モー イカナイ。 ( B  
も 無い ようい ならなければ<sup>山</sup> これは もう いけない。 )

ソユー コト ヨノー。 ) イマノ ヨーニ ホットクングツタラ  
そういふ こと よねえ。 ) 今の ようい 放っておくのだったら、

モー アノー ショードク センノヤツタラ ネー。 ( Bホー  
もう、 あの 消毒(を) しないのだったら ねえ。 ( B  
そう

ヨノー。 ) ジャケンドガ モー アンマリ アノー ゴョ ギョーク  
よねえ。 だけれど、 もう あまり、 あの、 漁業組合の

ミアイノ シトナンカー チト カンガエテ クレナ イカント  
人なんか(は)、 せし 考えて くれなくてはいけなと、

コー オモーノガ……。 コナイダモ アノー センダイ イツタ  
う、 思うのだが……。 この間も、 あのう 他(へ) 行った

トキニ アノー マツシマ ヨネー。 ( Bノー。 ) マツシマエ イ  
時に、 あのう 松島 よねえ。 ( うん。 ) 松島へ 行っ

ツタラ マツシマイモ キトル ニョノー。  
たら、 松島(へ)も、 来ている のよねえ。

B マツクイムシガ。  
松食い虫が。

A ンー。 ( Bフーン。 ) ホイデ キトル モンジャケン ネー。 ( B  
うん。 ( Bフーン。 ) それで、 来ている ものだから ねえ。 ( B

ンー。 ) ホイデー ソノー ソコノー アノー ショーランノー シトナン  
ん。 ) それで、 そのう そのの あのう 商店の 人なんか(は)、

カニ チョット キータラ ネ。 ( Bノー。 ) ホイタラ アノー  
せし 聞いたたら ね。 ( うん。 ) それ(は)、 あのう

ギョ ギョークミアイガ ソノ ヤカマシーンジャ イオライ。 ( B  
漁業組合が、 その やかま(い)のた(と) 言っている。 ( B

アー。 ヤツバリ。 ) ショードク シタラ ( Bハー。アー。 ) ソノー コ  
ああ、 や(は)り。 ) 消毒(を) したら、 ( Bはあ。ああ。 ) そのう、 公

一 ガイ ガ アル ユー テ ナ。  
案が ある(と) 言って ね。

B ホ ジャ ケ ン ド ネ ー ヤ ラ ニ ャ イ カ ン ワ イ ノ ー。  
た"ければ、 やらねば、 いけな... わねえ。

A ホ ジャ ケ ン ド マ ツ シ マ ユ ー ト コ ロ ー ワ ニ ホ ン サ ン ケ ー ノ  
た"ければ、 松島(と) いう 所は、 日本≡景の

ヒ ト ツ チャ ロー。(B ン ー ン ー ン ー) ホ イ タ ー ア ノ ー ア ノ シ マ ニ  
一つだろ。 (うん。うん。) それ(ら)、 あのう、 あの 島に

マ ツ ガ ナ カ ツ ラ (B 笑) モ イ ヨ イ ヨ ツ マ ラ ン ノ ヤ ロ ー。  
松が 無かつたら、 (もう) いやいよ つまらないのだろ。

(B 笑) ソ ー ダ 。 ソ レ デ モ ギ ョ ギ ョ ー ク ミ ア イ ノ モ ノ  
そう だ。 それでも、 漁業組合の 者は、

ワ ー ソ ノ ホ シ ョ ー ク レ ー ヨ ネ ー。(B ン ー ン ー ン ー) ホ イ タ ー  
その 補償(を) くれ、 よね。 (うん。 それ(ら)、

ソ ノ ニ ョ ー ボ ト カ ー ア ノ ー コ ド モ ナ ン カ ム ス メ サ ン ナ ン  
そのう、 せろとか、 あのう 子どもなんか、 娘さんなんか

カ ワ ネ ー。(B ン ー ン ー ン ー) ツ イ シ タ ラ ー ソ ノ マ ツ シ マ ノ ー  
は ねえ。 (ん。 ひょと したら、 その 松島の

ナ ン デ ー ソ コ ラ デ バ イ ミ セ オ ー ニ ー ソ ノ ー ツ ト メ ト ル  
何で、 そ(れ)で 売、 店 \*\*\*\*\* に、 そのう 勤めている

カ モ ワ カ ラ ン ノ ヨ ネ ー。(笑)  
かもわからない のよねえ。

B ン ー チ ョ ツ ト グ ラ イ ホ シ ョ ー ヤ ッ テ モ エ カ ロ ー。  
ん。 少(し)ぐらい、 補償(を) やっても 分かる。

A エ ー。  
ええ?

B チョット グライ ジャッ タラ ホ ショー ヤッ テモ エ カロー。  
少しぐらいだったら、 補償(を) やっても よからう。

A イヤ。ソレガ ソノ ソノ ホ ショーガ ソノ チョット ナラ  
いや。それが そのう、 その 補償が その ちょっとなら、

エー ケンド ネ。(B ソノ。) コノ ゴ ロー ギョ ギョ クミ  
いいけれど、 ね。(うん。) この ごろは、 漁業組合の

アイノ ホ ショー ヒド カロー ガイ。  
補償(は) ひどからう よ。

B ソノ。 マ ソ ジャ ケド ノ。  
うん。 まあ そうだけれど、 ねえ。

A ソノ。 ホ ジャ ケニ モ マ ツシ マノ ア スコノ アノ ズイ  
うん。 だから、 もう 松島の あそこの、 あの 瑞巖

ガン ジ カ ネ。(B ソノ。) ズイ ガン ジノ ウ ラッ カワノ ヤマ  
寺 かね? (うん。) 瑞巖寺の うん 裏側の 山は、

エ ワ ハイ キ トル ユ ウン ジャ ケン ネ。  
もう 来ている(と) 言うのだから ね。

B ソノ。(A ソノ。) ア ソ コノ ホ デ モ マ ツ ガ オ モ ジャ ノ イ  
うん。(うん。) あそこの 方でも、 松が まだ、 のに、

ナイ ナッ ナイ ナッ タラ ウ ...  
~~無く~~ ~~な、~~ ~~無く~~ ~~な~~ ~~たら~~ ...

A ホ ヨ。 マ ツシ マ ジャ ケン ネ。  
そう よ。 松島だから ね。

B ソノ ヨ ノ。  
そう よねえ。

A ソ ネ デ モ ホ ショー ク レ ジャ ロ。(B ソノ。) デ ワ レ ワ レ  
そんなでも、 補償(を) くれ、 だろ。(うん。) で、 我々

ヒャクショ一カラ ユ一タウ モ一 イヨイヨ モ一 キママ  
百姓から 言ったら、 ough いやいよ ough、 氣儘(色)

イヨルト ヨ一 オモウ シヨネ一。(Bシ一)  
言っていると、 ough 思う のよねえ。(うん。)

## 注

- (1) 「オラ・が・イエ」(私の家)が、つづまって、「オラーウエ」と発音されている。
- (2) 「ワーラ」は、「ワレラ」>「ワイラ」>「ワーラ」となって、生じたもの。A話者は、これを特異なものの一つとして例示したが、B話者はこれらを、会話中で頻用している。
- (3) 「だから」に相当する順接の接続詞として、話者Bは、「ハケン」「ハケー」を、よく使う。土地ことばらしい特色の一つである。
- (4) 対象代名詞の複数形卑称に、「コナツ」という右称が使用されている事実は、注目される。
- (5) 「なくなっていく」ことを、この土地では、殆ど、「ナイ ナッテイク」と表現する。
- (6) 聞きとり困難
- (7) 指定、断定の助動詞は、土地ことばでは一般に、「ジャ」「ヤ」が使用される。ところが、稀に、「ダ」が使用されることもある。
- (8) 順接の接続助詞では、老年が「ケニ」、中年が「ケン」、青年以下が「ケー」を専ら使う。
- (9) 「ヒラケ」の意味が不明。「シンタク」とは、次男が分家する時に言う。「シンタク、ヒラケ」を、「新宅を開いた」と訳した。
- (10) 「戻って」を、「モンテ」と言うのは、土地ことばの特色の一つである。
- (11) 「ツグエ」は、お尻のこと。この語単独での使用は、少ないということである。「ツグエクソ」と連語にして、「お尻にくっつけた糞」を称呼することは、多い。
- (12) 姓
- (13) 「帰ると」を、土地では、「カエルガト」とも、「カエルト」とも言う。
- (14) 2発話が重なって、聞きとり不能。
- (15) ク、[kwa]音が、土地の老年層の発音生活に、生きている。

- (16) この「デ」は、話者が、「標準語デ」の意で、言いかえたものらしい。「それで」と訳出した。
- (17) 「～カトコー～」(～かと、こう、～)のごとく、講演ふうのもの言いは、為政的地位にある話者Aの表現特色であり、土地ことばではない。
- (18) 「ワシノ ス」とは、「私のとっておきの場所」という意味。耳のよく生えている所で、誰にも秘密にしてある場所を、このばかり、「ワシノ ス」と言っている。
- (19) 聞きとりにくいのが、話者の教示を得て、標記のとおりに解した。
- (20) 藁で編んで作った、底の浅い運搬器。てんぐん棒の両端に、これをひもでつり下げ、担ぐ。
- (21) 朝飯を、「アサメジ」と濁音にしているのが、注目される。
- (22) 話者Aの家の前には、段々畑がある。天秤棒でものを担いで「越す」というもの言いは、奥相を、よく表わしている。
- (23) 伯方町では、かつて製塩が盛んであった。塩を運搬したり、船にそれを積みこんだりする人夫役のことを、「シオナカセ」と、言う。
- (24) 聞きとり困難。標記のごとく解して、訳出した。
- (25) 不可能を表わすもの言いは、「エー クワン」(食べられない)が一般的であり、「ヨー クワン」などは、稀である。
- (26) 木浦地区内の小字地域名
- (27) 聞きとり困難。波線部のごとく解した。
- (28) 現在の木浦港のあたりが、「シンバト」(新波止)と称される。
- (29) 祭[maturi]と発音している。「ツ」が[tu]となっている。しかし、派別的な事態ではないようである。
- (30) 木浦内の、ある「峠のふもと」を「トーノ モト」と言っていたが、そのあたりを指し示す地名にもなっている。
- (31) 木浦港の近辺にある「高丸山」。
- (32) 聞きとり困難。しかし、話者Bの教示によって、標記のごとく解した。

- (33) 「ズルナバ」は、ずるずると粘っ、こい茸のことだと言ひ。茸の一種。
- (34) 「イクチ」は、茸の種類の一つ。
- (35) 終止形は、「グドレル」。これは、「崩れる」という意味である。
- (36) 浦戸は、大島の大島の地域名称。
- (37) 木浦内の小字地域名。木浦地区内にあり、木浦港の突き出た半島先端部の集落名。
- (38)(39) どちらも、大島内の町名。
- (40)(41) どちらも、大島内の集落名。
- (42) 「ソネーデモ」は、「ソナイデモ」の音転である。一般に、/qi/ > /ee/ は、稀である。この土地では、/qi/ が相互同化しないのが普通であるが、稀に、[œ:] となることがある。[a:] となることもある。

### 補注

- (1) 「ハイ」は、「もはや」の変化したもの。「ハヤ」とも言う。  
例 「ハヤ(ハイ)行くノ？」(もう行くの?)
- (2) 「キャリアー」は、ミカンを入れる箱型の容器。プラスチック製で、18 kg ほどのミカンが入る。



VI. 高知県<sup>なんごく</sup>南国市<sup>おこう</sup>岡豊町<sup>じょうつう</sup>常通寺島<sup>じしま</sup>・滝本<sup>たき</sup>

収録・文字化担当者 土 居 重 俊

## A. 収録地点とその方言

1. 地点名 高知県南国市岡豊町常通寺島・滝本

### 2. 収録地点の概観

南国市は長岡郡後免町の中心となつて誕生した田園都市であり、昭和34年10月1日に市制を施行している。後免町は野中兼山の開いたところで、この町のほか15の町村が合併されて、市がうまれた。この南国市に該当する地域は、平安時代には土佐の国司が居住したところで、「土佐日記」の著者紀貫之は、現在の南国市国分にやいたをかまえていたためである。国司につづいて守護代が住み、戦国の武将長宗我部元親が現在の高知市のある地に移るまで、土佐の南国市に当たる地域は、政治・文化の中心として栄えたのである。

南国市は土佐のほぼ中東部に位置し、高知市に隣接し、言わば高知市の衛星都市と言つた観がある。交通は至極便利で、高知市との間は汽車・電車で結ばれており、自動車なら大体20分で片道が行かれる。南国市は田園都市の名にそむかず、周囲に香長平野が広がっている。人口は約4万3000人。主要産業は農業で、職業別人口でも農業が首位を占めている。南国市には高知大学農学部のほかには高知工専がある。近く岡豊町に高知医科大学が設置される予定である。

岡豊町常通寺島は純農村で戸数約60、人口約240名。岡豊町の東部に位置している。滝本は高知市と隣接しているが、ここも農村である。

### 3. 収録した方言の特色

#### ① 方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

筆者はかつて土佐方言の区画試論として、高知市を中心とする東ことばと中村市を中心とする西ことばとに二大別し、さらに東ことばを高知地区；甲浦・佐喜浜地区；物部大豊地区；大川・本川地区；吾川・仁淀地区；興津地区；佐賀地区、西ことばを中村地区；北幡地区；持原地区とにそれぞれ下位区分したことがある。以上の地区の中で西ことばに属する中村；北幡；持原は勿論土佐方言的要素は多分に持てているが、徳島や香川や愛媛の方言とては九州の方言とも共通あるいは類似した要素を有している。アクセントも高知市あたりと体系を異にする。その点東ことばが本来の土佐方言を代表していると考えられる。しかも東ことばの中でも甲浦・佐喜浜地区そのほか高知市からへたたる地区は、これまた他県の方言の影響を受けている。結局高知地区の土佐ではもっとも *normal* な方言地区であろう。岡豊断方言は体系的にも高知市方言と逕庭が感ぜられない。甲浦・佐喜浜地区その他の地区とは距離的にも随分へたなっている。

#### ② 音韻上の特色

|     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |   |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|---|
| 'u  | hu  | gu  | ku  | du  | tu  | zu  | su  | ru  | nu  | mu  | pu  | bu  | u |
| 'o  | ho  | go  | ko  | do  | to  | zo  | so  | ro  | no  | mo  | po  | bo  | o |
| 'a  | ha  | ga  | ka  | da  | ta  | za  | sa  | ra  | na  | ma  | pa  | ba  | a |
| 'e  | he  | ge  | ke  | de  | te  | ze  | se  | re  | ne  | me  | pe  | be  | e |
| 'i  | hi  | gi  | ki  | di  | ti  | zi  | si  | ri  | ni  | mi  | pi  | bi  | i |
| 'ju | hju | gju | kju | dju | tju | zju | sju | rju | nju | mju | pju | bju | へ |
| 'jo | hjo | gjo | kjo | djo | tjo | zjo | sjo | rjo | njo | mjo | pjo | bjo | ん |
| 'ja | hja | gja | kja | dja | tja | zja | sja | rja | nja | mja | pja | bja | っ |
| 'wa |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |   |

以上のかかげたモーラ表は、岡豊町常通寺島におけるほぼ40歳以上の人のあてはまるものである。

次にこの集落における40歳以上の人の音声的特徴とあげる。

1. ジ [ʒi] ヂ [dʒi]; ス [ɜu] ヅ [dʒu] ~ [du] いわゆる四つがなを音声学的にも音韻論的にも区別する。
2. チは [tɕi] ち [tɕi] ツは [tɕu] ち [tɕu]。いわゆる濁音の チ、ヅとともに一般に破裂が強く、摩擦が弱い。
3. [gwa] はありわれない。
4. [~d] [~g] の現象が主として語中・語末にあくられるが、語頭にもかすかなくありわれる。
5. /ei/ に該当するものは [ei] であるが、語頭的現象として背 [se:] 姪 [me:] 精出して [se:~daite] などがある。
6. サ行の子音は、[θ] に近い。
7. /u/ に該当するものは [u] であって、[w] ではない。
8. /w/ も円唇性が認められる。
9. 語末の /N/ は、[ŋ] が多い。

### ③ 文法上の特色

1. 「死ぬ」「寝ぬ」の終止・連体形に シヌル・イヌル がある。
2. いわゆる使役の物動詞の「せる」「させる」に当たるものに ス・サス・ラス・ガスが多くあくられる。
3. 可能とあくらす場合 ヌー……スル (例、ユー行く) レレル (物動詞) (例、取レレル) 不可能とあくらす場合 エー……セン (例、エー書カン) がある。

4. 否定回想とよくわかる場合 サ タ の多く使われる。読マザッタ・取ラザッタ など。
5. 禁止とよくわかる場合 ①動詞終止(連体)形+「ナ」②動詞連用形+「ナ」の両方がある。①は上、さうげうな禁止 ②は下、さしい禁止である。遊ブナ・遊ビナ 笑ウナ・笑イナ など。
6. 推量とよくわかる場合 ロー の多くよく使われる。動詞や形容詞や形容動詞の連体形に下接する。泣クロー・着イロー・正直ナロー。ニカーラン という形式もよく使われる。猫ニカーラン・来ルニカーラン など。「にのあはむ」の残存か。
7. 継続態と結果態のけ、きりしている。前者に ヨル または ユー 後者に 来ル または 来 - のよく使われる。降りヨル (ユー) と降ッ ヲル (来 -) など。
8. 断定とよくわかる場合 着 を多く使用する。普通体言に下接する。石着
9. 条件とよくわかる場合 動詞仮定形+ば の形式は普通使用しない。飲シヤ - ・飲 - ダラ・飲ンダラ・飲ムト の諸形式を使用する。
10. 命令とよくわかる場合 やさしい命令としては動詞連用命令を使用する。行キ・書キ
11. 接続とよくわかる場合 順接として キ = ・キ を多く使用する。逆接として ケンドがもっ げう用いられる。動詞、形容詞、形容動詞の連体形に下接する。飛ブキニ・寒イキ・元気ナケンド など。
12. いわゆる終助詞の「ねえ」に該当するものに ノー の多くよく使われる。ソ - 哉 ノ -

#### 4. その他

高知市は他県人や県内郡部の人最近多く流入しており、この点これらの人の流入のかわり少ない岡豊町内方が方言調査地として、より適当であると思われる。constant な normal な方言を使用する地点として岡豊町を選定した。

## B. 表記について

1. 母音のウは、おおむね [u]。Cardinal vowel の [U] よりやや低い位置で調音されるが、音価は極めて接近している。
2. サ行の子音は、[θ] に近いが、サ行は、サ・シ・ス・セ・ソであらわす。
3. タ行の子音は、[tʰi] (or [tʰɨ])。私見によれば [ti] にやや接近することもあるが、[ti] そのものはほとんど聞かれないように思われる。これに対して [tu] は往々聞かれる。(この場合は トゥ と表記。) ツは [tʰu] [tsu] の範囲を示す、チは [dʰi]。[di] はあまり聞かれないようである。ジは [dʰu] [dzu]。[du] は ドゥ と表記。
4. 母音の前、終末に位置する ン は、おおむね [ŋ]。
5. 「言う」については、今回は カウ (買) トウ (潤) などの系列と考え、音素論的に ュウ と表記してみた。
6. 助詞のエについては、たとえば「手へ」などの例があったとしても、テ と表記せず、テエ とした。
7. [~d] [~g] については、多少個人差があり、中には鼻音化の現象がそれほど強くない人もあるが、強弱は表記しづらいので、一律に「ンガ ンダ」の形式であらわした。語頭の鼻音化については問題があるが、今回はすべて語頭にも「ン」と表記した。

### C. 収録内容の概説

1. タイトル こどもの頃の遊び、いたずら、食べ物などの話

2. 録音年月日 昭和51年10月27日

3. 録音場所 田島正実氏宅(南国市)

4. 話し手

田島正実、男、明治29年生、農業、南国市常住、方言保有度やや大。

橋村清澄、男、大正3年生、農業、26歳中支に半年(戦争のため)、方言保有度やや大。

田島敏、男、昭和24年生、会社員、南国市常住、話し好き。

5. 録音環境 良好



こどもの頃の遊び、いたずら、食べ物などの話

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 田島正実 男 明治29年生まれ

B 橋村清澄 男 大正3年生まれ

C 田島敏 男 昭和24年生まれ

A マー タカシ ソノ コンドモノ オリニ オンシモ エカン ゲン  
まあ 敏 その こどもの 折に お前も かなり  
ヤンチャ <sup>ノ</sup>チャ ー ッ タン ガ ソノー ヤンチャ オ シタ コトオ  
やんちゃん坊 だっ た。 ば、 その やんちゃん した ことと  
ンドー ユウヨーナ アンビオ シテ オヤン ガカラ シコタマ  
どう いう ような 遊びと して おやどから しこたま  
ンドゥ カレタトカ (Bソノ) ユウ コトノ キオクン ガ アッ ア  
しかられたとい (Bうん) いう こと の 記憶 が <sup>xxx</sup> あ  
ル コトカラ マー ハナシテ イテ ミヨーカ。 オンシラーノ  
る ことから まあ 話して いて みようか。 お前達の  
ジンダイニャ <sup>ン</sup>ダイタイ ンー ンドー ユウ アンビンガ  
時代 じゃ 大体 うん どう いう 遊びが  
シュ <sup>ン</sup>ガンデ アン <sup>ン</sup>ダラ。  
主 眼で 遊んだのか。

B マー ソー <sup>ン</sup>チャ ノ。 コレ <sup>ン</sup>ガ モー シチャ ー ッ タト ユウ  
まあ そうだね。 これ <sup>バ</sup> もう して あ、 たと いう

コタ ナイ。 ナント ユウ コタ ナイ。 ソノ ウチノ スニ  
 ことは無い。 何と いう ことは無い。 その うさという 菓に  
 ャ オラン。 モーッ タラ ンドコエ ヒンガ クレルマンデ モ  
 は 居ない。 もどッ たら どこへ 日 が 暮れるまで も  
 ンドラン モンヂキ キニ ワリコトワ スミカラ スミマンデ ヨ  
 どりね むめだから いたずらは 隅から 隅までよ  
 ー ヤッ タ モノヨ。(笑) エー コレト サーネー マー オ  
 く ちた ものよ。 ちゅ これと さあねえ まあ お  
 ラー コンナ コトオ シタ ユウテイテ ヒトッガ ユウタラ ソ  
 れは こんな ことを したといッていて 人 が 言ッたり  
 ンナ コトニ スカリヤ ナイ。 ヤッ ちゃーン コタ ナカッタワ  
 んな ことに 扱わりは無い。 ちゅ ない ことは ちゅかッたさ  
 。 ナンデモ。(笑)  
 。 何でも。

A イチバン ンヅカレタ コトワ ンドンナ ワリコト シテ ンド  
 一番 しかつした ことは どんな いたずらと して し  
 ャ カレタラ。  
 いられたのか。

B サー エート アノー ちー ンド イマヨリ ちッ ト ハイイ  
 さあ ちゅと あめ ちゅ じ ど 今から ちゅと 早い  
 ジブンちッ トロカ。 アノー オヤノ<sup>(1)</sup> オノノ トヨカサマノ エ  
 時分だッたら ちゅか。あめ 小野の 豊岡様の え  
 ー アノ イシンダンオ アンガッテ ちー オークノ トコロマンデ  
 えあめ 石 段 と あがッて 中央のあたりの ところまで  
 アンガッテ ヒンダリテニ オークナ テノ マーラン フトイ  
 あがッて 左 手に 大きな 手の まわりは、大きい

クリノ キンガ アッタ。 タンマン<sup>(2)</sup>グリノ。(A ンー) サー  
 栗の木があった。 丹波栗の。(A くん) さあ  
 ホントー シタカラ ミタラ ンドゥサリ ウレチュー。 ソレ  
 ほんとに 下から 見たら どっさり いている。 それ  
 ンガ。 ワローチュー。 アリョ トルゾト ユーテ シンゴニンガ  
 ば。 笑っている。 あれと 取るぞと 言って 四五人の  
 イテ イタケン モト イタケンド アンマリ フトーテ ンド  
 行って 行ったけれど 元へ 行ったけれど あんまり 大きくて ど  
 ーイテモ キエ エー アンガラシ。(A ンー) ソレカラ  
 うしても 木へ 登れない。(A くん) それから  
 アンロー ンドー ヤッタ モンサオト オモーテ サー モッテ  
 あの どうした ものだらうと 思って 竿を持って  
 キテモ トンドカン モンサ キニ シタカラ コータインデ  
 来ても とどかぬ ものだから 下から 交代で  
 イシオ ヒローテ キテ シタカラ グンダン グンダン イショ  
 石を 拾って 来て 下から ぶんぶん ぶんぶん 石を  
 クライテ ソレオ オトスンガシヤ。(A ンー) サー ソ  
 投げた それと 落とすのだ。(A くん) さあ ヤ  
 ノー シタニ イエノ アル コトワ イショ ホーリュ ヒトニ  
 の 下に 家の ある ことは 石と 投げている 人に  
 ヤ キンガ ツカンキニ (笑) クリニ アタッタ トキニヤ  
 は 気が つかねから 栗に 当たった ときには  
 イショ サキニ トバンキニ クリニ アタラザッタ バーイニヤ  
 石は さきに 飛ばねから 栗に 当たらなかつた 場合には  
 ソレオ ゴート トビコエチュイテ シタノ タンドコロノ ヤ  
 それと ずつと とびこえておいて 下の 田所 の 屋

ネエ カンカン カンカン イシंगा キタン残。 サー ソー  
根へ かんかん かんかん 石 が 来たのだ。 さあ そう

スルト オヤンヂンガ ンドゥー ナッ テ キタ。 ンドゥー ナッ テ  
すると おやじ が ど っ なっ て 来た。 ど っ なっ て

キテ サー イカン。 オヤンヂンガ オコッ テ キタゾ。 へ  
来て さあ いけない。 おやじ が おこっ て 来たぞ。 す

ンシモ ニンゲロト ユーテ ソノー ミワ ハイシ ョー ンガー  
ぐにも 逃げようと言っ て その 実は むいているのは

ザンジ フツクロエ イレタケンド インガワ タカンデ オサ  
すぐ 小、ところへ 入れたけれど い ばは 全 く つい

エレン モンヂ キニ ミンナー フターツンヅク インガノ サ  
まえられぬ もめた から ぶんば ニッ ずッ い ばめ 先

キオ オサエテ プッ プー プッ プー アノ イジダンオ ウエ  
と つかまえて ぶっ ぶう ぶっ ぶう ばめ 石 段 を 上

エ アンガッ テ サキラエ コシテ ホントー アセニ ウイテ  
へ ぶっ っ て 向う側へ 越して ほんとい 汗 だくにな

シテ ヨーヨ ニンゲタ コトッ ガ オボエヌ ーッガ ショー  
て やと 逃げた こと を 覚えている ば たいそう

コリャ ンドゥー カレタ。 タマルカ カーランガ ナンボカ ワレル  
これは しかられた。 たいへんだ 瓦 が だいぶん <sup>xxxxxx</sup> われる

ワレタニカーランガ。(笑) ソンナ コトワ モー ショッチ  
われたらしい ば。 そんな ことは もう しょ ちゅ

ユー ヤッ タキニ (A ソー) ヤッ タ モノヨ。(笑) ソル モー。  
う や たから (A うん) や た ものよ。 それはもう。

A マー マエノ オー コンドモワ ワリコトワ イマノ コンドモト  
まあ 前の おお こどもは いたずらは 今の こどもと

チンゴーテ (B ソリヤ) スンゴカ タネヤ。  
そバツ (B それけ) すご かったなあ。

B ソリヤ タシカニ イマノ (A ン) コワ ワリコト ソン  
ソリヤ たしかに 今の (A うん) 子は いたずら <sup>xxxx</sup> せん  
(A ~~~~~) ソナ ワリコトワ センネー。  
せんな いたずらは しないねえ。

A ン オラー ソノ セン トコロニガ ミョーニ モノタランヨ  
うん おれは その しない ところが 妙 に 物足りぬよ  
ニ オモテ コンドモノ ジンダイニヤ モー ピット コノー  
うに 思ッテ こどもの 時代には もう すこし この  
ハナレキッ タ ワリコトオ スルバーノ コー ナニデ コ  
なみはずれた いたずらと するくらい の こう 何 て こ  
ドモノデ アッテ モライタイヨニ オモウガ コリヤ マチ  
ども て あつて もらいたいように 思う の けれど 間  
ンガイン ぢゃ ロカネヤ。  
違いだらうかなあ。

B ン ソラーネー アシモ ソナニ オモウガ ン ウチノ  
うん それけねえ わしも そのように 思う ば うん うちの  
マンゴナンカ アノー アラ ンガッ コーニデ コラ ヒマンジン  
孫 なんの あめ おれは 学校 で けれど 肥満児  
ぢゃ キニ マッ ト ウンドーササナ イカン ユウテ ス <sup>xxx</sup> ウチン  
だから もと 運動させねば いけないと 言ッテ す うち  
デ スッ コンデ アンマリ ソトニデ ワリコト センロー。(A  
です。こんで あんまり 外 で いたずらと しないだらう。(A  
ン) ヒマンジニ ナル。  
うん) 肥満児になる。

C ソー ソー ぢゃ オ。 マコト ケンド イマノ マー アノ セ  
 うん そうだらう。 まことに けれど 今の まあ あめし  
 ン ナツ タネー。 ボクラー ホソイトキヤ マッコト ヤリマクリヨッタ  
 ないようになたねえ。 ぼくなら 小さいときはほんといに徹底的にやめた  
 キ。 イマ モー (B ンー) コノー トナリノ アノー ミヤザキノ カ  
 の 今 もう (B うん) この 隣 の あめ 宮崎の 勝  
 ツトカ マ (B ンー) ヒロユキ マ アノ シモノ ツグオ (B  
 とい まあ (B うん) 広 幸 まあ あめ の 下の 継 夫 (B  
ンー) ミンナーガ アツマツテ イマゴロガ キタラ ドコヤロ  
うん) みんなが 集まって 今頃が 来たら どのか  
 ノ カキガ ウレチューキ ユーテ ホントー カバンオ オイチュ  
 の 柿が うれているかと言つて ほんといに カバンを 置いて  
 イテ ズボンオー ハキカエテ ザンジ イキヨッタガ。  
 ちいて ズボンと はきかえて すぐに 行つてたが。

A オランガ ヤツタンガー ナニヨヤ カツミト マサキト ユウ  
 おれの や。 ためは なんだね 克美と 正樹と いう  
 モンガ オツタンガ アノー ベイコクエ イチュッダ (B アー  
 者が 居たが あめ 米 国へ 行つていた (B ああ  
アー アー アー アー) アノ ヒトノ コニネー (B ンー)  
ああ ああ ああ ああ) あめ 人の 子にねえ (B うん)  
 マサキト ユウゾウガンガ コレゾガ トモダチゾウツタンガ コノ  
 正樹と いうの が これが 友達 だったの この  
 サンニンガ オノオノ オトトオ ツレテ イオキヤ ヒトリヨ。  
 三人が おのおの 弟 と つれて 伊尾木は ひとりよ。  
 キョーゾウダイゾウガ ナイ モンぢゃ キニ。 マサキモ オトトオ  
 兄 弟 が 無い ものだから。 正樹も 弟 と

ツレ オレモ オトトオ ツレテ イテカラ イマノ アノ モーテル  
つれ おれも 弟 と つれて 行ってから 今の あの モーテル  
ノガ ノデキチュウ トコロニ ケンザサンノ タンガ アッタ。  
の できている ところに 健三さんの 田が あった。

(<sup>B</sup>ソ- ソ-) ソノ ケンザサンノ タノ イネオ マイチモンジニ ヒ  
(<sup>B</sup>うん うん) その 健三さんの 田の 稲と 真一文字に 引  
ーチャ ツチエ ツッコミ(笑) ツッコミアッテ ソイツワ コジ  
いては 土へ つこみ つこみごっこをして そいつは こっぴ

ヤント ノドゥカレタワヤ。(笑) ソレト ソレカラ ヒトトッ  
どく いられたで。 それと それから ひとつ

インジョ-ノガ アルニ ノガッコーカラ モンドリニ マエワ  
印象 に あるのだの 学校から 帰りに 前は

テスキンガミオ コー タチキッテ ジャ-ラミタヨナ モノオ  
手すき紙 と こう 断ら<sup>(3)</sup>って 紙テープみたいな ものと

アレワ コーチエ ヒッパッテ イキヨツタンガ マタ ソリヨ  
あれは 高知へ 飛ばして 行っていたの また それと

サイセイシルカ シランガ(<sup>B</sup>ソ-) ンリキエ イッパイ シン  
再製するの しろないの(<sup>B</sup>うん) 荷馬車へ いっぱい 積ん

デニシ ムイテ イキユンガンガ ノガッコーカラ モンドリニ  
で 西へ 向いて 行っているのだ 学校から 帰りに

オンチャン オンシヤルゼヨ エウテ オス ウチニ ソノ タコノ  
おじさん 押してやるよと言っ て 押す うちに その 風の

ジャ-ラニ スルンガ タメニワ ミンナーンガ ソノ ヒキマイ  
紙テープに するの ためには みんなの その 引き抜い

テ コー フツクロエ イレテ(笑) セーカラ ソコンデ ワカレ  
て こう 小いところへ 入れて それから そこで 別れ

ル トキニ キタ オリニ ツイテ クレタキニ オンシラーニ  
 る ときは 来た 折に 押して くれたから お前たちに  
 ナン哉 ツキチンオ ヤルゾ ユウテ ソノ ウチ ジッカ  
 あれだ 押し賃を やらぞと 言ッテ その うち 若干  
 ソノ ソノ 紙 テープと ヒキヌイテ クレテ ソノ ユウタ コ  
 の その 紙 テープと 引きぬいて くれて その 言ッた こ  
 トオ オボエ者 ラー。(B ンー) コリャー スクナイケンド  
 とを 覚えていゝあ。(B うん) こりゃあ すくぬいければ  
 ネヤ オンシラーノ フツクロノソガオ タシタラ ヨケニ ナル  
 なあ お前たちの 小ところの 上 足したら 多ク なる  
 キ。(笑)  
 いら。

B ソレワ  
 それけ

C デキチニ。(笑) ソラ ナカナカ (B ソシテ) ソノ トージニ  
 できている。 それけ なかな (B そして) その 当 時に  
 ソレバーノ コト イエル ヒトワ。(笑)  
 それくいの ことが 言える 人は。

B ンー ンー ソレワ タイシタ モン哉。(笑)  
 うん うん それけ たいした もめだ。

C デキチニ ーネー。(B ンー ~~~~~)  
 できているねえ。(B うん)

A ソー ユウ コトソガ アッ タワヤ。(笑)  
 そう いう こと が あつたで。

B ンー ソレワ タイシタ モン哉。  
 うん。 それけ たいした もめだ。



C ケンド マコトネー ソー ユウ フーニ ユウタ ホーガネー  
けれど (ほんとに)ねえ そう いう ふうに 言った (ほう)ねえ

コドマ オコラレルヨリ もっと キクデ。(笑)  
こどもは おこられるより もっと きくさ。

B ソラー ヤッ タンドコロシガ ナイ。 ワシノ アノ オヤジノ  
それは だに どころではない。 わしの あの おやじの

サトノ オヤジノガ ニョーボノ カキオ シドッ サリ ツク  
里の おやじの 女 房の、柿を どの さり つく

ツチュートコロシデ ソリヤ シヤント ワカイシユノガ ヨル  
っているところ で それは 似た似たことに 若い 衆 の 夜

キテ ソロ ヌスミニ クルキニ ヒトバン シダーマッテ コ  
来て それと 盗みに 来るから 一晩 だまって こ

ッソリ イテ ホーカブリシテ カクレ者 ッタトコロシガ ワカ  
っそり 行て 頬 かぶりして 隠れていたところの 若

イシユノガ シドンドン シドンドン カキオ テギリエー。ン  
い 衆 の どんどん どんどん 柿を もぎ取っている。うん

ンダイブ トツ タノー ユウテ ホントニ イッパイニ ナッタ ジブ  
だいたい 取ったなあと言て (ほんとに) いっぱいに 似た 時

シニ エー モー エーゾ シドッサリ ナッタキニ オーキニ オ  
分に ええ もう いいや どのさり 取ったから ありがとう あ

ーキニ ユウテ カタインデ <sup>xx</sup>ウウチエ コットリ インダトシガ  
りがとうと言て かついで うらへ しゃっかり 帰ったんだって。

ソノ ヌスミヨツタ ワカイシユ ジブンラーノ クミヤト オ  
その 盗んでいた 若い 衆は 自分らの 組だと思

モータンガ シヤント トリアンゲラレテ (笑) バッサリイタ  
ったのが っかり 取りあげられて しまった

ト ユウタト。(笑) マー ソノ ムカシワ ソー ユウ ワリ  
と 言はれたのか。 我ら その 昔 は そう いう いた  
コトワ ヨー シタ モノヨ。  
ずいぶん よく した ものよ。

C マコト ミナ イ ショウ タデネー。  
ほんとに みな <sup>xx</sup> していたねえ。

B コンドモワ ヤリソーナ コトヨ。 オトナニ デモ ワカイシュン  
こどもは やりそうな ことよ。 おとなでも 若い 衆  
デモ ヤリヨウ タキノー。(C ソー) ソラー イマノ コ  
でも やっていたからねえ。(C くん) そらあ 今の こ  
ンドモト ズイブン ナニ ガツ タゼヨ。  
どもと ずいぶん ぶがったよ。

A オラモ インマ サトシノ <sup>(4)</sup> ンダンモ ヤッ タニ ガネヤ。 ミソコ  
おれも 今 教 の 段も やったがなあ 見底  
<sup>(5)</sup> ンダニノ ソラエ イマー ミチンクノ ナニ アニシガ  
谷の 上へ 今 雄夫の家の なんだ 兄が  
ノチニヤ ヨーシニ イタキニ キョー ンダイノ ウチニ 弟 ケンド  
後には 養子に 行ったから 兄弟の 家 だけけれど  
ゴンドモノ ジブンナ モンタ キニ アニラート イッ ショニ  
こどもの 時分だ ものだから 兄たちと 一緒に  
ソナー ニッ ケイオ ホ ホゼクリニ イタワヤ。(笑)  
その 肉桂皮 <sup>xxx</sup> ほ ぼじくりに 行ったよ。

C ニッ ケイワ ヤッ タデー。 アノ ホラ ナカグミニ トーフ  
肉桂皮 やったなあ。 あの ほろ 中 組に 豆腐を  
ツクリユー オバサンガ オルロー。(B オー オー) アコエ  
つくっている おばさんが 居るだらう。(B おう おう) あそこへ

ハジメノ ウチャ ネー ミナ テデ ホラ コチャ コチャ ホッテ  
はじめの うちねえ みんな 手で けら こら こら 揺って

ホッソイ ネオ ヤリヨッタケンドネー シマイニャ ソノ オバ  
細い 根を やっていたけれどねえ (まには その <sup>xxx</sup>)

オバサンが ミミガ トーイト ユウ コトニ ナッテ オーチャ  
おばさんが 耳が 遠いという ことにおて 横着

クニ クワカラ ノコギリオ モッテ イテ ヤリヨッタトコロ  
に 鋏から のこぎりを 持って 行って やっていたところ

マタ アノ ウエノ ホラ クボサンカネー アレワ ( <sup>B</sup> オー  
また あの 上の けら 久保さんかねえ あれば ( <sup>B</sup> おう

オー クボサン) アノ オンチンガ クワオ ツカイヨー コノ  
おう (久保さん) あの おじさんの 鋏を 使いた この

キガ アッテ カゲルゼヨ ユウテ ケシカケル モン若 キニ  
木が あって 陰になると 言って けしかける もめだから

( <sup>B</sup> ア ) ミンナーガ エツニ イッテ ヤリマクリヨッタトコロ  
( <sup>B</sup> ああ ) みんなが 悦に 入って さかんにやっていたところ

ガ ホントー トーフ ヤリヨル オバサンガ カマオ モッテ  
の (ほんとに) 豆腐を やっている おばさんの 鎌を 持って

オワエテ キタ ユウ。 マリチンクノ ヤマエ コケニゲシタ  
返りかけて 来たという。 真理ちゃんこの山へいらもくさんに逃げた

コトオ (笑) ヨー ワスレン。(笑) マッコト ニッケイオ  
ことを 忘れることができない。 真実 肉桂を

ムカシ アーモ ネーヨブ アレオ カライ ネオ カジリモッテ  
昔 ああも 根を あれば かしい 根を かじらなから

タベヨッタキネー。 ケンド カンガエテ ミタラ。  
たべていたからねえ。 けれど 考えて みたら。

B ソー エウ モノワ (C ネー) フーブツノ<sup>(6)</sup> ナリモンガ ビワ  
 そう いう ものは (C ねえ) 風物の なりものが びわ  
 オ チンギル カキオ チンギル。 ソラ ソノ オコッテ オワ  
 と もぎ取る 柿 を もぎ取る。 それは その おこって 違っ  
 エテ クルガ ニゲルンガ オモシローテ タマラン。(A ソー ソー)  
 かけて 来るのが 逃げろのが おもしろくて だまらぬ。(A そう そう)

C ソリヤ ソー オ。 イー。  
 それは そう だろう。 いい。

B コンドマ アシガ ハイイ モンガ キニ。(笑) (A       )  
 こどもは 足 が 早い ものだから。

C イマノ モナ マツコト センネー。(B セン セン ソナコタ  
 今の 者は ほんとに しいねえ。(B しい しい そんなことは  
セン セン) ソナ コタ ネー。  
しい しい) そんな ことは ねえ。

A イマノ コンドモワ コノー ヨリアツマツ テ ガ ネー トモニ  
 今の こどもは この より集まっ た だ ねえ ともし  
 イタン ドウ ラオ シ トモニ アツブト エウ コトオ センネ  
 いた ずら と し ともし 遊ぶ と いう こと と しいね  
 ー。(B センネー) ン。  
 え。(B しいねえ) ん。

C ンー イマノ モナネー マコト ソトエ デテ アソビヨッタラ ベ  
 うん 今の 者はねえ 真実 外へ 出て 遊ん でいた ら 勉  
 ンキョーガ オクレルノ ナンノ エウテネー オヤニ エワレルカ  
 強 が おくれるの 何の と 言っ てねえ 親に 言われるの  
 シラン マツコト タスイ。  
 しら ほんとに 気が足りない。

A ホンデ ソー エウ トコロカラ コノー オー レンタイカント  
 それで そい いう ところから この おお 連帯感と  
 エウ モゾガ ツチカエテ マエノ ヒトワ イケオラセザッタロ  
 いうもの が つちかわれて 前の 人 はいけていなかっただらう  
 か<sup>(7)</sup> オモワ。 イタン ドラ シテモ イッ シュ = (笑) イタ  
 かと 思うよ。 いたずら しても 一緒に いた  
 ら ドラ オ スル。  
 ずら と する。

B マー シンゴニン (A<sub>ン</sub>-) ングルーブンデ ヤッタ モノヨ ミンナ。  
 まあ四五人 (A<sub>うん</sub>) グループ で やた じめよ みんな。

C ケンド マツ コト セン ナッタネー。 モー ヒットツダケ ボクモ  
 けれど ほんとに しなく なったねえ。もう ひとつだけ ぼくも  
 オボエタケーケンドネー。 モー ソレコソ ソー マー イマカラ  
 覚えているけれどねえ。もう それこそ そう まあ 今から  
 シュ<sup>xx</sup>ー ソツキョー<sup>xx</sup> シテ シュ<sup>xx</sup>ー = ネンカ シュ<sup>xx</sup>ー シュ<sup>xx</sup>ーネンバ  
 十 卒業して 十 二年の 十 十年くら  
 ー マエヨ。 ソツキョー スル トシノ マエ コーコー ニネンノ  
 い 前よ。 卒業する 年の 前 高校 二年の  
 トキヤッタガネー。 ボカー アノー バスケット ヤリヨッタ  
 ときだったのねえ。 ぼくは あの バスケットとやっていた  
 キー バスケットブイン ミンナーガ サンネンガ ツレテ アノ  
 から バスケット部員 みんなが 三年生の(れい)つれてあの  
<sup>(8)</sup>  
 トーチノ コンピラサンエ (B<sub>ン</sub>-) アコエ イテネー。  
 十市の 金比羅さんへ (B<sub>うん</sub>) あそこへ 行ってねえ。  
 カキオ ソレモ カキガ アル ユウテ イテ イタラ カキト  
 柿を それも 柿の あると 行って 行って 柿と

ナシガ アッ テネー。(B ンー ンー) ホントー ミンナーガ  
梨が あつてねえ。(B うん うん) ほんとに みんなが

イテ ブインガ イチー モン若キ イレル モンオ モッ  
行って 部員が 行っている ものだから 入れる ものを 持

テ ナイキ (B ンー) ホンデ ブインノ ハイリダチノ イチ  
て ないから (B うん) それで 部員の はいったばかりの ー

ネンノ トレパンオ ヌゲ ユウテ ヌガイチイテ ソレオ ア  
年(生)のトレパンを 脱がと言つて 脱がして置いて それを ち

ノ カズラデ ククッ テ ソレエ ナシカラ カキオ タンマリ  
め のずらで くくつて それへ 梨 から 柿を たんまり

イレテ ヤリヨッ タトコロが ソノマエ ソコナ ヘンオ イキユ  
入れて やつていたところの その前を そのの あたりを 行つて

オン若ンニ オコラレテ (笑) マー ウ ハヨーニ ミナニ  
おじさんにおこられて まあ<sup>xx</sup> 早く みんな逃

ゲタケンド イチネンノ ガーフ ヒトリ ソノ パンツダケノ ガガ  
げたけれど 一年の は ひとり その パンツだけの の の

アノ コエオ ホラ タメルミタイニ シ若ー ウジャイカ。  
あの こやしと ぼろ ためるみたいにしてある はないか。

(Bアーアーアーアー) ミズオ ヤッ。アレエ トビコ  
(Bああ ああ ああ ああ) 水と 入れている。あれへ 飛びこ

ンデ ツカマッテ ホラ。(笑) アクルヒニ ミンナーガ コー  
ンで つかまつて ぼろ。 明るる日に みんなが 校

ヲー シツエ フケイ ドーハンデ ヨバレテ モー ナー ンモ  
長室へ 父兄 同伴で 呼ばれて もう

イヨイヨ シボラレタ ヨトオ ヨー ワスレン。(B マー)  
たいそう しぼられた ことを 忘れることができない。(B まあ)

ミンナー ケンド ソノ トージノ レンチューワ ケッ コンシタ  
みんな けれど その 当時の 連中は 結婚した

ケンドネー ハヤ。(B ンー ンー ンー) ホンデ アツマツ タラ  
けれどねえ ばやく。(B うん うん うん) それで 集まったら

ネー カキノ コロガ キタラ ソンナ ハナシガ デラー。  
ねえ 柿の 頭が 来たら そんな 話が出るよ。

B ンー ンー ソラ モ コンドモノ トキノ ワリコトシタ ンドカ  
うん うん それはもう こどもの ときの いたずらした しか

レタ コトワー ソノ ズンガイ インショーニ ノコル モンデワ  
れた ことは その 存外 印象に 残る ものでは

ソレ。(A オレ)  
それ。(A おれ)

C ソー ケンドネー アノー コー ワリーヨーニ オモワンガネー  
そう けれどねえ あの こう 悪いように 思わないかねえ

(笑) エー オモイデミタイニ ノコッテネー。  
よい 思い出みに 残ってねえ。

B ソノ ソー オモシローテ タマラン ヤツチュー。(C 笑)  
そう おもしろくて たまらぬでや ている。

A オラー ソコカラ ソナイ ンダンタイ セイカツ<sup>(9)</sup> ショ カイジン  
おれは そこから そのように 団体 生活 社会人

トシテノ セイカツ<sup>ガ</sup> マエノ モノニワ ツチカワレテ <sup>xxx</sup>キテ キ  
としての 生活が 前の 者には つちかわれて 来

タ トコロニガ アルト オモウ。 ソリャー トキト バーイニ  
た ところが あると 思う。 それ 何時と場合に(よって)

ワ ムシクリオーテ ソンデノ チンギレルホンド ケンカモ ス  
は ぬつかみあって 袖の らぎれるほど けんかもす

ルケンド スング = ナオ、テ (B ソー ソー ソー ソー)  
るけれど すぐに なる、て (B そう そう そう そう)

イッ ショ / コ = アンビ イッ ショ / コ = ワリコトオ シタ  
一 緒の子と 遊び 一 緒の子に いたずらと した  
キ = ネー。  
からねえ。

B ソー ワシラーモネー エー コートーショ ーノガク スムマシデ  
うん わしくもねえ ええ 高等 小 学 が すむまで  
エー イマノヨーナ フクワ ナカッ タカラ キモノノ キャ ッ タ  
ええ 今の ような 服 は ずかったから 着物 だった  
。 (C アー) ソデワ イッ トウ モ チノギレルキニ オカー  
。 (C ああ) 袖 は いつ も らざれるから 母  
= ヌーテ クレ ユウタラ ノヅカレルキニ (笑) アンゼン  
に 縫って くれと言ったから しかれるから 安全  
ピンデ ノギッ チリ トメチョ ッ タ。(10) (笑) ワリコトスル ケン  
ピンデ きつり とめていた、 いたずらする けん  
カスル トキニ、ー アンゼンピン ノケヲ イテ (笑) ソノ  
かする ときには 安全 ピンと のけておいて 袖  
デ ノケヲ イテ ムシクリオーテ ヤッ タ。(C ア <笑>) セカラ ス  
と はずしておいて ひっかきあって やった。(C ああ) それから す  
ンダラ マタ アンゼンピンデ トメテ。(C エーエ) ヤッ タ  
んだら また 安全 ピンで とめて。(C えええ) できた  
モノヨ。(11)  
ものよ。

A クイモノエ ウツッ テ ミヨーカ。(B ソー) コノドモノ  
食物へ ちって みようか。(B うん) こどもめ



オリノ クイモノワ ショーワノ ニンゲントワ オハナシニ ナ  
折の 食物は 昭和の 人間とは お話にな  
ラナーネヤ。  
らないなあ。

B ソルヤ トテモ セン  
それは とても。

A オンシラーモ イチバンガーワ カライモカ。  
お前も 一番のものは さつまいか。

B ソルヤ ソーヂャ、 モー センソーノ イチバン ソノー  
それは そうだ。 もう 戦争の 一番 その  
ジブンラー ケッキニ ハタラキユー トキニャー モー ショク  
自分らが 元気に 働いている ときには もう 食  
リョーノ イチバン ナイ トキニ 若 ッタキニ ソラー モー  
糧の 一番 多い ときだから それは もう  
アノー イモ メシバツ カリ クウ ワケニ イク モンカ。 イ  
あの 芋と 飯ばかり 食うわけに いく ものか。 芋  
モ ハブン クワニャ イカント。  
と 半分 食わねば いけないだつて。

A ソレンガー コドモノ ジブンニャー カライモオ フツクロエ  
それが こどもの 時分じゃ さつま芋と 小ころへ  
イレテー ホンナラー ナニカ ソイト カジッ テ ワリコトシ  
入れて そんなら 何か それを かけて いたずらし  
タ クミカ。  
た 組か。

B ソー ソー。 ヤッ タドコロヨ。 モー アノ モーッテ キタ  
そう そう。 やつ たとも。 もう あの もどつて 来て

チ ソー オー アー ワリコトシテ モーッ ちー キ ハラ  
も ちー おお あの いたずらして もどっているから 腹が

へっ ちゅー ケンド モーッテ メシオ クウヨーナ コトワ ンデ  
へっているけれど もどって 飯を 食うような ことは で

キル モンカ。アー イイモミタイナ ナカッ タラ ホントー ン  
さる ものの。ああ<sup>xx</sup> 芋みたいな(ためでも) 芋かたら ほんとい

ゲンダングダ フンダ。(笑) イモンガ ナイト オモテ。ハラ  
ドだんだ 小んだ。 芋 が 無いと 思って。 腹

ンガ へっ ちゅー モンダ キニ。ワリコト~~~~~  
が へっている ものだから。いたずら.....

A ソレカラ オンシラーワ ソノー タイモメジトカ アルイワ ア  
それから お前ならは その 里芋飯とか あういは あ

ノー ンダイコノ ハオ キッタ ナメシト (B ンー ンー)  
め 大根の 葉を 切った 菜飯と (B うん うん)

エウヨーナ モノオ クタカ。

いうような ものを 食ったの。

B ソリャ クタンドコロヨ。(A ~~~~~) ワシラー ソノ  
それは 食ったとも。 わしらは その

タイモメシガノー ンドーモ ヒエタラ ヌクイ ウチワ エー  
里芋飯 がなあ どうも ひえたら 暖かい うらは よい

ケンド タイモメシガ ヒエタラ ンドーモ ニンガテンデ  
けれど 里芋飯が ひえたら どうも にが手で

ウチノ オバーンガ アライ サイクンチャ モンチャキ オーケナ  
うちの ばあさんが 大ざ、マなヤリ方だ ものだから 大きな

タイモノ マルツタンガ コロツ コロツ シユー。 ソリョ  
里芋の まるいのが ころ、ころ、 している。 それを

サデノケ サデノケ メシバツカリ ヨソータラ オカーンガ  
かきのけ かきのけ 飯ばかり 旦那様 母

オコッテ ホントー アトノ モナ タイモバツカリ (笑)

おこつて ほんとうに 最後の者は 里芋ばかり

クワナ イカン ユウテ オカーニ 旦那様 カシタ コトオ ソラ  
食わなきゃいけないと言って 母に しかされた ことを それは

モー エー ワスレンキニ。(笑)

もう 忘れられないから。

A マー ( <sup>B</sup>クタン ドコロヨ。 ) ソンナラ オンシラーノ ジンダイ  
まあ ( <sup>B</sup>食ったとも。 ) それなら お前さんの 時代

ト オララーノ ジンダイトノ マー クイモノワ ヨケー

と おれならの 時代との まあ 食物は 上げい

チガワナンダ。

ちがわなかつた。

B ソー アマリ チンゴーチョ ランロート オモウネー。( <sup>A</sup>~~~~~ )

そう あまり 旦那様 ていないだらうと 思うねえ。

ショー - ショー - モ。

少 少 少。

A オララーモ カライモンガ モー ンギッ チリノ ナニヨ ショー

おれならも さつまいもが もう いつもの あれだ 常

ショクミタイナ モンギッ ツタ。

食みたいな もめだつた。

B ソー ソー フー ソー。 モーッテ モーッテ キタラ ンガッ

そう そう そう そう。 もどつて もどつて 来たから 学

コーカラ モーッたら アサ イモンガ ナカッたら アサ ンダ

校から もどつたら 朝 芋が 無かつたら 朝 日

ンダンダ フンダワネ。 ヒンダリイ モンぢ キニ。  
だんだ ふんだね。 ひもじい もめたから。

A ソノ メンワー (B ~~~~~) ショ - ワノ - オー セイネンワ  
その 面 は 昭和の おお 青年は  
メングマレチョ ラネヤ。  
恵 まれていらなな。

B ソリヤ ウンデイノ ソーイ ~~~~~ ン - 。  
それは 雲泥の 相違 ----- うん。

A オソラク ショ - ワノ セイネンデ カライモオ クタ モノワ  
おそらく 昭和の 青年 中 さつまいもと 食べた者は  
ナイト オモウゲネー。  
無いと 思うがねえ。

C ン - ショ - ショクニ メシオ クウ イヤ アノ カライモオ クウヤ  
うん 常食に 飯を 食う いや あの さつまいもと 食うと  
ユウ コトワ ナカッタネー。 ケンド カエッテ キタラ ボ  
いう ことは 無いがねえ。 けれど 帰って 来たら ぼ  
クラ - モ ゴドモノ トキ ユウタラ ツリゾーケ<sup>(12)</sup> ムイ ム  
くくも こどもめ とさと言ったら 吊りぞうけへ <sup>x x x</sup>むし む  
イチュ - イモオ ポケットエ ヒットツ イレテ クチエ ガリ  
してある 芋と ポケットへ ひとつ 入れて 口へ ぱり  
ット カジッテ ヤマエ シュットノ アンビニ イキヨッタゼー。  
つと かわって 山へ さつとね 遊びに 行っていたぜ。  
(B ン - ン) セーカラ アノ - アキオ ヤリダイテ イマト  
(B ン - ン) それから あの 秋のどかれをやりだして 今と  
チゴ - テ ムカヤ オンカッタキニ ヒャクショ - ノ イエワ  
らびって 昔は おそかったから 百姓の 家は

ヨル <sup>(13)</sup> オッ<sub>xx</sub> オク<sub>xx</sub> ユウタラ。ハラシガ ヘッテ キタラ (B ンー) ソレコソ  
 夜 仕舞うと言った。腹が へて来たから (B うん) それこそ  
 ンー オバーサンガ ホントー イドノ ウエ ツッ チュー ソー  
 うん おばあさんの ほんとに 井戸の 上に つてある ぞ  
 ケカラ オーキナ ニギリメシオ (笑) コシラエテ クレテ  
 るから 大きめに ぎりあげて こしえて くれて  
 メンドイ ヤツぢー ユウテ ウメボシカラ サトーオ チョッ  
 めんどくさい 奴だと 言て 梅干から 砂糖と しょ  
 チョト ツケテ クレヨッタガ。ソレオ タベヨッタキネー。  
 しょと つけて くれていたが。それと たべていたからねえ。  
 (B ンー) イマ我 マコト タベロトモ オモワン。アン  
 (B うん) 今では ほんとに 食べようと 思わない。あん  
 ナ モナ ハラガ ヘッ チョッ テモ。  
 な ものは 腹が へていても。

B ショ<sub>xxx</sub> ショ<sub>xx</sub> クセイセクワ セイカトルワ ズイブン カワツタノー  
 食 生活は ずいぶん 変わったなあ  
 。  
 。

C ンー マッ コト (B ソリヤ) イマー マコト イモ ムイヲ ッテモ  
 うん ほんとに (B それは) 今では 真実 芋と 小かいていても  
 メヅラシイ トキヤッ タラ ヒットツバー タベロート オモワン  
 珍しい ときだったから ひとつくらい 食べようと 思わない  
 ケンド<sup>(14)</sup> (B ンー) マッ コト タベン モノネー。  
 けれど (B うん) ほんとに 食べない ものねえ。

B オンぢ ンラー ソエカラ エンソクニ イク ユウタラ タマン  
 おじさんなんか それから 遠足に 行くと 言ったから 卵

ゴンドモ インデテ モロータラ モー ホントー サイコーゾゲ  
でも ゆてて もらたけ もう ほんとに 最高だ

チャタキニ (C ソーダ オネー.) コノゴロノ オマヤ  
だから (C そうだらうねえ。) このごろの あなた

オンキ シンクノ マンゴラー タマンゴンヂ ユウタラ マイニ  
おじさんとこの 孫らけ 卵 だと 言たけ 毎

チヒニチ。(笑) アノ コナインダ イシニ アノー コラー コノ  
日。 あの この 前 医者に あめう これは この

アノー タマンゴ ソローンド クワサレン。 エー シーニ  
あめう 卵 は それほど 食べさせていけない、ええ 週に

イクツヤランヂ。(Cソリヤー<笑>) セインデンセラレタツゼ。 ヒマン  
いくつやらだと (Cそれは) 制限せられたんだけ。 肥満

ジャカラ。(Cアーハ) ソノー エイヨー トリスンギタラ。 ソ  
児だから。(Cああけ) そのう 栄養と 取りすぎたら。 そ

レバー ショーショク タマンゴンドモ クイユーカーアノー。 ズ  
れくしい 常食に 卵 でも 食っているからなあ。 ズ  
イブン カワツタゼヨ。

いふん 変たよ。

C マコト ケンドネー イマー マッコトイ <sup>xx</sup>ボクラーガ ケンド コ  
真実 けれどねえ 今 ほんとに ほくらが しかし こ

ドモノ トキラーモ ソーヤツタデー。 モー アノー マツリト  
どもの ときなども そうだったぜ。 もう あめ 祭と

カ ユウタラ ホラ オイシイ モンオ タベヨツタケンドネー。  
か 言たけ ほくら おいしい もめと 食べていたけれどねえ。

ソレ (B ン) イガイワ コドモノ トキマ マダ ナカッタデ  
それ (B うん) 以外は こどもの ときは まだ 無かったぜ

一。 ソンナ ソンデ オキヤ クラーガ ウント ウレシカッタ。  
。 そんな それで 宴会などの うんと うれしかった。

ホラ。 ( <sup>B</sup> ソラ ソーヨ。 ) サーチノ アノ ウマイ モン  
ほら。 ( <sup>B</sup> それは そうよ。 ) 皿 鉢の おめ うまい もの

バツカシ クイヨッタガガ オツ タキ=ネー。

ばかり 食べていたのが 居 たからねえ。

## 注

- (1) 神社名。南国市岡豊の岡豊は、もとはこの神社のように「豊岡」と書いていたようである。
- (2) /b/ > /m/ の例。ほかに ヌッピン (別嬪) ショーブ (屏風) などがある。
- (3) 語源は「蛇腹」と言われる。
- (4) 「敏と同じようなエピソード」というような意味。
- (5) 地名。
- (6) コーブツノとも聞こえる。
- (7) 意訳すれば「こういう考え方でやったのではないだろうか」となる。
- (8) 地名。
- (9) タンタイセイカツ とつづけて書くことも考えられる。むしろこの方が適当か。
- (10) チャーッタとも聞こえる。
- (11) ヤタモノヨで「要領よくやった」「うまくやった」とも訳せる。
- (12) 夏季の飯ご。家の中の涼しい所へつるすのでこの名がある。
- (13) オスとも聞こえるが、オスでは意味をなさぬ。
- (14) 論理的には「オモウケンド」であらう。



Ⅶ。長崎県<sup>にし</sup>西<sup>その</sup>彼<sup>き</sup>杵<sup>きん</sup>郡<sup>かい</sup>琴<sup>かい</sup>海<sup>かい</sup>町<sup>お</sup>尾<sup>と</sup>戸<sup>ご</sup>郷<sup>う</sup>

収録・文字化担当者 愛宕八郎康隆

1. 地点名 長崎県西彼杵郡琴海町尾戸郷

2. タイトル 「青年宿の話」, 「ペーロンの話」

3. 録音年月日 昭和52年1月23日

4. 録音場所 平尾忠太郎氏宅客間

5. 話し手

| (氏名)  | (性) | (生年)  | (職歴・役職歴)                               | (居住歴) | (言語的特徴)        |
|-------|-----|-------|----------------------------------------|-------|----------------|
| 平尾忠太郎 | 男   | 明治31年 | 農業<br>小口実行組合長<br>区長, 農業委員<br>PTA会長 等総代 | 外住歴なし | 方言保有度<br>かなり高い |
| 平尾 政博 | 男   | 昭和23年 | 農業                                     | 外住歴2年 | 方言保有度<br>かなり高い |

6. 録音環境

同席者は、司会者の平尾美和子と愛宕の2名。録音場所は、平尾忠太郎氏宅客間で、静かで落ち着いた環境で、録音環境として良好であった。収録時の雰囲気は、堅さもなく、打ちとけた気分で、会話の進行状況もスムーズであった。

7. 収録地点の概観・収録した方言の特色などについては、『方言談話資料(2)』を参照。

# 1. 青年宿の話

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 平尾忠太郎 男 明治31年生まれ

B 平尾政博 男 昭和23年生まれ

A ソルカラーン シェイネンナ アリヤ ナーンジャッタ トナ。  
それから 青年は あれば 何だったのまね。

アノー シェイネンヤドガ アッテ オッドッガ イク ジブン  
あの 青年宿が ほら 私たちが 行く 頃が  
ガ シェイネンヤドヤッタ ト。  
青年宿だったんよ。

B アー。  
ああ。

A ソシター <sup>(1)</sup>ソレ イッ トキャ サケバ イッシュー モッテ イ  
そして それに入る 時は 酒を 一升 持って 行っ  
タター  
て

B アー。  
ああ。

A ソシテ タノデー イレテモロテ ソシテ コツキャ ター。 (   
そして 頼んで 入れてもらって そして 小使い よあ。

B アー ) モー。  
ああ ) もう。

B タノデー イ<sup>xx</sup> イレテモライヨッタッ ター。  
頼んで 入れてもらっていたんだねえ。

A タノデー イレ<sup>(2)</sup>オッタ ト。  
頼んで 入れていたんよ。

B オー。  
おう。

A アー。  
ああ。

B モー イマワ ヒャーッテ クレロッテ イワンバジャン モンナ  
もう 今(の時代)は 入って くれて 言わなければだものねえ。  
ー。

A アー ソースットユート ソン ジブンニー ナンスレバ ソノー  
ああ そうするというと その 時分に 何すれば その  
オー<sup>(3)</sup> イー エントヤッタ。 アノー モー<sup>(4)</sup> ウエノ モンノ  
おう 言うことができなかった。 あの もう 上の 者の  
コター シェイネンガシラン ユー コター モー ジェンブ フ  
ことは 青年頭の 言うことは もう 全部  
クジューシェンバヤッタ モンノー。  
服従しなければいけなかったものねえ。

B (笑)

A ヤカマシカッタ ト。 ソリヤー。  
うるさかったんよ。 それは。

B オー。  
おう。

(5)  
A ワッカモンバナシットバ ヤラレオッタッ タ。 ( B アー。 )  
若い者離しというのを やられていたんよ。 ( ああ。 )

ワルカ コト スレバ。  
悪いことをすると。

B アー。  
ああ。

A アー。 イマノ アノー ムラハチブテ ユー カナ。 ( B アー。 )  
ああ。 今の あの 村八分 と言うかね。 ( ああ。 )  
アルヲー。 ソギャーン ゲンカクカッタ ト。  
あれを。 そんなに 厳格だったんよ。

B オー。 ウン。  
おう。 うん。

A ソッデー コリャ モー ダイタイー ソノ オトコバツカッヤッ  
それで これは もう た"いたい その 男ば"かりだった  
タ ッタ。 ( B アー。 ) ダンシバカッノ ( B アー ) ヤドデ  
んた"よ。 ( ああ。 ) 男子ば"かりの ( ああ ) 宿で。  
ー。 ソシテ ソコデ ソロバンヲ ケイゴシターリ  
そして そこで そろばんを 稽古したり

B <sup>(6)</sup>  
ンー。 ソンナロ オ  
うん。 それでは

A ソシテー ツナ アノー ナワヲ ノータリ ノー。  
そして 綱 あの 縄を なったりねえ。

B オー。  
おう。

A タワラワ ジェンブー ソノー ナワデ クビランバジャッケン  
俵は 全部 その 縄で くくらなければ"た"から

ナワデ クビッテ シッタイ シテ ソシテ ソン エー シェイ  
縄で くくって したりして そして その ええ 青

ネンヤドオー コジンノ イエヲ コドンガ オラン エット ソン  
年 宿を 個人の 家を 子供が いない あまり そう

シェイシェキノ ワルー ナカゴトアル オヤジノ オツ トコ  
成績が 悪く なさそう な 親爺が いる 所

ルバ (Bウん) エロテ ソコバ ソーダンシテ (Bオーン。<sup>(7)</sup>)  
を (うん) 選んで そこを 相談して (うん。)

ソシテ アンマールー ヤドナンテ ユーテモ ソーン ンー  
そして あまり 宿賃と 言っても その うん

<sup>(8)</sup>  
ヤルオラン。 ンー。

やっていた。 うん。

B ヤドワー モー ベツニー アガーン コーミンカン ナンノノ  
宿は もう 別に あんな 公民館 なんかの

クラブノ アッジャ ノーシテ  
クラブの あれでは なくて

A ンー ナカ ト。  
うん ないんよ。

B アン フツーノ イエ。  
あの 普通の 家。

A アー。 フツーノ イエバ。  
ああ。 普通の 家を。

B アー。  
ああ。

A イチバン オッドッガ イッタトガ アノー アギヤントヤッタ。  
一番(はじめに) 私たちが 入ったのか あの あんなのだった。

アン ウラカミノ イエ。

あの 浦上の 家。

B アー <sup>(9)</sup> エイジー

ああ 栄治

A <sup>(10)</sup> カズヨシノ イエ。

一芳 の家。

B アー ハー ハー。

ああ はい はい。

A ソルカラ ニバンメガ <sup>(11)</sup> フキヤゲジャッタ。

それから 2番目が ふきあげ だった。

B オー。

おう。

A ソケ イタテ ソシテ イレテモロテ。 <sup>(12)</sup> ドー モー シェイシェ

そこへ 行って そして 入れてもらって。 どうして もう 成績の

キノ ワルカター ソン ワッカモンバナシバ ヤラレオッタケン。

悪い者は その 若い者 離れを やられていたから。

B オーン。

うん。、

A ナッダケ ~~~~~ <sup>(13)</sup> ソシテエテ コノー アミゲガ アッタケン ノ。

なるだけ ~~~~~ そして この 網上げが あったからね。

B アー。

ああ。

A アジェアマテ アミノ。

鰻 網って 網の。

B アー。

ああ。

A ソースット アサカラ ヨジニャ オケンバヤ モン。 ソケ ト  
そうすると 朝早くから 4時には 起きなければいけないんだもの。そこに  
マリフードカントユート ソノー ヒョット デー エズ。  
泊りこんでおかないというとその 急に 出られない。

B アー。  
ああ。

A ソリカラ アノー ナニモ ショットッ ター。 ショーボーノ  
それから あの 何も していたんだよあ。 消方  
の 何も。  
ホーノー ナニモ。  
方の 何も。

B アー シェイネンデー。  
ああ 青年で。

A シェイネンデー。  
青年で。

B オー。  
おう。

A アー。 ソッテ オスワ ヤグラヲ カイテ アリヤ ムカシカラ  
ああ。 そして 後には 櫓を 組んで あれば 昔から  
ヤグラチュー モナー アッタ ツタイノー。  
櫓というものは あったんだよねえ。

B ンー。  
うん。

A ソコニモ ネオッタ ツタイ。 アスコノ<sup>(14)</sup>ー エー ヒヨシノ ハ  
そこにも 寝ていたんだよ。 あそこの ええ 日吉の  
ナエ イッチョー。 ソリカラ アッチノ<sup>(15)</sup> アン シェドノ ハミヤ  
端に 一つ。 それから あっちの あの 瀬戸の 浜に



ー イッチョー (Bウん) ヤグラバ タコー キャーテ サー。  
ーっ (うん) 櫓を 高く 組んで ねえ。

B アーン アン フツ ヤグラワ フツノー アゲン アミダナン<sup>(16)</sup>  
ああ あの 普通 櫓は 普通の あんな 網棚の  
ゴトアットバ ナー。  
ようなのを ねえ。

A イーヤー。 マット タケン タコー  
いいや。 もっと 丈が 高く

B アー エー。  
ああ ええ。

A ニジョーモ サンジョーモ。  
2丈も 3丈も。

B アー。  
ああ。

A ソシテ タタミノ サンミヤバカーリ スカルッゴトー シテ  
そして 畳が 3枚ばかり 敷かれるように して  
ナー。 ウエー。  
ねえ。 上に。

B ンー。  
うん。

A ソシテ ソレニヤ ヒケシテ ユーテ モー ソノ タタク モン  
そして それには 火消しと言って もう その たたく 者と  
トー

B アー。  
ああ。

A ソシテ タゴバー アノー ミツタゴー ヨッツバカーリ ソノ  
そして 担桶を あの 水担桶を 4つばかり その  
ー ウエトツタッ サ。  
埋めこんでいたのよね。

B ンー。 ポンプン ナンノワ ナカッタ トター。  
うん。 ポンプの 何のは なかったんだねえ。

A ポンプワ ジェンジェン ナカ。 オスワ ポンプバ コータ<sup>(17)</sup> コ  
ホンプは 全然 ない。 後には ホンプを買った こ  
ター アリヤ テオシポンプノー イマノ ショーボーキノ アン  
とは あれは 手押しポンプの 今の 消防機の あの  
テオシーグリュントジャッタロ。 イッチョ コータッジャッタ  
手押し位のだったろう。 一つ 買ったのだった  
ナー。  
ねえ。

B ンー。  
うん。

A ソルカラ アノー ハチニンオシラー コーテー ソシテ ソン  
それから あの 8人押しを 買って そして その  
トキ アリヤ<sup>(18)</sup> アースケー オルガ タイショー ジューニネンノ  
時 あれは あそこに 私が 大正12年の  
ハチグワチ イタッジャッタ ヨ。 カンプコーシューカイ ソ  
8月に 行ったんだったよ。 幹部講習会に そ  
ン トキ アノー エー カタマチントノ オームラノ ヨ シハ  
の時 あの ええ 片町の 大村の 師範  
ンガッコノ ソン ジブンニ デキトツタテ。 エ アノー ア  
学校が その 頃に できていたか。 え あの あ

スコントー ショーボーキヲ ウーッテ ユー モンジャルケン  
そこのが 消防機を 売るって言うものだから

B アー。  
ああ。

A イクリャバカッテ アルガー <sup>(19)</sup> ハッ ロッピャクエンバカッヤッタ  
いくらばかりって あれか 600円ばかりだったろう。

ロー。 アノー ジドーシャポンポン ナスツチューター。  
あの 自動車ポンプに すると言って。

B オー。  
おう。

A ソシテ オレ カワンカッテ ユー モンジャルケンカー カタッ  
そして 私に 買わないかと言うものだから 語り

ヨッテ <sup>(20)</sup> ミテテクッ ツクツケ キタンドン ソギャン モナ イ  
あって 来たけれども そんなものはい

ランテユーゴトアル フーヤデ (笑) (B笑) ソシタラ カワ  
らないというようにあるふうで せしたら 買わ

ントジャッタ モン。 ソシタラ ソノギノ アノー シマダッテ  
ないのだったもの。 せしたら 彼杆の あの 島田って

エートン  
言う人が

B オーン。  
うん。

A アスコニ コーテ ソレヲ コーテ <sup>(21)</sup> タ。 ソーユー フーヤ  
あそこは 買って それを 買って そういふふうで

デ ソノー シェイネンナー ソー ユーテモ マ アー アーン  
その 青年は そう 言っても ま ああ ああん

モ ソー ソシテ ソノ イショーカラシテ ワルカッタ トノ  
 も そう そして その 衣装からして 悪かったんだよね  
 ー。 ンー。 ナンゾ ヨーフクァー ナーシ モー ドンザバ  
 え。 うん。 何も 洋服は なし もう どんざを  
 キテ サルキオッタ。 (B笑) アン ジュードーノ ケイコギ  
 着て 歩きまわっていた。 あの 柔道の 稽古着の  
 ンゴト アットバ (Bアー) アツシュー オーダトバ ナー。  
 ようなのを (ああ) 厚く 編んだのを ねえ。  
 ソシテ ムカシノ モナー コノー クジラフネ ノルカー グラ  
 ー。 (23)  
 そして 昔の 者は この 鯨船に 乗るか ぐら  
 ミ ノルカ シェンバ フトリマエノ オトコニヤ ナランチュオ  
 めに乗るか しなければ 一人前の 男には ならないと言っ  
 タッジャ モン。  
 ていたのだもの。

B オーン。  
 うん。

A ソン クジラートリニヤ ドーシテ ワシドマ モー ソリャー  
 その 鯨とりには どうして 私たちはもう それは  
 イカントジャッタンドンカー アノー グラミャー アッタ ツタ  
 行かないのねったけれども あの ぐらみは あったんだよね。  
 ー。 (24)

B ンー。  
 うん。

A グラミテユータ ズーットー アルガ サンジューニンバカリ ノッ  
 ぐらみというのは ずっと あれか 30人ばかり 乗っ

チャ <sup>(25)</sup> オリモシエンヤッタロ カ。  
ては おりませんだったろうか。

B フネ フネノ ナ。  
船 船の ね。

A アー アノ イオトンノ サ。  
ああ あの 魚とりの ね。

B オー。  
おう。

A オームラワンヲ <sup>(26)</sup> ヲン ヲン ヲン ヲン <sup>(27)</sup> ウェーテ サルキオッ  
大村 湾を おん おん おん おんと(船を)押して まわって  
タッ ター。  
たんよお。

B アー エーテ  
ああ 押して

A タイオ  
隊を

B アー。 アーアー。  
ああ。 ああ ああ。

A タイバ クンデー。ソースット <sup>(28)</sup> コノシローン シキノ ミユレバ  
隊を 組んで。 そうすると このしろの 敷が 見えると

パーッテ ミユレバ ジキ ヤレーッテテー ヤルオッタッジャ  
はあっと 見えると すぐ 「やれ」って言って やっていたのた

モン。  
もの。

B アー。  
ああ。

A ソルケン キツカ シゴトジャッタ ト。  
だから 苦しい 仕事 だったんよ。

B オー。  
おう。

A ソシテー コノ アノー タイアミデモー アン <sup>(29)</sup> フクロバー <sup>(30)</sup> ア  
そして この あの 綱網でも あの 袋を あ  
ルバ ジューゴヒログリヤ アリヤシェンジャッタロ カ。 フク  
れは 15尋位 ありはしなかっただろうか。 袋  
ロバッカーリ。  
ばかりで。

B オーン。  
うん。

A イチバン サキノー <sup>(31)</sup> アルバ アルーテ トッヨン ナレバ ヒト  
一番 先の あれを 洗って 取るようになる と 一人  
リマエジャッタ モン。 ( B オー。 ) イクラー トシャ ワコ  
前だったもの。 ( おう。 ) いくら 年は 若く  
シテモー。  
ても。

B オー ソレー イカンバジャッタッ ター。 ナーン  
おう それに 行かなければいけなかったのだよお。 何

A オーカタ ノリオッタ ッター。 アミヤ アッテー ヨンニユ  
おおかた 乗っていたんだよお。 綱は ほら たくさん  
アッタケン ノー。  
あったから ねえ。

B アー。

ああ。

A エンケモ シトツタツジャッタ ター。 アノー モヨテー。

家も していたのだったんよお。 あの 協同で。

B アーン。

ああ。

A シゴトシター。<sup>(32)</sup> ソルカラ アン <sup>(33)</sup> テンポッテ ユートバ ツキャ  
仕事をして。 それから あの てんぽって 言うものを 使って

オッタツジャ モン。 イオバ オドストバ。

いたのた" もの。 魚を 威すものを。

B アーアー。

ああ ああ。

A ブリャゲテ。

振り上げて。

B アー。

ああ。

A アルバ <sup>(34)</sup> ツキユーヨン ナランバ フトリマエ エオランジャッタ。  
あれを 使うことができるようにならなければ一人前(チギキ)貰っていなかった。

イクラー サンジューン ナッテモ。 (笑) ムカシャ ソー  
いくら 30オに なくても。 昔は そう

ユーフーヤッタ ト。<sup>(35)</sup> ソシテ <sup>(36)</sup> シェイネンナト ユートガ ナン  
いうふうだったんよ。 そして 青年宿と 言うのか 何

ネンジャッタロ カニャー。 イチバン ハジメワ コカ シェイ  
年だったろうかねえ。 一番 初めは こゝは 青年

ネンヤド アーノー シェイネンクワイジョカ ドカ ウチノー  
宿 あの 青年会所か どうか 家の

オヤージト <sup>(37)</sup>ムカシャー コケニヤ クチョーフ ナカッタ モ  
親爺と 昔は ここでは 区長は なかった も  
ンナー。  
のねえ。

B オー。  
おう。

A クミガシラノ ヨッタッテ シハイシオッタ。  
組頭が 4人で 支配していた。

B オー。 ヨンクミジャッタッ タ。 マエワー。  
おう。 4組だったんよ。 以前は。

A ヨンクミ ナットッタ ト。  
4組に なっていたんよ。

B <sup>(38)</sup>オー。  
おう。

A ソシテー アノー クミガシラデ タイテー シハイシヨッタ <sup>(39)</sup>モ  
そして あの 組頭で たいてい 支配していた もの  
ソジャケー トネバリ <sup>(40)</sup>イクワカ ジュー ジューエンバカ ス  
だから 戸根原に いくらか <sup>xxxxxx</sup> 10円ばかり す

ル ウー ヘヤノ アッタッジャッタロー。  
る 部屋か あったのだったろう。

B ンー。  
うん。

A ソルバ コーテ キテ コケ タテタッジャッタ モンナ。(B ンー)  
それを 買って きて ここに 建てたのだったものね。(うん)  
ソルカラ <sup>(41)</sup>オスワー マッツァン <sup>(42)</sup>ソッジャッター。 サキヤマニ  
それから 後には 松さん それだった。 崎山に



アン ウッタトワー。 サキヤマニ ウッタ モンナ。  
あの 売ったのは。 崎山に 売ったものね。

B ソン エーバ ナ。  
その 家をかね。

A ソン エーバ。  
その 家を。

B オーン。  
うん。

A ソシテ ソルガー ハシニー イー <sup>(43)</sup> アノー タケバラサンノ イ  
そして それの 端に あの 岳原さんの 医  
シャガ オラン モンジャルケン。  
者が いない ものだから。

B アー。  
ああ。

A タケバラサンノ キタケン ソシテ タケバラサンヲー アノー  
岳原さんが 来たから そして 岳原さんを あの  
ソン イシャヲ キテモローゴト シテ。  
その 医者 を 来てもらうようにして。

B アーン。  
うん。

A チット シェイネンデー ナーンシタチュオッタ。  
少し 青年で 何したって言っていた。

B コッチャンモー ナ。  
こっちも かね。

A ン アー チットー ハシ カケテ (B アーン) アン シンリョ  
ん ああ ちっと 端に(小屋を)かけて (うん) あの 診療

ーショバ。

所を。

B アーン。

うん。

A ソシテ ソン シェーネンカラ アノー ワッカモンーグミカラ  
そして その 青年から あの 若い者組から

シェイネンニ ナス トキガ ヒドー モメタ ツター。  
青年(団)に する 時が たいへん もめたんだよお。

B アー。

ああ。

A ソスト ムカシノ ソン ワッカモングミテ イエバ ソノ ドク  
せうすると 昔の その 若い者組と 言えば" その 独

シンシャワー ゴジューン ナッテモ ロクニ ナッテモ タッツ  
身者は 50オに なっても 60オに なっても 龍

オンジトカ ナントカガ ナー。  
おじとか 何とかか ねえ。

B アー。

ああ。

A シェイネンガシラデー

青年頭で

B アー モー ドクシンワー ズーット <sup>(44)</sup> ヒャー <sup>(45)</sup>  $\frac{\text{シエ}}{\text{xx}}$  (Aウ イッ  
ああ もう 独身は ずと う 入

トッタ ト。) シェイネンニ オッタッ タナー。 (笑)  
っていたんよ。) 青年に おったんよねえ。

A オッタ ト。 (笑) <sup>(46)</sup> ソーシテ ソルバ カイカクシャトガー  
おったんよ。 そして それを 改革した人か

アノー フカエー キゾー。

あの 深江 喜蔵

B オーン。

うん。

A アン ニンゲンガ モー コカー カイカクシトッタ ノー。

あの 人間が もう ここは 改革していたねえ。

B オー。

おう。

A ソシテ<sup>(47)</sup> スツツ ソノ シェイネンニ<sup>(48)</sup> ニヤータツジャッタ。

そして その 青年(田)に したのだった。

ソシタトコー オスワー ソノー シェイネンナ ソン ジブーン  
そうしたところが 後には その 青年(田)は その 頃は

ナ ンーニャ ワッカモンヤド ジブンジャッタ。 アリヤー マ  
いや 若い者宿 の 頃だった。 あれは ま

ーダ。 ソン ジブンニ オガワサンノ ウチ ヨーデ オガワサ  
だ。 その 頃に 小川さんの 家に 呼んで 小川さ

ンガー。

んか。

B アー。

ああ。

A ソシテ コノー シェイシンキョーイクバー ヤッタ タ。 ソロ

そして この 精神教育を やったんよ。 そろ

バンモー ナラーウ。

はんも 習う。

B オー。

おう。

A ソリカラー アノー アー キョーイククゴラ モトニ シテー  
それから あの ああ 教育勅語を 基に して  
ズーット シェツメイバー シオライッ ト。  
ずっと 説明を しておられたんよ。

B オー。  
おう。

A ソリカラワー アノー ソルガ ホーシューニ ソノー <sup>(49)</sup> アラテズ  
それからは あの それの 報酬に その 荒手綱  
ナッテ ユートガ ノーテー フターカタズツ <sup>(50)</sup> ソン アブラン  
て 言うのを 綱って 二束ずつ その 油の  
カワリ <sup>(51)</sup> ソルバ ウッタ ジェンバ ヤルオッタ。 <sup>(52)</sup> ソコニ。  
代わりに それを 売った 代金を やっていた。 そこに。

B アー。  
ああ。

A オガワサンテユータ ドーシテ ココノ アノー ゴーゾクジャッ  
小川さんという人は どうして この あの 豪族だった  
タケーン (Bアー) アスケニヤ イツモ カツモ ソノ イリヤ  
から (ああ) あそこには いつも かもは その 入る  
エンゴトアッタ ツー。  
ことかできないようであつたんよ。

B オー。  
おう。

A ヤシキノ (Bオー) ヘーカマエシテ ナー。 <sup>(53)</sup> ツチバ ヨート  
屋敷の (おう) 堀構えして ねえ。 ま よく  
シオライタ ト。 ソシテ ソノー オガワサンガ アノ ジュ  
しておられたんよ。 そして その 小川さんが あの 14日

ーヨッカノ アン <sup>(54)</sup>モグラウチ ナー。  
の あの もぐら打ち ねえ。

B アー。  
ああ。

A アン モグラウチバ ウッテ コドンガ。 ソシテ モチバー  
あの もぐら打ちを 打って 子供か。 そして 餅を  
アノ フクロバ モッテ モロテ サルキオッタッ ター。 アル  
あの 袋を 持って 貰って 歩きまわっていたんよあ。 あれ  
モ ハイシサシェテイッタ。 オガワサンガ。 コジキコードーテ  
も 廃止させていった。 小川さんが。 乞食行動という  
ユー コトデ。  
ことで。

B オーン。 モー ホントン <sup>(55)</sup>ミンヤッタ モン。  
うん。 もう ほんとうに 見なかったもの。

A アー。 ソヤッタ ト。 オガワサンガ ダイブン ココワー ナ  
ああ。 そうだったんよ。 小川さんが たいぶん ここは 何  
ンシテ サシタッジャッター。 ソシテ ソン ジブンガー ア  
して されたのだった。 そして その 頃か あれ  
リャー ソンチョー シトラシタ モンナー。 ココノー。  
は 村長を しておられた ものねえ。 ここの。

B アー。 ドケ オライタッジャロ カ。 オガワサン。  
ああ。 どこに おられたのだろうか。 小川さんは。

A ア チョードー ミゾグチン エン トコー。  
あ ちょうど 溝口の 家の所。

B ンー。  
うん。

A アー。 ミヅグチン エノ ヤシキーン カターッカラー ウラエ  
ああ。 溝口の 家の 屋敷の 方から 浦江の  
ント ゴケンブンニ ナットッ タ。 アスコン ヤシキヤ。  
と 5軒分に なっているんよ。 あそこの 屋敷は。

B アー。 アスコン <sup>(56)</sup> ヘンナ <sup>(57)</sup> ペラーット ター。  
ああ。 あそこの 辺は へらっとたねえ。

A ペラット。(B アー) アードガ ナガサッテ オルガ ソクリョーン  
へらっと。(ああ) ああ どの位の長さって 私が 測量に  
イコカトモトットナンドン カク マエー。(B ニー) マーダ。  
行こうかと思っているのだけれど(郷土史を)書く前は。(うん) まだ。  
ソシテ アスケニャー アノ ナガゴヤガ アール。 ナガ  
そして あそこには あの 長小屋が ある。 xxxx

ナガベーニ ナガゴヤッテ アリヤ コグチニ ユーメイナ モン  
長塀に 長小屋って あれば 小口で 有名な もの  
ジャッタ ト。 オスワー。  
だったんよ。 後には。

B アー アスコ ズーット マ イマ <sup>(58)</sup> マ  
ああ あそこ ずっと ま 今

A アー。 ナガゴヤガ アルガ コメソーコヤッタ ッター。  
ああ 長小屋が あれが 米倉庫だったんだよあ。

B オー。  
おう。

A アー。 <sup>(59)</sup> イマゴラ <sup>(60)</sup> ドーシ シェイネンダンモ一  
ああ。 今頃は どうして 青年団も

B ゴーキ <sup>(61)</sup> イマゴラ ダイブン ヘッタトジャン モンナー。  
ひどく 今頃は たいぶん 減ったんだものねえ。

A ヘッタ ト。  
減ったんよ。

B アーン。  
うん。

A ムカシャ ドーシテ ソギャン ワガママワ デケントジヤルケン  
昔は どうして そんな わかまは できないのだから  
ノー。  
ねえ。

B ーン。  
うん。

A ソシテ フトハナー アン ナー。 <sup>(62)</sup>マエンショノ <sup>(63)</sup>タワヲ <sup>(64)</sup>シサ  
そして ひと頃 あの ねえ。 前の島の 田を 試作  
クデンヲ ヤリオッタ。 オルガ シトッ ジブンナ。  
田を やっていた。 私が(役員を)している頃は。

B アー。  
ああ。

A アー。  
ああ。

B シェイネンダンノ ナ。  
青年団のね。

A アッ。  
ああ。

B ヤリオライタッ ナー。  
しておられたんよねえ。

A ヤルオッタ ト。 シサクデンバー シサクデンテユーガ ナンノ  
していたんよ。 試作田を 試作田と言うか なに

ー ソー シサクモ ナローズ。<sup>(65)</sup> ソノ フゥイヒトリ  
そう 試作にも なるだろう。 その会費取り

B アー。  
ああ。

A アー シオッタッジャッタ。  
ああ していたのだった。

B ホンナラー オンナー オンナワ イツカラ イツゴロカラ ハイッ  
それなら ~~xxxxxxx~~ 女は いつから いつ頃から ~~xxxx~~ 入っ

~~ソ~~  
~~xxx~~  
そ

A オンナワ チョット モー オクレトッタ トヨノー。  
女は ちゃんと もう 遅れていたんだよねえ。

B オーン。  
うん。

A ソシテー オナゴドミテユータ アー オナゴノ ホーワ コノー  
そして 女たちというのは ああ 女の 方は この  
<sup>(66)</sup>  
ドー ムカシャー シェーマイバ シオッタッ ター。 ウスデ  
どうして 昔は 精米を していたんだよね。 印で。

ー。

B アー アー。  
ああ ああ。

A ワガ テデ。  
自分の手で。

B アー。  
ああ。



A マー ソノクライノー コトガ タノシミジャカッタロ カー。  
まあ その位の ことが 楽しみではなかったろうか。  
<sup>(67)</sup>  
イーシテ。  
結して。

B オーン。  
うん。

A ゴロクニンズツ ツチヨッテ ナー。 ウタ ウトトッテエテ ム  
5、6人ずつ つきあってねえ。 歌を 歌いながら 麦  
ギター チーターリ コメヲ チーターリ バンニ サー。  
を ついたり 米を ついたり 晩にねえ。

B ホー ホー。  
ほう ほう。

A ソースット オナゴヤドッテユーモナ アンマッ ナカッタゴトアッ  
そうすると 女宿っていうものは あんまり なかったようだっ  
タ。 ナカッタロ。  
た。 なかっただろう。

B ホー ホー。  
ほう ほう。

A オナゴヤドッチュータ ナー。 ソシテ アリヤー ナンネンジャ  
女宿というのは ねえ。 そして あれば 何年だったろう  
ッタロ カニヤー。 タイショー ナンネン カ。 アリヤー  
かねえ。 大正 何年か。 あれば  
モトワー タイショー ジューニネンマジヤ サンジューマデジャッ  
もとは 大正 12年までは 30才までだったもの。  
タ モン。 シェイネンナー。  
青年は。

B アーン。

ああ。

A ソルガ モンムー ウー ナイム リョーダイシンカラ クンチノ  
それが 文部 内務 両大臣から 訓示が

アッテ ニジューゴマデ シロッテ ユー コトデ

あって 25才までにしろっていうことで

B オーン。

うん。

A アノー<sup>(68)</sup> ソゲン ナッタトジャッタ。

あの そんなに なったのだった。

B オン ソー ソンナラ ソン ナガレバー クンデ マー (A ニ  
うん そう そんなら その 流れを 汲んで まあ

ニジューゴサイマデ) シェイネンダンノ キヤクワ ニジューゴ  
25才まで 青年団の 規約は 25才と

ーッテ シタ トコンモ アットジャン モンナー。 マーダ (   
した ところも あるんだものねえ。 また

A ウン) イマデモー。  
うん) 今でも。

A アッ トネ。

あるのかね。

B ア アッ トー。

あ あるんよお。

A アー ニジューゴサイマデッテユーゴト<sup>(69)</sup> アッ フーヤンシター。  
ああ 25才までというふうにして

B ソー ソククリャーダナー  
そう その位

A アーソシテ チョード オルガ カンプコーシュークワイ イタ  
ああ そして ちょうど 私が 幹部講習会に 行って  
テ キタルバ モー ニジューゴン ナッテ  
来たら もう 25オに なって

B オーン。  
うん。

A オイ デタトヤ モン。 ソシテ ココーノ シェーネンノ アリヤ  
私は 退団したんだもの。 そして この 青年の あれは  
ナンヲ ズーット シトツタジャッタ。  
何を ずっと していたんだった。

B ダイブー ナロー ヨンニュ オッタロー。  
だいぶん そんなら たくさん おったろう。

A ハーッ。  
はあ？

B ダイブー ヨンニュ オッタロー。  
だいぶん たくさん おったろう。

A オッター。 サンジューマデッテ イエバ ドーシター。  
おった。 30オまでって 言えば どうして

B オーン。  
うん。

A ソノー<sup>(70)</sup> ソースー アリヤ ショーワジューニネンニ コリヤ ショ  
その そうすると あれは 昭和12年に これは  
ーボーダンノ セツリツノ アッタ ト。 ソルマジヤ モー シェ  
消防団の 設立が あったんよ。 それまでは もう  
イネンデ シオッタツジャ モンナー。  
青年で していたのだから ねえ。

B アー。

ああ。

A ショーワジュースンネンマジヤ。<sup>(71)</sup> デムカシャ ヨーソノー  
昭和13年までは。 で昔は よく その

ワッカ モナ コン<sup>(72)</sup> テグリフキ イキオッタ ツ。

若い 者は この 手繰り引きに 行っていたんよ。

B アー テグリ

ああ 手繰

A テグルッテユーテ。

手繰って いて。

B アー。

ああ。

A アー フチャーッデ ナ。

ああ 2人で ね。

B アー。

ああ。

A アルラー。

あれを。

H<sup>(73)</sup> イマノ シェイネンダンワ ドゲンジャロ カ。

今の 青年団は どうだろうか。

A イマン シェイネンダンナ ドゲン ナットル。

今の 青年団は どうなっている。

B イマン シェイネンダンナ モー オドンガ シェイネンニ ハイッ  
今の 青年団は もう 私が 青年(団)に 入ッ

タ ゴロマジヤー マダー コノ マトメヤスカッタトバツテ ナ  
た 頃までは また この (団員を)まとめやすかったけれどね。

ー。

A アー。  
ああ。

B モー 今カゴラ コノー ヤッパー  
もう 近頃は この ヤッぱり

A ソー サナー。  
そう よねえ。

B コジン コジンノー ヤッパー アッガー ウーナッテー <sup>(74)</sup> モ バ  
個人 個人の ヤッぱり あれが 多くなって もう  
ラバラジャ モンナー。  
ばらばらた"ものねえ。

A アー。 ムカシ<sup>(75)</sup>ンタ トー キョードシンノ ツヨ<sup>(76)</sup>カッタ (B ア  
ああ。 昔の青年は どうして 共同心か 強<sup>(77)</sup>かったん (あ  
二) ト。 モー シリヤ (B イー) <sup>(77)</sup> ベットワ ベット <sup>(78)</sup> ウ  
あ) よ。 もう <sup>(76)</sup> それは (B イー) <sup>(77)</sup> 別当は 別当  
ラワ<sup>(76)</sup>ウラ (B アー) カタマッテー キャーロンドン カクト<sup>(78)</sup>キャ  
浦は浦 (ああ) かたまッて ペーロンなど 漕ぐ時

ー。

は。

B ハー ハー。  
はあ はあ。

A モー ウ<sup>\*\*</sup> ウリヤ イクター ガイコキ イクゴトアッタ ト。  
もう 浦に 行くのは 外国に 行くようだったんよ。

ウラン モン。  
浦の宥。

B (笑) (A笑)

A モー ムカシャ キョードシェイシンノ ツヨカ ト。 ソノ ナ  
もう 昔は 共同精神が 強いんよ。 その  
ナンカラ ツネカワレトッ トナー。 クジラフネジダイカラ。  
何から 培われているんよねえ。 鯨船時代から。

B アー。  
ああ。

A クジラフネー トキャ ドーシター ココデー <sup>(79)</sup> ニジューシコン  
鯨船の 時代は どうして ここで 24.5人  
ニ ソノ ノリクーデ イキオッタツジャルケン。 アー。 キョ  
その 乗りこんで 行っていたのだから。 ああ。  
ードーシェイシンヲ ツヨー アンモ チョード ソーユー フー  
共同精神を 強く あれも ちょうど そういう ふう  
ヤデ (Bアー) イッシヨニ ソロワンバ アルガ ヤラルッ  
で (ああ) 一緒に 揃わないと あれが できる  
シゴトジャ ナカツジャケン キョードーシェイシン  
仕事では ないのだから 共同精神

B モー チカゴラ コジンバー ヒドー アツシテカラ (Aア  
もう 近頃は 個人を ひどく あれしてから (あ  
二) キョーチャーシェイテユートノ ドンドン ウスレテキタ  
あ) 協調性というのか どんどん うすれてきた  
モンナー。  
ものねえ。

A ウスレテキタ。 フントーニ。 モー <sup>(80)</sup> ターンダ コリヤ トク  
うすれてきた。 本当に。 もう だんだん これは 都

イーノ フーシューノ イッ<sup>xx</sup> (Bアー) イッテキテ ナ。 ン。  
会の 風習が (ああ) 入ってきて ね。 ん。

B ソイデー モー アン アッジャ モンナー。 コー イ<sup>xx</sup> イケン  
それで もう あの あれですものねえ。 こう 意見

ナンカモー ソノ (Aウン) コ ワッカ モンカラ ススンデ  
なども その (うん) こう 若い 若から 進んで

イロイロー アトカタズケナンカモー スツテモ シェズ サー。  
いろいろ 後かたづけなんかも しようもしないねえ。

A オー。  
おう。

B イケンモ ヤッパー コー ネンパイニモー シェ<sup>xxx</sup> シェンパイニ  
意見も やっぱり こう 年輩の人にも 先輩に

タイシテモ モー イッチョン コー アレガ ナカ モン。  
対しても もう 少しも こう あれがないもの。

(Aドーシテ) シェンパイニ コーハイノ サノ ナカゴトアッ  
(どうして) 先輩 後輩の 差がないようだ

(81)  
アッ (Aモー) ナカゴト ナッテキタ モンナー。  
(もう) ないよりに なってきたものねえ。

A シェンパイノ トコッジャ アタマワ アガランゴトアッタ ト。  
先輩の 所では 頭は 上らないよかったです。

(Bオー) ジェンブ ソノ コツカイワー ワッカ ホーカラ  
(おう) 全部 その 小使は 若い 方から

シェンバ ヤッタ モン。(Bオー) ホー キョードーシンナ  
(なければいけなかったもの。(おう) 共同心は

ツヨカッタ ト。 ムカシタ。 オッ。  
強かったんよ。 昔の青年は。 おう。

B イマゴラ ソガン トコッパ ヤッパ オシユッ トコノ ナカッ  
今頃は そんな ところを やっはり 教える ところが ないの

ジャ モンナー。

たゞ ものねえ。

A ナイ ノー。

ない ねえ。

B ガッコデモ ソギャン コトワ オシエンシ サー。

学校でも そんな ことは 教えないしねえ。

A アー。

ああ。



## 注

- (1) 「ソレ」は、「青年宿」をさす。
- (2) 「イレオッタ」は、「イレテモライオッタ」とあるところ。
- (3) 先輩などに、意見などを言えなかったの意。
- (4) 「ウエノ モン」は、「青年頭」のこと。
- (5) 「ワッカモンバナシ」は、「若い者離し」で、青年仲間から追放すること。
- (6) 「ソंनाロ」は、「ソंनाラ」からのもの。
- (7) 「ソーダンシテ」の次に、「決めた」に当ることばが略されている。
- (8) 「ヤルオラン」とあるが、共通語訳は、文脈上、過去形とした。
- (9) 人名
- (10) 人名
- (11) 屋号に発した地名という。
- (12) 「ドー」は、「ドーシテ」の言いさし。
- (13) 「アミゲ」は、「網上げ」で、「網をたぐり上げる作業」。
- (14) 「ヒヨシ」は、人名。
- (15) 「シェドノ ハマ」の「シェド」は、陸地と島とが迫っている所。
- (16) 「アミダナ」は、魚網を干すのに設ける棧敷状の棚。
- (17) 「コター」の次に、「あつた」に当ることばが略されている。
- (18) 「アースケー」は、「犬村に」。
- (19) 「ハッ」は、「800円」を、言い出そうとしてのものか。
- (20) 「ミテテクツ ツクツチ」は、意味不明。
- (21) 音声不明瞭で、聴取不能。
- (22) 「ドンザ」は、ボロ切れを、厚く綴り合わせて作った仕事着。
- (23) 「グラミ」は、「グリアミ」(繰り網)の音変化。「グラミ」は、「このしろ」、「鰹」、「鯖」などを獲る大きな網。「グラミ ノル」は、「グラミ」を積んだ船に乗るの意。
- (24) 「ツター」は、文末詞で、「トター」からのもの。

- (25) はっきりしないが、「モ」に聞こえる。
- (26) 衆り組の青年達のかけ声ではなく、船が、力強く、順調に波を切って進む様子の表現。
- (27) 「ウェーテ」は、櫓を「押して」で、つまり、「漕ぐ」こと。
- (28) 「シキ」は、海中に見える魚群のこと。
- (29) 「フクロ」は、「袋状の網」のことで、大きな網の、魚を集める部分に当る。
- (30) 「アルバ」とあるが、文脈上、「あれは」と訳した。
- (31) 「アルバ …………… ヒトリマエジャッタ」というのは、船の進行中、袋状の網に付いたごみを洗い取るようになれば一人前だったという意味で、この作業には、相当の体力を要したという。
- (32) ここに、やや長い間がある。
- (33) 「テンポ」は、魚を威す木具で、黒木という木を使って作る。棒状のもので、先の方、 $\frac{1}{2}$ 部分が太く平たくなっている。長さ約5尺。上端に、約10尋のロープがついている。これを船上から海中に投げ込んで魚を威す。
- (34) 「ツキエーヨン」は、「ツキユルヨーニ」からのもの。
- (35) ここに、やや長い間がある。
- (36) 「シェイネンナト」と聞こえるが、「青年宿」と言っている。
- (37) 「ムカシャー」のところから、語が急に変わっている。
- (38) はっきりしないが、「オー」と聞こえる。
- (39) はっきりしないが、「モンジャケー」と聞こえる。
- (40) 「イクラカ」とあるところだが、「イクワカ」と聞き取れる。
- (41) 人名
- (42) 「サキヤマ」は、琴海町崎山。
- (43) 「アノー」のところから、語が変わっている。
- (44) 「ヒャ」は、「入る」の言いさしか。
- (45) 「シェ」は、後出、「シェイネンニー」の言いよどみ。
- (46) 「ソルバ」の「ソル」は、「ワッカモングミ」をさす。
- (47) 「スツ」は意味不明。

- (48) 「ニャータ」は、「ナシタ」の音変化。
- (49) 「アラテズナ」は、「荒手綱」で、藁で作る細目の綱。これを荒目の綱を作るのに使った。
- (50) 「ソン アブラン カワリ」は、小川さんの自宅で消費する、灯火用の菜種油代のかわりりの意。
- (51) 「ソルバ」の「ソル」は、「アラテズナ」をさす。
- (52) 「ソコニ」の「ソコ」は、小川氏宅をさす。
- (53) 意味不明。
- (54) 「モグラウチ」は、正月14日(旧暦)の行事で、部落の男の子供達が、6尺位の茅竹の先に藁を巻き(約一尺位)それで、各家の前地を叩いて歩き、餅を貰う。叩く時、口上きとなえなという。
- (55) 「ミンヤッタ」は、「モグラウチ」を。
- (56) はっきりしないが、「ヘンナ」と聞こえる。
- (57) 「ペラーット」は、「ひと続き全部」の意。
- (58) 音声聴取不能。
- (59) ここに、やや長い間がある。
- (60) 「ドーシ」は、「ドーシテ」。
- (61) はっきりしないが、「ギ」と聞こえる。
- (62) 「マエンショ」は、「前の島」で、「鵜瀬島」。
- (63) 「タワヲ」は、「タヲ」の言い損じか。
- (64) 「シサクデン」は、青年団が勉強のために、実地研究田として与えられたもの。
- (65) 「ソノ クロイヒトリ」の意は、試作田から穫れる米を売って、その代金を、青年団の費用に当てるというわけ。
- (66) 「ドー」は、「ドーシテ」。
- (67) 「イーシテ」は、「ユイシテ(結して)」の変化したもの。結(ゆい)は日本の伝統的社会で広く行われている風習で、『改訂綜合日本民俗語彙』には「ユイは結合、共同をあらわす言葉であるが、労働組織としてのユイは労力交換を意味する。通例一日出

働の労力に対しては必ず一日の労力を返し、金銭や物で相殺することを許さぬのが特徴の一つである」とある。ここでは「グループ作りなどして」くらいの意味。

(68)ここに、やや長い間がある。

(69)はっきりしないが、「アッ フーヤンシテ」とも聞こえる。

(70)ここに、やや長い間がある。

(71)ここに、やや長い間がある。

(72)「テグリフキ」は、「手繰の網を引くこと」で、漁法は、小範囲に網をまわして、2人でこれを引くやり方。当地では、「シラサエビ」などを、この漁法で獲るという。

(73)この一文は、司会者、平尾美和子のことば。

(74)はっきりしないが、「モ」に聞こえる。

(75)「ドー」は、「ドーシテ」の「ドー」。

(76)「それは」であるが、「シリヤー」に聞こえる。

(77)部落名

(78)部落名

(79)「24.5人」と、話者は言っているが、音声は、「ニジューシコンニ」と聞こえる。

(80)「ターンダ」は、「ただ」の意でなく、「だんだん」の意。

(81)「ナカゴトアッ」の「アッ」のくり返しと思われる。

(82)はっきりしないが、「オッ」と聞こえる。

## 2. ペーロンの話

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 平尾忠太郎 男 明治31年生まれ

B 平尾政博 男 明治23年生まれ

H 平尾美和子 女 昭和30年生まれ

A シー コケ ナンジョー ムラデー ソンユーノ キャーロンブネ  
うん ここに 何艘 村で 村有の ペーロン舟が  
ノー

B ゴソー オット。 イマ。  
5艘 あるんよ。 今。

A ゴソー  
5艘

B ア ゴソー ソッデ イッチョ アノー  
あ 5艘 それで ひとつは あの

A オーガタノ  
大型の

B オ<sup>ロ\*</sup> オーガタバ イッソーデス ナー。  
大型を 一艘ですわねえ。

A アーッ。 (Bアー) オーガタ ソレ ヨソト ヤットキタ  
ああ。 (ああ) 大型 それは 他所とする 時ね。

B ハー ヨソト ナ  
はあ 他所と

A カク  
漕ぐ

B モー オナジ オ マクル モンジャケン ワーガ エントデ カッ  
もう 同じ 負ける ものだから 自分の家のでは  
カカンゴトシテ ソツデ シェントジャ モン。 ソイデ <sup>(1)</sup> ヨッ  
漕がないようにして それで しないのだもの。 それで  
トイシカラ カツテキテ キョネンナ ヤッタツジャツ モン。  
戸石から 借りてきて 去年は やったのだもの。

A オー。 コツテンター ソノー キャーロンブネガー イカン ワ  
おう。 こっちは その ペーロン舟が いけない わ  
ケター。  
けよお。

B アー。 アノー <sup>(2)</sup> カキドーマデ ツクツテ <sup>(3)</sup> オリノ フカ フトカッ  
ああ。 あの 蛸道まで 造って 折りの 深い 大きい  
サナー。  
のよねえ。

A オー。  
おう。

B マギリワ キレーン スットナンジョーン  
まわることは じゅうぶんにするのだけれども

A オー  
おう

B ソノー <sup>(4)</sup> カワラノバ ゴーギ オツテ アル モンジャケン  
その 底板を ひとつ 折て ある ものだから

(Aアー) ハヨー ナカッ サー。  
(ああ) 速く ないのよお。

A オンモ ワッカ ジブンナ ソノー キャーロンーノー ソノ カ  
私も 若い 頃は その ペーロンの その  
ジトッデー  
舵取りで

B アー  
ああ

A ソシテー <sup>(5)</sup> アサヒマケマデ ナガサキノ (Bオー) ケイコン  
そして 旭町まで 長崎の (おう) 稽古に  
イタ トー。  
行ったんよお。

B オー。  
おう。

A アノー ジョーズン オッタ モン。  
あの 上手が いた もの。

B アー。  
ああ。

A イッテョ ゴーケツヤッタ ト。  
一人 豪傑だったんよ。

B カジトリデー ダイブン <sup>(6)</sup> (〇ジョーズヤッター ………) アー  
舵取りで ないぶん (上手だった) ああ

(笑) (〇~~~~~) (笑)

A イッペンナー アノー <sup>(8)</sup> キャーロンドーキ ネー。 レンタイテョ  
いっぺんは あの ペーロン時にねえ。 連隊長

ーガ オームラ オームラコー ター。  
が <sup>xxxxxxx</sup> 大村 大村侯 よねえ。

B アー。  
ああ。

A オームラコーノー レンタイチョー シトラッ ジブンニ コッチ  
大村侯が 連隊長を しておられる 頃に こっちに  
コライテー ソシテー ヤッタッ サー。 ソシタラー <sup>(9)</sup>ゴ マ  
来られて そして やったんだよお。 そうしたら 負  
ケタ。

けた。

B オー。(A笑) カジトリデー ダイブン 今ガウ モンナー。  
おう。( ) 船取りで たいぶん 違うものねえ。

(Aアー。) モー フネノー。  
ああ。 もう 船が。

A カジッテ イッスン マグレバ (Bハー) イッケン サガット  
船って 一寸 まげると (はあ) 一間 さがるの  
ジャルケン ナー。 ソッデー ソノー  
だから ねえ。 それで その

B シェッテ イキオッ トキンナー アスコノー オリカエシデー  
競って 行っている 時には あそこの 折り返して

A ドーシテ。 アノ カジノー アスコノー ナンバー ユルムット  
どうして。 あの 船の あそこの 何を ゆるめると  
ユート ナー。 アリヤ カジャ キク モンジャ ナカ。  
いうと ねえ。 あれは 船は 大きく ものではない。

B アー。  
ああ。



A ソシテ カジバ カンミヤト アギャン アブル モンジャ ナカ、  
そして 船を 絶対に あんなに 上げる ものでは ないん  
<sup>(10)</sup>  
ゾ。  
たよ。

B ハー。  
はあ。

A アン ジョーズブツテ アゲタン ナシタリ スレバ (Bアー)  
あの 上手ぶって 上げたり 何したり すると (ああ)  
ヤッパ ツケトカンバ <sup>(11)</sup> アルガー ジャマ ナッタ トキ シレ  
やっはり (船を水中に)つけておかないとあれが邪魔になった 時も 知れ  
タ モン。  
たもの。

B アー。  
ああ。

A ソシテ カジャ シェッピャ フト ナカラー ナー。  
そして 船は 精一杯 大きくないとねえ。

B アー。  
ああ。

A カジノ コマカルバ <sup>(12)</sup> トラルー ヤ ナガレン ナンカ カジ  
船が 小さいと とられる 長さの 長い 船が  
ガ ヨカ。 アルガ ンー ナーンネン コッチワ カッター。  
よい。 あれが ン 何年に こっちは 勝ったかい。

B エート <sup>(13)</sup> ドンク <sup>(14)</sup> カッタッ ケ。 <sup>(15)</sup> イッ ユーショーシタトワ イ  
ええと どの位 勝ったかな。 優勝したのは 一  
カイ タナー。  
回よねえ。

A シー。  
うん。

B イチバン ハジメ アノー オー フネバ ツクッタ トキ  
一番 初め あの 舟を 造った時

A ココノ<sup>(16)</sup> ブラ ココデ ドギャン ワケトリ ヤ。 オドガー。  
この 部落 ここで どのように 分けているのかい。 尾戸か。

B ア オドジャロー。  
あ 尾戸だろう。

A オドガ イッソー  
尾戸が 一艘

B カタ<sup>(17)</sup> ガーン。  
形上

A カタガミ ゴー。  
形上郷

B ナガウラー。  
長浦

A ナガウラ ノー。  
長浦 ねえ。

B ム<sup>(18)</sup><sub>xx</sub> アノー ムラマツガ ムラマツー キュー ムラマツムラガー  
あの 村松か 村松 旧村松村か  
アノ ホクブト ナンブト ワカレトッ ト<sup>(19)</sup> タナー。  
あの 北部と 南部と 分かれているんよねえ。

A ナンブト  
南部と

B ハー  
はあ

A ゴソー。  
5 艘。

B ハー ゴソー。  
はあ 5 艘。

A ンー ソースット ソノウエ マタ イッソー (Bハーイ) <sup>(20)</sup> オ  
うん そうすると そのうえ また 一艘 (はい)  
ーキナトヲ ツクッテ アッ トター。  
大きいのを 造って あるんだよお。

B ソノー オーキカトバ イッチョ ツクランバッテ ユーテ ナー。  
その 大きなのを ひとつ 造らなければと言って ねえ。

マ イチバン ハジメー アノー <sup>(21)</sup> ウチ アン ニ <sup>xx</sup> ニッソノギ  
まあ 一番 初め あの あの 西彼杵の

ノ アノー アレバ ココデ シタ トキー マケタ ワケ サ。  
あの あれを ここで した 時 負けた わけよ。

<sup>(22)</sup> オーシェトガー アノ フトカー フネラー モッテ キター  
大瀬戸が あの 大きい 舟を 持って 来て

(Aアー。) ヤッタ モンジャケーン (Aアー) アトデ モー  
ああ。 やった ものだから ああ あとで もう

ナンカ フトカ ナンカ フネデー ナカラ ツマランテ ユー  
長い 大きい 長い 舟で ないと つまらないと言う

A ン。  
うん。

B ヤットナンジョン マター <sup>(23)</sup> モ イチネン ソッデ カッターナン  
やるんだけれど また も 一年 それで 勝ったけれ

ジョン マ ソイカラ コンタ トイシート トイシト ドコガ  
ども ま それから 今度は <sup>xxxxxxx</sup> 戸石と どこか

キタ カニャー。 トイシト <sup>(24)</sup>テグマーガ モー ナンカ フネバ  
来た かねえ。 戸石と 手熊か もう 長い 毎ばか  
カツ キテ サー。 (A ン。) ソイデ ヨンガ カツ モンジャ  
リ 来て ねえ。 (うん。) それで 他所が 勝つ ものだ  
ケン モー コッジャ モー マクッテ ユーテ  
から もう これでは もう 負けると 言って

A ン アリヤ ドコ シュサイ ナツ ト。 ダイタイ。  
ん あれは どこ 主催に なるの。 たいだい。

B ダイタイー アン ニッソノギノー アノー ニッソノギー シェ  
たいたい あの 西彼杵の あの 西彼杵 西  
イヒブロック シェイネンダンレンラクキョーギカイト ユートノ  
彼ブロック 青年団連絡協議会と 言うのか

アットヤ モンナー。  
あるの ねえ。

A アー。  
ああ。

B ソノ ソコデー シュサイスツト。  
その そこで 主催するんよ。

A ア シュサイ  
あ 主催

B アー  
ああ

A ソルカラー ナガサキシンプンシャガー  
それから 長崎新聞社が

B アー コッ コトシワー キョネンワー ナガサキシンプントー  
ああ <sup>x\*x\*</sup> 今年は 去年は 長崎新聞(社)と

ソノー シェイネンダントノー キョーサイジャッター ター。  
その 青年団との 共催だったんよお。

A キョーサイジャッター。  
共催だった。

B シーニャ ナガサキシンプンジャ ナカー。 <sup>(25)</sup> エヌ ビー シー。  
いや 長崎新聞(社)ではない。 NBC。

A オー。  
おう。

B エヌ ビー シー エヌ ビー シー  
NBC , NBC

A オー。  
おう。

B エヌ ビー シーガー ヤンマーオ スポンサーニ シター。  
NBC が ヤンマーを スポンサーにして

A オー。  
おう。

B ソッデー キョーサイジャッター<sup>(26)</sup>ッデーヌ。  
それで 共催だったんです。

A オー。  
おう。

H キョネン カッタッジャロ カ。  
去年は 勝ったのだろうか。

B キョネンワ  $\frac{\text{ニ}}{\text{xx}}$  (A サレ)  $\frac{\text{ニ}}{\text{xx}}$  キョネンワ サンバンジャ ナ  
去年は 去年は 3番では な  
カッタ カナー。  
かったかねえ。

A オー。 アリャ ダイブン アルガ イツー  
おう。 あれは たいぶん あれが いつ

B アラ ゴガツニ アットジャン モンナー。  
あれは 5月に あるんだものねえ。

A アー。  
ああ。

B チョード イソガシュー ナル マエニー (Aアー) ヤルト  
ちょうど 忙しく なる 前に (ああ) やると  
ユーテ。  
言って。

A ソースット マタ ココントー ムラントトー (Bハー ハー)  
そうすると また こののと 村ののと (はあ はあ)  
ニクワイ アッ トタイノー。 (Bソー。) キャーロンナ。  
2回 あるんだよねえ。 (そう。) ペーロンは。

B コカー モー ハチガツニ スル (Aハー) ワケ タナー。  
ここは もう 8月に する (はあ) わけよねえ。

A ハー。 (Hアノ) ヒヨーガ ドン クリャ イロ カー。  
はあ。 (あの) 費用が どれ位 いるだろうか。

B ナカナカ モー シェイヒブロックンター オーシゴトデ アラ  
なかなか もう 西彼ブロックのは 大仕事で あれは  
モー シュサイヒーダケニー ヒャクマンブライ イットヤ モン  
もう 主催費だけに 100万円位 いるのだもの  
ナー。  
ねえ。

A アーン。  
ああ。

B ホイデー ジェンブー ソノ ユソーヒカラー <sup>(28)</sup> ナンサン スレバ  
 それで 全部 その 輸送費から 何まで 入れると  
 ー ダイブー イッ イットバツテ ソギャンタ モー カクチョーニ  
 だいぶん <sub>x x</sub> いるのだけれど そんなのは もう 各町に  
 ミテモロテ  
 みてもらって

A アー  
 ああ

B コトシー <sup>(29)</sup> ヨシ  
<sub>x x x</sub>  
 今年

A フネワ モチヨッ ター。  
 舟は 持寄りよねえ。

B ハイ モチヨリム アノー  
 はい 持寄りも あの

A ドコツチャ ドコ ドコー ニツソノギグンナ。  
 どことって どこどこ 西彼杵郡は。

B エーットー <sup>(30)</sup> サキトー <sup>(31)</sup> オーシマジャロー。  
 ええと 崎戸 大島だろう。

A アン。  
 ああ。

B ホイカラー サイカイチョー シェイヒチョー オー キンカイ  
 それから 西海町 西彼町 琴海  
<sup>(32)</sup> トギツ <sup>(33)</sup> ナガヨー <sup>(34)</sup> タラミー (A<sub>ン</sub>) <sup>(35)</sup> ミエモー ジャッタトナンドン  
 時津 長与 多良見 (うん) 三重もだったのだけれども  
 ミエガ <sup>(36)</sup> ナガサキー アレ ナツタ モンジャケン ナー。  
 三重が 長崎に あれになった ものだからねえ。

A アー。

ああ。

B ホイデー キョネンワー ミエモ コンヤッタ カ。 トイシト  
それで 去年は 三重も 来なかったか。 戸石と  
テグマト アノー ミエト キオツタトナンジョン。  
手熊と あの 三重と 来ていたのだけれども。

A アー。 ジドシャーデ ツンデ クッ トター。 (Bハー ハー)  
ああ。 自動車で 積んで 来るんよねえ。 (はあ はあ)  
トラックで。

トラックで。

B ハーイ。(Aアー) ナカナカ オーシゴトデ イマー ナカムラ テ  
はい。(ああ) なかなか 大仕事で 今 中村

イジサーンニ アレ シテモロテ キキンバ ツクリオッ トサー。  
積ニさんに あれしてもらって 基金を 作っているんよねえ。

イッシェン (Aオー) マンノー。(Aオー) イマ ゴヒャクマンバッ  
1000 (おう) 万円の。(おう) 今 500万円ばか

カリシカ ヨットランドン イッシェンマン ツクッテ ソン リ  
リしか 集まっておらないけれども 1000万円 作って その 利

シデー イツクヨ ウンエイシェーデッテ ユーター  
子で ひとつ 運営しようよ と言って

(37)  
A オー ナカムラ テイジサンガ シ (Bアノ) シテクレオッ  
おう 中村 積ニさんが \*\* (あの) (世話を)してしてくれてい

トター。

るんよねえ。

B アーイ。 タイショ (Aサンギインノ) タイショバ シェワ  
はい。 大将 (参議員の) 大将を 世話



シェ シェワシテモロテ タイショニー。  
\*\*\*\* 世話をしてもらって 大将に。

A アー。  
ああ。

B キフバ アツメテモライオッ トター。  
寄付を 集めてもらっているんよねえ。

A オー (笑) (B笑)  
おう

B ナカナカー ヤ<sup>(38)</sup> モー チョード フケイキン ナッタ モンジャ  
なかなか もう ちょうど 不景気に なった ものだ  
ッケーン ヨラジニャー。  
から 集まらずに。

A オー。  
おう。

## 注

- (1) 「ヨッ」は、「ヨン」(他所)の言いさしか。
- (2) 「カキドー」は、長崎市東長崎町蛸道。
- (3) 「オリ」は、「折リ」で、船底の角度のこと。
- (4) 「カワラ」は、船の底板。中板を「カジキ」、外板を「ウワイタ」という。
- (5) 「アサヒマチ」は、長崎市旭町。
- (6) ここのことばは、急に、隣室から話に加わろうとした老年男性のことば。
- (7) (6)に同じだが、音声がはっきりしない。
- (8) 「キャー ロンドー キ ネー。 レンタイチョ」の部分、隣室の老年男性のことばが重なる。
- (9) 「ゴ」は、意味不明。
- (10) はっきりしないが、「ジ」とも聞こえる。
- (11) 「アルガ」の「アル」は、「舵」をさす。
- (12) 音声不明瞭。
- (13) 「ドンク」は、「ドンクライ」の「ドンク」。
- (14) 「ケ」の文末詞は、当地では、ふつう聞かれない。
- (15) 「イッ」は、後出の、「イッカイ」の「イッ」か。
- (16) 「ブラ」は、「ブラク」の「ブラ」。
- (17) 「カタガーン」は、琴海町形上。
- (18) 「ム」は、後出の、「ムラマツ」の「ム」か。
- (19) 「トタナー」の「タ」は、「ヤ」にも近く聞こえる。
- (20) 「オーキナ」とあるが、当地では、ふつう「オーキカ」と言う。
- (21) 「ウチ」は、意味不明。
- (22) 「オーシェト」は、西彼杵郡大瀬戸町。
- (23) はっきりしないが、「モ」とかすかに聞こえる。
- (24) 「テグマー」は、長崎市手熊町。
- (25) 「エヌ ビー シー」は、「NBC」で、民放の「長崎放送」。
- (26) この一文は「デース」でわかるように、やや、改まった表現

になっている。

- (27)「ニ」は、「二番」を言おうとしての言いさしか。
- (28)「ナンサン」の「サン」は、本来、方向を表わす格助詞であるが、ここでの用法は、「何マテ」に当る、特異な用法。
- (29)「ヨン」は、何かのことはの言ひさしと思われるが不明。
- (30)「サキトー」は、「崎戸町」。
- (31)「オーシマ」は、「大島町」。
- (32)「トギツ」は、「時津町」。
- (33)「ナガヨー」は、「長与町」。
- (34)「タラミー」は、「多良見町」。
- (35)「ミエ」は、「長崎市三重町」。
- (36)「アレ」は、「合併」(三重部落の長崎市への)をさす。
- (37)「オー」と聞こえるか、はっきりしない。
- (38)「ヤ」は、「イヤ」の「ヤ」か。

## VIII。沖繩県那<sup>な</sup>覇<sup>は</sup>市首<sup>しゅ</sup>里<sup>り</sup>

収録・文字化担当者 中 松 竹 雄

1. 地点名 沖縄県那覇市首里
2. タイトル 1. 明治の首里城周辺  
2. 守礼門の額  
3. 坊主御主と呼ばれた国王の話
3. 録音年月日 昭和58年3月12日
4. 録音場所 沖縄県那覇市首里の新垣恒篤氏宅
5. 話し手

A 新垣恒篤 (男) 明治32年生まれ 隠居(旧士族)

この収録地に生育し、まだ一度も他所で居住したことがない。85歳になるが、今も元気な旧首里士族。先祖は王家の流れをくむという。耳も口も達者で話題も豊富であり、話し方は青年なみである。心身共に健康である。沖縄の歴史、地誌に関する著書も数冊ある。聞き手役のN(中松)とは旧知の間柄であるため、くつろいだ会話体になっている。Nとの年齢差が色濃くあらわれている。首里語には対等にものを言う言語生活上の習慣はない。つねに上下関係を設定して会話を行う。敬語体系がきわめて複雑に発達しているためであろう。詳しくは方言談話資料(6)参照。旧首里市寒川町の出身。

N 中松竹雄 (男) 昭和12年生まれ 琉球大学教授

この収録地で生育し、現在も収録地に居住している。先祖代々首里に居住する。祖先は英祖王の系譜という。首里語は大別して士族語と平民語に分かれるが、士族語の上にさらに貴族語というものがある。『方言談話資料(6)』に収録したのは、この貴族語である。本集に収録したのは士族語である。『沖縄語辞典』国立国語研究所編も士族語を収録してある。中松も一応士族語を保持するものと考えている。厳密には中和された方言

であるかも知れない。例えば、士族語の特徴的音韻である[tsi]  
[zi]などは失っている。このことは、新垣氏も同様である。

## 6. 録音環境

首里は閑静な場所であるが、録音当日は梅雨のため、明るい窓ぎわの部屋で行ったため、雨音が時々激しくなったり、隣室のテレビの音が雑音となって混入したり、ベストではない。

## 7. 表記について

琉球方言は、仮名表記は困難であるので、簡略国際音声字母を用いることにした。さらに文節ごとに分ち書きにした。

## 8. 収録地点の概観・収録した方言の特色などについては、『方言談話資料(6)』を参照。

# 1. 明治の首里城周辺

話し手

| (略号) | (氏名)               | (性) | (生年)     |
|------|--------------------|-----|----------|
| A    | アラガキ コウトウ<br>新垣 恒篤 | 男   | 明治32年生まれ |
| N    | 中松 竹雄              | 男   | 昭和12年生まれ |

A kunu dzu, dzumenunykai<sup>(1)</sup> Zaru tu:ija:  
この 図面に ある通りね。

N Zu:  
はい。

A ſimuZajaɔzo:do:ri<sup>(3)</sup>  
下綾門通り

N Zu:  
はい。

A ndi Zi:ne: tamaZuduntu Zwi:Ziſidzo: Wakairuja:<sup>(4)</sup>  
と 言うと、 王陵と 上石門 分るだろう。

N Zu:  
はい。

A Watta: ma:dzi nu<sup>(5)</sup> tjiɔudziN Zudunnu<sup>(6)</sup> Zanu Zama jaſitſi  
私たち 真和志村の 聞得大君御殿の あの あそこ 屋敷

jando:ja:  
なんだよ。

N Ia: Ianjaibi:mi

ああ そうですね。

A Ii: Iansa:ni Ianu <sup>(7)</sup> <sup>(8)</sup> <sup>(9)</sup> Sunga:nu tšimma:sa: wakaimi  
ええ それから あの 寒川村の ロ-タリ- 分るかね？

N Iu: Iu:

はい、はい。

A Iakamaruso:nu <sup>(10)</sup> Iukamija: ( N Iu: Iu: ) tšukute:ru  
赤丸宗の 御神殿 ( はい、はい。 ) 造ってある

tukuru Immamade: ſimuIajaɟo:ndi Iitšo:N  
所 そこまでは 下綾門 と 言っている。

N Ia: tšimma:sa:madi na: 亜:

ああ、 ロ-タリ-まで ですか？

A Ii: tšimma:sa: tšimma:sa: Iune kunu  
ええ、 ロ-タリ- ロ-タリ- ほら、 この

N Iu:

はい。

A Sunga:nu Ianu <sup>(11)</sup> maɟikinasu:dži jando:ja: ( N Iu: Iu: )  
寒川村の あの 真境名通り なんだよ。 ( はい、はい )

maɟikinasu:dži jakutu  
真境名通り だから

N Iu:

はい。

A Ianu <sup>(12)</sup> tanka:ja mata Ianu <sup>(13)</sup> watta:ga ſo:gakko:nu  
あの 向いは また あの 私たちが 小学校の

<sup>(14)</sup>  
Iitšininen so:ine: Iwa:gwa:Iui matsi jatando:  
1・2年に なる頃には 「豚売り市」 だったよ。



N Iumana: ̄u:  
そこですか？

A In: ̄iradzuzatu<sup>(15)</sup>  
ええ、裁判所跡。

N namanu suriko:ja<sup>(16)</sup> kuma: Iarani ̄u:  
今の 首里高校は ここでは ないですか？

A je:  
え？

N suriko:ja  
首里高校は？

A Ia: a suriko:ja Iaran Iure: kuma  
あ、いや 首里高校ではない。

N Ia: suriko:ja ka:ma Ia: kumaga t̄simma:sa:ykai  
ああ、首里高校は ずっと… ああ、ここが ロータリーに

Iuriti Iit̄suru tukuru  
下りて 行く 所

A In: kure: t̄simma:sa: Iune<sup>(17)</sup>  
これは ロータリー ほうら！

N kumaga t̄simma:sa: jaibi:saja:  
ここが ロータリー ですね。

A t̄simma:sa: madi jasaja:  
ロータリーまで だね。

N Iu: kumaga t̄simma:sa:  
はい。

A tayka:ja jo: Ianu makandunt̄sinu<sup>(18)</sup> kaykatsudu jaje: susiga  
向いはね、あの 真壁殿内の 管轄で あるが、

N Zu:  
はい。

A Zumankai Φiradzu  
そこは 裁判所

N Ia: Φiradzu Iatu kumankai Iaibi: (19)  
ああ 裁判所跡 ここは あり…

A kumankai makanduntji Iasaja:  
ここは 真壁殿内が あるだろう。

N Zu:  
はい。

A Φiradzu ja(siki jata(siga  
裁判所屋敷で あったか

N Zu:  
はい。

A Φiradzo: na: suridzo: kara Ianu <sup>(20)</sup> jo: taiwo: ja nakagusiku  
裁判所はもう、首里城から、あの 尚泰王は 中城

<sup>(21)</sup>  
Iudununkai Iutjimiso: t(sasaja:  
御殿に お移りなされたでしょう。

N Zu:  
はい。

A Iuri hana(se: t(sit(saru ja:  
それ、話は 聞いたでしょう。

N Zu:  
はい。

A nakagusiku Iudun na: ka mi, miguti n: t(saru kutu  
中城御殿の お屋敷の中を xxxx 一周して 見学した ことが

Iami  
ある？

N Iu: Iikkwai Iaiibi:N  
はい。一度だけ あります。

A Iaran jo: Iudunnu so:taiga Iimenjse:ni miguti  
そうではなくて、御殿に 尚秦王が お成りになる時は 巡回して  
n:tjaru kutu Iaimi  
拝見し: ことが あるかね。

N Wu: Wu: Iure: IaibirAN dzo:i ne:i birAN Watta:  
いいえ。それは ありません。とても ありません。 私たちは  
(23)  
Iunni:ne: da: kokumingakko:  
その頃は 国民学校 …  
(24)

A In: Iay jare: WakaiN Iansakutu suridzo:kara  
ン- それなら わかる。 だから 首里城から

Iakewataji: Jimiso:tji Iamanikai menso:tjase:ja:  
明け渡しして なさって あちらへ いらっしゃったでしょう。

N Iu:  
はい。

A sakutu kuman Iiradzunri:se: Iiran:se:ja:  
そこで、ここも 裁判所というのは 不要になったので。

N Iu: Iu:  
はい。

A Iansa:ni Iuma: Iunu kungutu dakinu mi:to:ru  
それから ここは その こんにゃくに 竹が 生えている  
(25)

Iukamanu mat:ijagwa: ja:se:  
外間家の 商店 だった。

N I'a: dakinu mi:to:ibi:tanna:  
ああ、竹が 生えておりましたか。

A I'ansa:ni  
その後、

N nama: murū  
今は すべて…

A nu:ndiga kuma: I'iradzū I'ato: ku:sa:ni jo:  
なんというか、ここは 裁判所の跡は 壊してね。

N I'u:  
はい。

A I'anu nama <sup>(26)</sup> hakubutsukwannakai I'wa:gwa: I'uinu I'anu  
あの 現在 沖縄県立博物館に 豚を 売買している

ji:nu I'ase:ja: I'are: kuma I'uto:ti hadzimite:ru  
絵が あるでしょう。あの絵は ここで 豚の売買を 初めてやった様子を

ji: jasa  
描いた絵なんだよ。

N I'aha:  
あはあ…

A I'wa:gwa: I'ui matsjinu I'ansa:ni I'unu I'umakara  
豚売り市が <sup>(27)</sup> それから その そこから

katabarunkai I'ndzo:nte: ja:  
干原に 移って行ったわけよ。

N katabaru  
干原？

I In: katabarukara mata I'unu <sup>(28)</sup> I'iamba<sup>(29)</sup>jinu ni<sup>(29)</sup>sihongwandzinu  
ん。干原から また その 思案橋の 西本願寺の

Ianu nu:ndiga Iagatandzi Iare: ka:ma Iatu na:  
あの はんというか もっと遠くに あれば ずと後々の もう(事であった)

Iunni:ŋkara: gunkoku dzidai nato:tan  
その頃には 軍国 時代: になっていた。

N Ia:  
ああ。

A Iansukutu kuri kuri Iubito:ru mundug jare:  
Tから、 これ、 これを 憶えている のであれば。  
(30)

N Iu: Ia tŋu:zammondi Ii:ne: Watta:ga: Iuibiransa:  
はい。あ… 中山門と 言う と、 私たちは 憶えて いませんね。  
(31)

A So:darō:  
そうだろう。

N Iu: Watta:ga na: munu Iubi:ŋkara: na: tŋu:zammono:  
はい。私たちが ものを 憶える 頃からは もう 中山門は

ne:jabirantan  
ありませんでした。

A tŋu:zammon tŋukuiru tamini Iune kumankai Ianu Ije:  
中山門を 建造する ために、 ほら ここに あの ほら、

Iitta: ŋi:tu jataran nu:jarawan nu:ndiga sunga:nujo:  
あなたら 生徒 だつたにしろ、 なんにしろ、 なんというか、 寒川村のね。

N Iu:  
はい。

A Ianu: Imma ( — Iohajo: gozaimasu — ) namanu  
あのう、 そこ ( オハヨー ゴザイマス ) 今の  
(32)

kunu mijakohoteruntŋi Iasaja:  
この 都ホテルと いうて あるでしょう。

N Iu:

はい。

A Immanu me:ŋkai ki: Iarisa:ni kunu kundzansabakui si  
その 近くで 材木を あれして(おろして) この 国頭サバクリ(という木遣り歌を歌って)

(34)

⊕i ⊕itʃaʃe: Iubirani  
xxx  
(材木を)引いたのを 憶えていないか。

N Iure: hanaʃe: tʃitʃo:ibi:ʃiga  
それは、 話は 聞いていますが。

A Iaray hanaʃe: tʃitʃaru ja:  
そう、 話は 聞いた:た:ろう。

N Iu:

はい。

A Iunni:ne: kuri tʃukuinditʃi  
その時にはこれ(首里中山門)を 造るといって

N Iu:

はい。

A ʃe:ru dzaimoku  
集めた 材木を

N Iu: jatandiru hanaʃe: tʃitʃo:jabi:ŋ  
はい、 そうだったという 話は 聞いています。  
(35)

A rju:tanunakai tʃikitanjo: ja:  
龍譚池に つけた:んた:よね。

N Iu: Iurimade: hanaʃe:  
はい、 それまでは 話は

A kure: Ianu: Iungutu:ʃi ʃe:ru kuto: jaʃiga ma: nama  
これは、 あのう そんな風に やった: ことでは あるが、 マー 未だに

tʃukute: ne:ŋ se:ja:  
建造して ないでしょ。

N ɽu:  
はい。

A ɽansukutu wanne: kuri tʃukurasuru tamini  
だから、 私は 中山門を 建造させる ために

N ɽa: ha:  
あー はー!

A ɽunni:ne: ʃuriʃijakuʃu ʃuriʃimin ɟembu wikiga winagu  
その時には 首里市役所(が) 首里市民が 男性も 女性も

ɽndʒiti  
総出で

N ɽu:  
はい。

A wudui sagana: kanʃi jakusuku se:ʃi jando: ja:  
舞踊 しながら こう 約束した 中山門 なんだよ。

N ɽa: ha:  
ああ

A ɽuriga tʃukuratte: ɽuramba:  
それが 建築されて ないでしょ。

N tʃu:ɟzammon tʃukuintʃi  
中山門を 造るとして

A ɽanu ɟzaimoku ɽijugumuinkai tʃikitaʃe: tʃu:zammon  
あの 材木を 龍潭池に つけたのは、 中山門を

tʃukuintʃi  
造るとして。

N tʃukuintsʃi du ~~~~~  
建造するため

A kunu ʃurei nu mon tʃukuramma: du  
この 守礼の 門を 造らない間に、

N ʒu:  
はい。

A Wanne: ʒunni: ne: nu: ndiga sunga: ŋkai wukutu  
私は その時には なんというか 寒川村に 住んでいるから。

N ʒu:  
はい。

A ʒansa: ni watta: ŋ kundzansabakui ʃi ʒuta ʒutaigana:  
それから、 私たちも 国頭サバクリの 木遣り歌を 歌いながら、  
hippati ʒndzando: ja:  
引張って 行っただよね。

N ʒu:  
はい。

A jaʃiga ʒunu tʃukuran ʒo: i ʒunu ki: ja kusari: gata:  
だけど、 その(中山門は)造らないで、 その 材木が 小さい せいで  
natakutu  
たがったので。

N ʒu:  
はい。

A ʃuridzo: nu tʃukuinditsʃi so: ru tʃumangura ʒo:  
首里城の 造ろうと している 時期 たったよ。

N ʒu:  
はい。



A Ianu: mata Immakara satʃi tʃukuran na:ndi wanne:  
あのう、また、首里城から先に 建築しないかと 私は

Iitʃaŋ jo: ja:  
提案してんたよ。

N Iu:  
はい。

A tʃukute: ne:ŋ ʃe:  
(たけど) 造ってはいないさ。

N Iu:  
はい。

A Iaŋʃi ʃure: nu  
そして 守礼の

N Iaŋʃi Iunu ki:ja tʃa:saga  
そして その 材木は どうしたの？

A Iunu ki:ja jo: Iansukutu na: dokunen ʃitʃinen bike:  
その 材木はね、それだから もう、6年、7年 ばかり  
natakutu kusari hadʒimato:ŋ jo: ja: midʒinu mi:ŋkai  
た→たので、くさり始めてんたよね。 水の中。

Iijugumuiru jakutu  
龍潭池 たから。

N Ia: ha:  
ああ。

A sakutu ji:ba: mata kunu Ieŋkakudʒi tʃukuindi Iija:ni  
そこで 好都合に また この 首里内覚寺を 再建すると 言って、<sup>(36)</sup>

Ianu ni:jo: moŋ ja:  
あの 仁王門をね。

N Iu:  
はい。

A Iuma tsukujuru dzairjo:ŋkai Iare: tsikati  
それを 造る 材木に あれば 使った。

N Ia: ha:  
ああ

A Iansa:ni Ianu: wanne: ki:ze:ku:ŋ<sup>(37)</sup> Iarin judi Ianu  
そこで あのう、 私は 大工さんも あの方も 呼んで、 あの、  
Iunni:ne: tamaIudunun tsukurasagana: jakutu  
その時には、 王陵も 建造中であつた から、

N Iu:  
はい。

A Iurašimitaŋ jo:  
彫刻させたんだよ。

N Iu:  
はい。

A Iunu Iu:dzi:si se:kutu kure: dziIi  
そんな風には やつたので、 これは 是非とも

N n:  
ん!

A Iurišimintunu jakusukug jakutu tsukurašiwaru jaje: saninditsi<sup>(38)</sup>  
首里市民との 約束でも あるから、 造って いたんだこうと

Wanne: Iumuto:ruba: Iunu tamini kure: katšaruba:  
私は 思っているんだよ。 その ために、 この図面は書いたんだ。

N Iu: Ia: ha: Ianru jaibi:nna:  
はい。 ああ。 そうでしたか。

## 注

- (1) 新垣氏は首里の明治時代の地図を記憶をたぐりながら作成中である。その原図を見ながら、会話は進行する。
- (2) [ɽu:] 応答語。身分の低い者または若い者から身分の高い者または年長者に対する許諾の意を表わす。はい。同年の者であっても、一か月でも一日でも先に生まれた者に対しては敬語を用いるのが士族語の特徴である。同輩の者や年下の者に対しては[ɽi:]という。
- (3) 首里城から守礼門を経て那覇市方面に通じる幹線道路の一つ。特に、現在の首里高等学校の裏門から観音堂あたりまでの大通りを指している。綾門は美しい門の意。「あや」は美しいの意。
- (4) [tama-ɽudun] 玉御殿。tama は御霊の<sup>ソマ</sup>霊。ɽudun は御殿。王陵のこと。みささぎ。ここでは尚氏の王陵を指している。
- (5) [ma:dʒi] 語源は<真地>か。旧首里市の一町。首里城の北西部に位置し、城西小学校、首里高等学校などの所在地。
- (6) [tʃiɽudʒin-ɽudun] きこえおおぎみ(聞得大君)御殿と書く。  
[tʃiɽudʒin]の語源は<貴婦人>か。きこ急大君は祭政一致の時代の名残り。琉球王国における最高の女性神官。国王の母、后または姉妹がこれに当る。その配下に「ノロ」[nu:ru]という女官があり、各地方に配置された。現在の市町村にほぼ相当する間切ノロがこれである。  
首里には、地方ノロと聞得大君のパイプ役をつかさどる三平等(三区)の真壁殿内・首里殿内・儀保殿内にノロの頭領が置かれていた。
- (7) 応答語。はい。同輩または年下の者に対して用いる。
- (8) [sunga:] 寒川。首里の町の一つ。
- (9) [tʃimma:sa:] ロータリー。十字路。一里塚の起点。
- (10) [ɽakamaruso:] 赤丸宗。醤油製造販売会社。沖縄を代表する製造業の一つ。那覇市首里寒川町に本社がある。具志堅宗精氏の創立になる。
- (11) [madʒikina] 真境名と表記する。代表的な士族の氏姓の一つ。  
[su:dʒi]は<小路>のこと。

- (12) [taŋka:] 向い。語源は[tamukai] <手向い>か。
- (13) 代名詞。[waN] (私) は自称の単数形。[watta:] は自称の複数形。  
このように、本来、単数形を用いるべきところを複数形で表わすことが多い。
- (14) [ʔwa:gwa:] 豚。[ʔ] は声門閉鎖音。首里方言の音韻上の特徴である。[gwa:] は美称の接尾辞。
- (15) [ʔiraŋgu] 平等所と書く。裁判所。
- (16) [ʃuriko:] 首里高。首里高等学校の略称。創立百年を越す沖縄の名門。進学校。野球、芸術面でも有名。『甲子園の土』という映画にもなった。戦後初めて沖縄から野球で甲子園の土を踏み、持ち帰った土が、当時の政治状況(外国扱い)のために海に捨てられたことが国民に大きなショックを与えた。
- (17) [ʔume] 間投詞。ほら。それ。
- (18) [makanduntʃi] 真壁殿内[makabi-duntʃi]のこと。真和志の平等にあった。
- (19) 言いさし。
- (20) [ʃo:taiwo:] 尚泰王。1848年に即位し、1879年に退位する。  
明治12年に琉球王国が廃され、沖縄県が置かれた時の琉球国最後の国王。退位後は中城御殿に居を遷され、さらに皇居に近い九段に屋敷を下賜された。
- (21) [nakaguʃiku-ʔudun] 中城御殿。首里城外、大中町に所在する尚家の私邸。退位後はここに居住された。  
太平洋戦争で破壊されて後は琉球政府の時代に文化財保護委員会の事務局、博物館などに移し、現在は沖縄県立博物館が置かれている。  
残存した石垣に昔日の面影をしのばせる。
- (22) [ʔimeŋʃe:ni] いらっしゃる時に。尊敬語。[meŋʃe:N] より敬意が高い。
- (23) [wu:wu:] 応答語。いいえ。[ʔu:] の対語。目上または年上の者に対して用いる。
- (24) [kokumingakko:] 国民学校。大東亜戦争当時の小学校の別称。

- (25) [ɕukama] 外間。旧首里士族の氏姓の一つ。
- (26) [hakubutsukwan] 博物館。終戦後散逸した首里の文化財を収集したことに始まる。最初は汀良町にトタンぶきの小屋から出発し、龍潭湖畔の沖縄県立師範学校跡に移り、さらに中城御殿の中に琉球政府立博物館として本格的な建物が出来、昭和47年の祖国復帰と同時に沖縄県に移管され、今日に及んでいる。
- (27) [katabaru] 干原。干礁のこと。
- (28) [ɕiambaɕi] 思案橋。那覇市内にある古い橋の一つ。
- (29) [niɕihongwandɕi] 西本願寺。那覇市街地にある古寺の一つ。
- (30) [tɕu:dzammon] 中山門。現在の首里高等学校の裏門の近くにあった城門の一つ。中山は首里の別称。南山、北山に対していう。今次大戦で焼失した。
- (31) 共通語形。
- (32) 共通語形。お茶を運んできた女性のあいさつ語。
- (33) [mijako hoteru] 都ホテル。全日空系の全国チェーンホテルの一つ。那覇市首里坂下町にある。
- (34) [kundzansabakui] 国頭サバクリ。木遣り歌。沖縄の代表的労働歌の一つ。ユーモアに満ちた所作が人気を呼ぶ。
- (35) [rju:tan] 龍潭池。首里城外にある人工湖。この湖から眺めた首里城の風景は天下一品である。
- (36) [ɕenkakudɕi] 首里円覚寺。1492年の創建。首里城外にある旧国寺。元の国宝。今次大戦で焼失。15世紀から17世紀にかけて最も隆盛をきわめ、僧6000人を学ばせたという。山門は復元された。禅宗。
- (37) [ki:ɕe:ku] 語源は<木細工>。木工のこと。[ɕi:ɕi:ɕe:ku] <石細工> (石工) に対していう。[ɕe:ku] <細工> は大工の意。
- (38) [jaɕe:saminditɕi] は直訳すれば「であろうとって」。

## 2. 守礼門の額

話し手

| (略号) | (氏名)  | (性) | (生年)     |
|------|-------|-----|----------|
| A    | 新垣 恒篤 | 男   | 明治32年生まれ |
| N    | 中松 竹雄 | 男   | 昭和12年生まれ |

A kure: makanduntji ja:  
これは 真壁殿内<sup>1)</sup>よ。

N Ōanſe: nama kuma: na: ſuriko:ko: jaibi: tanna:  
それでは、現在 ここは、もう 首里高等学校の所在地でしたか。

A Ōn: ſuriko:ko:ja jo: (N Ōu:) nakaguſiku Ōudun  
ええ、首里高等学校はね、 中城御殿<sup>1)</sup>よ。

(N nakaudun Ōanſi ) kungutuſi narado:tan jo: ja:  
中御殿 そして こうして 並んでいたよ。

N Ōu:  
はい。

A Ōansa:ni Ōunumamanakai tſu:gakko: <sup>(1)</sup>jatay jo:  
それから、(中城御殿が)そのままに 沖繩第一中学校に ならんた<sup>1)</sup>。

N Ōu:  
はい。

A Ōunu Ōuramonna:ri:  
その(中城御殿の)裏門から、

N Iuramonga Iatanna:  
裏門が あったの？

A Iuri Iuri  
それ！ それ！

N Ia: Ia: Iuramonga  
ああ、ああ、裏門が

A Iangsi Iunu namanu den<sup>(2)</sup>sa do:ri ndit<sup>(2)</sup>si wakaimi  
それで その 今の 電車通りって 分るかい。

N Iu:  
はい。

A den<sup>(2)</sup>sa Iubito:mi  
電車を憶えているか。

N Iu: Iubi Iija den<sup>(2)</sup>sa Iubite: Iuibiran Iare: tai<sup>(2)</sup>so:ru  
はい。憶え、いや、電車は憶えていません。あれは。大正でしょう。

A den<sup>(2)</sup>sa Ianu tsukui tu:sundi jo: kunu nakagu<sup>(2)</sup>siku Iudunnu  
電車を、あの、造る、通すといってね。この 中城御殿の

kuma sit<sup>(2)</sup>sa mute: Iisigatsin ku:sa:ni  
この 下側は 石垣も 壊して、

N Ia: ha:  
ああ

A Ianu mi:t<sup>(2)</sup>si nukuto:tan jo: ja:  
あの 三つ 残っていたよね。

N Iu: Iu:  
はい。

A hadzime: ju: ju:t<sup>(2)</sup>si narabi: jatan jo: ja:  
初めは 四つ、四列に 並んで いたよね。

N Ia: ju:tʃi narabi: na:  
ああ、四列ですか。

A In: jaʃiga Iuri ku:tʃimadin sa:nakai Iajʃiga Iuramono:  
ええ、たけど、それを壊してまでも軌道を造ったが、裏門は  
kunu kure: makandu kumaykai su:ɔʒi nde: makanduntʃi  
この、これは、真壁殿、ここに、通り 真壁殿内、  
makanduntʃi su:ɔʒe: jaʃiga kuri  
真壁殿内通りではあるが、これ、

N Iu:  
はい。

A kunu Iudzo: nu Iaru Ije:ka: jo: kuma wo: nu Iari jassa:  
この御門の、ある間は、ここ 国王が、なんですか  
Ianu nu:ndiga su:ɔʒinde: Ijan  
あの、なんというか、通りとは言わない。

N Iu:  
はい。

A Iurikara Iwi:Iiʃidzo: jatin Ianu  
それから、上石門でも、あの

N Iu:  
はい。

A su:ɔʒe: Iaraj ja: Iansukutu niʃinu Iudzo:do:ri du jataru  
通りではなく、<sup>(3)</sup>だから、北御門通りで、あった。

N Ia:ha: Iajʃe: Iunto: seiʃikina meiʃo:ndi Ii:ne:  
ああ、それではほんとうの正式な名称と、いうのは、

niʃinu Iudzo:do:rindiru Ijabi:nna: Iu:  
北の御門大路と、言うので、すね。



A Ii: nijinuZudzo:du jaru makanduntsi ndi Zise: Zunu  
そう、北の御門で ある。 真壁 殿内と 言うのは、 その  
(4)

nu:ndiga Zure: tada nu:ru nu makanduntsi ndiru  
なんというか、それは T=t= 祝<sup>ノ</sup>女<sup>口</sup>が 真壁 殿内に

nu:ru nu Zuti makanduntsi sunduntsi dzi:buduntsi ndit<sup>(6)</sup>si  
祝女<sup>(5)</sup>が 居て、 真壁 殿内、 首里 殿内、 儀保 殿内とって

mitunt<sup>(6)</sup>si  
三殿内。

N mitunt<sup>(6)</sup>si  
三殿内。

A mi:t<sup>(6)</sup>si ja:  
三つですね。

N Zu:  
はい。

A mi:t<sup>(6)</sup>si Zati sukutu mitunt<sup>(6)</sup>si Zanjiga  
三つ あるから、 三殿内と 称している。 T=t=t、

N Zn:  
はい。

A Suridzo: Zakewata<sup>(7)</sup>itu madzun  
首里城 明け渡しと 同時に、

N Zu:  
はい。

A Zanu daigaku nu ko:gakubunu Sit<sup>(8)</sup>janu kubunnakai Zama:  
あの 琉球大学の 元の工学部の 下方の 窪地にあった。 あそこは…

N Zn:  
はい。

A ɽunu mituntse: kunu muru rengo:sa:ni ɽumaykai  
その 三殿内は、 この、 すべて 連合して、 そこに

mituntsi mi:tʃi jakuturu mituntʃi  
三殿内、 三つ あるので、 三殿内。

N ɽaha:  
ああ。

A mi:tʃi jakuturu mitun jaru ɽunu  
三つ あるから 三殿内 なんだ。 その…

N ɽa: mutumuto: ɽanʃi mitukuma wakarito:  
ああ、 元々は そうして 三殿内 は 分れていた…

A ɽi: ɽakatasunduntʃi kurabunu ɽattukuru ɽurikara  
ええ。 赤田首里殿内は クラブが あるところ それから

makanduntʃi kuma  
真壁殿内は ここ

N kuma kuma  
ここ、 ここ!

A dʒi:bunduntʃindi ɽi:ne: hanaguʃikunu ɽirimuti  
儀保殿内と 言うと、 花城さんの 西側にあった。

<sup>(9)</sup>  
hanaguʃikunu seiʒo:ta:  
花城 清用 さん 宅の。

N ɽu: namanu  
はい。 現在の

A jati  
である。

N namanu  
現在の。

A seijo:ga wuttukuma: Zirimute:  
花城清用さんがおられる 屋敷の西側。

N Zu: Zumankai Zaibi:tan  
はい。そこに ありました。

A Zansukutu Zunu mi:, Zunni:nue:ka Wo:Φunu  
であるから。 その その時までは 王府の  
tʃiΦudzij Zudunnu Zanu Zamma: kankatsu so:miʃe:kutu  
開得大君御殿の、 その、 そこは 管轄で ありましたので

N Zu: Zu:  
はい。

A tʃiΦudzij Zudundi Zise: kikoeʔo:giminditʃi katʃuruba:te:ja:  
「貴婦人御殿」と称するのは、「開得大君」と 書くんたよね。

N Zu:  
はい。

A Zansukutu Zuri Zanu ʃiruʔutʃinkai Zataruba:  
だから、それを、あの (首里)城内に あったんだ。

N Zu:  
はい。

A Zaʃiga Zanu: nu:ndiga nakaguʃiku Zuduno: namanu  
あるが、あのう なんというか、 中城御殿は 現在の  
hakubutsukwannu tukurunkai ʔutʃijui  
博物館の 場所に 移られるし。

N Zu:  
はい。

A Zanʃikara mata Zanu: sakutu ʃiruʔutʃine: na:  
それから また あのう 色々あったので、(首里)城内には

(10)  
Zunni:kara: kempeinu Zittsaruba:  
その時以来 憲兵隊が 駐屯していた。

N Za:  
ああ。

A kempeinu Zittso:se: wakaimi  
憲兵が 駐在していたのは知っているの。

N Wu:wu: Zure:na: Jikatto: Zubite:Zuibiransa:  
いいえ。それはもう はっきりは 憶えてはいませんね。

A watta: kempeini Iwa:tte: wu:i sattay jo: watta:  
私らは 憲兵に よく追いまわされたりしたものです。私らが  
gakko: ZanJiga gakko:nu watta:ga jonen so:ini jo:  
学校… た“けど”、 学校の 私たちが 4年に なるた時に

(11)  
SuriJitso: tsibana tjo:jo: dzidai ni jo:  
首里市長 知花朝章 時代には、

N Zu:  
はい。

A Suridzo:ja Surinu Zanu dzeikinsa:ni ko:tan  
首里城は 首里市民の 税金で 買った。

N Zu:  
はい。

A ko:to:Jiga Immanikai mata. Jimadzuke nu satsumanu  
(買うのは)買ってあったが、そこに また“ 島津家の 薩摩の

Zunu Jijji:kara kempeikara nu:karasi watta:ga Jigu  
その 教員やら 巡査やら ばにやら居て、 私たちが すぐ

Zittsi Zitji:ne: Zi:ma:sutan jo:  
入っていくと、 追い出しようとした“よ。

N Iu:

はい。

A Iansakutu watta:ga nama (in)si:ŋkai jo: Ianu: Ian(ŋ)i  
それだから、私らが、今 先生にね、あのう ああいうように

Ii:ma:sundo:ja:ndi Iit(ŋ)akutu mata mombanug kai  
追い出されると 上申すると、 首里城の門番の

Iakabana:tamme:gwa:ndit(ŋ)i Iuri satsumanu tt(ŋ)unu Iutan  
赤鼻じいさんという(ニックネームのつけられた) 薩摩の 人が いたん

jo: ja:  
だよな。

N Iu:

はい。

A Ianu Iuriga Iŋ(ŋ)ga:ni nu:ga kuma: ŋurikunu ŋi:sa:ni  
あの それが、行って、なんだおまえは、ここは 首里区の、市で、

ko:te:ru Iunni: ŋuriku: Iunu (N Iu: ŋuriku )  
買ってあるんだぞ。 そのころ 首里区 その ( はい、 首里区で。 )

ŋuriku ko:te:ru munnu Ija:ga waraba:ta: Ii:ma:suru  
首里区で 買ってあるのに、 おまえが 首里の子供たちを 追い出すとは

wakinu Iamindit(ŋ)i (N Iu:) Iitta:ja Iŋ(ŋ)irindit(ŋ)i  
何事かと 抗議をして、 おまえたちは 出て行けと言って、

Iunni:n Iuto:ti Iakabana:tamme: Ii:Φo:rattan jo:  
その時に、 赤鼻じいさんは 追放されたんだよ。

N Iaha:

ああ！

A Ian(ŋ)ikara <sup>(12)</sup> nakamanu <sup>(13)</sup> nobu:ta:  
それから 名嘉真の 信さんの家で 管理人が出た。

N Iu:  
はい。

A Ianu Iujanu<sup>(14)</sup>  
あの、先代の名嘉真さん

N Iu:  
はい。

A Ianu: benkjo:do:ndi Iisiga Iuma Iari Iu<sup>x</sup> Iu:taru ba:te:ja:  
あのう、勉強堂と いうのが、そこ、あれ、いた わけよ。

N Iu:  
はい。

A nobu:ja suridzo:nu kutu waka uja: wakaisiga jasiga  
信さんは、首里城の ことは 分ら、親は 分るた:らうが。

nobuga jatin suridzo:nu kuto: wakaransa ma: Iunu  
信さんは 首里城の ことは 分らないた:らうね。

Iu:dzi:ŋ Iakutu ja:  
そんなこと あるからね。

N Iu:  
はい。

A Iansukutu Ianu Iunni:nu kunu nu:ndiga to:nukuranu<sup>(16)</sup>  
た:から、あの、その時の この なんというか、当之蔵村の

<sup>(17)</sup> kusuminu <sup>(18)</sup> kadjimaja:nakai Iaru tsumagurankai Iarisi  
楠見薬局の 十字路で、ある 頃に あれして、

Iunna Iatudu bentso:do:nu IumaIuti Iuitakutu  
その 後ぞ、勉強堂が そこで 売ったので、

Iitengwa:ja madzi so:gakko: mi:Iatidu jate:kutu  
支店は 第一 小学校(の子供)が 目当て た:らた:から、

(19)  
(N mmandzi namanu gako:nu ) kwangkaimonnu  
そこで、 今の、 学校の 歓会門の

N Zu:  
はい。

A kwangkaimonnu tukuruZuti Zuto:ru ba:te:ja:  
歓会門の 所で 売った わけよ。

N Za:ha:  
ああ。

A ma: Zunni:ne: Zanu: nu:ndiga Zurikara kurin hana:se:  
まあ、 その時には、 あのう、 はんというか、 それから、 これも 話して  
so:kaja:  
置こいわ。

N Zu:  
はい。

(20)  
A kumakara sureimonnu Zumani Zasaja:  
ここから 守礼門の そこに あるだろう。

N Zu:  
はい。

A Zi: Zanu sureinu mondi Ii:se: Zanu: nu:ndiga kunu  
ええ、 あの 守礼の 門と 言うのは、 あのう、 はんというか、 この  
gaku kure: tju:dzan ditji Zure: kakatto:šiga  
額は これは 中山と、 それは 書かれているが。

N Zu:  
はい。

A Zare: sureinu kuninditji Zanu kuninu dzi:ja kuni  
あれは 守礼の 国と あの 国の 文字は 国

sikkaku: nu kunijaj jo: ja:  
四角い 国 ほんに"よね。

N ̄u: sikkaku: ja zaraj ho:  
はあ? 四角い文字ではない、「邦」

A sikkaku: nu zutšijkaite:  
四角の 中に

N Ia: Zu:  
ああ。

A Zure: Zure: ho: nu dzi: zare: ho: nu dzi: ja zaraj  
それは それ 「邦」の字。 あれは 「邦」の字ではない。

N ̄u:  
ほんですって?

A sikkaku: nu kuninu dzi: si kakatto: taj jo:  
四角の 国の 字で 書かれていたよ。

N ŋkaši na: ̄u:  
昔ですか?

A Zi: Zuring wanne: hakubutsukwannu ninđun kai  
そう。 それも 私 は 沖縄県立博物館の 館員に

<sup>(21)</sup>  
nnaŋ kai jamazatu jeikitšijkaing tšu: ku kuri Zitšo: šiga  
みんなは 館長の山里 永吉さんにも 強く そのことを上申しましたか。

mata Zurikara  
また。 それから

N šikaku: nu kunidu jaibi: nna:  
四角の 國の字が 正しいんですか。

A Zi:  
そうです。



N nama: ho:nu dzi: katse:ibi:ſiga  
現在は「邦」の字で書かれています。

A ſare: ſansukutu watta:ga gonen so:i ni jo:  
あれは、T="から、私らが小学校5年生の時に。

N ſu:  
はい。

A ſanu kempeinu tſa:ni jo: ſokinawawa ſimagunide  
あの憲兵が来て、「沖縄県は島邦で

ſarunoni kono kunino dzi:de kakunowa keſikaran  
あるのにこの國の字で書くのはけしからん。  
(22)

ſoroſite naose nditſi jo:  
おろして直せ。」と言ってね。

N ſu:  
はい。

A ſare: watta: me: natſo:ti ſuruſimiranttag jo:  
あれは私らの前で、おろされたんT="よ。

N ſitſi jaibi:N  
いつですか。

A meidzi  
明治!

N meidzi nannen jaibi:ga  
明治何年ですか。

A taiſo:ŋkai narandinu jonſu:goneŋ  
大正になろうとする、明治45年!

N me:dzi jonſu:goneŋ ſa ſunni:made: ſanſe: ſunu  
明治45年 あ、その時までには、それでは、その

sureinu kuni (A sureinu kuni) ndi ?ise: kunu  
守礼の国と (守礼の国) 言うのは、この

?ikaku: nu kunidu jaibi: tanna:  
四角い 國の字 でしたか。

A ?urisa: ni kakatto: ?i jatan jo:  
それで 書かれているものだからよ。

N ?oho:  
おお。

A ?ansa: ni ?unu kunu nu: ndiga bukabundit?i ?unu  
それで、その、この、なんというか、文化部と言って、その  
nu: ndiga ?anu nakagu?iku ?udunnu ?agataykai ?ata?e: ja:  
なんというか、あの、中城 御殿の あちらに あつてでしょう。

N ?u:  
はい。

A minamoto takeo<sup>(23)</sup> maeda gikenun<sup>(24)</sup> ?uta?e: ja:  
源 武右衛門とか、 真栄田 義見さんも 居てでしょう。

N hai  
はい。

A ?unni: nu t?umangura ?anu jamazato eikitsiga ?ari  
その時の 前後に、 あの、 山里 永吉さんが あれを  
t?ukurasimitasa ja: surei nu kuni mon t?ukuti  
建築させたでしょう。 守礼の国、 守礼の門を作った。

N ?u:  
はい。

A ?ansa: ni gaku ?agi: ru kutun natikara ho: nu dzi:  
それで、 額を 上げる ことに なってから、 邦の 字を

katʃe: takutu

書いてあったので。

N Zu:

はい。

A Zure: no:ʃindi Zitʃo:ndo:

邦の字は国の字に直せと申告したんだよ。

N Zundzuga na: ɕu:

あなたがですか。

A no:ʃi Zure: Zanu kempeinu Zunni:ne: satsuma gunkoku

直し、それは。あの 憲兵の その時には。薩摩、 軍国

ʃugi najɑ:ni ja:

主義に なるね。

N Zu:

はい。

A Zanu Zuriʃi Zataranditʃi Zari Zurutʃi ŋkaʃinu mama

あの それで 当らないと言って。あれを おろして。 昔の通りに

tʃukujuru ʃidʒi jara: no:ʃinditʃi Zitʃo:ʃiga Zundzu tʃuiga

作る わけで あれば。直しなさいと 言ったのだから。あなたの 一人の  
(25)

Zariʃe: naibirandi Zitʃiʃi Zunu sakutu jo:

考えで 直すわけにはいきませんと言って。そのままに したんだよ。

N Za: ha

ああ。

A na: ʃengo: maɕi Zitta:ŋ Zure: Zonnaʃi jaʃiga wanne:

もう 戦後は ます”あんた=ちも それは 同じことだろうけど”。私ほ。

nna Zunu ʃokunʒai Zittʃo:ʃe: Zunu kakihayʃi:ne:

みんな その 公務員の人ほ。 その 失敗をしてかすと。

munu kwe:hansu(ε: ja:

ものを食べられるので(職を失ってしまいでしょ)。

N Iu: Iure: Iaj jaibi:sa

はい。それは そうですね。

A minamoto:kara maedagiken ja: Iurikara mata Ianu  
源さんにしろ。 真栄田さんにしろ。 それに また、 あの

nu:ndiga Ianu nama Iibajanu munnu setsumeisa:  
なんというか。 あの 今。 沖縄 芝居の 解説をやっている

gibo gibo jo:

儀保。 儀保さん。

N naka Iu: gibo

なか。 はあ! キボ?

A gibo nu setsumeisa: su(ε)jo:

儀保さんだよ。 解説者をやっている

N Iu: Iare: watta:tu juntusina:du jaibi:ru

はい。あの人は 私たちと 同年輩の方ですよ。

A Iansukutu Ianu Iatta:ηkai Iisiga Ianu ga:εzu:sanu jo:

Iから。 あの あの人たちに申し上げるんですが、なかなか聞いてもらえないんだよ。

N Iu: ga:εzu:sandi Iisijaka: wakarandu Iaibi:nde:

はい。頑固であると言うよりは、(戦前の首里城のことは)わかってはいんですよ。

wannin da: nama Iundzūkara na: nama haεzimitidu

私も ほれ。 今 あなIから 今 初めて

t(ε)it(ε)abi:ru

聞くんです。

A Ianu watta:ja Ianu Ii:tunutsa: Iunni:ηkara na: gonεηkara:

あの。 私らは。 あの 生徒Iちは。 その時分からは。 5年生からは

munu ũumuto:ſe:ja:  
もの心づいでいるでしよ。

N ũu: gonendi ũi:ne: na: munu ũubi:rusuru  
はい。5年生と いうと、 もう 物事の道理はわかります。

A munu ũumuto:kutu . watta:ja tattſo:ſiga ũunu kempeinu  
物事の道理はわかるから。 私らは 傍らに見守っているが、 その 憲兵が  
ũuruſimitijo:  
おろさせたんだよ。

N ũo:hho  
ああ!

A ũunu kuninuſi: hagaſimija:ni suruũje:ka: wanne: ũunu  
その 国の字を 剝離させて する(書き直している)うちに 私はそのことを  
ſempenunikai ũunu gaku ũurutſe:ru ſaſinun tute:i  
私の本の前編に、 その 額を おろしている 写真も とってあるし。  
mata ũatunu mununij ũanu way honunikai ũaruhaſi do:  
また、 後に書いた本にも 後編の私の 本に 載っているでしよ。

N ũaſ jaibi:mi  
そうですね。

A ũansukutu ũunu setsume:ſi:ti ũaruhaſi do: ũare:  
Tから、 そのことの 解説も 載っているでしよ。 あれは  
kempeinu ũunni:made: gunkokuſugi nu to:go:tuka  
憲兵が その頃までは 軍国主義の時代Tだった。 東郷さんとか。  
ũanu mata saigo:ta:ga ũunu kumatſi ũutſina: damatſi  
あの また、 西郷さんたちが、 その、 ここに、 沖縄を Tまして。  
ũunu ſi ũutſina: ſimiti ũanu ũamanu ũure: sasaja:  
その <sup>xx</sup> 沖縄を 攻めて、 あの あそこの それを しTでしよ。

kwankatsun kaidu natassaija: zo:siman turattase: ja:  
管轄に ならてしょう。奄美大島も とられたいね。

N Iu:  
はい。

A Iunu Iunni: nu tsumangura karanu Iu si: naja: ni Iunni: ni  
その その時の 頃からの 教えに なるて、 その時に  
mata to:go: tai so: tuka nu: nde: muru gensui jase: ja:  
また 東郷大将とか 皆 元帥 たらたいよ。

N Iu:  
はい。

A Ianu mata saigo: dzu: do: wuta se: ja:  
あの また 西郷従道さんが 居てしょう。

N Iu:  
はい。

A dzu: do: η Iunni: ne: gensui natikaradu Iare: mata  
従道さんも その時には 元帥に なるてから、 また  
to:go: η kai judzito: sa ja:  
東郷さんには 譲ったんたいね。

N Iu:  
はい。

A kuma: muru Ianu nu: ndiga simadzunu kattidu jataru  
ここは すべて あの なんというか 島津家の 勝手に あった。  
Iurikara meidzi nidzu: sit sinemmadin jo:  
それから 明治 27年まで 続いたんたいよ。

N Iu:  
はい。

A Ianu: nu:ndiga na:kukaranu dzeikin̄kara tsumugi ja:  
あのう なんというか、 宮古島からの 税金やら 紬<sup>つむぎ</sup> やら。

N Iu:  
はい。

A mata Iurikara dzo:Φu ja:  
また、 それから 宮古上布などを

N Iu:  
はい。

A Suridzo:ŋkai Zusami:ndi Iija:ni Ianu Φuni Iunumama  
首里城に 納入すると 言って、 あの 船を そのまま  
ma:tʃi Iɛdzo:ru Iataidu jando:  
廻船していた 程 なんです。

N Φu: Suridzo:ne: Zusamiram muru  
ほう。 首里城には 納めないので、 すべて。

A Iaman̄kai muttʃi Iɛdzo:n do:  
本土へ 持って行ったんだ。

N jamatun̄kai na: Φu:  
本土に でるか。

A Ii: Ian̄siga Iabi:ne: sari:ʃe:ja:  
そう。 たいてい、 批判すると やられるからね。

N kurusari:kutu  
殺されるから？

A Ii:  
そう。

N Iu:  
はい。

## 注

- (1) [tsu:gakko:] 中学校。もとの国学。沖縄県立中学校。沖縄県立第一中学校。今の首里高等学校。沖縄第一の進学校。
- (2) [denŋa] 電車。大正年間に首里・那覇間の幹線を走っていた電車。後に首里市営バスにかわる。
- (3) [niŋi] 北のこと。「にし」(西)には[Ziri] (入り)という。
- (4) [nu:ru] 祝女。女神官の一つ。王府の勅命により、世襲制であった。辞令書や神器が各地に残されている。とりわけ、田名文書は有名。
- (5) [sunduntŋi] 首里殿内。那覇市首里赤田町にある。
- (6) [dŋi:buduntŋi] 儀保殿内。首里儀保町にある。
- (7) [ŋuridŋo: ŋakewataŋi] 首里城明け渡し。明治12年(1879年)3月31日に琉球国最後の国王となり、尚泰王は首里城を武力によらず無血開城す。日本政府は同年4月4日、琉球藩を廃し、沖縄県を置いた。
- (8) [daigaku] 大学。琉球大学のこと。戦後米政府により首里城内に1950年に創立された。のち、琉球政府に移管されたが、沖縄県の祖国復帰にともない、昭和47年に国立大学として再出発することとなり、昭和56年には中頭郡西原町千原に移転統合した。  
それによつて、首里城はもとの形に復原されつつある。
- (9) [hanaguŋiku] 花城。首里士族の氏姓の一つ。[seijo:] 清用。人名。首里儀保十字路に面した花城内科医院の院長。
- (10) [kempei] 憲兵。単に巡查にもいう。
- (11) [tŋibana tŋo:ŋo:] 知花朝章。明治期の首里区の区長(市長)。
- (12) [nakama] 名嘉真。首里士族の氏姓の一つ。
- (13) [nabu:] 人名。[ta:]は複数を表わす接尾辞。
- (14) [Zuŋa] 親。先代。
- (15) [benkjo:do:] 勉強堂。昔あった商店名。
- (16) [to:nukura] 当之蔵。首里市の中心街。首里城の所在地でもある。古くは市役所、教会、病院、学校、寺院、商店などがあり、県の中心地でもあった。



- (17) [kusumi] 楠見。薬局。首里当之蔵町にある明治からの薬局の一つ。寄留商人。
- (18) [kadzima:ja:] <風がめぐる所>の意から転じて、十字路。
- (19) [kwan:kaimon] 歓会門。首里城門の一つ。
- (20) [sureimon] 守礼門。首里城の正門。沖縄県の象徴的存在。
- (21) [jamazatu jeikitji] 山里永吉。元博物館長。
- (22) 共通語形。
- (23) [minamoto takeo] 源武雄。元の博物館長。文化財保護委員長。
- (24) [maeda giken] 真栄田義見。元沖縄大学学長。県文化財保護委員会の元委員長。
- (25) [ʔari:se: naibirandi] は直訳すれば「あれではなりませんと」。

3. <sup>ボー ジ ウ シュウ</sup> 坊主御主と呼ばれた国王の話

話し手

| (略号) | (氏名)  | (性) | (生年)     |
|------|-------|-----|----------|
| A    | 新垣 恒篤 | 男   | 明治32年生まれ |
| N    | 中松 竹雄 | 男   | 昭和12年生まれ |

A mata ʔunni:ne: wannin ʔanu: nu:ndiga guʃikuma  
 また その時には、 私も あのう なんとというか 城間

na:kanu ʔodʒi:sannakai ʔjattanjo:ja:  
 ナカの おじいさんに 言われたことがあるよ。

N ʔu:  
 はい。

A ʔanu wanne: nahaʃinu suido:nu basuni ko:dʒi sagana:  
 あの 私 は 那覇市の 水道の 時に、 工事を しながら

<sup>(1)</sup>  
 ʔuemamadi ʔariʃi ʔndʒo:kutu  
 上間村まで 行ったから。

N ʔu:  
 はい。

A guʃikumamu me:ʔuti dengazumi sundi ʃi:ne:jo:  
 城間家の 近くで 煉瓦積みを しようとするよ。

N ʔu:  
 はい。

A ɽanu ɽumanɽkai guɽikumanu ɽudunditɽi ɽanditɽi bo:ɽɽi ɽuɽu: (2) (3)  
あの そこへ 城間之 御殿 といつて あるといふ。(有名な)坊主御主  
te:ja:  
「よね。

N ɽu:  
はい。

A bo:ɽɽi ɽuɽu: nu ɽanu ɽujaɽitɽe: ɽumanɽkai ɽanditɽi ɽumanu  
坊主御主の あの 御屋敷は そこに あると その  
muranu ttɽunu ɽitɽakutu ɽja ɽansa:ni ɽoɽirujasumini  
村の 人が 教えてくれたので。や。 それで お昼休みに  
tɽo:du ɽimmana:ri: massu:gu ɽike: wakaisandi ɽanu  
丁度 そこから 真直ぐ 行くと 分るだろうと。 あの  
ɽukanu ttɽunu ɽitɽakutu ɽitɽundi ɽunu kumuinu me:kara  
外の 人が 教えたので。 行こうと その 池の 側から  
ɽattɽi ɽitɽundi ɽi:ne:jo:  
歩いて 行こうと するとね。

N ɽu:  
はい。

A ɽanu nu:ndiga kuruiɽi: tamme:tu hadaɽiɽi ɽanu:  
あの ねんといふか 色の黒い おじいさんと 裸足で あのう  
nubuti tɽu:tan jo:  
坂を昇つて来るところで"あった。

N ɽu:  
はい。

A ɽje:sai tamme: ɽanu ɽumarika:ɽkai ɽunu guɽikumanu  
「もしもし。 おじいさん。 あの このあたりに その 城間之

ʔudunditʃi ʔaibi:ndiʃiga ma:jaibi:ga ja:sai jattʃi:gwa:  
御殿といて あるそうですが、どちらでございましょうか」と尋ねると、「若者よ。

ʔja:ja ma:nu jagaditʃi ʔuntʃo: ʔitʃo:ruba:te:  
「おまえはどちらの方か」と、その方が お尋ねになられたわけだよ。

N ʔu:

はい。

A wanne: suinu ʔarakatʃinu jaibi:ndi ʔitʃakutu ʔn:ʔje:  
「私は 首里の 新垣の です」と 申し上げると 「そう、

ʔarakatʃinu jami ʔarakatʃinu jara: wa:ga so:ti ʔitʃusan  
新垣家の 者であるか、 新垣家の方なら、 私が ご案内しよう」

ditʃi wanne: na: ʔutsu:nu ʔanu tamme: kunu harusa:  
と言って、 私は もう 普通の あの おじいさん この 百姓の

tamme: hadaʃiʃi tʃingwa: (N ʔu:) ʔudakidu tʃitʃo:  
おじいさんだと思った。 裸足で 着物も この風には裾の短いものを着て  
(4) (5)

kutu ʔantʃo: na:ʔiru: tamme: jaʃe:ja:  
いたから。 だけど、 あの方は一風変わったおじいさんだった。

N ʔu:

はい。

A kuganiŋ kaʃimitidu ʔanu muru harukara ʔattʃimi  
黄金も蔵に埋蔵してあったそうだ。あの、普段はいつも(それでいて)畑を 耕して

ʃe:tandi sakutu to: ʔarakatʃinu jara: wa:ga  
いたそうだ。 それなら、 さあ、 新垣家の方なら、 私が

so:ti ʔitʃusandi ʔija:ni so:tʃimisakutu ʔiʃigatʃi gakui  
案内しようと おっしゃって、 ついて行くと、 石垣も 高くして

ʔama: taka:ku ʃiʃo:  
あそこ 大きな屋敷があった。

N Iu:

はい。

A hikuku (i:ne: satsumanu Ia, Ianu Iirikuru(i:ga t)u:kutu  
石垣の囲いを低くすると、薩摩が 射殺しに 来るから。

tippu:kara jumija mutt(i) taka:ku sa:ni dzo:ŋ ku:ku  
鉄砲やら 弓やら 持て。 石垣を高くして。 門は狭くして

Iari(i)jo:

ある。

N Iu:

はい。

A Iut(i)ŋkai to: Immajasa Ija: sat(i)nare: ndi  
屋敷内に、さあ、ここだよ。 あんたは 先に、いらいと、言ったので

Iu:ndi Ija:ni Iansa:ni Iut(i)nu  
はい、と言って、 屋敷内に 入って行くと。

N Iu:

はい。

A niwan date:ŋ Iut(i)nu date:n so:ruba:te:ja:  
屋敷は 庭も広く、 廷内も 大きかったわけよ。

N Iu:

はい。

A Iunu Iwa:biŋkai (8) ĩirama:t(a):nu kanni:gwa:(i) juda  
その 上は 平松が こんな風に、 枝を

kanni:gwa:(i) Ianu: Iujamanu (9) ĩirama:t(a): jakan rippanu  
こんな風に、 あのう 大山の 平松 よりも 立派な

munnu Iatan jo: ja:

ものが あったんだよ。

N ŋu:

はい。

A ŋansa:ni ŋunu nemotonakai ŋanu: nu:ndiga kuŋibi:ŋi  
それから その 松の根元に あのう なんというか これ位の

ŋibagwa: nu tsura:kugwa: mi:ti:jo:  
芝生が きれいに 植えてあった。

N ŋu:

はい。

A ŋje: jattŋi:gwa: ndi ŋitŋakutu ŋu:ndi ŋitŋakutu to: ŋja:  
もし、おにいさん! と 呼ばれたので 「はい。」と 答えたら、 さあ、あんた、

ŋimŋankai jittŋima:ndi  
そこは 座ってごらんと言われたので。

N ma:tŋinu ŋitŋankai na:ŋu:  
松の木の 下に ですか?

A ma:tŋinu ŋitŋankai (N ŋibanu ) ŋibanu ŋwi:ŋkai  
松の木の 下に、 ( 芝生の? ) 芝生の 上に。

jire:ndi ŋimise:takutu jo:  
お座りなさいとおっしゃったのでね。

N ŋu:

はい。

A ŋu:ndi ŋija:ni jittŋakutu to: ŋmma: ŋitta:ga ji:ttukuru:ŋasa  
「はい」と言っ、座ったので。 さあ、そこは あんたたちが 座るところだよ。

ŋanu bo:ŋi ŋu:ŋ ja: ŋimŋankai jittŋi ŋansa:ni ŋimmakara  
あの 坊主御主も そこは お座りになって。 それから そこから、

kunu du:nu kunu guŋikumana:kānu ŋi:ntŋi ŋama:  
この 自分の この 城間 ナーカの 土地だよと あそこは

mammaru muru gušikumana:kanu mun jaše:ja:  
周囲は すべて 城間 ナーカが 所有していたんだよ。

N Iahha  
あはあ!

A Iansa:ni suri suigušikukara nujo: Iwe:kata nu tša:jatin<sup>(12)</sup>  
それから、首里、首里城から 親方クラスの 役人でも、  
satunušinu tša:jatin tši:ne:<sup>(13)</sup>  
里之子クラスの 役人でも いらっしよると。

N Iu:  
はい。

A tšibui kanagija:ni harukai Inda:tši šigutu šimi:ru ba:te:ja:  
裾を からげて、 畑に 出されて、仕事を させる わけですよ。

N Iu:  
はあ!

A kunu še:miše:ru tukuru jakutu kunu ma:tšikara  
この なさった ところであらから、この 松の木から

(N Iu:) harunu Iamaykai šihon:kai Ianu garagara:  
はい) 畑の、あちらへ 四方に ああ 鳥おどしを

šigija:ni jasumi džikandi Ii:ne: (N Iu:) kuma  
つけて、 休み 時間に なると、 (はい) ここで

wuto:ti Iitta: Ianu Iugwansunu kadži širaši:runše:  
あんたにちの ああ 御先祖が、時間を 知らせたりすると、

mata Immaykai jukui mata munnu džikan jaine:  
また そこに お休みになつたり、また 食事の 時間になると

mata Iari so:ruttukuru jasanditši  
また それを 知らせたりしたところ なんだよとおしよつた。

N ʔohho:  
ほう!

A madzi ʔurimade: ʔarisa:ni dikka:nditʃi hamankai  
ます” それで”と”ます”話は終り それから さあ 行こう。 浜へ  
ja:ndi mata ʔimise:tan jo:ja:  
行こうと、 また おっしゃったんですよ。

N ʔu:  
はい。

A ʔansakutu ʔanu: hamankai ja:ndi sakutu ʔu:ndi ʔija:ni  
では、 あのう。 浜に 行こうねとおっしゃったので、「はい」と言って、

ʔurisakutu ʔje: jattʃi:gwa: ʔja:ga: ʃo:ko:wo:ja bo:ɕi ʔuʃu:  
ついて行くと 「おい、若者よ! おまえは、 尚 影王は 坊主御主

ja ʔanu: ʔuguʃikuʔuti ʔuʃiɕjirimiso:tʃo:ndi ʔumuimi  
は あのう 御城で” おかそれになられたと 思うかい?

jattʃi:gwa:ndi ʔitʃakutu ʔane: ʔaibiranna:saindi ʔitʃakutu  
若者よ」と おっしゃったので、 そうではありませんかと 申し上げると、

ʔane: ʔarando: ja:  
そうではないよ、と 言われた。

N ʔare: ʔaran  
そうではない?

A kunu ʔi:binutʃi ʃi jo:  
この 指で 指してね。

N ʔu:  
はい。

A kunu ʔumiʔuto:ti ja:  
この 海でね。



N kunu ?umindi ?i:ne: ma:muti:  
この 海と いうと. どこですか。

A gu?ikumanu ?igu ?udunnu mamuke:  
城間の すぐ 御殿の 真向い。

N mamuke: jaibi:nna:  
真向い ですか？

A ?ama: sango?o:nu ?anni: ?anni:si t?o:du namminnu<sup>(14)</sup>  
あそこは 珊瑚礁が まわりをとりまき 丁度 那覇市の波の上宮のある  
?uminu gutu?i  
海の ようである。

N nama: ja?iga gunjo:t?i jakutu wakaibirande:ja:  
現在は. だ"けど". 軍用地 t:"から. 分らないでしょうね。

A ?ume: ?unumama  
海は そのまま！

N ?ume: ?unumama  
海は そのまま！

A ?ama: ?umiraran  
あそこは 埋められない。

N ?umiraran na: ?u:  
埋められないんですか。

A ?n:  
そう。

N ?an jaibi:mi  
そうですか。

A sango sango?o:nu ?ama?uti ?ukamunu ?an jo:ja:  
珊瑚. 珊瑚礁が あそこで 深海が あるんだよ。

N ha:  
はい。

A ?anu ?uma?uto:ti kunu nu:ndiga satsumanu bugjo:muti  
あの そこで この なんというか 薩摩の 奉行側  
karajo:  
から

N ?u:  
はい。

A t?u: madzun tsuri ?i:ga ?it?abiranandit?i  
今日、一緒に 釣りに いらっしゃいませんかと言って。

N ?u:  
はい。

A ?ndgiti ?ure: t?ike:nu t?akutu  
出て、それは、使いの者が 来たので。

N ?u:  
はい。

A ?anu: nu:ndiga  
あのう、なんというか。

N ?u:  
はい。

A ?indu:n t?uje: na:kunt?u nu ?imman<sup>(15)</sup>kai wuiru sukutu  
船頭も 一人は 宮古出身の者が そこに 居るの T="から。

N ?u:  
はい。

A ?ang?e: madzun ?ikaja:ndit?i satsumanu bugjo:nkai  
では、一緒に 行きましょうと 薩摩の 奉行に

Φinto:si jarat(a kutu jo:

返答して 使いをやった。

N ?u:

はい。

A ?anu: tonikaku na: ?uri tsumi si:ga ?ndzito:mise:ru ba:te:  
あのう とにかく もう それ 釣りをしに お出かけになられたわけです。

ju: jukkuiti

夜が更けてから。

N ?u:

はい。

A ?ari sundi si:ne: kunu tʃitʃinu ?agati si: tʃe:ra ja:nditʃijo:  
あれをしようとする時、この 月が 昇ってきた、来ただろうとね。

N ?u:

はい。

A sundi si:ne: sigoso:bike:i jumi mi, muttʃo:si tippo:  
しようとする時、4,5艘ばかり。弓を 持つのも居るし。鉄砲を

muttʃo:si jai ju tʃukuto:si Φukanu Φuninu sigoso:  
持つのも居るし。矢を つがえているのも居るし。他の 船に 4,5艘に

tuimakattandi

取りまかれたと。

N ha:

ほあ。

A ?ansagutu hadzimirakara ?ure:na: ?anu nu:ndiga wakati  
そうしたら、初めから それはもう あ、なんというか 分って

kure: wan so:tai madzun tsumi sanaja:ndi ?ise:

くれば、私 尚泰が 一緒に 釣りに 行こうねと 言うのは。

(16)

kure: na: so: ikun'kai ju: ja judzite: kutu kuri?ute: ?u?idzi  
これはもう、 尚育に 国王の位は 譲ってあるから、 今度は 防いでも

?u?igaran na: ?umin'kai ?indziti ?attut?ine: nugiraran  
防ぎきれない。 もう 海に 出て いる時には、 逃げられない

hadzide: mun ?utta: ti: ni kakai?i jaka: ndi ?ija: ni  
丁ろうから、 そいつらの 手に かけて死ぬよりは 自決した方が良くと思って、

hadzimirara kuma tamutun'kai ?i?e: ?itto: mi?e: tandi  
初めから、 ここに 袂の中は 石を 入れてあった。 ”。

N ?u:

はい。

A ?ansugutu ?igu na: tippu: n nu?ikito: re: jai nu?ikito: ?in  
丁から、 すぐ もう 鉄砲も 向けられていたし、 矢も 向けられているし、

wui jumi nu?ikito: ?in wui ?ussanu mun satsumanu  
弓も 向けられているし、 それ丁のものを、 薩摩の

bugjo: haikanu ?ariso: ?i sakutu ?utta: ni kurusari: ?i  
奉行の 配下の あれして いたので、 そいつらに 殺される

jaka: wanne: du: kuru ?inusandi ?ija: ni tubindzimi  
よりは、 私は 自らの手で 死ぬのが 良いと言って、 船からとび出して

so: t?andi ?ansagutu kunu ?indu: n'kai jo:  
しまわれたと、 そうしたら、 この 船頭によ。

N ?u:

はい。

A na: kunt?un'kai

宮古の人に

N ?u:

はい。

A ?ja: sukui ?agiti ku:ndi ?itsakutu jo: na: ?ukade:  
おまえが 救い 上げて 来いと 命じたので もう 浮かんでは  
ku:ŋʒe:  
来ないので。

N ?u:  
はい。

A na: ?isi ?itto:kutu mata ?ure: ?i:me: ɔ:ɔ:ji jate:nte:  
もう 石を 入れてあるから。 また それは もぐりが 上手 行ったから。

N ?aha  
あは。

A ?ansakutu ?anu: sukui ?agiti ?amamade: ?untʒi:ke:ʒi  
それで。 あのう 救い 上げて、 あそこまでは ご案内して  
sa:ni kunu hamankai tʒiki:ʒito: maɔ:un jo: ʒigu  
この 浜に 着けるや否や すく

?ure: tattʒiratti na: kutʒi ɕu:ɔ:ʒiratti  
船頭は たたき殺されて もう 口を 封じられてしまった。

N ha:  
はあ。

A ?uri tʒuidu so:ti ?nɔ:ʒo:ssai ja: ?ja: ja wo: kurutʒanja:  
船頭 一人を 連れて 行ったのだから。 おまえは 国王を 殺したな  
nditʒi  
と責任をなすりつけて。

N ?a: ?urinkai muru ?ariʒi  
ああ。 船頭に すべて 責任はなすりつけて。

A ?n: ?ansukutu ?unu hanaʒi: wanne: guʒikuma na:kanu  
んん。 だから。 その 話を 私は 城間 ナーカの

ʔoɖji: san̄kara tʃitʃaruba: ja: ʔunni: ŋkara wanne: kunu  
おじいさんから 聞いたんだよ。 その時以来、 私は、 この  
rekiʃi ʔa: kure: ʔunto: nu kutu kakandare: naransa: n  
歴史は、 ああ、 これは、 ほんとうの 事実を 書かなければ、 ならない  
di ʔumui hadzimitaʃiga jo:  
と、 思い、 始めたわけですよ。

N ʔu:

はい。

A ʔanʃiga ʔoɖji: san̄ga mata ʔatunu kutubanakai  
で、 けど、 おじいさんが、 また、 後の、 言葉に、

ʔje: jattʃi: gwa: wa: ga ʔja: ŋkai ʔjuʃe: ja: jinu wo: kenu  
もし！ 若者よ！ 私が、 おまえに、 言うのは、 同じ、 王家の  
mun̄ jakutu ʔanu wanne: muru ʔja: ŋkai tʃigite: ʃiga  
一族だから、 あの、 私は、 すべてを、 おまえに、 話したのだから  
kuri ʔi: ne: ʔja: ŋ wannin̄ kube: ne: ndo: ja: katʃ  
これを外部の人に言うと、 君も、 私も、 首は、 ないんだよ。

katʃin narando: ja:

書くことも、 できないよ。

N ʔa: ha:

ああ。

A katʃin naram mata ʔja: dakin̄ ʔaran̄ ja:  
書くことも、 できない。 また、 君だけでなく、

N ʔu:

はい。

A watta: muntʃu: madi ʃigu sari: ru ŋkaʃin wo: jatʃo: n  
私たちの一族、 まて、 すぐ、 殺される。 昔も、 国王ですとも

surumunnu namande: jare: gundjinnu tsikarasa:ni  
されるものを。 今であれば、 軍人の 力で。

N ?u: ~~~~~  
はい。

A ?N, mata saigo:tuka to:go:ta:ga ?unni:ne: gensui  
ん。 また 西郷さんとか、 東郷さんとか。 その時には 元帥に  
nati ?anu gunkokusugisi ?anu: ?uriso:saja:  
なって。 あの 軍国主義になって、 あのう それしてでしょう。

N ?u: ?u:  
はい。

A ?inatu rosijatun katso:ru tsumagura jase:ja:  
支那と ロシアとも 勝っている 頃 T:"T:ね。

N ?u:  
はい。

A ?ansukutu ?ippe: muniut?inkai kadzimito:ti  
だから、 非常に 胸中には しまっておいて。

N ?u:  
はい。

A ja: wankara tsit?andij ?jangutu du:nu tudzikkwankai  
ねえ。 私から 聞いたことも 言わないように。 自分の 妻子にも  
jatin ?it?e: narando:ja: jatt?i:gwa: wanga ?ju?i  
口外してはならないよ。 若者よ！ 私が 言っていることが

wakaimindi  
わかるかね。

N ?u:  
はい。

A ?u: ?ure: ?anu wakaibi:nditʃi sagutu jino: nu:ndiga  
はい、そのことは よくわかりましたと 申し上げると、 縁は なんというか  
?o:neiwo: karanu ja:  
尚寧王 からの。

N ?u:  
はい。

A ?anu ?itta: watta: ?isonde:munnu ja:  
あの あんた:たちも 私:たちも 国王の子孫 なんだから。

N ?u:  
はい。

A wa:ga ?iʃe: ma<sub>xxx</sub>, mamuti mata tʃa:ganaʃi kakari:ru  
私が 言うのは 守って また どうにかして 書かれる  
basunu dʒiʃitʃinu tʃu:ru basune: ?arijaʃiga  
時には 時節が 来る 時には 喜ばしいが。

N ?u:  
はい。

A kannadʒi tudʒikkwanʒakai jatiŋ hanaʃe: sunajo:ja:  
必ず 妻子にも 話を するなよ。

N ?a:ha:  
ああ。

A ?ja:ŋ wanninʒ kube: ʃigu tatʃiduku manakai ʃigu  
君も 私も 首は すぐ 立ちどころに すぐ  
tattʃirari:ndo: mata ?unni:mmade: kempei wuiru  
た、切られるぞ。 また その時分までは 軍人が 居るの  
sukutu  
だから。



N ?u:

はい。

A ?anu ?uri tsu:i sattakutu ?u:nditʃi wanne:

あの それを 注意 されたので、はい。承知してと 言て、私は

mamuti sengomadi

守った、 戦後まで。

N ?u: ?aha:

はい。あはあ。

A mamuto:tando:ja: ?ansa:ni ?unu ?atu ?anu

ずと守ったんだよ。 それから その 後 あの

minjo:kara ma:kara muru ?ariʃi ?unu ?urikara

民謡 やら どこでも すべて あれし、 その、 それから

nihonnu rekisinu muru ʃirabititʃe:ʔaʃiga

日本の 歴史を すべて 調べてある。

N ?u:

はい。

A gojaʃiŋʃi:<sup>(17)</sup>me:kai kajuti wanne: naratan jo:ja:

琉球大学の学長であった、呉屋先生のお住いに通って、私は 習ったんだよ。

N ?u:

はい。

A gojaʃiŋʃi:me:kai kajuti narati sakutu ?anu ?arakakikun

呉屋先生の所に 通って 習ったら、 あの 新垣君

?ja:ŋ ?anu nu:ndiga wanja wanne: kju:ʒu:roku

君も あの なんというか 私は 私は 96歳に

nato:kutu ja: ?ja:tu madʒun ?attʃi kunu ?unu

なっているのね。 君と 一緒に 歩いて この その

tukuru mi:busa: ?asiga wanne: na: ?att?iju:san  
場所を 巡検したいのだが、 私は もう フィールドワークは

nato:kutu nama: genronnu dziju: nato:kutu  
できないから、 現代は 言論の 自由が 守られているから、

namanu baso: kakari:ndo:ja: (N ?u:) ?anu  
今の 時代には 真実を書くことができるよ。 (はい) さあ、

kakanna:ndi  
今こそ書かないかね。

N goja?in?i:ga  
呉屋先生が…

A goja?in?i:ga mata ?itta:tu watta:to: ?it?iban t?ikasa  
呉屋先生が また 君たちと 僕たちとは 一番 近い  
(18)

?e:ja:ndi ?ama: mabuni?udun jan?jo:ja:  
親族だから。 呉屋先生は 摩文仁 御殿 です。

N ?a: ?an?jaibi:mi  
ああ、そうですか。

A mabuni?udun wan? honun?kain? kakatto:sa ?ure:  
摩文仁御殿は 私の 本にも 書いてあるよ。 それは  
(19)

?anu ?o:ko ?ansukutu namanu basu han? ?ut?ihan  
あの 証拠。 丁から、 今の 時代、 時期を失して

?i:ne: mata gun?koku?ugini nari nama?jare:  
しうと、 また 軍国主義の時代には なって、 今 ならば、  
(20)

kakari:kutu  
書かれるから。

N ?u:  
はい。

A he:ku kakijo: <sup>(21)</sup> wannin hatsidzu: na: ?unni:ηkara:  
早く 書けよ、 私も 80歳に もう その時には  
nato:ʃe:ja:  
なっていたからね。

N ?u:  
はい。

A hatsidzu: nati so:kutu ?ansa:ni tʃo:du ko:hen katʃ  
80歳に なっているから、 それで 丁度 私の本の後編を  
katʃihadzimoto:tan jo:  
書き始めていたんだよ。

N ?u:  
はい。

A kanʃi ?ja:ga katʃuʃe: watta:ηkai kajujagana: judi  
こう 君が 書くのは 私たちは 通いながら、 読んで  
tʃikaʃi jo:  
聞かせよ。

N ?u:  
はい。

A ?ndi sakutu wanne: ?u:nditʃi te:ge: goroku mai  
とって、 私は 承知したと言って 大概 5, 6枚  
katʃi:ne: mata ?ndze:  
原稿が出来上がると、また 吳屋先生の所に行て

N ?u:  
はい。

A kure: kungutusi katʃe:ibi:ʃiga tʃa:jaibi:ga ja:  
これは こんなに 一応書いてありますが いかがでしょうか。

dzo:to: jasa kunnakai ?wa:ba muno: ?irinna  
良く出来ているよ。これに 余計な ものは 入れるな。

deki?indi ?i?e: ?o:dzikini kakiwaruja:  
歴史と いうのは、正直に 書いてこそ!

N ?u:  
はい。

A ?anu: nu:ndiga ?atunu ju:madi ?ure: ?ja: ?ja:  
あのう。なんというか、後の 世まで 歴史は、君の、君の

na: nukuindo: ?e:dzikandi ?i?e:ja:  
名まえは 残るぞ”。政治家と いうのはね。

N ?u:  
はい。

A ?e:dzikandi ?i?e: ?itsidainakai ?arija?iga ?ono:  
政治家と いうのは、一代で 名を高めるが、本は

jujumande: kuninu ?aru ?je:ka: kuninu na:nu  
世世萬代、国が ある 間は、国が、

nihonnu kuninu ?aru ?je:ka: jujumande: ?ja:munnudu  
日本の 国が ある 間は、永遠に 君の名まえと共に

nukuindo:ja:  
残るんだよ。

N n:  
ん!

A namajasa tsibati kake: ndi  
今だよ。気張って 書きなさいと。

## 注

- (1) [ʔuema] 上間。那覇市の一村落。
- (2) [guʃikuma] 城間。現在の浦添市字城間。戦前は農業が盛んであったが、戦後は米軍の軍事基地として設営され、第三次産業中心に変わった。尚家の別荘があった。
- (3) [bo:ɖʒiʔuʃu:] 尚瀬王が仏教に帰依して、頭をまるめて丸坊主になったことから坊主御主と呼ばれるようになった。1804年の即位、1834年に退位した。
- (4) [ʔudakidu tʃitʃo:kutu] 直訳は「それだけを着ている」。
- (5) [na:ʔiru:] は直訳すれば「名前に色がついた」ぐらいの意味。
- (6) [haru] は「畑」、[ʔattʃuN] は「歩く」だが、[harukara ʔattʃuN] で「畑を耕す」という意味になる。
- (7) [satsuma] 薩摩。慶長14年(1609年)薩摩軍数千人が琉球へ武力で侵入し、以後明治12年まで、琉球は島津家の支配下におかれることになった。
- (8) [ʔirama:tʃa:] 平松。風当りの強い岩の上などに生えた松が枝を横に平らに広げている形容。現存するものとしては、久米島の五葉松。伊平屋島の念頭平松。今帰仁村の平松などが有名。
- (9) [ʔujama] 大山。宜野湾市字大山のこと。
- (10) [jattʃi:] 兄さん(士族)。単に若者に対する呼称にも用いられる。[-gwa:] は美称の接尾辞。軽んじて言う。
- (11) [guʃikuma na:ka] 屋号。
- (12) [ʔwe:kata] 「親方」と書く。琉球政府の職階の一つ。長官。大臣。
- (13) [satunuʃi] 「里之子」と書く。琉球政府の職階の一つ。次官または局長クラス。
- (14) [nammin] 波の上。那覇市若狭町にある神社。また、その周辺の地域の凡称。
- (15) [na:kuntʃu] 宮古人。
- (16) [ʃo:ikuwo:] 尚育王。1835年に即位し、1847年に退位。

- (17) [gɔjaʃijʃi:] 呉屋先生。元の琉球大学学長。英文学者。
- (18) [mabuniʔudun] 摩文仁御殿。首里王子家の一つ。
- (19) [namanu basu] <今の場所> 「場所」は空間ではなく、ここでは「時間」を意味する。「今の時代」の意。
- (20) [kutu] 接続助詞。ので、から。[kakarɪ:kutu] 書かれるから。
- (21) [jo:] 終助詞。感動を表わす。[kakijo:] 書けよ。

昭和60年3月

国立国語研究所

〒115 東京都北区西が丘3丁目9番14号  
電話 東京(900) 3111(代表)

UDC 809.56-087

NDC 818

本書の市販品発行所

〔〒162〕東京都新宿区納戸町40 (03-260-5281)

株式会社 秀英出版

国立国語研究所刊行書一覽

国立国語研究所報告

|      |                                   |         |         |
|------|-----------------------------------|---------|---------|
| 1    | 八丈島の言語調査                          | 秀英出版刊   | 品切れ     |
| 2    | 言語生活の実態<br>——白河市および付近の農村における——    | 〃       | 〃       |
| 3    | 現代語の助詞・助動詞<br>——用法と実例——           | 〃       | 2,000円  |
| 4    | 婦人雑誌の用語<br>——現代語の語彙調査——           | 〃       | 品切れ     |
| 5    | 地域社会の言語生活<br>——鶴岡における実態調査——       | 〃       | 〃       |
| 6    | 少年と新聞<br>——小学生・中学生の新聞への接近と理解——    | 〃       | 〃       |
| 7    | 入門期の言語能力                          | 〃       | 〃       |
| 8    | 談話語の実態                            | 〃       | 〃       |
| 9    | 読みの実験的研究<br>——音読にあらわれた読みあやまりの分析—— | 〃       | 〃       |
| 10   | 低学年の読み書き能力                        | 〃       | 〃       |
| 11   | 敬語と敬語意識                           | 〃       | 〃       |
| 12   | 総合雑誌の用語(前編)——現代語の語彙調査——           | 〃       | 〃       |
| 13   | 総合雑誌の用語(後編)——現代語の語彙調査——           | 〃       | 〃       |
| 14   | 中学年の読み書き能力                        | 〃       | 〃       |
| 15   | 明治初期の新聞の用語                        | 〃       | 〃       |
| 16   | 日本方言の記述的研究                        | 明治書院刊   | 〃       |
| 17   | 高学年の読み書き能力                        | 秀英出版刊   | 〃       |
| 18   | 話しことばの文型(1)<br>——対話資料による研究——      | 〃       | 〃       |
| 19   | 総合雑誌の用字                           | 〃       | 〃       |
| 20   | 同音語の研究                            | 〃       | 〃       |
| 21   | 現代雑誌九十種の用語用字(1)<br>——総記および語彙表——   | 〃       | 〃       |
| 22   | 現代雑誌九十種の用語用字(2)<br>——漢字表——        | 〃       | 〃       |
| 23   | 話しことばの文型(2)<br>——独話資料による研究——      | 〃       | 〃       |
| 24   | 横組みの字型に関する研究                      | 〃       | 〃       |
| 25   | 現代雑誌九十種の用語用字(3)<br>——分析——         | 〃       | 〃       |
| 26   | 小学生の言語能力の発達                       | 明治図書刊   | 〃       |
| 27   | 共通語化の過程<br>——北海道における親子三代のことば——    | 秀英出版刊   | 〃       |
| 28   | 類義語の研究                            | 〃       | 〃       |
| 29   | 戦後の国民各層の文字生活                      | 〃       | 400円    |
| 30-1 | 日本言語地図(1)                         | 大蔵省印刷局刊 | 品切れ     |
|      | 日本言語地図(1) <縮刷版>                   | 〃       | 17,000円 |
| 30-2 | 日本言語地図(2)                         | 〃       | 品切れ     |
|      | 日本言語地図(2) <縮刷版>                   | 〃       | 17,000円 |



|      |                                                    |         |         |
|------|----------------------------------------------------|---------|---------|
| 30-3 | 日 本 言 語 地 図 (3)                                    | 大蔵省印刷局刊 | 品切れ     |
|      | 日 本 言 語 地 図 (3) <縮刷版>                              | 〃       | 17,000円 |
| 30-4 | 日 本 言 語 地 図 (4)                                    | 〃       | 品切れ     |
|      | 日 本 言 語 地 図 (4) <縮刷版>                              | 〃       | 17,000円 |
| 30-5 | 日 本 言 語 地 図 (5)                                    | 〃       | 品切れ     |
|      | 日 本 言 語 地 図 (5) <縮刷版>                              | 〃       | 17,000円 |
| 30-6 | 日 本 言 語 地 図 (6)                                    | 〃       | 品切れ     |
|      | 日 本 言 語 地 図 (6) <縮刷版>                              | 〃       | 17,000円 |
| 31   | 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究                            | 秀英出版刊   | 品切れ     |
| 32   | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1)<br>——親族語彙と社会構造——           | 〃       | 〃       |
| 33   | 家庭における子どものコミュニケーション意識                              | 〃       | 350円    |
| 34   | 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (II)<br>——新聞の用語用字調査の処理組織—— | 〃       | 品切れ     |
| 35   | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2)<br>——マキ・マケと親族呼称——          | 〃       | 〃       |
| 36   | 中学生の漢字習得に関する研究                                     | 〃       | 〃       |
| 37   | 電子計算機による新聞の語彙調査                                    | 〃       | 〃       |
| 38   | 電子計算機による新聞の語彙調査(II)                                | 〃       | 〃       |
| 39   | 電子計算機による国語研究(III)                                  | 〃       | 〃       |
| 40   | 送 り が な 意 識 の 調 査                                  | 〃       | 1,500円  |
| 41   | 待 遇 表 現 の 実 態<br>——松江24時間調査資料から——                  | 〃       | 900円    |
| 42   | 電子計算機による新聞の語彙調査(III)                               | 〃       | 1,200円  |
| 43   | 動詞の意味・用法の記述的研究                                     | 〃       | 6,000円  |
| 44   | 形容詞の意味・用法の記述的研究                                    | 〃       | 4,000円  |
| 45   | 幼 児 の 読 み 書 き 能 力                                  | 東京書籍刊   | 4,500円  |
| 46   | 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (IV)                       | 秀英出版刊   | 700円    |
| 47   | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3)<br>——性向語彙と価値観——            | 〃       | 700円    |
| 48   | 電子計算機による新聞の語彙調査(IV)                                | 〃       | 3,000円  |
| 49   | 電子計算機による国語研究(V)                                    | 〃       | 900円    |
| 50   | 幼 児 の 文 構 造 の 発 達<br>——3歳～6歳児の場合——                 | 〃       | 品切れ     |
| 51   | 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (VI)                       | 〃       | 1,000円  |
| 52   | 地 域 社 会 の 言 語 生 活<br>——鶴岡における20年前との比較——            | 〃       | 1,800円  |
| 53   | 言 語 使 用 の 変 遷 (1)<br>——福島県北部地域の面接調査——              | 〃       | 2,500円  |
| 54   | 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (VII)                      | 〃       | 1,000円  |
| 55   | 幼 児 語 の 形 態 論 的 な 分 析<br>——動詞・形容詞・述語名詞——           | 〃       | 品切れ     |
| 56   | 現 代 新 聞 の 漢 字                                      | 〃       | 6,000円  |
| 57   | 比 喩 表 現 の 理 論 と 分 類                                | 〃       | 6,000円  |
| 58   | 幼 児 の 文 法 能 力                                      | 東京書籍刊   | 5,500円  |

|      |                                    |       |         |
|------|------------------------------------|-------|---------|
| 59   | 電子計算機による国語研究(VIII)                 | 秀英出版刊 | 1,300円  |
| 60   | X線映画資料による母音の発音の研究<br>——フォネーム研究序説—— | 〃     | 2,500円  |
| 61   | 電子計算機による国語研究(IX)                   | 〃     | 品切れ     |
| 62   | 研究報告集(1)                           | 〃     | 1,700円  |
| 63   | 児童の表現力と作文                          | 東京書籍刊 | 6,000円  |
| 64   | 各地方言親族語彙の言語社会学的研究(1)               | 秀英出版刊 | 2,000円  |
| 65   | 研究報告集(2)                           | 〃     | 3,000円  |
| 66   | 幼児の語彙能力                            | 東京書籍刊 | 8,000円  |
| 67   | 電子計算機による国語研究(X)                    | 秀英出版刊 | 1,500円  |
| 68   | 専門語の諸問題                            | 〃     | 4,000円  |
| 69   | 幼児・児童の連想語彙表                        | 東京書籍刊 | 6,800円  |
| 70-1 | 大都市の言語生活(分析編)                      | 三省堂刊  | 7,800円  |
| 70-2 | 大都市の言語生活(資料編)                      | 〃     | 12,000円 |
| 71   | 研究報告集(3)                           | 秀英出版刊 | 4,800円  |
| 72   | 幼児・児童の概念形成と言語                      | 東京書籍刊 | 6,800円  |
| 73   | 企業の中の敬語                            | 三省堂刊  | 9,500円  |
| 74   | 研究報告集(4)                           | 秀英出版刊 | 4,200円  |
| 75   | 現代表記のゆれ                            | 〃     | 2,700円  |
| 76   | 高校教科書の語彙調査                         | 〃     | 5,000円  |
| 77   | 敬語と敬語意識<br>——岡崎における20年前との比較——      | 三省堂刊  | 8,000円  |
| 78   | 日本語教育のための基本語彙調査                    | 秀英出版刊 | 6,000円  |
| 79   | 研究報告集(5)                           | 〃     | 4,200円  |
| 80   | 言語行動における日独比較                       | 三省堂刊  | 8,000円  |
| 81   | 高校教科書の語彙調査(2)                      | 秀英出版刊 | 5,000円  |

#### 国立国語研究所資料集

|      |                          |         |        |
|------|--------------------------|---------|--------|
| 1    | 国語関係刊行書目(昭和17~24年)       | 秀英出版刊   | 品切れ    |
| 2    | 語彙調査——現代新聞用語の一例——        | 〃       | 〃      |
| 3    | 送り仮名法資料集                 | 〃       | 〃      |
| 4    | 明治以降国語学関係刊行書目            | 〃       | 〃      |
| 5    | 沖縄語辞典                    | 大蔵省印刷局刊 | 4,300円 |
| 6    | 分類語彙表                    | 秀英出版刊   | 1,800円 |
| 7    | 動詞・形容詞問題語用例集             | 〃       | 1,700円 |
| 8    | 現代新聞の漢字調査(中間報告)          | 〃       | 品切れ    |
| 9    | 牛店安愚楽鍋用語索引               | 〃       | 1,500円 |
| 10   | 方言談話資料(1)——山形・群馬・長野——    | 〃       | 6,000円 |
| 10-2 | 方言談話資料(2)——奈良・高知・長崎——    | 〃       | 6,000円 |
| 10-3 | 方言談話資料(3)——青森・新潟・愛知——    | 〃       | 6,000円 |
| 10-4 | 方言談話資料(4)——福井・京都・島根——    | 〃       | 6,000円 |
| 10-5 | 方言談話資料(5)——岩手・宮城・千葉・静岡—— | 〃       | 6,000円 |
| 10-6 | 方言談話資料(6)——鳥取・愛媛・宮崎・沖縄—— | 〃       | 6,000円 |

10-7 方言談話資料(7) ——老年層と若年層との会話——  
 青森・岩手・新潟・千葉・静岡・長野・愛知・福井

11 日 本 言 語 地 図 語 形 索 引 大蔵省印刷局刊 1,500円

**国立国語研究所研究部資料**

|     |                              |       |        |
|-----|------------------------------|-------|--------|
| 1   | 幼児のことば資料(1)―2歳・3歳誕生日のことばの記録― | 秀英出版刊 | 3,800円 |
| 1-2 | 幼児のことば資料(2)―4歳誕生日のことばの記録―    | 〃     | 3,800円 |
| 1-3 | 幼児のことば資料(3)―1歳児のことばの記録―      | 〃     | 6,000円 |
| 1-4 | 幼児のことば資料(4)―2歳児のことばの記録―      | 〃     | 6,000円 |
| 1-5 | 幼児のことば資料(5)―3歳前半のことばの記録―     | 〃     | 6,000円 |
| 1-6 | 幼児のことば資料(6)―3歳後半のことばの記録―     | 〃     | 6,000円 |

**国立国語研究所論集**

|   |                   |       |        |
|---|-------------------|-------|--------|
| 1 | こ と ば の 研 究       | 秀英出版刊 | 品切れ    |
| 2 | こ と ば の 研 究 第 2 集 | 〃     | 〃      |
| 3 | こ と ば の 研 究 第 3 集 | 〃     | 〃      |
| 4 | こ と ば の 研 究 第 4 集 | 〃     | 1,300円 |
| 5 | こ と ば の 研 究 第 5 集 | 〃     | 1,300円 |

**国立国語研究所年報** 秀英出版刊

|    |        |      |    |        |      |    |        |        |
|----|--------|------|----|--------|------|----|--------|--------|
| 1  | 昭和24年度 | 品切れ  | 13 | 昭和36年度 | 品切れ  | 25 | 昭和48年度 | 品切れ    |
| 2  | 昭和25年度 | 〃    | 14 | 昭和37年度 | 〃    | 26 | 昭和49年度 | 〃      |
| 3  | 昭和26年度 | 160円 | 15 | 昭和38年度 | 250円 | 27 | 昭和50年度 | 700円   |
| 4  | 昭和27年度 | 160円 | 16 | 昭和39年度 | 品切れ  | 28 | 昭和51年度 | 非売品    |
| 5  | 昭和28年度 | 品切れ  | 17 | 昭和40年度 | 〃    | 29 | 昭和52年度 | 〃      |
| 6  | 昭和29年度 | 200円 | 18 | 昭和41年度 | 300円 | 30 | 昭和53年度 | 800円   |
| 7  | 昭和30年度 | 品切れ  | 19 | 昭和42年度 | 300円 | 31 | 昭和54年度 | 1,200円 |
| 8  | 昭和31年度 | 〃    | 20 | 昭和43年度 | 品切れ  | 32 | 昭和55年度 | 1,300円 |
| 9  | 昭和32年度 | 〃    | 21 | 昭和44年度 | 〃    | 33 | 昭和56年度 | 1,300円 |
| 10 | 昭和33年度 | 〃    | 22 | 昭和45年度 | 〃    | 34 | 昭和57年度 | 2,000円 |
| 11 | 昭和34年度 | 〃    | 23 | 昭和46年度 | 450円 | 35 | 昭和58年度 |        |
| 12 | 昭和35年度 | 〃    | 24 | 昭和47年度 | 品切れ  |    |        |        |

**国 語 年 鑑** 秀英出版刊

|        |     |        |        |        |        |
|--------|-----|--------|--------|--------|--------|
| 昭和29年版 | 品切れ | 昭和39年版 | 品切れ    | 昭和49年版 | 3,800円 |
| 昭和30年版 | 〃   | 昭和40年版 | 〃      | 昭和50年版 | 3,800円 |
| 昭和31年版 | 〃   | 昭和41年版 | 〃      | 昭和51年版 | 4,000円 |
| 昭和32年版 | 〃   | 昭和42年版 | 〃      | 昭和52年版 | 品切れ    |
| 昭和33年版 | 〃   | 昭和43年版 | 〃      | 昭和53年版 | 〃      |
| 昭和34年版 | 〃   | 昭和44年版 | 〃      | 昭和54年版 | 〃      |
| 昭和35年版 | 〃   | 昭和45年版 | 1,500円 | 昭和55年版 | 〃      |
| 昭和36年版 | 〃   | 昭和46年版 | 2,000円 | 昭和56年版 | 〃      |
| 昭和37年版 | 〃   | 昭和47年版 | 2,200円 | 昭和57年版 | 5,500円 |
| 昭和38年版 | 〃   | 昭和48年版 | 2,700円 | 昭和58年版 | 5,500円 |
|        |     |        |        | 昭和59年版 | 5,800円 |

|                 |                      |       |        |
|-----------------|----------------------|-------|--------|
| 高校生と新聞          | 国立国語研究所<br>日本新聞協会 共編 | 秀英出版刊 | 280円   |
| 青年とマス・コミュニケーション | 日本新聞協会<br>国立国語研究所 共著 | 金沢書店刊 | 品切れ    |
| 国立国語研究所三十年のあゆみ  | ——研究業績の紹介——          | 秀英出版刊 | 1,500円 |

### 日本語教育教材

|    |                |                   |         |        |
|----|----------------|-------------------|---------|--------|
| 1  | 日本語と日本語教育      | 国立国語研究所<br>文化庁 共編 | 大蔵省印刷局刊 | 700円   |
|    | ——発音・表現編——     |                   |         |        |
| 2  | 日本語と日本語教育      | ——文字・表現編——        | 〃       | 850円   |
| 3  | 日本語の文法(上)      | ——日本語教育指導参考書4——   | 〃       | 450円   |
| 4  | 日本語の文法(下)      | 〃                 | 5——     | 〃      |
|    |                |                   |         | 550円   |
| 5  | 日本語教育の評価法      | 〃                 | 6——     | 〃      |
|    |                |                   |         | 700円   |
| 6  | 中・上級の教授法       | 〃                 | 7——     | 〃      |
|    |                |                   |         | 500円   |
| 7  | 日本語の指示詞        | 〃                 | 8——     | 〃      |
|    |                |                   |         | 500円   |
| 8  | 日本語教育基本語彙比較対照表 | 〃                 | 9——     | 〃      |
|    |                |                   |         | 1,000円 |
| 9  | 日本語教育参考文献一覧    | 〃                 | 10——    | 〃      |
|    |                |                   |         | 1,400円 |
| 10 | 談話の研究と教育 I     | 〃                 | 11——    | 〃      |
|    |                |                   |         | 550円   |

### 日本語教育教材映画一覧 (各巻16ミリカラー、5分、日本シネセル社販売)

<巻題名>

<プリント価格>

|       |                      |                       |         |
|-------|----------------------|-----------------------|---------|
| 第1巻*  | これは かえるです            | —「こそあと」+「は～です」—       | 30,000円 |
| 第2巻*  | さいふは どこにありますか        | —「こそあと」+「が～ある」—       | 〃       |
| 第3巻*  | やすすくないです、たかいです       | —形容詞とその活用導入—          | 〃       |
| 第4巻*  | なにを しましたか            | —動詞—                  | 〃       |
| 第5巻*  | しずかなこうえんで            | —形容動詞—                | 〃       |
| 第6巻*  | さあ、かぞえましょう           | —助数詞—                 | 〃       |
| 第7巻*  | うつくしいさらに になりました      | —「なる」「する」—            | 〃       |
| 第8巻*  | きりんは どこにいますか         | —「いる」「ある」—            | 〃       |
| 第9巻*  | かまくらを あるきます          | —移動の表現—               | 〃       |
| 第10巻  | おかねを とられました          | —受身の表現1—              | 〃       |
| 第11巻* | どちらが すきですか           | —比較・程度の表現—            | 〃       |
| 第12巻* | もみじが とてもきれいでした       | —「です」「でした」「でしょう」—     | 〃       |
| 第13巻* | きょうは あめがふっています       | —「して」「している」「していた」—    | 〃       |
| 第14巻* | そうじは してありますか         | —「してある」「しておく」「してしまう」— | 〃       |
| 第15巻* | おみまいに いきませんか         | —依頼・勧誘の表現—            | 〃       |
| 第16巻* | なみのおとが きこえてきます       | —「いく」「くる」—            | 〃       |
| 第17巻  | みずうみのえを かいたことが ありますか | —経験・予定の表現—            | 〃       |
| 第18巻* | あのいわまで およげますか        | —可能の表現—               | 〃       |
| 第19巻  | よみせを みに いきたいです       | —意志・希望の表現—            | 〃       |
| 第20巻  | てんきが いいから さんぽを しましょう | —原因・理由の表現—            | 〃       |
| 第21巻  | さくらが きれいだそうです        | —伝聞・様態の表現—            | 〃       |
| 第22巻  | あめに ふられて こまりました      | —受身の表現2—              | 〃       |

- 第23巻 おけいこを みにいても いいですか —許可・禁止の表現— 30,000円
- 第24巻 あそこに のぼれば うみが みえます —条件の表現1— //
- 第25巻 いえが たくさんあるのに とてもしずかです —条件の表現2— //
- 第26巻 このきっぷを あげます —「やり」「もらい」の表現1— //
- 第27巻 にもつを もってもらいました —「やり」「もらい」の表現2— //
- 第28巻 てつだいを させました —使役の表現— //
- 第29巻 よく いらっしゃいました —待遇表現1—
- 第30巻 せんせいを おたずねします —待遇表現2—

第1巻～第3巻は、文化庁との共同企画

VTR価格1/2インチオープンリール21,000円, 3/4インチカセット20,000円

\* 印については日本語教材映画解説の冊子がある。

NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE PUBLICATIONS

SOURCE X-VIII

TEXTS OF TAPE-RECORDED CONVERSATIONS  
IN JAPANESE DIALECTS

(Volume 8)

CONVERSATIONS BETWEEN OLDER AND YOUNGER SUBJECTS

CONTENTS

**Foreword**

**Purpose and Outline**

**Text**

- Part 1 ; GUNMA PREFECTURE (Hamlet Okkai, Village Tone, District Tone)  
Part 2 ; NARA PREFECTURE (Hamlet Tanigaito, Village Totukawa,  
District Yosino)  
Part 3 ; TOTTORI PREFECTURE (Town kôge, District Yazu)  
Part 4 ; SIMANE PREFECTURE (Hamlet Ômaki, Town Yokota, District  
Nita)  
Part 5 ; EHIME PREFECTURE (Hamlet Kinoura, Town Hakata, District  
Oti)  
Part 6 ; KÔTI PREFECTURE (Hamlet Zyôtûzîsima, Takimoto, Town  
Okô, City Nangoku)  
Part 7 ; NAGASAKI PREFECTURE (Hamlet Otogô, Town Kinkai, District  
Nisisonoki)  
Part 8 ; OKINAWA PREFECTURE (Town Syuri, City Naha)

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE  
TOKYO JAPAN

1985